# 分析療法論

大槻憲二譯

精神分析學研究所

春陽堂

フロイド精神
分析學全集

# 分析療法論

大槻憲二譯

精神分析
學研究所

春陽堂版

SIGM. FREUD

Medaille von C. M. Schwerdtner jun.

(1906)

# 譯者序文

本書は『フロイド精神分析學全集』の第八卷に當る。こゝに收められてゐるものは、『療法論』と『非醫者の分析問題』と『肛門性格論』とであるが、第一のは、ひとり分析治療に興味ある人々ばかりでなく、一般醫師もまた一讀すべき義務があると信ぜられる大文字である。

第二の論文は精神分析と舊來の醫學との相違を明かにしたもので、且つ分析學及び分析治療法の概論としての意義がある。第三の論文は病氣治療には直接關係はないかも知れないが、性格分析には必要な事項を說いたものとして、この『分析療法論』中に收載することの意義を認めるに何人も躊躇せぬであらう。

×

右は昭和七年九月に書かれた初版序文の一節である。

その後四年を經てこゝに再版を公にするに際し、心ゆくまで誤植誤記を正して完全なものとなし得たことは、譯者にとつても讀者にとつても同慶の至りである。

本書をよまれる人々は、恐らく分析學に對して最も專門的興味を持たれる方々（多くは醫家）であらう。この書の一讀が諸賢の對患者の態度に就いて重大な示唆を與へるであらうことを確信し希望するものである。

昭和十一年十月

譯　者　識

# 『分析療法論』目次

目次

# 分析療法論

こゝに『分析療法論』„Zur Technik“の題下に輯められたる十二篇の論文は、時々に書かれたものを原書全集編纂の際に一纏めにしたものである。原書全集第六卷收載。

# フロイドの精神分析法

始めてレーヴェンフエルド Löwenfeld の『精神的强迫現象』(一九〇四年) に匿名にて發表せられたもの。
原名は „Die freudsche psychoanalytische Methode."

フロイドが實施し、且つ精神分析と名付けたところの精神療法は、所謂洗ひ流し法から出て來たもので、抑々この洗ひ流し法とは如何なるものかと云ふに、それに就いては彼がブロイヤー J. Breuer と共著で公にした『ヒステリー研究』„Studien über Hysterie" 1895 中に說いてある。洗ひ流し療法はブロイヤーの發見に懸るもので、彼はこの療法に依つて約十年前に或るヒステリー患者を治療しその際その患者の症狀の病源を洞察することが出來たのであつた。ブロイヤーの個人的激勵の結果、フロイドはやがて再びこの方法を採上げて、これを幾多の患者に適用したのであつた。

洗ひ流し法と云ふのはまづ患者は催眠術に懸るものであると云ふことを豫想し、さうして催眠中には意識が擴張せられてゐると云ふことを土臺としてゐる。この方法を適用すると、催眠をかけられた患者に於いて、これまで意識の埒外にあつた記憶や思想や衝動が浮び上つて來る。さうしてこれ等の

精神過程を患者が激しい感動表出の下に醫師に話したならば、彼の症狀は克服せられ、再びそのやうな症狀になる事は絕えてなくなるのである。これ等の經驗は規則的に反覆せられるので、これを二人の著者はその共著の中でかう說明してゐる。――これ等の徵候は抑壓されて意識に達せざる精神的過程の代りになつてゐるので、つまりその精神過程の變形(『轉換』„Konversion“)であると。何故に彼等の方法に治療的効果があるかと云ふに、それは彼等の說明に依れば、抑壓されてゐる心理的行爲に纏綿してゐた、これまで、云はゞ『閉込められてゐた』感動を發散させる(„Abreagieren“)からであると。ところがこの療法の手續きはまことに簡單であるが、併し實際やつて見ると、いつも甚だ複雜なものになつて來る。と云ふのは、その症狀の發生に與つてゐるのが一つや二つの(『外傷的』)印象ではなくて、看過することの出來ない一聯のそのやうな印象だからである。

で、この洗ひ流し法をして他のあらゆる精神療法と正反對ならしめてゐる主要特質は、この方法に於いてはその治療的効果が醫師の與へる暗示的禁止に歸せられないと云ふ點にある。洗ひ流し法の期待するところは寧ろ、心理的機制に關する或る豫想に基いてゐるこの手續きを以てして、その徵候構成がこれまでとつてゐた方向とは違つた方向へ精神過程を流れさせることに成功したならば、徵候(症狀)が自分で消失することを期待するものである。

ブロイヤーの洗ひ流し法に對してフロイドが加へた變化は、まづ技法上の變化であつた。併しそのために新たな結果が生じて、從つて遂に、治療上從前のとは違つた（併しそれと矛盾はしない）考へ方をとらざるを得ないことゝなつた。

洗ひ流し法は暗示を與へることを廢したとするならば、フロイドは更に一歩を進めて、催眠を用ひないことにした。フロイドは患者を現のまゝに取扱ふのである。卽ち別に違つた影響を與へず、長椅子の上に仰臥させ、さうして自分自身の方は患者の視線を避けて患者の背後に、椅子に腰掛けてゐるのである。また眼を閉ぢさせたり、催眠術の時に必要なやうな一切の他の手續きは患者に對してとらない。で、そのやうな相互の關係は同樣に眼覺めてゐる二人物間の會話のやうに進んで行くのである。その間、その內の一人は、自分自身の精神活動に注意を集中することを妨げるであらうやうな一切の筋肉緊張と、一切の注意をそらせる感覺印象を避けるやうにしてゐるのである。

併し催眠術と云ふものは、人々の知るやうに、如何に術者が巧妙でも、結局被術者の氣分に依ることであるから、また神經症患者の內には如何に方法を講じても催眠させ得ないのが多數にあるから、催眠術を用ゐないことになると殆ど大多數の患者にはこの洗ひ流し法が慥に適用出來ないことになるわけである。他方に於いて、意識の擴大と云ふことがあればこそ醫者は記憶や觀念のある精神的材料

を把へることが出來て、それに依つて症狀を除去し感動を解放することが出來るわけであるのに、その意識の擴大と云ふ事が駄目になる。この駄目になつた意識の擴大と云ふことの代りになるものがなければ、また治療上の効果と云ふことも問題にはならなくなる。

そのやうな代りとしては患者の思ひ付きが正に申分のないものであることをフロイドは發見した。つまり、その意なきに浮び上つて來る思想、大低は他の思想を妨げるものとして感ぜられる思想、從つて普通の狀態に於いては側に押除けられてゐる思想、而も意圖的な言行の內へのさばり出て來勝ちな思想こそは、その代りとなるものだとフロイドは認めたのである。これ等の思ひ付きを十分に把握し得るために、彼は患者に要求するのである『會話に於いては百番目のことから千番目の事に話題が飛ぶが、丁度それと同じやうに』患者がその思つてゐることを分析醫に語り聽かせる時にも飛躍的でなければならないと。彼は患者たちに、その病歷を細かく話して聞かせよと云ふ前に、その病歷を話してゐる間に頭をかすめて通り過ぎる思想は總て何でも（それが重要でなく、關係なく、また無意味なことに思へても、そんなことには關はらずに）喋舌つてしまへと命ずるのである。併し殊に力を込めて要求せられるのは、患者たちがそれ等を喋舌ることが恥づかしいとか或は苦痛だとか云ふのでそれ等を差控へてはならないと云ふことである。平常は放任せられてゐるこれ等の思ひ付きに於けるこ

れ等の材料を集めんとの努力をなすに當つて、フロイドは今や彼の考へ方の全體を決定せしめたところの觀察を得たのである。假に病歷の話をなすに際して、患者たちにはどうしても思ひ出せない個所があるのである。例へば、實際はそれからどうなつたのであつたか忘れて了つたとか、或は時間の前後がこんがらがつて了つたとか、或は因果の關係が滅茶々々になつて、とんでもない結果になつて了つたとか。神經症の病歷には何等かの種類の健忘が伴つてゐないのはない。話者に對して彼の記憶のこの穴を是非何とか注意を集めて埋めろと强ふると、こゝまで思起されて來たことがあらゆる批評手段で押返され、遂には、記憶が實際に起つて來た場合に直接的にその眞僞を懸念するやうになるほどであると我々は氣付くのである。かゝる經驗からしてフロイドは結論を下して、健忘は彼の所謂抑壓Verdrängung の結果であると斷じ、それの動機としてはそこに不快感の存することを彼は認めたのである。かゝる抑壓を生ぜしめる心理上の力は、かゝる不快感の再起を防ぐところの抵抗、Widerstand こそがそれであると彼は考へるのである。

抵抗と云ふ契機は彼の學說の基礎の一つをなしてゐる。右に公式的に述べた中に擧げたやうないろんな口實の下において、平常は出て來ないやうにされてゐる思ひ付きを、併しフロイドは、抑壓されてゐる心理的形態（思想や感情）の派生として、その形態の再生に對して抵抗が働くためにそれが歪

められて出て來たものとして、見做すのである。

抵抗が大きければ大きいほど、益々この歪みは甚しくなる。意圖せざるに思ひ付く事が抑壓されてゐる心理的材料に對してこのやうな關係を有つてゐるから、この關係が治療的技法に對して價値があるのである。で、もし我々が思ひ付かれた事柄から抑壓されてゐるものへ、歪みから歪められてゐるものへ、到達すべき方法を有してゐるならば、即ち我々はまた催眠術を用ひずとも、精神生活中に於いて始め無意識であるものを意識化することが出來るのである。

フロイドはその後、このやうに無意識を意識化する解釋法を案出したが、この解釋法は云はゞ、意圖せざる思ひ付きと云ふ鑛石の中から抑壓せられてゐる思想と云ふ含有金屬をふるひ出すのである。この解釋法の對象は患者の思ひ付く事のみならず、夢もまた無意識を知るに就いての直接的な通路である。また患者の意圖せざる行爲や、計畫せざる行爲（徵候行爲）や、日常生活に於ける彼のいろいろな行り損ひ（云ひ損ひ、仕損ひ、その他）も、やはりこの解釋法の對象である。これ等の解釋法、また飜譯法の詳細は、まだフロイドに依つて公にされてはゐない。彼の云つてゐるところから察して見ると、それは實驗から獲たところの一聯の規定であるやうだ。宛も、患者が偶然に思ひ付いた事から無意識の思想を組み立てゝ見ると云ふやり方であるやうだ。さうして、そのやうな處置の經過中に

擡頭して來る最も重要な、典型的な抵抗に就いて知つたり、或は（患者の思ひ付きがどうしても出て來ぬと云ふ場合には、分る範圍內でその抵抗に對してからう〳〵せよと）助言したりすることであるやうだ。フロイドが一九〇〇年に公刊した『夢の註釋』に關する浩瀚な著書は、そのやうな技法に就いての要領を說いたものとして先驅をなしてゐるものである。

人々はこのやうな精神分析的技法の話を聽いて、その創始者はもつと簡單な催眠術を捨てゝこのやうな厄介な方法をとると云ふは間違つてゐると云ふかも知れない。併し一方に於いて、精神分析法は實際に呑込んで了へば、始めてその話を聽いて考へるほど實行の厄介なものではなく、他方に於いてまたこれ以外の方途では目的を達しないのだから、從つて急がば廻れである。催眠術は抵抗を掩ひ匿し、そのために醫師は心理の力が如何に働いてゐるかを洞察することが出來なくなると云ふ缺點があると云はれる。併し催眠術は抵抗を取除きはしないで、たゞそれを回避し、從つてたゞ不完全至極な（病源に關し）報告を與へ得るのみで、よしんば成功しても單にその當座だけの事である。

精神分析法は如何なる問題を解決せんと努めてゐるかと云ふに、それ等は種々な公式として云ひ表はすことが出來る。併しそれ等の公式は、その本質から云へば、等しいのである。精神分析治療の問題は抑壓に依る健忘を復活させるにあると云ふことが出來る。記憶の穴が總て埋められ、心理生活の

謎のやうな効果が總て說明されて了ふと、苦痛が存續したり再發したりすることはなくなる。この條件はまた別にかう考へることも出來る。——それは總ての抑壓を退行的に遡ることであつて、その時の心理狀態はつまり一切の健忘がなくなつてゐる狀態である。また今一つの考へ方は一層徹底してゐる。——即ちこの考へ方の要點は無意識を意識化することで、これは抵抗を克服することに依つて爲されるのである。併しその際忘れてならないことは、そのやうな理想的狀態は常態人に於いてもやはり存在してはゐないと云ふこと、また處置をそこまで押進めて行けるやうな立場には滅多に立ち得るものでないと云ふことである。病氣と健忘とは原理的に差別されず、たゞ實踐的に定義され得る總括的限界に依つて區別されるに過ぎないのであるから、丁度それと同じで治療の目的とても患者に實踐力を恢復させ、その行動能力、享樂能力を復活させる以外にはないのである。治療が不十分である場合、或は治療の効果が完全でない場合にでも、就中心理の一般狀態が著しく高められるやうになるものである。よしんばその症狀は存續（してゐるにしても患者にとつてその重大さは餘程低減してゐるが）してゐるにしても、患者としての刻印は捺すことが出來なくなつてゐる。

この療法は、種々な形態のヒステリーのあらゆる徵候構成に對しても、また强迫神經症のあらゆる顯現に對しても（多少の變化はあるとしても）大體同樣である。併しこの方法を無制限に適用し得る

と云ふわけでは固よりないのである。精神分析はその性質上、處置さるべき人物の側から何等かの暗示又は逆暗示を得來ると共に、また病狀を觀察してそこに暗示又は逆暗示を把握し來るのである。精神分析にとつて最も都合のいゝのは、暴風雨的症狀や、危險脅威のあまりない精神神經症の漫性となつてゐる場合である。つまりまづ、あらゆる種類の强迫神經症、强迫思想、强迫行爲、並びに（恐怖症や意志薄弱症が主要な役割を果してゐる）ヒステリーの種々な場合、併し更にまたヒステリーのあらゆる肉體的徵象。但し最後の場合に於いては、醫師に對してその症狀を急速に取除いてくれと云ふ註文が主要課題となつて（例へば食慾不振の場合の如き）ゐない限りは、である。激しいヒステリーの場合に於いては、人々はもつと鎭まつた狀態に這入りたいと願ふことであらう。神經衰弱が主要になつてゐる總ての場合に於いては、それ自身緊張を要するやうな方法を施すことは避けられねばならない。さうして暫くの間は症狀の存續することを顧慮してばかりは居られない。

精神分析に掛けて十分に利益の擧がる如き人人としては、次の如き種々の能力がなければならぬ。彼等はまづ常態的な心理狀態になり得る如き人でなければならない。錯亂又は鬱憂の時に於ては、ヒステリー患者に對しても何も手のつけやうがない。更にまた患者には或る程度の自然に具はつた知力と、倫理的發達とがなくてはならない。あんまり下らない人間であると、醫者はその患者の心理生活

の中へ深く這入つて行くだけの興味が持てなくなる。札付きの性格破産者や、體質上全然頽廢して了つてゐる徵候の見える者などに對しては、何としてもこれを心理的に治療して見ようと云ふ氣にならない。その限りに於いて、抑々體質と云ふことも心理療法に依る治療可能の限界をなすものである。それにまた年齡が五十近くになつてゐると云ふことは、精神分析を加へるに都合の惡い條件である。その年になつては、心理的材料の全體を支配することが出來なくなつてゐるし、治療に要する時間があまり長くなるし、心理過程を遡つてその病根に迫ることが難かしくなつてゐる。

これ等總ての制限あるに拘らず、精神分析に有能の士はその數やうやく多きを加へ、フロイドの主張に基くこの方法に依つて我々の治療し得る範圍は愈々著しきを加へつゝある。フロイドは効果の擧るだけの取扱をするには半年乃至三年の長い期間を必要とすると云つてゐる。併し彼の云ふところに依ると彼はこれまで、さま〴〵な容易に判知することの出來る事情の結果として、大抵は非常に困難な場合をのみ取扱つて來た、多年病氣の繼續してゐる患者、行動の全然不能な患者をのみ取扱ふやうな立場になつて來たのである。彼等はあれこれといろ〳〵手を盡して何れにも失望し、最後にこの新しい療法に半信半疑で云はゞ遁げ込んで來たのである。もつと輕症の場合に於いては、處置の期間をずつと短くすることが許されるし、また未來に對する著しい豫防としての目的を達することが出來る。

# 精神療法に就いて

一九〇四年十二月十二日、ヰイン醫師學會にて述べられたる講演筆記、一九〇五年『ヰイン醫師新聞』„Wiener Medizinischen Presse" に印刷發表。原名は „Über Psychotherapie."

諸君！　私は本會の今は亡き前會長フォン・レーダー教授 Prof. von Reder の慫望に因り、同教授の周圍の人々のためにヒステリーの問題に就いてお話して以來、約八年になる。それより少し前に（一八九五年）私はヨゼフ・ブロイヤー博士 Doktor Josef Breuer と共著で『ヒステリー研究』を公にし、同博士の示唆に因る新たな認識を基礎として、神經症の嶄新なる處置法を說かうと試みたのであつた。幸にして我々の『研究』の努力は成功を收め、その中に說いてある思想（卽ち、感動が保持された亢奮であるとの考へ方（我々はこれ等の思想のために『發散』„Abreagieren" だの『轉換』„Konversion" だのと云ふ術語を作つた）は、今日では一般に認められ、また理解されてゐる。少く

ともドイツ國に於いては、右の思想や考へ方を或る程度まで考慮に入れないヒステリー說はなく、また少くとも或る部分これと一致してゐない醫學者はない。而もこれ等の命題と術語とは、まだそれが新しかつた限りでは、甚だをかしく聽こえたのである。

私は治療法に關しては同じことを云ひ得ない。治療法の方も我等の學說と同時に斯學者仲間に動議してはは見たのだが……。この方は今日もなほその承認を得るために大いに闘ひつゝある。それには我々は特殊の根據を求めなければならぬ。この療法の技法は當時に於いてはまだ完成してゐなかつた。私はその書物を讀む醫者に對して、その種の處置法を徹底的に了解させ得るだけの說明を十分に與へることが出來なかつた。併し惜にまた一般的性質と云ふ根據もそこに共働してゐた。多くの醫師にとつては今日と雖も精神分析は近代神秘主義の所產の如くに思はれ、現代の物理化學的治療法（それの適用は生理學的見解に基いてゐる）と比較して全然非科學的で、自然探究者の興味に價しないと思はれてゐる。そこで諸君にこの精神療法の事をお話し、この裁斷に於いて如何なる不正と如何なる誤りがあるかを指示して見たいと思つてゐる。

そこで、まづ諸君に警告しておきたいと思ふことは、この精神療法は何等、近代の治療法の類ではないと云ふことである。それどころか、それは醫學の用ゐた最も古い療法である。レーゼンフェルト

Löwenfeld の教ふるところ多き著書(『各種精神療法教科書』)に就いてお讀みになれば分る通り、原始的及び古代的の醫學の方法はあのやうなものであつた。諸君はそれ等の方法をまづ大抵は精神療法の内に數へ入れなければならないであらう。古代人は患者を治療する目的のためには、彼等をして必ず治るとの『期待の信念』の心理狀態にならしめるのである。この信念があれば、今日でも我々はやはり癒るのである。また醫者たちが他の治療手段を發見した後にも、何等かの種類の精神療法は醫術に於いて決して廢滅して了はなかつたのである。

第二に私が諸君の注意を促しておきたい事は、我々醫師は精神療法をなか〳〵放棄することが出來ないと云ふ事である。何となれば、治療の過程に於いて非常に重視せられる他人——つまり患者たち——が抑々、精神療法なるものを放棄する意圖を持たないからである。諸君も御存知であらうが、這般の事情に對してはナンシー Nancy 派 (Liebault, Bernheim) は如何なる説明を下してゐるであらうか。患者の心理的性質に依憑する一つの要素が (それを我々が意圖せざるに) 現れて、醫者の施した治療法の效果にそれ自身を附加するやうになる。大抵は好ましい意味に於いての附加をするが、併しまた障碍的な意味に於ける附加をなすことも屢々である。我々はこの事實を形容するために『暗示』„Suggestion" と云ふ語を適用することを學び知つてゐるが、またメビウス Moebius は我々に敎へ

て曰く、我々は現在の大抵の治療法はアテにならぬと云つて嘆ずるが、それはこの契機があまりも力強くて障碍的影響を及ぼすからであると。で、我々醫者、諸君全體は、要するに精神療法を常に用ゐつゝあるのだ、よしんばそれを知らず、また意圖はせずとも……。たゞ諸君が患者に對する諸君の醫力中の心理的要素を全然患者に委讓すると云ふ一つの不利益はそこにある。かう云ふことでは、その心理的要素を支配することも、利用することも、高めることも出來ない。かくては、この要素を自由になし、意圖的に利用し、これを導いたり强めたりすることは、醫師として當然出來得ないことになる。ところで、これをさうすることこそは、科學的精神療法が諸君に期待するところに外ならないのである。

同僚醫師諸君よ！　第三に私は古くから知られてゐる經驗を諸君に明示しておきたいと思ふ。卽ち或る種の病苦、殊に精神神經症は、精神的影響の方を、他の醫療よりも遙かに受け入れ易いと云ふ事である。これ等の病氣を癒すものは醫術ではなく、醫者である、つまり醫者がその人格に依つて心理的影響を及ぼす限りに於いて、醫者の人格が癒すのであるとは、これ近代の云ひ草ではなくて、昔の醫者の言葉である。同僚醫師諸君よ！　このやうな言葉は諸君のお氣に召すことであらうことを私はよく承知してゐる。またこれを美學者のフィッシャー Vischer はその『作り變へファウスト』（悲壯劇ファ

ウスト第三部）の中で次のやうな古典的な言葉で云ひ表はしてゐる。――

『物的なものは屢々心的なものゝ上に影響することを私は知つてゐる』と。

併しかう云ふよりは寧ろ、我々は人間の心理に對しては心理的手段を以て影響を與へ得ると云ふ方が適切であり、また屢々妥當するのでなからうか。

精神療法にも澤山の種類や方法がある。治療の目的を達するものならば總て結構である。我々は常に患者に對して『もうこれで癒りますよ』との氣安めをふんだんに云ふものであるが、これ一種の精神療法である。たゞ我々は神經症の本質を深く洞察してこのやうな氣安めだけで滿足してゐられなくなつたゞけである。我々は催眠術的暗示の技巧を、轉向や實行に依る心理療法の技巧を、或る感動を呼覺ますことに依つてなす心理療法の技巧を、發達させたのである。私が實際に於いて或る唯一の治療法（それをブロイヤーは『洗ひ流し法』„kathartische Methode“と名付けてゐるが、私は寧ろ『分析療法』„analytische Methode“と名付ける）に固執してゐたならば、單なる主觀的な動機が標準となつてゐたであらう。併し私はこの療法の發見には參與してゐるのであるから、この療法の研究とその技巧の完成とに献身すべき個人的責任を感ずるのである。分析的精神療法はその効果が最も徹底

的であり、その及ぼす範圍が最も廣汎であり、それに依つて患者が受ける變化は最も多様であるものである。私が一度治療的の立場を離れるならば、この精神分析療法は最も興味があり、病氣の諸現象の起源と相互關係とに就いて何事かを知らしめる唯一のものであることを私は確言し得る。精神分析に依つて病的心理の機制を十分に洞察し得てゐる結果、我々はこの方法に依つてのみこの方途それ自身を卒業し、更に他種の療法的方途を指示することが出來るのである。

精神療法のこの洗ひ流し的、又は分析的方法に關して、今や私が二三の誤りを正し、さうして多少の説明を試みることを、諸君よ、許させ給へ。

(A)私は、この方法が甚だ屢々催眠術的暗示の療法と混同せられることを知るのである。それのみならず、同僚醫師諸君もまた彼等の別段懇親者でもない私に、患者を(勿論、甚だ難物の患者を)差し向け、催眠術を掛けてやつて吳れと云つて寄越すことを知るのである。ところで私はざつと八年この方、催眠術を治療のために用ゐて來てゐないので(個々の場合に一二度試みたこともあるが、それは例外として)いつもさう云ふのは催眠術を實際にやつてゐる者にやらせればよいと云つて返してやる慣はしにして來た。實際に於いて、暗示的療法と分析的療法との間には、最大可能の相反が存するのだ。丁度、かの偉大なレオナルド・ダ・ヰンチが藝術を附加へる per via di porre 遣り方のと、取

去る per via di levare 遣り方のと、相反に考へたのと同様に…。繪畫は附加へる藝術であるとレオナルドは云ふ。つまり繪畫は白地の畫布の上にいろ〳〵の色彩を附加へるのである。彫刻はその反對に取去る藝術で、その石の内に含まれてゐる像以外の餘分の石片を多分に取除くのである。諸君よ丁度それと同じやうに暗示療法は附加へることに依つて効果を及ぼさうとするものである。暗示療法は病徴の由來、力、意義などに頓着しないで、たゞ何物かを（つまり暗示を）そこに附加へようと腐心し、その暗示に依つて病的觀念の表現が阻止されるほどその暗示が十分に力強くなると期待してゐるのである。分析的療法はこれに反して、附加へようとはしない。何等新しいものを導入しようとはしない。寧ろ引去り、取除かうとする。さうしてその目的のために病徴の起源を探り、病的觀念の心理的關係を知らうと骨折る。さうしてこの病的觀念を取去ることこそは分析療法の目的であるのだ。かう云ふ研究の仕方で分析療法は、我々の理解にまで甚だ重要な促進を齎したのである。私は暗示療法並びに催眠術を既に夙く放棄したのである。何となれば、暗示に依つて持續的な治癒を必然的ならしめるほど暗示を力強く保持的にすることが出來るかどうかを疑はしく思つたからである。總て難症者の場合に於いては、そこに附加せられてゐる暗示が再び粉碎せられ、かくて病氣、又はその病氣の代償が再びそこに現れてゐることを見るのである。その他、私がこの療法を批難する點は、このため

に我々が心理の力の働きを洞觀することが出來なくなると云ふことである。例へば、抵抗と云ふことが我々に認識出來なくなる。この抵抗に依つて病人は自分の病氣に固執し、これに依つて病氣の治癒に反抗し、またこの抵抗と云ふことを考へることに依つてのみ彼等の生活の態度を我々は理解し得るのである。

(B)病源探究の技法及び病的現象除去がこの方法に依つて容易であり自明であるとの誤りが醫師間に廣まつてゐるやうに、私には思はれる。何故私がこのやうに考へるかと云ふに、私の療法に興味を持ち、これに對して確乎とした判斷を下す人々は多いが、彼等の內一人もが未だ曾て私に向つて、如何にして私が抑々それを爲すかと尋ねはしないからである。併しそれにはたゞ一つだけ理由があるのだ。そんなことは尋ねるまでもない、自然に了解出來ることだと考へてゐるのがその理由である。また時々私は聽いて驚くのであるが、或る病院のどれかの科でその科長が若い醫師に或るヒステリー患者を『精神分析』して見よと命じたと云ふ話である。私はその若い醫師が歷史的に探究する技法を果して心得てゐるかどうかを科長が確めずに、彼にそのやうな既に根絕されてゐる病氣を大袈裟に考へて調べて見よと命じてゐるのではなからうと信ずる。同樣にまた私の聞及んだところでは、或る醫者はそのやうな治療法を全然心得てゐない事は慥であるのに、或る患者に心理療法を施さうとて彼と話

をして見たと云ふことである。つまり彼はその患者が秘密を洩らすであらう。卽ち一種の懺悔又は打明けの形で治療し得ようとしたものに違ひない。そんな風に取扱はれては、患者には寧ろ弊害はあつても利益はないことは怪しむに足りない。要するに、心の樂器はさう容易にかき鳴らせるものではない。かう云ふ問題にぶつつかるに付けて思ひ當るのは、世界的に有名な或る神經症患者の話である。その患者は勿論、醫師の取扱ひを受けたことはなく、或る詩人の空想中にのみ生きてゐたのである。私の云ふのはデンマークの王子ハムレットの事である。王はローゼンクランツ、ギルデンスタインの二廷臣を彼の許に遣はし、彼が心中の秘密をかぎ出させようとした。王子は彼等を寄付けなかつた。その時、笛が舞臺に齎された。王子は笛の一つを執つて、二廷臣の一人を招き、これを吹鳴らして見よ、嘘をつくよりは容易だからと云ふ。その廷臣は吹き方を知らぬからと云つて、それを斷る。どうしても鳴らさうとしないので、遂にハムレットはかう云つた。――『はて、これはどうぢや？ すれば御身は予をば一管の笛にも劣る痴者と思うたのぢやな！ いや、現に予を弄ばうとお爲やつたわ。予が歌口を調べ、予が心の奥秘をもあなぐり、ありとあらゆる予が本音をば吐かせうとお爲やつたではないか？ 此小かな一管にも、見ん事、いみぢい音樂がある、それを御身は能う鳴らさぬといふ。すれば予をば笛よりも弄び易いものと思やつてか？ こりや、予を樂器扱ひにするのは隨意ぢやが、

其手際では所詮好い音色は出まいぞや。……』（三幕二場、坪内博士譯に依る。）

（C）私の云つた言葉の端々から諸君もお察しあつたであらうやうに、分析的治療法には療法としての理想からは遙かに遠い二三の特質が存してゐるのである。Tuto, cito, incunde. 探究し調査したからとて、それでよい結果が早く擧がると云ふわけではない。また病人の抵抗を認識すると、これはとても受容れられないと云ふ氣がして來る。慥に、精神分析は患者の側にも醫者の側にもいろ〳〵むづかしい事が多い。始めから極めて正直であれとの犧牲を要求する。時間が懸かるし、從つてまた金も懸かる。醫者にとつても同樣これは時間が懸かるし、また自分の學び且つ習練すべき技術のために可成りに骨が折れる。であるから、人々がもつと簡單な方法で間に合ふならばもつと簡單な方法を用ゐやうとするのは、至極尤であると私自身も思ふ。問題はたゞこの一點に懸つてゐるのだ。簡單で容易な方法よりは骨の折れる時間の懸かる方法を重要視するならば、前者の方がいゝわけになつて來る。考へても御覽なさい、諸君よ、狼瘡の療法として腐蝕させたり削つたりする舊式の遣方よりはフィンゼン Finsen の療法が如何に厄介で金が懸かるかを——。而もこの方が遙かに進歩した療法である。その理由は簡單である、その方が効果が大であるから——。つまりこの療法は狼瘡を根柢的に取去るからである。今や私はこの比較を杓子定規に押通さうと云ふのではないが、併し同樣な特權を精神分

析のために要求することが出來よう。實際に於いて私は自分の療法を難症者に、最難症者にのみ施し試みることが出來た。私の扱つた患者はまづ、種々試みて見たがその甲斐なく、幾年も病院に過ごして來た病人のみであつた。私は自分の療法があの輕微の、挿話的に擡頭して來た病氣（種々雜多な影響に依り、また自發的に癒つて行くのを我々が見るところの病氣）に對して如何に作用するかを諸君に語り得るほどの經驗をまだ十分に集めてゐない。精神分析療法は永久的生存を持續し得ざる病人に就いて、またさう云ふ病人のために、創始せられた。さうしてさう云ふ病人の可成り多數をして生存を持續し得しめたことは、この療法の誇りとするところである。この成功に對しては、あらゆる讃辭も過大でないやうに思はれる。重い神經症はともに罹つてゐる個人にとつて重大なもので、その重大さにかけては如何なる病狀（一般に恐れられてゐる何れの病苦）にも劣らぬものであると云ふことを、患者に對しては否定し慣はして來たことを我々は認めざるを得ない。

（D）この療法が如何なる事に適し如何なる事に適せざるかを語ることは、私の仕事中に遭遇した多くの實踐上の制限のために、徹底的には殆ど出來ない。併し私はその點に就いて諸君と多少論じて見たいと思ふ。

一、我々は病氣以外に或る人物の價値を看過するものではない。で、或る程度の敎養や多少尊敬す

べき人格を具へてゐない患者は斷るのである。世には健康者であつても全然下らない人間もあると云ふことを、また人々はそのやうな劣等な人間に於いて、その生存を不能ならしめる一切をその病氣のせいにする（もしそこに多少とも神經症の形跡が見えると）傾きがとかくあるものだと云ふことを、忘れてはならない。私の立場から云へば、神經症患者はその神經症の故に決して廢質者と刻印すべき者ではないが、併し同一人物に於いて廢質と神經症とは屢々一緒になつて存在して居るものである。ところで、分析的精神療法は神經病的廢質を取扱ふべき方法ではなく、寧ろ病氣もこゝまで來て居ては精神分析にも手がつけられぬ方である。また病苦のあまり自分で治療を受けて見ようと云ふ氣になつてゐず、身近の者の强制に依つて已むなく受けようとする者に對しても精神分析は適用出來ない。精神分析の適用され得べき者の具へて居なければならない特質、即ち敎育を施すの餘地あることは、吾人なほまた別の見地からこれを論じなければならないのである。

二、石橋を叩いて行かうとならば、人々はたゞ常態を失つてゐない人間だけを扱ふことにすればよいのだ。精神分析では常態を支配するのだから――。精神症、錯亂狀態、酩酊狀態は、精神分析にとつては（少くともこれまで實施して來た限りに於いては）不適當である。併しこの方法に何とか獨特の變化を加へてこれ等の不適當に備へるならば、精神症の心理療法も企てられると、私は勿論考へて

ゐる。

三、精神分析で處置するに適した患者を選ぶに就いて、患者の年齢と云ふことも或る限度まで考慮に入れなければならない。何となれば、五十歳前後の人間は一方に於いて心が剛張つてゐるし（心の柔軟性が分析治療には必要である――老人には教育を施し得ない）他方に於いてまた、扱ふべき材料上から治療の期間が非常に永びくからである。下の方の年齢限度はたゞ個人的に決定すべきものである。思春期以前の青年は屢々最も影響を與へ易いものである。

四、さし迫つた現象を應急的に取除く（つまり例へばヒステリー的食慾不進の場合の如き）ことが問題である場合には、人々は精神分析を用ゐはしない。

かう云つて來ると、分析的精神療法の適用範圍は甚だ局限されたものであるとの印象を諸君は受けるであらう。何となれば諸君は私からたゞ適用し得ざる場合をのみ説明されたのであるから――。併しこの療法が適合する場合や病氣形式とても、これに劣らず澤山あるのである。即ち、ヒステリーのあらゆる漫性的形式（漫性以外の現象も具はつて）、强迫狀態の廣大な分野、意志薄弱症、その他これに類したもの。

最も價値ある、病氣以外の點では最も高尙に發達してゐる人物をこのやうな方法で最も早く助ける

ことが出來るのは、喜ばしいことである。併し分析的精神療治を以てしても施すに術ないやうなところには、何か他の方法を用ゐても慥に何の結果をも示し得ないと云ふことを、確信を以て主張出來る。

(E)諸君は慥に私に向つてからお尋ねになりたいであらう、精神分析を適用すると、どうしてその結果がとかく思はしくなくなるのですかと。それに就いては私はかう答へることが出來る、も少し公平に物事を見て下さい、現代の他の療法に對するのと同じだけの好意的な批評眼を以てこの療法を見て下さるならば、諸君も私の意見に一致して、理解を以て精神分析を施すならば決して患者に弊害を及ぼすやうなことはないと考へられるやうになるであらう。素人にはよく、病中に起つて來たことは總てその間の療法のせいだと考へる者があるが、さう云ふ人ならば恐らく吾人とは別の判斷を下すだらう。かの水浴療養所がさう云ふ先入見を持たれたことは、ついまた近頃のことである。水浴療養所へ出掛けたらどうだと云はれると多くの人々は考へちまつたものである。何となれば、彼の知人にそこへ行つてから發狂した神經症者があるからだと云ふのである。それは要するに、諸君も察せられるであらう通り、一般的の痲痺症になりかけであつたのだ。まだ始め頃であつたから水浴療養所へ連れて行くことが出來たのだ。が、そこにゐる内に漸次に精神障害を示すやうになつたのだ。素人にとつては水浴療養をしたばかりにこのやうな悲むべき變化が起きたと思はれるのである。新たな影響が起

きたと云ふ點が問題になると、醫者もさう云ふ間違つた判斷をしないとは限らぬ。思ひ出せば、私は嘗て或る婦人に精神療法を試みたことがあるが、その婦人の生活の大部分は交互に來る燥狂と憂鬱との間に送られてゐた。私が扱ひ始めた時は、或る憂鬱期の終りに於いてゞあつた。二週間ばかりは順調に進んだやうであつたが、三週間目には我々は既に新たな燥狂の始まりに入つた。これは慥に病狀の自然發生的變化であつた。何となれば、二週間ぐらゐでは分析的精神療法はそんなに大した事をなし得る筈がないからである。併し私と共にこの患者を診ることになつてゐた或る優秀な（今は既に亡き）醫師はこの『惡化』が精神療法のせいであると云はないではゐられなかつた。彼は他の諸條件を調べたならばもつと批判的に證明し得たであらうと私は確信してゐる。

（F）最後に、同僚醫師諸君よ、分析的精神療法に諸君の好意的注意を招き得るためには、この處置法の要點は何であるか、何を基礎とするかを語らなければならないと云ふことを私は認めるものである。併しあまり冗々しく論じても居られないから、極簡單にお話しておかう。この療法の基礎となつてゐるのは、無意識的觀念――もつと適當に云へば、無意識の內に起る或る精神的過程――が病的徵候の直接原因であると云ふ洞察である。そのやうな信念を我々はフランス學派（ジャネー）と共通的に代表するものであつて、この派は極端な公式化を以てヒステリー徵候が無意識的な定着觀念 idée fixe

から來るとするのである。そんなことを云ふと、我々は甚だ漠然たる哲學に墮して了ひさうに諸君は思はれるかも知れないが、そんな心配は御無用である。吾人の云ふ無意識とは、哲學者の所謂無意識とは違ふ。それのみならず哲學者たちは『無意識心理』に就いて何も知らうとはしない。併し諸君も我々の立場に立つて御覧なさい。さうすれば諸君も、患者の精神生活中のこの無意識を意識化することに依つて首尾よく彼等の常態離脱を是正し、彼等の精神生活が惱んでゐる强迫を除去することが出來るのを認めるやうになるであらう。何となれば意識的意志は意識的心理過程と同じ廣さに達し、一切の心理的强迫は無意識に依つて基礎づけられてゐる。諸君はまた患者が、その無意識を意識化する際に同時に受ける衝動のために弊害を被ることを決して怖れるには及ばない。何となれば、意識化した亢奮の肉體的及び感情的の効果は無意識のまゝであつた時のそれ等の効果ほどに大であり得ないと云ふことは、諸君これを理論的に說明し得るからである。我々が我々の總ての亢奮を支配し得るのはただ、意識と結び付いてゐる我々の最高の心理行動をそれにさし向けることに依つてゞある。

併し諸君はまた、分析的取扱ひを理解するために、今一つの見地を擇ぶことも出來る。無意識を曝露し意識化しようと思ふと、患者の側から抵抗を受ける。このやうに無意識を剔抉すれば、そこに必ず不快が伴ふのである。そのやうな不快が伴ふために、これを曝露し剔抉することは常に拒まれるのだ。

患者の精神生活中に於けるこの葛藤を、今や諸君は把握するのだ。患者が自律的に不快を支配してゐた結果として、これまで拒け（抑壓し）てゐた或るものを、患者が（事態を一層よく洞察するやうになつたゝめに）容認するやうに（諸君の努力に依つて）なると、即ち諸君はその患者に對して多少の教育を働きかけたことになるのである。朝早く寢床を離れようとしない人間が諸君の力で早起きをするやうになつたとすれば、それは既に教育である。そのやうに內的抵抗を克服するための成人教育としては精神分析法にまさるものはない。併し神經症患者に對するそのやうな成人教育としては、他の如何なる點に就いてよりは最もその性生活に於ける心理的要素に關して、重要である。實際、文明や教育がその最も重大な弊害を及ぼしたのは、正にこの點に關してゞあつて、また諸君が經驗に徵して知られるであらうやうに、神經症の病源にして治療し得べきものは、この點に關したものである。他の病源的要素（素質的原因）は、實は我々には改變し得べからざるものとされてゐる。併しこゝからして一つの重要な・醫師に對して差出される註文が、生ずるのである。彼は自ら一つの正直な人格でなければならないとのみならず――テオドル・フィッシャー Th. Vischer の „Auch Einer" 中の主要人物が『道德は自明さ』と常々口にする如く――また彼は自分自身に對して羞みと愼み（大抵の人々は、遺憾ながらこれ等に依つて性問題を解決せんとしてゐるが）とを克服してゐなければならないと。

こゝまで論じて來れば、更に一歩を進めてもよからう。私は、精神神經症の起るに就いては性が大きな役割を果してゐる事を强調するものだとして知られてゐることを、私はよく承知してゐる。併し私はまた、大衆に對して細々した局限や定義を與へて見たつて始まらないと云ふことも、よく承知してゐる。彼等はあんまり物事をよく覺えてゐないし、何かの主張を聽いてもその中から大雜束な中心だけを把握してゐて、その一面を分りよく極端化するものである。これと同じで多くの醫師たちも、私の學說とは、畢竟するに、神經病を性の禁制に歸せんとするものだと云ふ風に考へてゐるらしい。我々の社會の生活條件の間には、性的禁制が缺けてはゐない。さう云ふ豫想の下に進むならば、心理療法に關して骨の折れる迂路を避け、性的活動を恢復手段として受容れることに依つて直接的に治療に努めることが、如何に容易となることであらう！　もしこのやうな歸結が當然となれば、私は何物が妨げるとも、それに負けてゐることではない。ところが事實はさうでないのだ。性的の慾求と攝制とは、神經症の機制に働く單なる一要素に過ぎない。その要素が單獨に存在したとすれば、その結果は病氣にはならなくて、常態を逸することにならう。他の同樣に重大な要素があるのだが、それを人々はとかく忘れ勝ちになる。それは神經症者の性反撥である、戀愛し得ざることである、私が『抑壓』と名付けてゐる例の心的特徵である。二つの働きの間の葛藤からして始めて、神經症が發生し來るの

だ。また、それ故に、精神神經症者に於いて性的活動をなさしめようとすることは本來たゞ稀にしかよい議として認め得ない。

最後に私は次のやうな自家防衞的な言葉を以つて本論を結ぶことにする。諸君が一切の反感的先入見を淸算して、純粹なる興味をこの精神療法に對して抱き、重い精神神經症者を處置する場合にも好結果を示すやうに、我々を支持されんことを希望してやまない。

# 精神分析療法の將來

一九一〇年、ニュルンベルクに於ける第二回精神分析私會に於いて講演されたもの。始めて印刷に附せられたるは『精神分析中央雜誌』（一九一〇年）上に於いて。

諸君！　我々が今日此處に集つたのはとりわけ實踐的の目的のためであるから、私は自分の劈頭を承る講演の對象として實踐的の主題を撰ぶものである。諸君の學的興味に訴へずに醫師としての興味に訴へんとするものである。私は諸君が我々の療法を恐らくどう判斷してゐるかを察し、さうして大抵の諸君は行り始めの二つの段階——自分等の治療行爲が思ひがけなくうまく行くための喜びと、我々の努力を妨げる大きな困難のための落膽と——を既に經過せられたことであらうと考へる。併し發達過程の如何なる地點に諸君は到達してゐられるにもせよ、我々は神經症への抗爭方法に於いて行きつくところまで決してまだ行き着いてゐないことを示し、また近き將來に於いて療法を一層改善すると期待し得ることを明かにしておかうと思ふ。

三つの方面から我々は强くされて行くと、私は考へてゐる。——

一、內的進步に依つて、
二、權威の增大し行くことに依つて、
三、我々の仕事の一般的効果に依つて、

(一)『內的進步』とは(a)我々の分析上の知識の進步と、(b)我々の分析技法上の進步と、この二つに分れる。

(a)、我々の知識の進步に就いて。――我々は勿論、我々の患者の無意識を理解するに必要なる一切を、まだ知悉してはゐない。ところで、我々の知識が進步すれば、當然我々の技法も進步することは明かである。何も知つてゐなければ、何とも手のつけようもない。我々が知悉すること愈々多ければ我々の爲し得るところも愈々大となるわけである。精神分析治療はその始めに於いては隨分無駄骨が折れたものであつた。患者は自ら一切を語らなければならなかつたし、醫者の方でも患者に一切を吐き出させるやうに不斷に迫まつてゐなければならなかつた。今日では非常に樂になつたやうである。治療は二つの部分から成立つてゐる。醫師が察知して患者に云つた事と、醫師が患者から聽いてそれを解釋した事と。我々が醫師として患者に與へ得る助力的行爲の機制は、實際これを理解するに容易である。我々は患者に意識的な期待觀念を與へると、その觀念に似てゐる如き無意識的な被抑壓觀念

を患者が自分で指すのである。これは知力的助力であるが、これに依つて患者は意識と無意識との間の抵抗を容易に克服することが出來るやうになるのである。更にまた私が諸君に向つて云ひ添へておきたいことは、以上が分析的療法に於いて用ゐられる唯一の機制ではないと云ふことだ。實は、諸君はみんなこれよりも遙かに力強い機制（それは『轉嫁』を利用することに存する）を知つてゐるのだ。私は療法を理解するために必要な總てこれ等の關係を、何れその內『精神分析方法論一般』の中で論じたいと思つてゐる。また諸君は、今日のところではこの療法の實施に於いて、我々の豫想が如何に正しいかの證明がまた明瞭でないとの抗議を呈出されるかも知れないが、私は敢へてそれを却下しようとは思はない。諸君もお忘れでないであらうが、この證明は他の方面に發見せられるのだ。また、療法上の探究は理論上の研究のやうになされるわけには行かないのである。

吾人は二三の方面に於いて新しい發見をしてゐるし、また每日のやうに新しい經驗を得つゝあるがそれに就いてざつと諸君にお話して見たいと思ふ。それは就中、夢及び無意識に於ける象徵である。これは、諸君も御存知の通り、なか〳〵やかましい問題であつた。同僚ステーケル Stekel があらゆる反對者の抗議を物ともせず、夢の象徵の研究に專念したことは、なか〳〵容易ならぬ功績である。そこにはなほ實際、學ぶべき多くがある。私が一八九九年に書き下した『夢の註釋』は、なほ象徵の

研究に依つて重大な補足のなさるべきを期待してゐる。

これ等の新たに認識せられた象徴の一つに關して、私は諸君に二三語つておきたいと思ふことがある。——さき頃私の知つたことであるが、我々とは非常に違つた立場にある或る心理學者が我々の一人に向つてかう云つて來た、我々は慥に夢の匿れたる性的意義を重要視し過ぎると。彼が最も屢々見る夢は階段を登る夢で、その背後には性的の事は慥に何もないといふのである。この抗議に依つて注意を喚起されて、夢の中に現れる階段、石磴、梯子などに意を向けて見ると、階段（その他これに類したものは）は慥に性交の象徴であることが、やがて明確になつて來たのである。階段と性交との比較の根柢の何であるかは、これを發見するに容易である。律動的な運動、愈々加はり行く息苦しさなどと共に人々が或る高さに達し、そこからまたピョン〳〵と二三步で飛下りることが出來る。で、性交の律動は階段の登攀に當つてゐる。こゝで我々は言葉の習慣を參照することを忘れてはならない。言葉の習慣に依れば、『登る』„Steigen“と云ふことは性行爲の代償的名辭として用ゐられてゐることが直ちに分るのである。男は『登攀者』„Steiger“であり、『背後から登る』„nach-steigen“ものであると云ひ慣はされてゐる。(一)フランス語に於いては階段のことを la marche と云ふ。„un vieux marcheur“とはドイツ語で云ふ„ein alter Steiger“（老登攀者）と全く同じ意味である。これ等の

新たに認識せられた象徴は如何なる夢の材料から得たのであるか、それは象徴の共同研究委員會（それをやがて我々は組織することになつてゐる）に依つて諸君に示されるであらう。も一つの興味ある象徴（即ち『救助』の象徴、又はこれの言葉の變化したもの）は、我々の年報の第二卷に報告してある。併し、私はこゝでこの問題は打切らねばならない。でないと、我々は他の點に觸れることが出來なくなる。

註（一）　わが國にも『折花攀柳』と云ふことばがある。銀座に柳の復活した動機もこの邊からその無意識的原因を考察し得る。（譯者）

諸君の內の各位は、二三の典型的な病氣の組織を始めて洞察した場合には、一人の新たな患者に對する態度が全然違つて來ると云ふ事を、自分の經驗に照して確信するであらう。さて我々が神經症の種々な形式を定めるに際して、合法的なものを要領のいゝ公式の形で摑へたと、諸君よ、假定しておいて下さい。その摑へ方が丁度、これまでに我々がヒステリーの徵候構成に對して成功したのと同じであり、また我々の豫診的判斷がそのために確證されたのと同じであり、實際、助産師が胎盤を檢査することに依つて、總てが取出されて了つてゐるか、或は有害なものが殘つてゐるかどうかを知るのと同じであると假定しておいて下さい。さうすれば我々は、成功如何とは獨立に、また時々の病狀は

ともかくもとして、果してこの仕事が我々にとつて窮極的に成功してゐるかどうか、或は病氣が再發したり新發したりするかも知れぬから我々がその準備をしてゐなければならないかどうかを云ふことが出來るであらう。

(b)私は治療法の分野に於いて革新を急いでゐる。實際、この分野に於いては、大部分の事はなほその確實な地位を保持してゐるし、また多くの事は今や漸く明白になり始めてゐる。精神分析の技法は今や二つの目的を目指してゐる。醫師の勞力を省くことゝ、患者をしてその無意識内に無制限に立入らしめることゝである。諸君御承知の通り、我々の技法に於いは一つの根本的な變化が起きてゐるのである。洗ひ流し療法の當時に於いては、我々は症狀(徵候)の說明をその目的としてゐたのだが、やがて我々は症狀から轉じて、その代りに『コムプレクス』„Komplexe"――今ではなくて叶はぬものとなつたユングの造語――の發見を目的とするやうになつて來た。今や我々は併し『抵抗(ワイデルスタンド)』を發見し克服することを仕事とするやうになつた。さうしてこの抵抗が認識され取除かれるや否や、コムプレクスは何の苦もなく浮び上つて來ると云ふことを當然信ずるやうになつた。諸君の內の多くの方は、これ等の抵抗を大觀し分類することが出來るやうになりたいとの要求をこれまでに示された。そこで私は諸君にお願ひする、諸君は果して次の如き纒め上げた見方を諸君自身の材料に就いて確證す

ることが出來るかどうかを——。男子患者は治療に對して甚だしく抵抗するが、それは父コムプレクスから發源してをり、父を畏れ、父に反抗し、父を信賴せぬと云ふことを意味してゐると、解釋せられる。

療法上の他の革新は醫師の人格それ自身に關係してゐる。我々は『逆轉嫁』"Gegenübertragung"と云ふことの存在を氣付いてゐるのである。これは醫者が患者から影響を受けて自分の心に起す態度である。醫者は須らくこの逆轉嫁を自分自身の心中に認識して、これに左右されないやうにして貰ひたいものだと我々は思ふ。多數の人々が精神分析を實施し、彼等の體驗を互に交換し合つてゐるのを見て、我々は、總ての分析者の分析はたゞ自分のコンプレクスや內的抵抗のお蔭でそれをなし得てゐる程度であることを氣付いたのである。だから我々は、分析者が須らくまづその活動を自己分析から始め、患者に就いて經驗を積む間にも、不斷に自己分析を深めて行くやうにして貰ひたいものと思ふ。そのやうな自己分析に於いて何物をも齎し得ない者ならば、患者を分析的に處置する力を得ようなどとは、間もなく思はなくなるであらう。

我々には今やまた、分析技法は、患者の病氣の形式によつて、また患者を主に支配してゐる本能如何によつて、多少の手加減をせねばならないと云ふことが分りかけてゐるのである。肉體轉換のヒス

テリーの治療から實は我々は出發してゐるのである。不安ヒステリー（恐怖症）の場合に於いては我々は我々の取扱ふ方法を多少變へなければならない。これ等の患者は、恐怖症的條件を保持することに依つて自分等が安全であるやうに感じてゐる限りは、要するに恐怖の解除のためには決定的であるところの材料を取出すことが出來ないのだ。治療の始めから恐怖症的條件の保持を放棄させ、强迫條件の下に働かしめることは、何人にも勿論出來ない。で、我々は彼等の無意識を段々に彼等に解き聽かせてやることに依つて、彼等をして恐怖症的安全感を放棄させ、さうして今や中庸となつた强迫の前に敢然立たしめるやうにしなければならない。彼等がこれをするやうになれば、今や始めて例の決定的の材料に近づくことが出來るやうになるのだ。さうしてこの材料を支配することに依つて恐怖の解除に導くやうになる。これとは別の技法上の諸變化（これは私にはまだ十分に決定的になつてゐるやうには思はれないが）は、强迫神經症の處置上に要求せられるものである。非常に重大な、併しまだ說明せられてゐない問題が、這般の關係の內に擡頭するのだ。卽ち、患者の抑制せられてゐる本能に對して、治療中に如何なる程度まで或る部分の滿足を許すべきか、またその間にこれ等の本能が能働的（加虐性的）性質のものであるか、或は受働的（被虐性的）性質のものであるかに就いて如何なる區別をなすかの問題である。

以上申上げたところに依つて諸君が次のやうな印象を得たならばうれしいと思ふ、卽ち、もし我々が今や我々に始めて分りかけた事を知悉してゐるとするならば、また我々が患者に就いて深い體驗を積んだ結果、到達せざるを得なくなつた技法上の總ての改良を完成したとするならば、その時我々の醫師としての取扱は（あらゆる醫師的特殊分野には存しないところの）結果の確實さを持つことになるであらうと云ふことを――。

（二）時の經過につれて我々に權威が增し來るやうになれば、我々は多くを期待せねばならなからうと云ふ事を私は云つた。權威の意義に關しては、私は諸君に多くを語るを要しない。文明人として他人に依憑せずして生存することが出來、或はまた獨立的な判斷を下すことの出來る者は極めて少い。人間が權威を外に求め、而も內には定見がないものである事は、これを如何に意地惡く考へても考へ過ぎでない。宗教が勢力を失墜して以來、神經症が異常に多くなつたと云ふことは、右の事實に對する一つの標準を諸君に示すものであらう。抑壓のために多大の支出をなすことに依つて自我が貧窮を來すと云ふことは（文明はこれをあらゆる個人に就いて求めるのだ）、かゝる狀態の主なる原因の一つであるかも知れない。

權威ならびにそれから發する途法もない暗示は、これ迄は我々に反してゐた。總て、我々の治療上

の成功はこれ等の暗示に反對して目指されてゐる。抑々暗示に反對して而も成功が收められたと云ふことは、驚くべきことである。私は諸君に、私が精神分析の唯一の代表者であつた當時には如何に患者たちから受取られたかを話して聞かせるやうなことをまでしようとは思はない。患者に對して私が君の病苦を永く取去つてあげる方法を知つてゐると云つてやると、彼等は私の貧しい樣子を眺め、私の職業や肩書が輕微であることを觀察し、私が何處かの賭博場（それに對して人々は反對してゐられる時には反對し、從つて自分ではさう云ふ事はせぬやうな顏をしてゐなければならぬ）で間違ひなく收入を得て居るのだらうと見てゐることを私は承知してゐる。また心理療法を施すことは實際に於いて容易でなかつた。何しろその間に、助手を勤めて呉れる責任のある同僚醫師が治療にいろ〳〵の嘴を容れることに特別の面白味を感じてゐるし、また患者身邊の者等は患者に於いて血が出たり不安な運動が起るや否や、手當をやめてくれなどゝ云ひ出すからである。何か手當をすれば、それに對する反應の現象が當然起きなければならない。外科手術に於いては、我々は久しくそんなことには慣れてゐる。我々總てをまだ人々が信じてはゐないが、丁度このやうに人々は私を信じてはくれなかつたのだ。そのやうな條件の下に於いては、大抵の事をやつて見ても失敗である。一般の信賴が我々に向つたとして、その時に治療の機會を多からしめるやうに圖るためには、トルコやカトリック教國に於け

る婦人科醫の立場を諸君はお考へなさい。そこに於いて婦人科醫たちが爲すべく許されてゐる一切は壁の穴からは彼等の方へ突出されてゐる腕の脈搏を見るだけである。このやうに患者に接近することが出來ないのであるから、醫者の治療手段もこれに相當してゐるのである。カトリック教國に於ける我々の反對者たちは、我々の患者の精神に對してほゞこれと似たやうな態度をとることを要望するのである。併し、婦人患者をして婦人科醫の許に走らしめたものは社會の暗示であつて、その暗示あつて以來婦人科醫は婦人の救助者となつたのである。で、よしんば諸君は、社會の權威が我々を助けに來、我々の成功がそれだけに高まつたとしても、これだけで我々の考への正しさの證據には一向ならないなどゝ云ふものではない。暗示が一切をなし得るとすれば、我々の成功は卽ち暗示の成功であつて精神分析の成功ではない。社會の暗示は今や、神經衰弱者に對する水浴療法、斷食療法、電氣療法に對して好意的であるが、併しこれ等の方法では神經病を征服することは出來ないのだ。精神分析的處置法がそれ以上の事をなし得るかと云ふことは、自ら明かになつて來るであらう。

今や併し私は、諸君の期待を再び抑制しなければならない。社會はなか〳〵急いで我々に權威を賦與してはくれない。我々の方で社會に批評的な態度で出るからして、社會の方でも我々に對して抵抗的に出なければならぬ。我々は社會に對して、神經症の多くなる原因の大部分の責が社會にあること

を指摘する。我々が個人の內に抑壓されてゐるものを剔抉することに依つて彼等を敵に廻す如く、社會とてもその弊害や不備を遠慮なく曝露されてはこれに對して同情ある態度を以て應ずることは出來ない。何となれば、我々は幻想を打破るからであり、人々は我々が理想を危險に陷れると云つて批難するのである。で、我々の治療上の機會の大きな促進のために私が期待をかけてゐるところの條件は一向その中に立つて調停しようとしないやうに見える。併し事情は人々が只今考へてゐるに違ひないほどには絕對的なものではない。人間の感情や僻見は如何に力強くあらうとも、知識もまた一つの力である。この力は最初には大したことではないが、併し終りになるほど愈々確實になつて來る。最も痛切な眞理は、そのために傷けられた利害感やそのために呼覺まされた感情が消去つた後には、遂に耳を傾けられ、認められる。これまでは、さう云ふ風であつた。で、我々精神分析者が世間に向つて云つて來たところの喜ばれざる眞理は、やはり同じ運命を辿ることであらう。たゞ、それがあまり夙くは來ないであらう。我々は隱忍することが出來なければならない。

(三)最後に私が諸君に說明しておかなければならないことは、我々の仕事の『一般的効果』„Allgemeinwirkung" とはどう云ふ意味であるか、またどうしてこの効果に希望を持つやうになつたかに就いてゞある。ここに非常に注意すべき一つの療法上の觀念がある。その療法はこれと似たやうな形

では恐らく何處にも存在してゐないもので、諸君もこれの内に久しく信ぜられて來た或るものを認識されるまでは、最初の程はをかしく思はれたであらうところの觀念である。併し諸君も御存知の通り精神神經症とは（その存在を自分に就いても否認し、他人に就いても否認せざるを得ないやうな）本能の歪められたる代償的滿足である。さう云ふ滿足はその形が歪みをり、人々の眼をくらましてゐるが故に存在してゐるのである。もしその歪みやくらましの謎が解決され、その解決が患者に依つて受容されると、かゝる病的狀態は存在し得なくなるのである。これに類したやうなことは醫術には殆んど存在しない。童話に於いては諸君は、惡魔がその秘密にしてゐる名前を人から呼ばれるや否やその通力を失ふと云ふ話を聽かれるであらう。

そこで諸君よ、個々の患者の代りに、神經症に惱んでゐる全體の、病人や健康者から成立つてゐる社會を問題にして御覽なさい。あちらの方で解決を假定する代りに、こちらの方で一般に承認することを問題にして御覽なさい。さうすれば一寸考へて見たゞけでもこのやうな代償が結果に於いて何の變化をも齎し得ないと云ふことを知るであらう。この療法が個々人に就いて示し得る成功は、また群衆に就いても同樣に示される。患者達の身邊の者や他人の總てが（患者達は自分の精神過程をそれ等周圍の者達に匿しておかうと思つてゐるのだが）その症狀（徵候）の一般的意義を知つて了つてゐた

り、また患者自身も、自分の病的現象に於いて爲すところの意味を他人が直ちに解釋して了ふのだと知つてゐたりすると、患者たちは自分の種々な神經症――例へば、彼等の强迫的な程の過度の優しさ(それは却つて憎惡を匿さうとする意識的手管である)や、彼等の臨場恐怖症(それは彼等の名譽慾の滿たされざることを語つてゐる)や、彼等の强迫的行爲(それは惡い企てをせぬとの保障と、企て故の自已批難とを表はしてゐる)――を知らせないやうにすることが出來ない。併しその効果は症狀を匿しておくこと――どうせ大抵は匿しおほせはしないのだから――だけに限られはしない。何となれば、病氣になつてゐることは、匿さなければならないと云ふ事のためには、役に立たなくなつてゐるからである。秘密を知らせると云ふことはその秘密に等しき病源(そこから神經症は發してゐるのだ)の最も急所を襲ふことで、そのために病氣になつてゐることの利益も空しくなり、從つて醫師の分別に依つて變化された事情の窮極の結果は病氣を生ずることの中絶に外ならぬことゝなる。

から云ふ希望を抱くのは甚だユートーピア的であると諸君には思はれるかも知れないが、それならば考へても御覽なさい、かゝる方途に於いて神經症的現象を取除くことは實際に(よしんば全然個々の場合に於いてゞはあるにもせよ)既に行はれてをると云ふことを――。思ふても御覽なさい、昔時に於いては聖母の幻覺は如何に屢々百姓の娘に於いてなされたかを――。そのやうな現象のためにその

結果として信者の大衆が生じ、聖地に寺院が建立される間は、百姓娘の幻想狀態は何とも手のつけようがない。今日に於いては、坊さんたちでさへもこの現象に對する彼等の立場を變更してゐる。僧侶たちは、憲兵や醫師が幻想する女を訪れて、それ以來聖母は非常に稀少になつたと云ふことを容認してゐる。また諸君は、私がこれと同じ過程（それを私は豫め未來に期してゐた）を、類似の、併し低下した、從つてとかく看過し易い立場に就いて、諸君と共に研究するものであることを容認して貰ひたい。假りにこゝに良家の男女から成る一群があるとして、それが綠の郊外にある料亭に遠足を試みる約束をしたとしよう。婦人達は互の間でかう云ふ定めをした、卽ち彼等の內の一人が小用を催して來たら、その人は一寸花を摘んで來ますわと大聲で叫ぶことにしようと。ところがこの秘密を或る間者が嗅ぎつけ、遠足に參加する男達に配る印刷したプログラムの上に『婦人連が小用に行く時には、花を摘みに行くと云ふであらう』と附け加へさせた。勿論、婦人連は花にまぎらせるこの方法を用ゐようとする者はなからう。これと類似な方法を新たに案出しても、やはり同じに困難であらう。その結果はどうなるであらうか。婦人達は別に羞恥の感もなく自分等の自然の要求を人に知らせ、男達も誰もそれを不作法と思ふものはない。さて、我々は吾人のもつと重大な場合に戾らう。相當多くの人々は人生の葛藤に於いて（それの解決があまりに困難になると）神經症に逃込み、さうしてそれに依

つて見まがう方なく（併し長い間にはあまりにも甚だしい犧牲を拂はなければならないが）病氣の利得を目指すやうになるのである。ところがこの病氣への逃込みと云ふ事が精神分析の説明に依つて無下に阻まれて了つたならば、かう云ふ人達はどうなるのであるか。彼等は正直になるより外はない。自分の内に燃えて來た本能を自認するより外はない。葛藤を續けなければならない。戰ふか諦めるかしなければならぬ。さうすれば社會は精神分析の説明の結果として當然寛大となつてゐるから、これに助け舟を出してくれるであらう。

併し我々は思ひ出すのである、人々は人生に對して狂熱的な衞生家や治療家として向つてはならないと云ふことを。神經病になると云ふこの理想的逃込法は總ての個人に都合のよい利得となるとは限らぬと云ふことを我々は認める。今日病氣に逃込んでゐる大多數の者は、我々の假定した條件の下に於いては、葛藤をなさず、迅かに沒落して不健康となり、それが彼等の本來の神經病よりはもつと大きくなつてゐるのである。神經症者と雖もその自己防禦及び社會的是認としての生物學的機能を正しく有してゐるので、彼等の『病氣の利得』（逃込場所としての）と雖も純粹に主觀的なものとは斷ぜられないのである。神經症者の立場としてその一切の可能性の内、病氣になることが最も穩當な逃げ道であることを、諸君の内何方かはなほ認め得ないでなからうか。ところで世の中には、なほこれ以外

の不可抗的な悲惨が充滿してゐるのに、神經症を根絶するためにそれほど重大な犧牲を拂はなければならないであらうか。

では我々は、神經症が根柢に於いて個人に對して危險であり、社會の動力のために障害になると云ふ深刻な意義を闡明することの努力を斷念し、一つの科學的認識から實踐的歸結を導き出すことを放棄しなければならないのであらうか。否、私思ふに、我々の任務はやはり他の方向に進むものである。神經症者の病氣利得はやはり全體として、また窮極に於いて、個々人に對しても社會に對しても、一つの弊害である。我々の說明の仕事の結果として不幸が生ずることがあるとしても、それはたゞ個々人に關することである。社會がもつと眞實に卽した、もつと價値ある狀態へと轉向し來るならば、これ等の犧牲と雖もあまりに高價な代價であつたとは云ひ去れない。併し就中、一切のエネルギーは――今日では現實から遊離した空想世界の一つに奉仕して神經症的徵候を產み出すために浪費されてゐる一切のエネルギーは――既に生活のために役立ち得なくなつてゐるとしても、我々の文明に於けるあの諸々の變革――この變革の内にのみ我々は來るべき時代の者等のための健かな道が認められる――への叫びを强めることに助力するであらう。

そこで私は最後に諸君に次の一言を述べてお別れとしたい。諸君がその患者を精神分析的に取扱ふ

ならば、諸君は一つ以上の意味に於いて文明の任務を果すものであると――。諸君は唯一の、再び得難き好機會（神經症患者の奧秘の心を洞觀することの好機會）を摑むことに依つて、諸君は單に科學のために役立つ仕事をなすばかりではない。諸君は諸君の患者の病苦（それは今日では我々にまで自由になつてゐる）を最も効果的に處置するばかりではない。大衆は神經病の根本的豫防を、社會的權威を經ての迂路に求めてゐると我々は期待してゐるが、諸君はまたあの大衆の啓發に諸君の寄與を齎らすのである。

# 分析の『仕荒し』に就いて

始めて『精神分析中央雜誌』第一卷（一九一〇年）に發表さる。原名は Über „wilde“ Psychoanalyse.

二三日前、私の診察時間に一人の女友達に伴はれて一中老婦人が私の許に現れ、不安狀態で困つてゐると訴へた。彼女は年の頃四十七八と思ぼしく、相當元氣があつて、女としての働きを終つて了つてゐるとは明かに見えなかつた。その不安狀態となつた原因は彼女の夫と最近に別れた事であつた。併しその恐怖は、彼女の告げるところに依ると、彼女がその居る市外の町で或る若い醫師に診て貰ふやうになつてから甚だしく高まつて來たのである。と云ふのは、この醫者が彼女の恐怖の原因は性的欲求にあると說明したからである。彼女は夫との交りを節することが出來ない。それ故に彼女が健康になるには唯三つの方法が存するのみである。夫の許に歸るか、或は一人の愛人を持つか、或は自分自身で滿足を得るかである。ところが彼女は夫の許に歸る氣はないし、二つの他の方法も彼女の道德や宗教には反するしするから、その時以來、彼女は自分は癒らないと確信するやうになつた。併し彼女が、私の許に來たのは、その醫者が彼女に、かう云ふ新たな洞察は私のせいであり、さうして本當

にさうであるかどうかを確めたいならば私の許へ行つて訊くより外はないと云つたからである。同伴して來た女友達は、患者よりももつと年長で、惱み多く不健康に見える女であつたが、その女はやがて、醫者が間違へたのだと患者に云つて聞かせますと私に誓ふのであつた。ところがさうであるわけはないのだ。何となれば、彼女は寡婦となつて年既に久しく、而も恐怖に惱むことなく確乎としてゐたのであるから……。

私は厄介な者に飛込まれて甚だ迷惑に思つたが、これを相手にする氣持にはならず、抑々その若い醫者が何のためにこの患者を私の許に寄越したか、その心理を闡明したいと思つた。始めに私は豫防と云ふことを考へて見たい。これは恐らく――願はしくはと云つた方がよいかも知れないが――餘計な事ではあるまい。永年の經驗に依つて私の知つたところに依ると（私以外の人々と雖も勿論その經驗に依つて同樣の事を知つてゐるであらう如く）患者、殊に神經症患者がその醫師に就いて語るところは容易に信用出來ないのである。神經病醫は如何なる處置の仕方をなすにもせよ患者から敵對感情をさし向けられる對象と容易になり易いばかりでなく、彼はまた多くの場合、一種の投出に依つて、神經症患者の秘奧の、抑壓されたる願望に對する應答を引受けることを甘んじてゐなければならないものである。ところがさう云ふ批難を最も容易に信ずるのは誰かと云ふのに、それは他の醫師であつ

て、これは誠に困つた事だが、著しい事實である。

で、私は、自分の診察を受けに來たこの婦人がその醫師の言葉を傾向的に歪めて報告したと解するのが正當であり、またこの場合に對して私の所謂分析の『仕荒し』と云ふ言葉を結びつけるのは、私には個人的に未知の人なるその醫師に對して濟まないと考へるのが至當であると考へるのである。併しそれに依つて私は恐らく、彼女の病氣に對して間違つた見方をすまいと云ふ、他の正當さを實行したのである。

件の醫者が正にその婦人患者の報告した通りに云つたものと假定して見よう。

或る醫者が婦人と性慾と云ふ主題を語り合ふ必要が生じた場合には、それを氣轉や節言を以てなさねばならないと云ふことは、何人も容易に批評にかけることである。併しこれを語ることの必要は精神分析の或る技法上の規則と一致してゐる。それのみならずその醫者は精神分析の科學的の敎へを誤認し誤解し、且つそれに依つて、如何に彼が斯學の本質と意圖とに對する理解を缺いてゐるかを示してゐるのである。

先づ我々は最後の、科學的の誤謬から始めることにしよう。右の如き注意を醫師が與へることに依つて、彼等が『性生活』の意義を如何に解してゐるかゞ明白に認識せられるのである。通俗的な意味

に於いてはつまり、性的慾望とは性交もしくはそれに類した（恍惚又は精材料射出の効果を目指す）企てへの慾求に外ならないのだ。然るに醫師も、精神分析が性の概念を普通の範圍以上にまで押廣めるのを人々が難じ習はしてゐることを、知らないわけはない。成程さう云ふ事實はある。その事實が批難さるべく拒否すべきものであるかどうかは、只今これを論ずべき場合でない。性の概念は精神分析に於いては、普通の範圍を超えてはゐる。通俗的な意味に於けるよりは上にも下にも擴大されてゐる。この擴大は發生的に妥當する。我々は早期の性的源泉から發生する感傷的感情の一切の活働をも『性生活』の中に算入する。よしんばこれ等の感情がその本來の性目的を禁斷されてゐるにもせよ、或はまたこの目的が他の（既に性的ならぬ）目的と交換されてゐるにもせよ――。我々はそれ故にまた好んで性心理 Psychosexualität に就いて云々し、人々が性生活に於ける心理的要素を看過しないやうに、また見縊らないやうに、これを重視するものである。我々は性 Sexualität と云ふ語をドイツ語の『愛』,,lieben" と云ふ語と同じやうに、廣義に用ふるのである。また我々の既に知つてゐる通り、如何に常態的の性交は行はれてゐても精神的滿足が伴つてゐなければその結果はやはり面白くないし、また我々は治療者として自ら常に遺憾に思つてゐることは、性心理の働きが滿足に行つてゐないと（それのための代償滿足が神經症的形態をとつてゐるのに對して吾々は戰つてゐるのだ）、性交又

はその他の性行爲に依つてもたゞ僅かしかその滿足を取り得ないことが屢々である。性心理に就いてのこのやうな考へ方に同じないものは、精神分析の諸々の學說（そこには性の起源的意義が論ぜられてゐる）を辯護する權利もない。さう云ふ人は性に於ける身體的要素を專ら强調することに依つて、慥に問題を甚だ單純にしてゐるが、併し彼は自分の誤りに對して一人で責任を背負ふやうになるだらう。

件の醫者が患者に與へた言葉には第二の、同樣に甚だしい誤解が露見してゐる。性的不滿が神經症の原因だと精神分析が云ふ、と斷ずるのは正しい。併しそれ以上の事を精神分析は云つてをらぬだらうか。神經症的徵候は二つの勢力――その內の一つは（あまりに大きくなり過ぎた）リビドーであり、他はあまりに强い性拒否又は抑壓――の間の葛藤から生ずると精神分析は說くのであるが、これはあまり錯雜した考へ方であるとして、放棄しようと人々はするのであらうか。この第二の素因――併しこれは素因として第二義的であるとは云へない――を忘れない者ならば誰しも性滿足それ自身が神經症者の惱みに對する一般的な、無視し難き治療法であるとは信じ得ないであらう。神經症者の大部分は、實は性滿足を、與へられたる事情の下に於いても、或は如何なる事情の下においても、持ち得ないのだ。彼等がそれを持ち得るやうならば、彼等がその內的抵抗を持つてゐるな

いのならば、强力なる本能は、性滿足の方途を彼等に示すであらう、よしんば醫者はそれを彼等に敎へ得ずとも――。では、例の醫者があの婦人患者に與へたやうな助言はどう云ふ事になるであらうか。よしんば彼が科學的に正しいのだと云ふ事を示し得るにもせよ、彼女に對しては彼は何も實行し得ない。彼女が自慰に對し、又は情事に對し何等の內的抵抗を持つてゐなかつたならば、彼女は實際夙くにこれ等の方法の何れか一つを取つてゐたであらう。それとも件の醫者は、四十の坂を越えた女はその年になつても世間の人は愛人を持つことのあり得るものだと云ふことを夢にも知らなかつたと考へてゐるのであらうか。或はそれとも、その醫者は自分の感化力をあまりに買被り、醫者の指圖がなければ患者がさう云ふ方面に踏出す決心をなし得ないとでも考へてゐるのであらうか。

これは總て甚だ明瞭であるやうだ。併しそこにはなほ、判斷を下すことを困難ならしめる一つの契機が存することを、云つておかなければならない。多くの神經症的狀態――典型的神經衰弱や純粹の不安神經症などの如き所謂實際神經症（Aktualneurosen）――は明かに性生活の身體的要素に依憑してゐるが、併し我々はそこに心理的要素や抑壓が役割を果してゐるか否かに就いては、何も確實な考へを持つてゐない。そのやうな場合に於いては醫者は非心理的の療法（身體的性活動の變更）を加へることを目論んでゐゝのだ。さうして彼の診斷が正しい限りは、その方法をとる事が正しいのだ。

件の若い醫者に診斷を乞ふたあの婦人の病苦はとりわけ不安狀態にあつたのだ。で、どうやらその醫者はその婦人が不安神經症に惱んでゐると見立てたらしく、彼女に身體的療法を勸めるのが正しいと考へたのである。これまた一つのいゝ加減な誤解である！　不安に惱むものは誰でもその故に必然的に不安神經症になるとは限らぬ。このやうな診斷は病苦の名稱から下さるべきものでない。如何なる現象が不安神經症となるかを、また不安神經症と他の、やはり不安のために顯現して來る病的狀態とを區別することを、人々は知つてゐなければならぬ。問題の婦人は、私の診るところでは、不安ヒステリー Angsthysterie に惱んでゐるのである。不安神經症と不安ヒステリーとでは大した違ひではないではないかと人々は思ふかも知れないが、併しかゝる區別をなすにも重大な價値がある。何となれば、それに依つて病源の斷定も違つて來るし、從つて療法も違つて來からである。そのやうな不安ヒステリーと云ふものがあり得ることを認めた者は誰しも（例の醫者がかうなればあゝせよ、でなければかうせよと敎へた注意に於ける如く）心理的要素を等閑視することにはなるまい。

この似而非精神分析醫のあやふやな療法に於いては、精神分析の餘地は全く存しないと云ふ事をよく注意しなければならない。この婦人は夫の許に歸るか、自慰をするか、或は誰か愛人が出來て滿足を得れば、それで彼女の不安症は癒える筈なのだ。では何處に精神分析をする餘地があるのか。抑々

分析療法なるものは不安狀態に對する主要なる手段だと我々は認めてゐるのに……。

そこで我々は、この場合に於いて例の醫者が企てたところに如何なる療法上の誤りが存してゐるかを突きとめたことになるであらう。患者は自分の病源を云はゞ知らない結果惱むのである。で、この無知を（彼の生活と病氣との因果關係、幼兒時代の體驗その他に就いて知らせることに依つて）打破するならば、彼は必ず全快するに違ひないと云ふ考へ方は、今日では旣に古くなつてゐる、表面に執した見方である。この無知それ自身は發病的契機ではなくて、寧ろ內的抵抗（そのために無知は始めて生じ、今もそれに依つて支持されてゐる）內に於ける無知の基礎が契機である。この抵抗と戰ふ事が治療の任務である。患者がそれを抑壓してゐるが故に無知であるところの事柄を知らせてやることは、治療のための必要なる一準備に過ぎない。患者に無意識を知らせることが、精神分析の經驗のないものが信じてゐるほど、それほど重要であるならば、患者は講義を聽いたり本を讀んだりしたゞけで、病氣が癒りさうなものである。併しかう云ふ遣り方は神經症の苦痛徵候に對して、丁度空腹時に獻立表を配ることが食慾に及ぼすのと同じ影響を及ぼすのである。ところがこの比較は兩者の場合が似てゐるのを理解するための役に立つばかりでなく、それ以上にまで及ぶ。何となれば、患者に對してその無意識を告げ知らせるならば、必ずその結果として、彼の心內の葛藤が愈々激しくなり、苦惱

が益々重くなるからである。

併し精神分析はそのやうに無意識を知らせないでやることは出來ないから、二つの條件が充足されるまでは寧ろこれをやらない方がよいと云ふ定めになつてゐる。第一に、患者が習練に依つて、自分が抑壓してゐるものを知るやうになる時まで——。また第二には、患者が醫師に對して非常に執着（轉嫁）を持ち、醫師に對する感情關係のために今更逃げ出すことが不可能になるまで——。

これ等二つの條件を充すことに依つて始めて、抵抗（これあるが故に抑壓や無知が結果することになつたところの）を認識し、これを左右することは可能となるのだ。さう云ふわけで、精神分析を施すことは患者と相當長い間接觸してゐる事を豫想してゐる。で、醫師が初對面の患者に對してその看取したる秘密をぶしつけに話して聽かせやうとすることは、技法として感服出來兼ねるし、その結果は覿面で、患者は醫師を心から憎惡するやうになり、從つてその後の一切の影響を受付けなくなるのである。

ましてや人間には屢々見損ひと云ふこともあるし、また一切を看破することも不可能であるのだから——。醫師には『醫師の手練手管』と云ふ怪しげなものが必要で、それは特殊の天分であるとされてゐるが、精神分析ではこのやうな手管に代へるに、右の如き一定の技法上の規則を以てするのである。

それ故に、醫師としては精神分析に關する二三の知識を得たゞけでは十分でない。我々は自分の醫師としての處置の仕方を精神分析的見地に依つて導いて行かうと思ふならば、また精神分析の技法にも親熟しなければならない。この技法は今日ではまだ書物から學び知ることは出來ない。で、慥に時間、骨折り、並びに結果に就いての大きな犧牲を拂つてのみ、我々は自分でそれを發見するより外はない。人々は他の醫師的技法と同樣、精神分析技法をも、その技法に依つて治した患者に依つて體得するのである。それ故に私が例の如き注意を與へた醫者に會ひもせず、またその名を聽きもしなかつたのは、慥にこの醫者の診斷振り（私は右に論じて來たのは勿論これに大いに關係させて云つてゐるのだが）を批難するためであるのだ。

このやうに醫師としての技法を一手專賣的にしておくことは、私とても愉快でないが、私の友人同僚たちとても別に愉快ではないのである。併し『仕荒し』の精神分析を先に實行して了ふことは患者に對して危險があるし、また精神分析も難かしくなつて來るから、これを思ふと專賣的にしておくより外はないのだ。我々は夙く一九一〇年に國際精神分析學會を興したが、それの會員は名前を公にすることに依つて已れがそれに所屬するものであることを明かにしておく。それは、この會に屬せずして自分の行ふところを『精神分析』と僣稱する總てのもの等の所爲に對する責任を負はないやうにす

るためである。何となれば、そのやうな自稱分析家の『仕荒し』は、個々の病人よりも精神分析なるものを損ふからである。私が屢々經驗したところに依ると、そのやうな未熟な行り方で始めは患者の樣子が惡くなつても、遂には癒つて行くことがあるものである。いつもさうとは限らぬが、併し屢々さう云ふことがある。患者が隨分永い間醫者の惡口を云つて居り、その影響など受けないと思つてゐる內に、症狀の方は段々よくなつて行き、全治の方へ決然一歩を踏み出すことがあるものである。して見れば窮極的によくなるのは『ひとりで』„von selbst" にさうなるので、或はその患者が後になつて掛るやうな醫者の甚だ思ひもよらぬ處置がよかつたと云ふことになるのである。醫者の惡口を云つて聽かせた例の婦人の場合に就いて云へば、私の見るところでは、その『仕荒し』分析者と雖もそんじよそこらの非常に尊敬されてゐる權威者（その權威者は彼女の病氣は『脈管神經症』だと云つたと云ふことだが）よりはその婦人患者に對して勝つたことをしてゐるのである。彼はその婦人患者の視點をその病苦の實際の根據又はその近くに引寄せ、さうしてから云ふ扱ひは患者のあらゆる反抗を受けたに拘らず、結果は好ましくないことはなかつたのだ。併し彼自身はそのために迷惑をし、患者の先入見（患者に於いて明かに感情上の抵抗があるために、その結果として精神分析者の活動に對してこの先入見が起きて來る）を強めることになる。而もこれは避け得ることとなのだ。

# 精神分析に於ける夢の解釋の使用

『精神分析中央雜誌』第二卷（一九一二年）に始めて發表。原名は „Die Handhabung der Traumdeutung in der Psychoanalyse."

『精神分析中央雜誌』は精神分析の進步に關して回顧し、それに就いて短い諸論篇を公にせんとの企てを立てたのみでなく、既に知られてゐることを後進のために明白に纒めてやり、分析處置の初學者のために獨特の指導に依つて時間と勞力とを省いてやらうとの、別の任務をも果さうと欲したのだ。それ故に本誌に於いては向後、敎示的性質並びに技術的內容の論文も現れるであらうが、それのみが本誌の本質ではない。よしんばそれ等の敎示的論文にも何か新しいことが報ぜられるにもせよ――。

私が今日扱はうと考へてゐる問題は、夢の解釋の技法に關するものではない。我々が夢を如何に解釋すべきか、また如何にその解釋を利用すべきかは、こゝに論ずべき事ではない。たゞ患者を精神分析的に取扱ふに當つて夢の解釋の技術を我々が如何に使用すべきかをのみ論ずべきである。ところがそれを使用するにも慥に色々の行り方があるが、併し技法上の問題は精神分析に於いては決して簡單

明瞭ではない。良い行り方とてもたつた一つでない上に、惡い行り方も甚だ澤山にある。さうして種々な技法を比較して見ると、それによつて決定的な方法が發見されないにしても、説明の效果だけはあるわけである。

夢の解釋から分析處置に進んで來た者は誰でも夢の內容に對する興味を失はないであらう。さうして患者が彼に語る一切の夢を出來るだけ完全に解釋したいと思ふであらう。ところが彼はやがて全然別種の事情の下に已れを發見し、彼が自分の企てを貫徹しようと思ふ場合に治療上の第一の問題に撞着する自己を氣付くことが出來るのである。患者の最初の夢がその病氣の説明を甚だ見事になし得る程のものであることが分つたとしても、やがてその次に出て來る諸々の夢はあまりに長く且つ漠然としてゐて、その日の限られたる診察時間內にはその解釋を片付けられぬ事がある。醫者がその夢の解釋の仕事を翌日も續けてゐると、その內にまた種々な夢が報告せられると云ふ始末であるから、この方は第一の夢が片付いたと考へるまでは持出すことを見合はさせておかなければならない。時々は夢を見る數が甚だ多く、そのくせ夢の理解力は甚だしく進みが遲く、分析者は遂に、このやうにふんだんに材料を提供するのは、これまた一種の抵抗であらうとの考へを抱くやうにならざるを得ないのである。つまり、こんなに材料を持出されては治療の方でも手がつけられないと云ふ感じが、その抵抗

のために して來るのである。そんな事をしてゐる内にも、併し、この治療は全然現在の背後に殘つてゐるのだ、現前との接觸を放棄してゐるのである。そのやうな技法に對しては我々は如何なる規定を立てなければならないかと云ふに、それは患者の時々心理の表面を知り、如何なるコムプレクス、如何なる抵抗がそれを惹起してゐるのか、またそれに對して如何なる意識的反動が彼の態度を導くやうになつてゐるかを呑込んでゐることが、治療上甚だ重大な意義あることである。この治療上の目的は必ずしも常に、夢の解釋に對しての興味に都合よく裏付けられるとは限らぬ。

では、我々はその規定を記憶してゐようと思ふ場合に、この目的を分析に於ける夢の解釋と如何に調和させるべきか。まづかうである。——我々は或る時に得られる（解釋の）結果に常に滿足するのだ。さうして嘗ての內容を完全に理解しなくても損失のやうには考へないことだ。次の日には自明の事のやうには解釋の仕事を續けないのだ。さうして患者に於いて何か變つたことが心の表面に出て來てゐないと云ふことを確めて後に始めて、それを續けるのだ。であるから、夢の解釋が中斷されてゐる場合にも都合よからしめるためには患者が最初に思ひ浮ぶことを取上げると云ふ規定には、これは例外とはならぬのである。以前の夢をまだ片付けない內に新しい夢がどし〳〵這入つて來ると、我々はその近頃の夢の方に向ふのだ。古い夢を等閑に附したことを別に心配しないのだ。夢があまりに廣

がり過ぎてゐるならば、豫めそれを完全に解釋して了はうなど〻云ふ考へは放棄してか〻るのだ。我々はまた夢に對して非常に特別な興味を持つてゐると云ふことをあまり露骨に示さないやうに、或はまた患者に於いて夢を持つて行つてやらなければ治療の仕事は停頓するのだと云ふ考を起させないやうに、用心しなければならぬ。でないと、抵抗は夢を見ることの上に働いて來て、夢を漸次に見なくなつてしまふのである。分析は如何なる場合にでも（夢を示さうと示すまいと）その材料を發見して續けられるものであり、如何なる程度にでも夢を扱ふものであると云ふ風に、被分析者を敎へ込んでおきたいものである。

さて、人々は尋ねるであらう。――そのやうな制限的な方法で夢の解釋を實行するのでは、その無意識の發見上非常に價値ある材料をあまりに多く放棄することになりはせぬかと。これに對しては次の如く答へることが出來る。――その損失は、あまり深く這般の事情を洞觀しない者が思ふほどには決してさう大きくはないのだと。一方に於いて我々は、如何に精細な夢の話も重病の神經症者に於いては原則としてのあらゆる豫想に基いて完全に解釋されると判斷してはならないと云ふことを明かに知つてゐる。そのやうな夢は屢々その（患者の）場合の全體の病理的材料（醫者も患者もまだ知つてゐない材料）の上に成つたのだ（所謂プログラム的の夢、傳記的の夢。）そのやうな夢は時々は、神經症

の全內容を飜譯したものに擬せられる。かゝる夢を解釋せんとするに際して、まだ手をつけないまゝで存在してゐる抵抗が効力を發揮して來て、分析者の洞察力に限界を劃して了ふ。そのやうな夢を完全に解釋することは、すつかり分析を完了して終うことゝ正に一致するわけである。そのやうな夢を分析の始め頃に氣付くと、まづ分析の終り頃に（幾月もの後に）理解することが出來る。それは個々の徵候（主要徵候）を理解するのと、丁度場合が同じである。分析の全體が主要徵候の說明に役立つのだ。處置の間に於いて分析者はその時々に應じて徵候の意義の或はこの部分を、或はあの部分を把握し、遂にこれ等總ての部分を纒め上げることが出來るやうになる。であるからまた、分析の始め頃に出て來た夢からあまり多くを望んではならない。分析の試みから個々の病的願望感情を看取し得たならば、まづ滿足しておかなければならない。

から云ふ次第であるから、夢を完全に解釋しようとの意圖を放棄したとしても、知り得べきことを諦めたと云ふことにならないのである。併しまた分析者は、やゝ近頃の夢を解釋せんとするためにやゝ以前の夢の解釋を中止したとしても、大抵は何物をも損失したことにはならないのだ。完全に解釋し盡された夢の見事な實例から我々は、その夢の相互に繼起する澤山の場面が同じ內容（その內容がそれ等の場面に於いて愈々勝り行く明白さを以て貫徹してゐる）を持ち得るものであることを知つた

のである。一夜の内に見る多くの夢は同じ內容を異なる表現法で示さうとの試みに外ならぬものであると云ふことを、我々はまた知つたのである。今日一つの夢を生んだ願望感情はそれが理解されて了はず、また無意識の支配が避けられてある限りは、總てまた別の夢となつて現れ來るものであることは、如何なる場合にでも確だと我々は云ひ得る。で、また一つの夢を完全に解釋することの最良の道は、その夢を捨てゝおいて、それのと同じ內容をもつと分り易い形で表はしてゐる新しい夢に立向ふことに存する。處置に際しては意識的な目的觀念を放棄し、我々に常に『偶然』としか見えない一つの導きに任せておくことが、被分析者にとつてばかりでなくまた醫者にとつても一つの力強い難題的要事であることを私は知つてゐる。併しこの事は、人々が自分の理論的主張に信念を持たうと決心するならば、さうして無意識をして素直に事情の再現をなさしめやうとの決意があるならば、常に報ひのある方法である。

だから私は、分析的な處置に於ける夢の解釋は、それ自身のための藝術として追及せらるべきものでなく、それを驅使するには一切の技術上の規定（一般に治療の完成はこの規定に支配されてゐる）に從はねばならぬと、辯明するものである。勿論、人々は時にまたそれを變へ、自分の理論上の興味に深く這入つて行くことはあり得る。併しさう云ふ場合にも人々は、自分の行つてゐることを常に承

知してゐなければならない。なほまた考慮に入れなければならない別の場合がある。それは我々が、夢の象徴に關する自分たちの理解に對して一層大きな信念を持ち、患者の思ひ付くことゝはもつと獨立的に我々が知るやうになつて以來、起つたことである。特別に巧妙な夢の解釋者は、患者をして夢の解釋のためにいろ〳〵力を折らせたり暇つぶしをさせたりしないで、患者の一切の夢を洞察し得る如き位置に立つことが出來る。で、そのやうな分析者に對しては、夢の解釋上の必要事と治療上の必要事との間の一切の葛藤がなくなる。彼はまた夢の解釋を常に完全に利用したくなるし、彼が患者の夢から洞察した一切のことを夢の本人に話してやりたい誘惑を感ずるのである。併しさう云ふのは處置上の一つの方法で、これは正規の方法とは著しく違つたものであることは、何れまた私が別のところで云ふであらう通りである。初歩の分析者に對しては、かう云ふ異常な方法を手本にとることは常に控へて貰ひたいのである。

分析處置中に患者が（夢の飜譯法に就いてまだ何の知識をも持たない限りの患者が）報ずる最初の夢に對しては、總ての分析者は、吾人が假想したところのあの優秀な夢解釋者の如くに振舞ふのである。これ等の最初の夢は、云はゞ素朴であつて、健康者と云はれてゐる人達の夢と同じやうに、甚だ多くを聽者に知らしめるのである。そこで問題となるのは、醫師が夢から讀み知つたところの一切を

直ちに患者に飜譯して聽かすべきかどうかと云ふことだ。併しこの問題に對してはこゝでは答へるべきでない。何となれば、この問題は一層廣汎な別の問題がその基礎となつてゐるからである。即ち、處置の如何なる時期に於いて、また病氣の如何なる場合に、患者は自分の精神中に匿されてゐるものを醫師から語り聞かされるべきかの問題である。さう云ふ次第で、患者は夢の解釋方を知れば知るほど、彼が見るその後の夢は大概は愈々曖昧になつて來るのだ。夢に就いて獲得した一切の知識はまた、夢の構成に對する警戒として役立つのである。

夢に關する『科學的』著述（それ等は夢の解釋を拒否してはゐるが、併し精神分析に依つて新たな刺戟を得てゐる）に於いては、夢をあるがまゝに保持するために實に餘計な骨折りをしてゐるのを常に我々は見るのである。即ち眼が覺めた瞬間に生じ來るさま〴〵な歪みや必要を出來るだけ避けようとするための不當な骨折りである。また多くの精神分析者は被分析者に覺醒直後に夢を書留めておけと命じてゐるところを見ると、夢の構成條件への彼等の洞察を十分に利用してをらぬやうに思はれる。かゝる命令は治療に於いては餘計なことである。また患者は睡眠中に眠を醒ましたり、自分を利用されないやうな風になるために、この命令を役立てる。で、そのやうに骨折つて夢の原文が忘れられるのを救つたとしても、それを以て患者に對しては何も施すことが出來ないと云ふことは我々の容易に

知り得るところである。原文に對して何も思ひ當るところがなかつたならば、結局夢が原文のまゝ保持されなかつたのと同じことである。醫者はとにかく他の場合には見落した或ることをこの場合には經驗してゐる。併しそれは、醫者が又は患者が何事かを知つてゐると云ふ事と同じでない。この區別は精神分析の技法に對して如何なる意義があるか、それを我々はも一度調べて見なければならない。

最後に私は夢の一つの特殊な型を擧げておきたいと思ふ。その型の夢はその條件上からたゞ精神分析治療に於いてのみ現れ得るものであり、また初歩者を面喰はせ、誤らせるものである。これは所謂低徊的又は確證的の夢で、解釋を下すことが容易であり、また飜譯としては治療者が最後の日に於いて白日に患者をして思ひ付きを云はせて得た材料から結論したところ以上には何も示さないものである。そこでこの夢は患者が、豫め我々に直接的に『暗示』されたことを夢の形で提供するいゝいゝしほらしさがあるかの如くに見える夢である。もつと熟練した分析者は自分の患者にそのやうなしほらしさを求めることが困難になる。彼はそのやうな夢を望まれたる確證として見做し、さうしてそれは治療の影響の一定條件下に於いてのみ觀察せられると說く、治療の濟むまでには實に多數の夢が出て來るわけで、それ等の夢からして（既に知られてをりまた理解されてをるものは別としても）なほ多少とも判然たる示唆が、これまで匿れてゐた或るものに對して與へられるのだ。

# 轉嫁の動力性

『精神分析中央雜誌』„Zentralblatt für Psychoanalyse“ II (1912) に始めて發表。原名は „Zur Dynamik der Übertragung.“

『轉嫁』と云ふ主題はこれを徹底的に論じ盡すことは甚だ困難であるが、ステーケル W. Stekel はこれを最近の本誌上に於いて細論してゐる。(一) 今や私はこゝで、精神分析療法中に如何にして轉嫁と云ふ現象が突然的に生じ來るか、また如何にして轉嫁が取扱中に例の如き役割を果すかを理解せしむるに足るべき二三の語を附加しておきたいと思ふ。

註(一) Jahrgang II, Nr. II, s. 26.（以下譯者曰）『轉嫁』はまた『交付』と譯してゐる向きもある。これを『投出』Projektion 又は『轉位』Verschiebung などゝ混同せざらんやう希望する。

總て人間は、持つて生れた性質と、彼が幼年時代に受けた影響との協同的効果に依つて、彼が如何に戀愛生活を營み、つまり如何なる戀愛條件を立て、その際如何なる本能を滿足させ、また如何なる目的を求めるかに就いての、特殊の遣方を決定されるやうになるのだと云ふことを明かにしよう。(二) こ

れは云はゞ一つの印刷原版（一つとは限らぬが）であつて、それが生涯中に幾度も反覆せられ、環境や手近の性對象の性質が許す限りに於いて新たに印刷される。それはまた慥に最近の印象に依つても全然變化を受けないと云ふわけではない。我々の經驗に依れば、戀愛生活を決定するこれ等の感情の內たゞ一部分だけが完全な心的發達を遂げてゐることが分るのである。この部分は現實に差向けられ意識的人格の補助となり、またその一部分をそれからとつてゐる。これ等のリビドー的感情の他の一部分は發達が止まつてしまひ、意識的人格からも現實からも阻まれて、たゞ空想中に擴がるか、或は全然無意識中に取殘されねばならぬことゝなり、そのためこの部分は人格の意識には知られないのである。さて自分の戀愛要求が現實に依つて常に滿足を與へられない人は、自分の前に立現れる總ての人々に對してリビドー的期待觀念を以て向はねばならない。さうして彼のリビドーの兩方の部分たる意識化し得る部分も無意識的の部分も、かゝる心的態度の生ずるに就いてたしかに役割を持つてゐるらしいのである。

註（一）　吾人は幼兒時代に受けた印象の意義を强調するものであるが故に、持つて生れた（素質上の）契機の意義を否定するものであるかの如く誤解されてゐるが、この機會に於いてかゝる批難に對して辯明しておきたいと思ふ。さう云ふ批難は人々の因果觀の狹さから來るのである。彼等の因果觀は現實の普通の形

態とは正反對に、原因的契機を唯一の事に求めて滿足しようとするのである。精神分析は病源の偶然的要素に關しては多くを語り、素質的要素に關しては少しゝか語らなかつたが、併しそれはたゞ精神分析が前者に就いては何か新しいことを語り得たが、後者に就いてはそれに反し、普通の人々が知つてゐる以上には語り得なかつたからである。これ等二聯の病源的契機の間に原則上の相互對立を認めることは吾人の拒否するところである。我々は人々が認める如き結果を生ぜしめる二者の間に恐らく常住的相互關係があることを假定するものである。素質と境遇とが個人の運命を決定する。これ等二勢力の何れか一つだけで決定することは稀であるが、或は恐らく決して無からう。病源的効果を兩者間に配分することは、たゞ個人的に、個々の場合に、行へるだけである。兩方の要素は交互に片方が大きく、次には他方が大きく、その順序に從つて調和がとれるわけだが、その順序がまた極端に走る場合も、慥にある。我々の見方に依つて、個々の場合に於いて或は素質の部分を、或は體驗の部分を違つて評價し、我々の觀點を改めることに依つて正しく我々の判斷を變化せしめることにならう。また素質それ自身もやはり無限に繼續し來つてゐる祖先の受けて來た偶然的影響の殘滓として敢へて、見傚すことも出來よう。

であるから、部分的に滿足を得てゐないものゝ、對象を期待してゐるリビドー纏綿は、また醫者と云ふ人間に向つて行くことは、甚だ常態的であり、また理解し易い。我々の豫想に從へば、その纏綿は一定の原型（フォルビルド）（模範）となつてゐるものに、固執してゐる。相手の人物に就いて認められる『印刷原版』の一つに戀着してゐる。或は我々はまたかう云ふことが出來る、患者がこれまで構成して來た幾

多の心理『印刷物』の一つに醫者は仕立て上げられるのだと。つまり『父の俤(イマゴー)』Vater-Imago(ユングのいみぢくも云ひ得たる言葉)[一]が『印刷原版』となり、醫者もその『印刷物』の一つにされてゐるのだと云ふ事に解すれば、實にこの關係は如實に說明される。併し轉嫁は必ずこの原型に執するとは限らない。また母のイマゴー、兄弟のイマゴーその他を追及することもあり得る。醫者に對する轉嫁には特殊さがあつて、この特殊さのためにこの轉嫁は正氣の沙汰でなくなるほどの程度と種類とに達するのであるが、この特殊さとても、この轉嫁が意識的期待觀念に依つてのみならず、抑壓された無意識的觀念に依つてもまた生ずることを思へば、自ら理解されて來るのである。

註(一) Symbole uud Wandlungen der Libido. Jahrbuch für Psychoanalyse, III, s. 164. 中村古峽氏の邦譯(世界大思想全集の內)あり。(後半譯者附記)

轉嫁のかゝる態度に關してはこれ以上云ふべきことも考へるべきこともないのであるが、たゞこゝに精神分析者にとつて特別興味のある二つの點が、說明されないで殘つてゐる。第一に、轉嫁が分析時に於ける神經症患者に於いては、分析されざる人々に於けるよりは一層激しく起きるのは何故か、我々に分らない。第二に、何故に分析に際しては、轉嫁が處置に對する最も力強い抵抗となつて立現れるか(分析以外に於いては轉嫁は治療的効果を齎すものとして、よき結果を生む條件として認めざ

るを得ないのに）それが謎である。併しながら私は屢々經驗に依つて次のことを知つて喜んでゐるのである。即ち、患者の自由聯想が杜絶えて來ると、(一)それはいつでも醫者の身に關したこと、或はそれに類したことを思ひ當つてゐるのでせうと云つてやることに依つて、その停頓を打開してやることが出來ると。我々がから云ふ風に說明してやると、直ぐに停頓は克服される。つまり、思ひ當ることがなくなつたのではなくて、思ふことが出て來ないやうになつてゐるのだと、考へ直させることになるのだ。

註(一)　私の云ふのは、自由聯想が實際に出て來ない場合を云ふのであつて、醫者に關する何か不快な感じから沈默を守るやうになつてゐる場合ではない。

普通ならば非常に結果を擧げる力となるべき轉嫁が、精神分析に於いては抵抗の最も力強い手段となると云ふは、一見すると、精神分析の方法上の大きな不利と思はれるであらう。が、併し、仔細に觀察すると、兩者の內第一の方の問題は解消する。轉嫁は精神分析中には普通の場合に於けるよりは激しく起きると云ふのは、正しくない。神經症を分析的に取扱ふのでない病院などに於いて轉嫁が非常に激しく、絕對從屬と云ふほどの困つた形で、而もそこに明かにエロティッシュな色彩を帶びて現れるのを、人々は觀察するのである。ガブリエーレ・ロイテルのやうな銳い觀察者は、精神分析がまだ

生れなかつた時代に於いて既に、或る優れた書物の中にこれを描いてゐる。この書物は神經症の本質と起源とを最もよく洞觀してゐる。[一] で、轉嫁のこのやうな特質は、精神分析的取扱ひをしてゐるとゐないとに拘らないのだ。寧ろ神經症それ自身が問題なのだ。第二の問題は、暫く觸れないで放つておいた。

註(一) Gabriele Reuter(1859—)ドイツ婦人作家の雄。ベルリンに住す。彼女は社會及び家庭の因襲的思想に抗する婦人の性格描寫に妙を得てゐる。また或る意味で農民作家と呼び得る。こゝに言及せられてゐるのは女史の傑作 „Aus guter Familie, Leidensgeschichte eines Mädchens,"(1895)のことである。(譯者)

この問題、即ち何故に轉嫁は精神分析中に於いて我々に向つて抵抗となつて現れて來るかと云ふ疑問を、我々は今や細かく考究しなければならない。分析處置に於ける心理的關係を具體的に話して見よう。——一切の精神神經症的病氣の豫想條件として必ず常に具はつてゐたのはユングがいみぢくも名付け得たるリビドーの內向 Introversion と云ふ現象である。[一] それはつまり、意識化し得るところの、現實にさし向けられてゐるところのリビドーの部分が少くなり、現實から離れてゐるところの、無意識的のリビドー(これは當人をして空想に耽らしめるが、併しやはり無意識に屬してゐる)の部分が、それだけの割合で增大する。リビドーは(全部的に或は部分的に)退行し、幼兒的の想像が復

活して來る。(二)分析的治療はそこまでリビドーを追跡して行くのだ。さうしてリビドーをして再び意識に近付かしめ、遂に現實生活に役立たしめるやうにしようと欲するものだ。

註(一)　尤もユングの云ふこの內向とは早發性痴呆症の特徵を示すもので、その他の神經症に於いてはこれは問題にならぬと斷ずる如き觀があるが――。

(二)　リビドーは幼兒的『コムプレクス』に再び纒綿したと云ふ方が分りよいかも知れないが、併しこれは正確ではないであらう。このコムプレクスの無意識的部分に纒綿すると云ふのが、唯一の正しい云ひ表し方であらう。

分析の探りが無意識の割目にかくれてゐるリビドーに觸れると、そこに一つの闘爭が勃發する。リビドーの退行に依つて生じてゐる一切の力は、分析的仕事に對する『抵抗』となつて立上つて來、この新獲得の退行狀態を保存せんとする。つまり、內向(卽ちリビドーの退行)は外界に對する一定の關係に依つて(最も一般的には、滿足の拒否に依つて)是認されないならば、少くともその瞬間だけでも目的に協はないやうならば、抑々內向と云ふことは生起し得なかつたであらう。かゝる性質の抵抗は唯一のものでもなく、また最强のものでさへもない。人格が自由に驅使し得るリビドーは常に無意識的コムプレクス(更に正しく云へば、このコムプレクスの無意識に屬する部分)の引力を受けて

來たもので、それが現實の引力から放れたゝめに退行したものである。このリビドーを自由にするためには、まづ無意識のこの引力を克服しなければならない、つまり個人の内に生じてゐる（無意識本能の）抑壓、並びにその抑壓の所産を廢絶しなければならない。ところがこれを廢絶しようとすると別に遙かに大袈裟な抵抗が生じて來て、そのために實は病氣が屢々（よしんば現實廻避と云ふことは一時的にその基礎を失ふにもせよ）存續せしめられるのである。で、二つの源泉からの抵抗と、分析は戰はねばならないわけである。分析處置は到るところで抵抗にぶつ突かる。被分析者のすべての聯想、思ひ付き、あらゆる行爲は抵抗と見なさなければならない。恢復しようと目指して進む力と、それに反對し惑はす力との妥協として現れてゐるのである。

さて我々が病的コムプレクスをその意識に於ける顯現（象徴となつて著しく見えるものにもせよ、或はそれとも見えぬものにもせよ）から無意識に於けるその根源に溯り行くならば、やがて我々は一つの領域に辿り着くであらう。その領域に於いては抵抗が判然と存在を主張し、最初の思ひ付きが大きな問題となり、それが抵抗の要求と分析的探求の仕事との間の妥協として現れて來なければならない事となる。そこで今や（我々の經驗の證するところに依ると）轉嫁が生じるのである。コムプレクスの材料（コムプレクスの內容）中にある何ものかゞ醫者の人物に轉嫁されるべき性質のものである

と、即ちこの轉嫁が起り、最初の思ひ付きが生じるが、そこには一つの抵抗（停頓）の徵象が見える。我々はこの經驗からしてかう結論する。――この轉嫁觀念はそれ故に他の一切の思ひ付かれる可能性あるものよりも先に意識界へ押出されたのである、何となればこの轉嫁觀念はまた抵抗にも滿足を與へるからである。さう云ふ過程は分析處置の期間中に何度繰返されるか分らないほどである。我々が一つの病的コムプレクスに探り寄つて行くと、いつでもまづ、轉嫁され得る部分のコムプレクスが意識に押出され、最大の頑强さを以て守り立てられる。（一）

註（一）　とは云へ併しその故にとて、轉嫁の抵抗にまで擇ばれたる要素には一般に特別な意義があると結論することは出來ない。或る聖堂や領地の所有のために特に激しい戰ひが演ぜられたとしても、その聖堂が國民的聖域であるとか、その家が軍隊的の寶を包藏してゐるとは、假定する必要はない。對象の價値は單に策略的なものである。恐らくたゞこの一戰を生ぜしめるだけのものであらう。

これを克服してしまひさへすれば、コムプレクスの他の部分を克服することは大して困難でない。分析的治療が永引けば永引くほど、さうして患者が、病的材料を歪めておくだけでは發見されることへの防備にならないと云ふ事を愈々判然と認めれば認めるほど、益々結論的に一種の歪みに賴るやうになるのである。その一種の歪みは明かに最大の利益を彼に齎すもので、つまり轉嫁による歪みであ

る。かう云ふ關係は結局どう云ふ事情に向つて行くかと云ふに、それはつまり一切の葛藤が轉嫁の領域内で戰ひぬくことになるのである。

そこで、分析的治療に於ける轉嫁とは、まづ常にたゞ抵抗の最堅固な武器に過ぎないと吾人には思はれるのである。であるから、轉嫁の激しさと持續とは抵抗の一つの表はれであると吾人は結論することが出來るのである。轉嫁は如何なる機制に依つて生ずるかは、これをリビドーの既得性（それは幼兒的空想を有したまゝになつてゐる）に還元して見ることに依つて明かになるが、併し轉嫁が治療に於いて如何なる役割を果すかは、轉嫁と抵抗との關係を觀破すれば、自ら説明がつくのである。

轉嫁がそれほど見事に抵抗の手段となる性質を有してゐるのは、何處から來るのであるか。この問題に答へることは、さして困難でないと思つてよい。凡そ禁斷せられてゐる願望感情を、その感情の當の相手である人物の前で告白しなければならない場合には特に困難になつて來ることは、固より明かである。この必要からして現實に於いては殆ど實現すべからざるやうに思はれる關係が生ずるのである。被分析者がその願望感情の對象と醫者とを一致させる時には、正に彼は右に云つて來た事を目指してゐるのだ。併しなほ仔細に考究して見ると、かくの如きは一見目的に適つてゐるやうだが、問題の解決にはなつてをらぬのである。感傷的な、歸依的な信頼狀態の關係ある事は、また他方に於い

て告白の一切の困難さを助長する。現に人々はこれと類似した現實の關係に於いて、から云ひ慣はしてゐる。――君の前で私ははにかみはしない、總てを語ることが出來ると。から云ふ次第であるから醫者への轉嫁があるために、告白が同樣に容易になるだらうと思ふ。さうして轉嫁のために何故に困難になるかを人々は理解しないだらうと思ふ。

こゝに繰返して提出した問題はこれ以上考究して見ても答へは出て來ない。寧ろ人々が、治療に際しての個々の轉嫁的抵抗を研究して見て得た經驗から出て來る。最後に人々は、『轉嫁』をあまり簡單に考へてゐると、轉嫁が抵抗に利用されることが理解出來なくなると分るのである。轉嫁にも『積極』positiv と『消極』negativ との別があり、感傷的轉嫁と敵對的轉嫁と兩種類の轉嫁が醫者に對して寄せられるから、それを區別しなければならない。積極的轉嫁はやがてまた別れて、意識化し得る友情的又は感傷的感情、並びにそれの無意識内に於ける延長となる。後者の方はこれを分析して見ると常にエロティッシュな源泉に辿りつくことが證明せられる。そこで我々は、同情、友情、信頼その他我々の生活上に結ばれる一切の感情關係はその發生的起源が性と聯結してをり、よしんば我々の意識的自己認識には如何に純粹に、如何に非肉感的に見えて居ようとも、性目的を撥無することに依り、純粹に性的な慾望から發達して來たものであるとの見解に到達せざるを得ないのである。元來、我々は

たゞ性對象をのみ知つてゐたのである。我々が現實に於いて單純に尊重したり畏敬したりしてゐるのだと思つてゐる人物でも、我々の內なる無意識にとつては常にやはり性對象たり得る人物であることが、分析に依つて明かにされたのである。

そこで、謎は次の如く解かれる、醫者に對する轉嫁は、それが消極轉嫁であるか、或は抑壓されてゐるエロティッシュ感情の積極轉嫁である限りに於いてのみ、治療中に於ける抵抗となり得るものであると。我々が意識化することに依つて轉嫁を『廢絕止揚(アウフヘーベン)』するならば、我々はたゞこの感情行爲の二成分を醫者の人物から引離すのみである。他の意識化し得る、邪魔にならぬ成分はそのまゝ存續し、さうして精神分析に於いて、他の處置法の場合と同樣に、成功を助けるのである。その限りに於いては吾人も、精神分析の成功は暗示に俟つものであることを喜んで容認する。たゞこの場合に云ふ暗示とは、フェレンチの所謂(一)——或る人に於いて可能なる轉嫁現象に依る感化——の意味に解せられねばならない。患者をして窮極的に醫者から獨立させるために、我々は暗示を利用することにしてゐる。即ち、暗示を利用して心の働きを完成させる、それに依つて必然的結果として心の持方が持續的によくなつて行くと云ふわけである。

註(一) Ferenczi, Introjektion und Übertragung, Jahrbuch für Psychoanalyse, Bd I, 1909.

併しなほ問題になり得るのは、何故に轉嫁の抵抗現象がたゞ精神分析の際にのみ現れて、それ以外の取扱、例へば病院などに於いては現れて來ないかと云ふ事である。その答へはかうである。――それは病院に於いても現れるのだが、それはさう云ふものとして扱はれてしまふのである。消極轉嫁の勃發は病院に於いても實は珍らしいことではない。患者は消極轉嫁の支配を受けるや否や、別によくなりもせず、寧ろ惡くなつて病院を出る。エロティッシュな轉嫁は病院に於いては別に禁制を受けないで働く。それはかゝる轉嫁は病院に於いては（實生活に於いてもさうだが）剔抉せられずに、そつとしておかれるからである。併しかゝる轉嫁は判然と、全治に對する抵抗となつて現れる。と云ふのはそのために患者が病院からおん出て行くからと云ふわけではない、それどころかそのために患者は病院に執着してゐるものである。寧ろ、そのやうな轉嫁があれば患者は生活から離れてしまふからである。患者が病院に於いてあれこれの不安、又は禁制を克服したと云ふことは、全治と云ふことに對しては要するにどちらでもよい事である。彼が現實生活に於いてもこれ等の不安や禁制に囚はれなくなつたと云ふ事の方が肝心である。

消極轉嫁はそれだけの範圍内では到底なし得ないやうな深い洞察をなさしめるに役立つたのである。治療し得べき形式の精神神經症に於いては、消極的轉嫁は感傷的（優しい）轉嫁と並存してゐる。

同一人物に對して屢々同時にさし向けられる。この事情を云ひ表はすためにブロイラー Bleuler はアムビヴレンツ（相反並存感情）Ambivalenz と云ふ語を新造してゐる。(一) そのやうな感情の相反性は或る程度までは常態的と思はれるが、併し最高のアムビヴレンツ的感情は慥に神經症患者の特殊の徵象である。强迫神經症患者に於いては早期に於いて本能生活が『相反一對に分裂』することはその特質であり、またその素質的條件の一つとなつてゐる。感情方向のアムビヴレンツから說明すると、何故に神經症者が自分の轉嫁を抵抗に利用し得るかゞ最もよく分る。轉嫁力がその本質に於いて消極的となつてゐる場合には（例へば、妄想症者に於いては）これに影響を與へたり、治療を加へたりすることは出來なくなる。

註(1) E. Bleuler, Dementia praecox oder Gruppe der Schizophrenien in Aschaffenburgs Handbuch der Psychiatrie, 1911. —— これは一九一〇年にベルン Bern に於いてアムビヴレンツに就いて試みたる講演にて、この中央雜誌第一卷に公表せられたもの。——同じ現象に對してステーケルはそれ以前に『兩極性』 „Bipolarität" と云ふ語をあてゝゐる。

以上の如く細論したけれども、これまでのところではまだ轉嫁現象の一方面だけしか明かにしてゐないのである。同じ事象の他面の樣相に注意を向けることも必要であらう。被分析者が沒頭的な轉嫁

的抵抗の支配下に陷るや否や、如何に彼等は醫者に對する現實的關係を脱線するものであるか、またその時彼等は如何に精神分析の根本規定（何でも自分の頭に思ひ浮ぶことは別に自分で批評を加へずに喋舌つて了へとの規定）を勝手に無視するやうになるものであるか、また彼等が處置を受けに來た時の決心を如何に忘れてしまふものであるか、また彼等が少し以前にはあれほど重大に思つた論理的關係や結論を如何に下らないものに思ふやうになつて來るか、以上の事柄に關して正しい見解を持つてゐるものは誰しも、この見解を、これまで説明し來つたのとは違つた立場から説明しようとの必要を感ずるであらう。さうして實際さう云ふ説明の方法は大してむづかしくはない。それは被分析者が治療に際して立つ心理的立場から説明されるのである。

意識から逸したリビドーを探索してゐると、人々は無意識の領域内に這入り込んで行く。探索してゐる内に反應が現れるので（それこそ人々の目指すところだが）それにつれて無意識過程の多くの特質が明るみへ持出されて來る。丁度、我々が夢の研究に依つて無意識過程を知つたのと同じやうにである。無意識的感情を治療者の方では思ひ出させたいのだが、感情の方では思ひ出されることを欲しない、寧ろ無意識の沒時間性と幻覺力とに基いて自らを想起するやうに努めてゐる。患者は夢に於けると丁度同じやうに、彼の無意識感情の擡頭して生み出したものを、現實のものであるやうに考へて

ゐる。彼等は現實の立場を顧慮する事なしに、自分の情熱を引立てようと欲してゐる。醫者は患者のこれ等の感情が分析處置に對して如何なる關係をとるか、本人の生活史に對して如何なる關係を持つてゐるかを見ようとする。その感情と本人の物の考へ方見方との間にどんな關係が存してゐるか、その感情の心理的價値はどうであるかを見ようとする。醫者と患者、知力と本能、認識と感情との間の闘爭は、殆ど專ら轉嫁現象となつて現れる、この戰場に於いてこちらが勝利を得れば、それが神經症の永久全治となつて表れるのである。轉嫁現象の克服は精神分析者にとつて最大の困難であることは否めない。併し人々の忘れてならないことは、正にこの克服こそは患者の匿れたる、忘れられたる愛慾感情を實地的にし、顯在的にすることの大きな役目を果すものだからだと云ふことである。何となれば、結局非實地的な、非顯在的な、抽象的なものを、畫餅のやうなものを、克服することは出來るわけがないからである。

# 分析醫に對する處置上の注意

『精神分析中央雜誌』二卷（一九一二年）に始めて發表。現名は „Ratschläge für den Arzt bei der psychoanalytischen Behandlung.“

私がこゝに提示しようとする技法上の種々の規則は、私がいろ〳〵他の方法をやつて見て自分で困つて、結局永い間の自分の經驗の結果、生み出したものであるが、これ等は人々の容易に氣付くであらう通り、少くともそれ等の内の多くは、結局唯一のものに要約出來るのである。希くは、これ等の規則に留意することに依つて、分析醫が多くの無駄な勞力を節し、而も多くの事柄を看落さゞるやうになり得むことを——。併し私は明かに云つておかなければならない、この技法は私の個性にとつては唯一の合目的々な技法となつたものであると——。私と全然素質の違つた醫者はまた、患者に對して、また解決すべき問題に對して、一つの別な心的態度を好んでとるであらうが、私はそれをいけないなどゝ云ふものでは決してないのだ。

（a）その日の内に一人以上の患者を分析的に處置する分析醫にとつて、彼の前に現れる第一の問

題が最も困難なやうに思はれるであらう。卽ち、一人の患者が幾月幾年の間に治療中に提示する無數の姓名、月日、個々の記憶、思ひつき、並びに病徵など悉く覺えてをつて、これを同時に、またはそれ以前に分析した他の患者の提示した類似の材料と混同しないでおくといふ大問題である。例へば或る分析醫が一日の中に六人、八人、もしくはそれ以上の患者を分析せねばならぬとすると、その分析醫がそれだけの事を記憶してゐることは（假りに記憶してゐるとして）傍人には殆ど信ずべからざる驚嘆すべき、或は寧ろ同情に價すべき事とさへ思はれることであらう。あらゆる場合に於いて人々はそれほど澤山の事を見事にこなして行く技法とはどんな技法かと甚だ好奇心を持つであらうし、またこの技法が特別な補助手段としても役立つに違ひないと期待するであらう。

ところがこの技法たるや極めて簡單なものである。この技法は（聽いてゐるだけで）一切の補助手段を、書き付けておくことをさへも、必要としない。さうして何事にも特に注意を集めやうとは欲しないで、聽かされる一切の事に對して、同様な『一視同仁的注意』„Gleichschwebende Aufmerksamkeit“をさし向けてゐるだけの事である。かくの如き方法に依つて人々は注意の緊張（每日幾時間にも亘つて注意の緊張を持續することは出來ない）保持を節し、意圖的注意にはつきものゝ危險を避けることが出來る。つまり人間はその注意を或る一つの頂點に緊張させると、そこに與へられてゐる

材料中から選擇を始めるものである。一つの點に特に鋭く定着し、それの代りにまた他の一つを擇びこのやうな選擇に於いて自分の期待するところを、自分自身の傾向を追及することになる。併しこれこそは人々の特にしてはならない事だ、その選擇に於いて自分の期待を追ふならば、人々は自分の既に知つてゐる事以外の事を決して發見するやうにはならないと云ふ危險がある。自分の傾向に從つて行くと、人々は慥に知覺し得べき事をも知覺し得ないで過ごすやうになる。人々の忘れてならない事は、我々は實は物事を大抵は聽き流してゐて、その意義は後になつて漸く分つて來るものだと云ふ事である。

何人にも分る通り、話される總てに對して一視同仁的に耳を傾けると云ふことは、被分析者に對して批評なく選擇なく、思ひ付く一切を喋舌れと云ひきかす命令と、丁度必然的な一對をなすわけである。醫者の態度がかうでないと、折角患者の方で『精神分析の根本規定』に從つてくれても、そこから生ずる利益の大部分を得損ふわけである。――人々は自分の注意から一切の意識的影響を引離しておくこと。或は純粹に學術的に云へば、――分析者はたゞ聽いてゐればよい、さうして注意をしてゐるかどうかなどゝ云ふ事には氣をつかはぬがよい。

處置の間に必要なことゝしては、右のやうな行り方で知り得た一切で澤山である。醫者が頭の中で

ハハアこれはかう云ふ關係に屬するのだと呑込んでゐる部分の材料は既に意識的に利用出來るが、まだ何れの關係に屬するとも理解されない、渾沌として秩序の定まらない部分の材料は、始めの程は埋沒してゐるやうであるが、併し被分析者が新たな材料（右の材料と關係づけられ、またそれに依つて關係を進めることの出來る如き新たな材料）を持出すや否や、その材料は直ちに記憶に蘇生つて來る

そこで一年も前に聽いた一寸したこと（それを記憶して居ようなど丶云ふ意識的意圖はなかつたと思はれる筈だのに）を想起して持出すと、被分析者から『何てまア物覺えのい丶』と云ふあらぬお世辭を頂戴して笑はされることになるのである。

この記憶に間違ひがあつたとすれば、それはたゞ時や場所の間違ひだけで、それ等の時や場所に對し分析者自身が持つ個人的關係のために障害を受けてゐるので、かくの如きは分析者の理想からは甚だしく遠いわけである。他の患者の材料と混同することは滅多にない。かう〳〵した事を被分析者が云つたかどうか、或は如何に云つたかと云ふ點に就いての被分析者との云ひ爭ひに於いては、醫者の方が大抵は正しい。（一）

註（一）　被分析者は或る事柄を前に既に分析者に對して話したことがあると主張することが屢々ある。併し、もつとよく落着いて考へて見させると、やつぱり云つてゐなかつたと云ふことが被分析者にも分つて來る。

よく考へて見ると、被分析者は以前に一度その話をしようかと思つたことがあるのだが、併し只今でも存續してゐる或る抵抗のために、それを喋舌ることを差控へてしまつたのだ。話さうと思つたことゝ、話して了つたことゝの區別が彼にはつきかねるのだ。

(b) 被分析者との對談中にノートを澤山にとつたり、記錄を作つたりする事は、お勸め出來ない。そんな事は大抵の患者にあまりいゝ感じを與へない。併しそれは別問題としても、被分析者の云ふ事に對して注意を集めることに就いて云つたあの見地からもまた、これは面白くない事になる。分析者は速記したり書きとめたりしてゐる間に、その材料の中から必然的に有害な選擇をするやうになる。さうして自分自身の精神活動(それは相手の分析解釋にはもつとよく利用されねばならないのに)の一部分を結付けるやうになる。が、直ぐに忘れて了ひさうな、さうして實例として獨立的に役に立ちさうな日付、夢の本文、或は個々の著しい出來事などは、この規則の例外として書きとめておくことにしても別に惡くはない。併し私はやはりさうはしない事にしてゐる。實例は晚になつて仕事が濟んだ後に思ひ出して書き付けてゐる。私に興味のある夢の本文は夢の話が濟んでから患者に書かせることにしてゐる。

(c) 患者と對談してゐる間に書き付けることは、當面の場合を學問的に發表する意圖ある時には

是認せられる。それは實際、原則的には拒否することは出來ない。併し分析的の病歴に於いて十分な記錄を作ることは、人々の期待するよりは稀である。さう云ふ記錄は、嚴密に云へば、外面的確實さを有するに過ぎない。現に『近代的』精神療法がこれに類する多くの驚くべき實例を與へてゐる。さう云ふ記錄は大低はこれを讀むものを徒らに奔命に疲れしむに過ぎなくて、直接臨床的分析の代償になり得るものではない。私の一般的な經驗に依れば、讀者と云ふものは分析者を信用する意志ある時には材料に多少の手加減が加へてあつてもそれを大目に見るが、もし分析者を眞面目に扱ふ意志のない場合には、忠實な處置記錄でもてんで相手にせぬものである。精神分析の說明に證據の明白さが缺けてゐるとて、それを補ふ一助に右のやうな記錄をとるのは、方法の宜しきを得たるものではないやうである。

（d）分析の仕事は探究と處置とが一致してゐると云ふ評判をとつてゐるが、併し探究の方に資する技法は處置の方には或る點で撞着する。始めから學問的に利用することに定めてゐるやうな場合はうまく行かなくて、その反對に、別に意圖を立てずに處置した場合、種々な危機が起きてハラ〳〵させられたやうな場合、更にまた何の囚はれるところもなく豫想するところもなく對つた場合には、最もよく成功するものである。分析者として如何なる態度をとるのが正しいかと云ふに、臨機應變的に

一つの心的態度から他の心的態度に轉回することである。分析中には思索したり空想したりしないことである。さうして分析が終つて了つて得たる材料を綜合的に考へ纏めるときになつて始めて思辨するのである。我々が無意識心理に關する認識を、並びに神經症の構成に關する認識を、或は少くとも本質的な認識（それは精神分析的操作に依つて持つことが出來る）を持つてゐる限りは、二つの態度を區別することは無意味であらう。現在に於いては我々はまだ〳〵そこまでは行つてゐない。で、それまでに得た認識を調べ確かめ、また新たな認識を發見することを、我々はもうやめにして了つていゝわけはない。

（e）　精神的處置の間には外科醫を手本にし、努めて感情を、否、人間的な同情をさへ拋擲し、全心全靈の力を唯一つの目的——手術を出來るだけ正確巧妙に行はうとの目的——に注ぐやうに、切に同僚諸君にお勸めしたい。精神分析にとつては、今日行はれてゐる事情の內で最も危險なのは、感情に無理をすることである。多くの論議の的となつてゐる彼の新方法を以て、他人をして首肯せざるを得ざらしむる如き何事かをやつて除けて見せたいと云ふ療法上の名譽慾である。さう云ふ事を行つてゐては操作のために甚だ不都合であるばかりでなく、患者（何よりもまづ彼の力を働かせることに依つて治療は可能であるのに）の抵抗を誘發して何とも施すべき術がなくなる。何故に分析者に對して

はこのやうに感情の冷嚴さが要求せられるかと云ふに、それは双方に對して最も有利な條件を供するからである。卽ち、醫者に對しては、彼自身の感情生活を望ましくも節用せしめるやうになり、患者に對しては、今日我々にまづ可能な最大量の助力を與へることが出來るのだ。或る老外科醫は、自分の坐右銘として“Je le pansai, Dieu le guérit“（『私はそれを扱ふだけだ、神が直して下さるのだ。』）と云ふ語を擇んでゐる。大抵それと似たやうな心掛けを分析者も持たなければならない。

（f）以上個々別々に提出した種々の規則が如何なる目的に於いて合致するかは、これを判知するに困難でない。つまりこれ等の規則は、被分析者に對して要求せられる『精神分析根本規則』の對をなすもので、醫者に對して要求せられる規則である。被分析者が自己觀察に於いて把へ得た一切を告げねばならないと同樣に（その間に彼の心に論理的、感情的抗議が起きて、彼をしてその觀察材料の内から選擇をして告げるやうにさせようとするけれども）醫者も自分に告げられた一切を解釋の目的のために資し、匿れたる無意識を認識するに利用し、患者が選擇を廢してゐるのに、醫者の方で檢閱を以てこれに換へるやうなことがあつてはならない。これを公式的に云つて見ればかうである。――分析者は患者が與へつゝある無意識に對して、自分自身の無意識を受容器關の如くにさし向け、丁度電話の受話器が電話者に對してとると同じやうな態度をとらねばならないと。宛も受話器が意味に依

つて電線の上に惹起された電氣の動搖を再び音波に變轉させるやうに、醫者の無意識は、患者から聽いた（無意識の）派生の内から（患者の思ひ付くところに從つて決定されてゐる）この無意識を再製することが出來るのである。

併し醫者は分析に際して自分の無意識をこのやうに道具として使用せねばならないとすると、醫者自身は心理的條件を甚だ十分に充すものでなければならない。醫者は自分の無意識に依つて認識したところを意識に依つて拒けるところの抵抗を心の中に持つてゐてはならない。でないと彼は分析に際して、別種の選擇と歪みとを導き入れるやうになるであらう。そのやうな選擇と歪みとは、彼が意識的に注意を緊張させることに依つて拵え上げるところのものよりは遙に有害なものであらう。この場合には、醫者が相當な程度で常態者であると云ふだけでは十分でない。この場合要求せられるのは、醫者自身が精神分析に依つて純化されてをり（被分析者の提示したところを把握するに妨げとなるところの）自己コムプレクスを承知しぬいてゐることである。自分の方にそんな缺陷があれば、その及ぼすところが面白からぬことは疑ふまでもない。醫者に於いて解除せられざる抑壓の存することは、彼の分析的知覺に於ける『盲點』„ein blinder Fleck“（ステーケルのいみぢき用語を借りれば）に相當するわけである。

嘗て私は或る人から精神分析者たらんとする者の心得に就いて訊かれて、次のやうに答へたことがある。——先づ汝自身を分析せよと。慥にこれだけの準備で多くの人々には十分であるが、併し精神分析を學ばうとする總ての人々に對してさうだと云ふわけではない。また自分の夢を他人の力を借らずに分析するのは、誰にでも出來る事ではない。チウリッヒ派の分析者たちがこの條件を嚴にし、凡そ他人を分析せんと欲するものは、先づ誰か練達の士に就いて自ら分析を受けねばならないとしてゐるのは、彼等の功績の一つと私は考へてゐる。分析の仕事を眞劍に考へるものはこの道を選ぶに相違ない。この道をとればその利益は一二に留まらない。自分の胸襟を病的恐怖なくして他人の前に打開いたことの犧牲は十分の報ひを得るであらう。人々は自分自身の内に匿れてゐるものを知らうとの意圖を短時日の内に、また僅かの感情の費えを以て實現するのみでなく、また書物を讀んだり講義を聽いたりしただけでは容易に得られないやうな印象と確信とを體得するであらう。最後に云つておきたいことは、被分析者とその指導者との間に生ずべき慣ひなる持續的の精神的關係から獲べき利益も、決して小さくはない。

實踐的に健全な人間のそのやうな分析は、固より何處まで行つても終るところを知らないのは云ふまでもない。分析に依つて得た自己認識並びに自己支配の增大が如何に有難いものであるかを知るも

のは誰しも、自分自身の分析的探索をその後も自己分析として繼續し、自分の內に外界に於けると同樣に常に新たなものを發見すると期待せざるを得ないことを、謙虛にも認めるやうになる。併し、分析者として自己の分析の企てを輕視する者は誰しも、或る程度以上に、自分の患者を知り得ないことに依つて懲罰されるばかりでなく、彼はまた更に一層重大な危險――他人にとつて迷惑となるところの危險――に陷らなければならぬ。かくて彼は、自分自身の特質に就いての怪しげな自己知覺の中に認識したものを、一般的に妥當する理論として學問の中に投出しようとの誘惑に陷る。彼は精神分析に對する世人の信用を失墜せしめ、また未熟者の指導を誤る。

（g）私はなほ、醫者の心的態度から被分析者の處置に移り行くに就いての二三の他の規則を附加へておく。

若い熱心な精神分析者にとつては、患者を自分の力で引廻し、彼の狹い人格の限界以上に高尙なところへ引擧げるために、自分自身の個性の多くを吐露すると云ふは、慥にやりたくなることである。患者に存する抵抗を克服するためには、それは甚だ結構なことであり、また目的に適つたことである（醫者が自分自身の精神的缺陷や葛藤を吐露し、自分の生活からありのまゝに報告することに依つて患者をして自分と同樣ならしめ得るならば）と、我々も考へる。一方からの信賴は他方からの信賴を

ならないからである。

豫期する。他からの親密を要求せんとする者は、まづ他人に對してそれだけの親密さを示さなければ

併し精神分析的の交渉に於いては、我々が意識心理の豫想に從つて期待するのとは全然違つたことがいろ〳〵生ずるものである。經驗の示すところに依ると、そのやうな感情的技法はあまり有利でないことが分るのである。またさう云ふ方法は既に精神分析の立場を離れて暗示處置の方に近付いてゐるものであることは、これを知るに困難でない。で、患者は自分に分つてゐること、並びに彼が習俗的な抵抗に依つて暫く押込んでゐた事を告げるのは、寧ろ容易であることが、まづ我々に分る。患者にも無意識である事を發見するためには、この技法は役に立たない。一層深い抵抗を克服することは益々不可能になる。またもつと重症の場合には、患者の眼覺めてゐる慾求を充してやることが必ず出來ないのが常である。その時には患者は自分の態度を飜して、醫者の分析を自分の分析よりも面白く思つてゐるのに・　。また分析治療の主要題目たる轉嫁解除も、醫者の親密な態度に依つて困難となり、そのために、始めに偶々解除されかけてゐたところも終りには全然逆戻り以上になつてしまふ。それ故に私は、この種の技法を間違つた技法として拒けるに遲疑しない。醫者は被分析者からは視え透いたものであつてはならない。さうして鏡面のやうに、その前に提示したものをのみ寫し出すに止

まらねばならない。暗示的影響を用ふる精神療法家がその影響の一部分中に分析を混入し、一層短期間内に眼に見える成功を目指したとしても（例へば病院などに於いてはそれは必要となるが）それは別に反對すべき事ではないが、併し我々の希望したいことは、その精神療治家が自分の企てゝゐる事に就いては疑ひを抱かぬやう、また自分のとつてゐる方法は正しい精神分析法ではないと云ふことを承知してゐて貰ひたいことである。

（九）　醫者が分析的處置を加へてゐる間に別にそのつもりはなくとも偶然的に教育的な活動をしたくなるものであるが、その教育的活動から今一つの誘惑が生ずる。發達の禁制となつてゐるものを解除してゐる内に、醫者はその解除せられた力を新たな目的に向けてやる立場に自然に來ることがあるものである。もしその醫者が、自分の骨折りで神經症の除かれた人物を何とか特に素晴らしい人間に仕立てゝやらうと努めたり、彼の願ひに高尙な目的を定めてやらうとしたりすることは、明かに名譽慾に過ぎない。併しその場合にも醫者は十分に自己を統御し、自分自身の願望よりは被分析者の特性を主にしなければならない。總ての神經症者が昇華能力を豐富に具へてゐるわけでない。彼等の多くの者は、もし彼等が自分の本能を昇華させる術を心得てゐたならば、抑々病氣にはならなかつたらうと我々には思はれる連中である。彼等を昇華に驅り立て、最も手近な、容易な本能滿足を遮斷したな

らば、彼等にとつて人生は大低愈々難澁となり、そんな昇華のなからんことを望むやうになるであらう。醫者たるものは患者の弱點に對しては何よりもまづ寛大でなければならない。同じく不完全な者のために一部の行動力と享受力とを恢復してやつたことだけで滿足しなければならない。治療家的名譽慾もさることながら、敎育家的名譽慾も同樣に、目的には適はぬものである。その他、考へられることは、多くの人々が自分の素質に許されてゐる程度以上に自分の本能を昇華させようと試みるがために病氣になると云ふことである。また昇華能力のある者等に於いては、分析に依つて彼等の禁制が解除せられるや否や、昇華過程は自然に起るのが常であると云ふ事である。それ故に、分析的處置を常に必ず本能昇華に利用しようと努めることは、如何なる場合にも結構な話ではあるが、併しあらゆる場合にお勸め出來る話では決してないと私は考へる。

（i）如何なる限度まで醫者は被分析者の知識に訴へて協力を俟つことを、處置に際して要求すべきか。この點に關して何とか普遍妥當的なことを云ふのは、容易でない。患者の性格が第一に問題である。併しそれにしても如何なる場合にでも觀察すべきは、警戒と差控へとである。被分析者に向つて、その記憶を集めよとか、彼の生活の或る時代に就いて追想せよとか、問題を課するのは正しくない。彼には寧ろ、何よりもまづ、何人にも容易に呑込めないことを呑込ませなければならない。即ち、

追想と云ふやうな種類の心理的活動に依つては、意志を働かせ注意を緊張させる事に依つては、神經症の謎は少しも解除されない、却つてたゞ精神分析の規定に忍從して、無意識並びにそれからの派生に批評を加へずに悉くそれを吐露する事に依つてのみ解除されると云ふ事を呑込ませなければならない。處置に際して知的なことに話をそらさせる技巧を用ゐたり、屢々甚だ賢しく自分の狀態に就いて反省して自分を支配されないやうにする患者に對しては、特に嚴重にこの規定を遵奉させなければならない。それ故に私は患者に對しては精神分析の講義をした文献を讀ませることはしないやうにしてゐる。私は彼等に、自分の事を知りなさい、さうすれば精神分析の書物を讀むよりはもつと多くを、もつと價値あることを知り得ると云ひ聽かせてゐる。併し入院の條件の下に於いては、本を讀ませておいてそれを被分析者の準備に、感化の雰圍氣を作ることに利用するのが甚だ有利であることは、私にも分る。

是非とも止すやうに誡めておきたいことは、兩親や近親者の贊成と支持とを得るために、我々の著書を――入門的のものにせよ、更にもつと深いものにせよ――讀ませることである。かう云ふ親切な出方をしても、大抵は近親者が精神分析的處理に對して自然に抱くやうになる、何時かは避け難き反感を、豫め勃發させ、從つて處置の始めに起きさせないやうにするに役立つに過ぎない。

で、私の希望をこゝに云つておくが、精神分析者の經驗は進歩してやがて、技法問題に關しては、神經症者を最も合目的々に處置するには如何にすべきかと云ふ點に一致するであらう。『近親者』の處置に關しては、私にも何とも申様がないことを告白する。さうして彼等の個性的處置には一般に信頼が置けない。

# 精神分析的操作中に於ける誤てる再認識（『嘗て話した』）に就いて

『國際精神分析醫雜誌』„Internat. Zeitschr. für ärztl. Psychoanalyse“ Bd, II (1914) に始めて發表。原名は „Über Fausse Reconnaissance (‚Déjà Raconté‘) während der psychoanalytischen Arbeit.“ この題目に關しては本全集第三卷『日常生活の精神分析』二三四頁及び三八五頁參照。

分析操作中に患者が思ひ出した或る事實を話さうとしてから云ふことが一再ならず起る。――『だつていいいいいいそれはもうお話しいいましいいたよ』と。併し分析者の方はそんな話は慥にまだ聽いた覺えはないのだ。そこで患者にそんな話はまだ斷然聽かぬと云ふと、彼等は屢々一所懸命に、慥に自分はそれを話したことを知つてゐる、神明に誓つてもいゝなどゝ云ひ出す。併しそれと同じ程度に聽く方ではそれが始めての話であることを愈々強く信ずるやうになる。さてさう云ふ論爭を怒鳴り合つたり掛値を云ひ合つたりして解決しようと思ふのは、甚だ非心理的である。自分の記憶が眞實であるとそのやうに確信してゐる感じは、明かに何等客觀的價値を有してゐない。さうして兩方の內何れか一方が間違つてゐ

るにきまつてゐるのであるから、一時的健忘症(パラムネシア)に陷つてゐるのは醫者であることもあるし、被分析者である事もある。我々が患者にさう云つて聞かせて論爭は中絕し、解決は何れその內と云ふ事になる。

稀にはやがて我々の方で問題の話を旣に聽いてゐる事を思ひ出し、同時に何故にこれが一時的に忘れられてゐたかに就いての主觀的な、込入つた理由を發見する場合もある。併し大抵の場合には、間違つてゐるのは被分析者の方で、やがて彼は自分の誤りであることを認めなければならないやうにされる。かう云ふ事實は屢々起るが、それは次のやうに說明せられるやうである。卽ち、彼は事實上旣にそれを話さうとの意圖を持つたのである、實際にそれを心の中で一再ならず喋舌つて見たのだが、併しやがて抵抗に會つて自分の意圖を果すことが妨げられたのだ。さうして今やその意圖の記憶が意圖を實現したことの記憶と混同せられるに至つたのだ。

私は今や一切の場合(そこに於ける事實關係が多少とも疑はしく思はれる一切の場合)を放擲しておいて、特に理論的な興味を持つてゐる他の二三の場合を擧げて見よう。それはつまり別々の人間に於いて繰返し起つたことであつて、彼等は自分の話を醫者に告げてゐる間に或る事を旣に話したと特に頑固に主張するのであるが、併し事實の關係からして彼の方が正しいわけは全然ないのである。彼等が旣に以前に一度話さうと思ひ、且つ今や古き或る事(醫者も亦それを知つておかなければならな

かつた）として再認識してゐる事柄は、分析にとつては最高の價値ある記憶である。分析者が永い間待つてゐた心的過程であり、分析操作の或る部分を終結せしめる解決であり、實際、分析醫はこの解決を待つて更に深き論議に入ることにしてゐたものである。さうと知つて患者の方ではやがて、自分の記憶の間違ひであつたことを（それも確かであるかどうか説明は出來ないのだが）認めるのである。

被分析者がそのような場合に示す現象は、當然これを『誤てる再認識』と名付くべきものである。ところがこれと全然類似してゐるのは、人々が自分は嘗て既にこのやうな立場に立つたことがある、このやうな經驗をしたことがある（déjà vu）との感じを自然に持つ場合である。實際にはさう云ふ事はなかつたし、嘗ての事を記憶の中に再發見してこれを確めたのでもないのに、さう云ふ感じを持つ場合である。この現象に對しては種々澤山の説明が試みられた事は人々の知るところであつて、これ等の説明はこれを概して二つの群に分つことが出來る。（一）一群の方にはこの現象の内に出てゐる感情は信用が拂はれて、要するに何事かゞ記憶されてをると云ふので、問題はその記憶されてゐるものが何であるかに掛つてゐる。他方の群はその數が遥かに多く、この方の説明では寧ろこゝには記憶の欺瞞があると主張する。そこで問題は如何にしてこのやうな假性健忘症的な思ひ違が生じ得たかを調べることにある。この方は數が多いだけに、やはり説明の仕方も色々で、ピタゴラス Pythagoras の説だ

と云はれてゐる最も古い說明——『嘗て見た（デジャ・ヴヰウ）』の現象は早期の個人の存在を證據立てるものだとの說、これを受繼ぎ解剖學から支持した假定は、腦髓の兩半の活動に時間上の齟齬があるためにこの現象が生ずるとの說（ヰガン Wigan 1860）——から、最近の大抵の純粹に心理學的な說明——これはデジャ・ヸウは統覺の弱點を暴露したもので、疲勞、困憊、錯亂などのためにそれが生ずると說く——に至るまでである。

註（一）この種の文獻にして最近の編輯に懸るものは、ハヴロック・エリス著『夢の世界』（H. Ellis „World of Dreams“ 1911）の内に見られる。

グラッセ Grasset[1] は一九〇四年にデジャ・ヸウに對する一つの說明を與へてゐるが、これはわが派の信者に數へ入れなければならない。彼の考へに依れば、この現象は、以前に一度無意識的の知覺がなされてあつて、それが今になつて始めて一つの別な類似の印象の影響に依つて意識に達したことを示すものであると。多くの他の學者たちも彼の說に贊同し、この現象の根柢をなすものは忘れられた夢想の記憶であるとした。兩方の場合とも、無意識的印象の復活が眼目になつてゐるのであらう。

註（1）La sensation der „déjà vu“ (Journal de psychologie norm. et pathol. 1. 1904)

私は一九〇七年に『日常生活の精神病理』の中で、一見假性的健忘と思はれるこの現象に對して、

グラッセのと全く似た説明（グラッセの著は知らなかつたし、引用もしてゐないが）を試みてゐるのである。（一）私が自分の理論を精神分析的探究（それを私は或る婦人患者が抱いてゐた甚だ判然たる、併し約二十八年の後にまで殘つてゐたデジャギウの場合に就いて、試みることが出來たのだが）の結論として獲得したものであることは、自分がグラッセを引用しなかつた責任を、いさゝか辯明するものであるかも知れない。私はそのさゝやかな分析を、再び繰返さうとは思はない。彼女の云ふところに依ると、そのデジャギウの起きたところは、實際に被分析者の以前の經驗を想起せしめる性質を具へてゐた。當時十二歳の少女として彼女が訪れたその家族には、重病で死に瀕してゐる（彼女の友達の）弟がゐた。さうしては彼女自身の弟はその二三ケ月前に同樣危篤に瀕してゐた。この共通點に於いて結びついたものが、併し、第一の體驗の場合にあつた。それは意識化することとの出來ない空想で、弟が死ねばよいとの願望であつた。それ故に、兩方の場合の類似點は意識化することは出來なかつた。この感情の代償となつて出て來たのが、嘗て一度經驗したことがあるとの現象であつた。卽ち、感情の同一性が場所の同一性に轉位せられて現れたのである。

註（一）　本全集第三卷『日常生活の精神分析』三八四頁以下參照。（譯者）

人々の知る如く、このデジャギウ（嘗て見た）と云ふ名は、一群の類似の諸現象――『嘗て聽いた（デジャアンタンデュ）』

,,déjà entendu,,『嘗て會つた』,,déjà éprouvé,“『嘗て感じた』,,déjà senti,“など——の代表となつてゐるものである。私が多くの類似のもの〻代りにこ〻で報告しようとしてゐるのは『嘗て話した』déjà raconté“の起つた場合である。これは無意識の企てにして實行されずに終つてそのま〻になつてゐるものから生じたのであらう。

或る男患者が、彼の聯想をとつてゐる間にかう話した。——『私が五歳の時に庭でナイフを持遊んでゐる間に小指を切つた話、いやたゞ切つた話、これは併し、前にもうお話しましたね。』と。私は確かにそれに類した話を聽いた覺えはない。併し彼は益々確信を以て自分はその點に就いては間違つてゐる氣づかひは斷然ないと云ひ張るのである。最後に私は、この論文の始めに云つておいた行り方に從つてその論爭を打切り、是非その話を繰返してくれと頼む。さうすれば、やがて我々に分るであらう。

『私が五歳の時に、私は庭で自分の守女の傍で遊んでゐました。さうして私の小刀で、私の夢の中に(一)出て來た例の胡桃の樹の一本の樹皮を傷けました。(二)突然私は、自分の（右であつたか左であつたか）手の小指が切られて、たゞ僅かに皮でぶらさつてゐるのを知つて、云ひやうのない程驚きました。苦痛は少しも感じなかつたが、非常に不安を感じました。私は自分のところから二三歩離れたところに

ゐる守女に何か云ひかける勇氣がありませんでした。手近の椅子にドツと腰を下して、そのまゝチツとしてゐました。まだその指に眼をやることが出來なかつたのです。遂に段々氣が落着いて來て、指を眼にやると、何の事、指はチツとも傷ついてゐなかつたのです。』

註(一)　『夢と童話』本全集第六卷『分析藝術論』(三五八頁以下)參照。

(二)　後にはこゝのところをかう訂正して話した。――私はその樹を切つたのではなかつたと信じます。それは或る他の記憶との混同で、その記憶もやはり幻覺的に間違つたものであつたに相違なく、私は小刀で或る樹に傷をつけたら、そこから血が流れ出たと云ふ記憶である。

やがて我々には、彼がその幻想を、又は幻覺を、まだ私に話してゐる譯がなかつたと云ふことが僞になつて來た。彼の五歲當時に去勢恐怖のそれだけの證據のあつたことは私が注意せずに放つておくわけのないことを彼は甚だよく了解した。去勢コンプレクスを承認することに對する彼の抵抗は、かくて打破せられたが、併しかう質問して來た。――何故、私はこの記憶を旣にお話したと、あんなに確信してゐたのでせう?……と。

その時我々に思ひ當つたことは、彼が幾度も繰返して次のささやかな思ひ出を話した（その原因はいろ〳〵であるが、併し正直に云つてゐた）ことであつた。――

『或る時、叔父が旅行に出る時に、私と姉とに向つて、何をお土産に買つて來てやらうかと尋ねました。姉は本が欲しいと云ひ、私は小刀が欲しいと答へました。』今や我々は一二ケ月前に現れたこの思當りが、抑壓されてゐる記憶に對する陰蔽記憶であり、また小指（明かに一つの男性器象徴）を切つたと誤つて考へた事を話さうと思つてそれが抵抗のために押へられてゐる、それの代償である事を理解した。叔父さんは實際に小刀を買つて來たが、その小刀が、彼の記憶に依れば、話さうと思ひつゝ長く抑壓されてゐた報告の中に出て來る小刀と同じ小刀であつた。

この小さな經驗が『誤てる再認識』の現象に關して參考せられる限りは、これ以上解釋を附加へる必要はないと私は信ずる。この患者の幻想に就いて私はかう云つておきたい。そのやうな幻覺的な思ひ違ひは去勢コムプレクスの混成體中に於いて決して孤立的に存在してゐるものではなく、また望ましからぬ知覺を是正する上にも同樣にその思ひ違ひが役立つと云ふ事を……。

一九一一年に、ドイツの或る大學都市出身のアカデミイの教育ある人が（その人とは私は面識はない、さうして彼の年齡も私は知らない）幼兒時代からの記憶として次の報告を私に與へ、これを利用してよろしいと云つて來た。――

『貴著「レオナルドの幼兒期記憶」を讀んで二十九頁から三十一頁の邊へ來た時に(一)、私は心內に抵抗

を覺えました。男兒は自分自身の性器に對する興味に支配されてゐるとのお說を讀んで、私は反抗的にかう云ひました。――「それは一般的な法則であるかも知れないが、少くとも私は例外である」と。さてその次の節（三十頁から三十二頁あたり）を讀んで私は極度の驚きを覺えました。それは我々が何か全然新しい事實を讀み知つた時に覺える驚きでありました。その驚きの最中に、私には一つの記憶が蘇りました。その記憶に依つて私は――それは私自身にも意外でしたが――その事實が私には全然新しいことではないことが分りました。つまり私は、自分が『幼兒的性硏究』の最中にあつた頃に幸運にも、或る同年輩の女友達の女性器を觀察するの機會を持ちました。さうしてその時明かに、自分自身のと全く同種の男性器をそこに認めたのでありります。併しその後間もなく私は婦人の像や畫を見てまたもや疑惑に陷りました。さうしてこの「知識上」の分裂を遁れるために次の如き實驗を思ひつきました。――私は上腿を密着させてその間に私の性器を押込んで見えなくさせ、かうすれば女の畫像と少しも違はないと云つて滿足してゐました。女の畫像に於いてもかう云ふ風にして性器は見えなくなつてゐるのは勿論だと、私は考へてゐました。』

註（一）　本全集第六卷『分析藝術論』一七四頁以下參照。（譯者）

『こゝで私は今や一つの別な事を想起しました。それは、私の夙く亡くなつた母に對する記憶群を成

してゐる三つの記憶の内の一つである限りに於いて、既に以前から私にとつては最も重要なものでありました。私の母は流し臺の前に立つてグラスや手洗鉢を洗つてゐました。その間に私は自分の部屋に遊んでゐて何かおいたをしてゐました。折檻のために私は手をひどく打たれました。その時私は自分の小指が切れて水盥の中へ落ちたのを見て、非常に喫驚しました。私は母が非常に怒つてゐる事を知つてゐたので、何も云ひ出すことが出來ませんでした。さうしてやがて後に女中がその水盥を持つて行つて了ふのを、なほも募り來る恐怖を以て見てゐました。私は永い間、自分の小指はなくなつたものと考へてゐました。どうやら自分が數を覺えた頃まではさう考へてゐたでやうです。』

『この記憶は、既に申しました通り、私の母に關係があります點で、私には最も重要なものでありまして、私は屢々これを解釋しようと試みましたが、嘗てその解釋に滿足したことはありません。只今始めて——貴著を讀みまして後に——この謎が端的に、滿足の行くやうに、解決されたことを感じます。』と。

また別種の誤てる再認識が處置の終了時に現れて、治療者を滿足させることが稀ではない。現實的性質のものにせよ、心理的性質のものにせよ、抑壓されてゐる出來事があらゆる抵抗に拘らず承認せられ、多少とも再經驗されると、患者はかう云ふのである。——さう、その感情を只今私は持ちまし

たが、併しそれは前から私には分つてをりました、と。分析者の仕事はこれを以て終りを告げるのである。

# 分析處置法

『國際精神分析醫雜誌』第一卷（一九一三年）に始めて發表。原名は „Zur Einleitung der Behandlung."

高尚な將棋を書物に就いて學ばうとするものは誰しも、たゞ開局と終局とのみが十分に組織的に説いてあつて、開局の後に始まる手の看過することの出來ない複雜さは、十分組織的に說いてないことを、やがて知るであらう。大家が互に戰つた對局を熱心に研究することのみが、そのやうな指導の缺陷を補ひ得る。精神分析的處置の實施に關して人々の與へ得る規則に於いても、恐らくこれに類した不備が見られるであらう。

私は次に、實踐的分析者の用に供するために、治療手引上のこれ等の規則の二三を纏めて見ることにする。それ等の內こゝに擧げた規則は小さなものに思へる規則でもあり、また恐らく實際小さくもある。その代りこれ等は實踐規則であり、それ等の意義は實際これを實踐して見る間に自ら生じて來るところに、その埋合せがある。併し私はこれ等の規則をたゞ參考としてまでに話しておくので、これ等が何れの場合にも適用出來ると無條件に請合ふものではない。さう斷つておく事は私としてもい

ゝ事だと考へてゐる。取扱ふべき心的狀態が種々雜多であり、總ての心的過程が變轉極まりなきものであり、また決定的要素が甚だしく豐富であるがために、また技法を機械的に統一することが許されないし、大低の場合に正しい方法も時々には無効である事もあるし、普通には無効な方法も一度は目的に協ふ事もあり得ると云ふわけである。事情かくの如くではあるが、併し、醫者として槪して適當な態度を確立しておくことは、決して妨げにはならない。

如何なる患者を擇ぶべきかに就いての最も重大なる助言は、私旣に兩三年前に他のところで與へておいた。(一)それ故に私はこゝでそれを繰返しはしない。他の精神分析者たちも右の助言には段々贊意を表してゐる。併し私は附加へて云つておくが、私はそれ以來、私のあまり知らない患者はまづたゞ試驗的に一週間又は二週間ぐらゐ、扱つて見ることにしてゐるのである。その期間の內に中止して了ふならば、治療を試みたがうまく行かなかつたと云ふいやな印象を與へないで濟む。その場合にはたゞ患者を知り、精神分析をするに適してゐるかどうかを決めるための探りを入れて見たゞけである。さう云ふ探りとは違つた種類の試みを人々は一つも持つてゐない。併しそれだけ長い間たゞ對談時間中に話合つたり訊き出したりしてゐるだけでは何の代償にもならない。併しこの豫備試驗は旣に精神分析の始めであつて、やはり精神分析の規則に遵はねばならない。では、この豫備試驗中特に如何なる

態度をとるべきかと云ふに、主として患者をして喋舌らしめて、彼の話を續けさせるに就いてどうしても必要である以上には說明を與へないやうにするのである。

註（一）『精神療法に就いて』（一九〇五年）本書一一頁以下參照。

分析處置をまづそのやうな一二週間の試驗期間を以て開始することは、やはりまた一つの診斷上の動機もそこに存するのである。ヒステリー的又は强迫的の徵候ある神經症者（過度の病狀に陷つた者でなく、神經症になつて餘り間のない神經症者、つまりこれなら處置するに都合がよいと考へたくなるやうな神經症者）を前にすると、分析者は甚だ屢々、この病人は準備時期、卽ち所謂早發性痴呆症（ブロイラーの所謂 Schizophrenie, 私の所謂 Paraphrenie）[一]に相當し、遲かれ早かれこの病氣の樣相を明白に示すのではないかとの疑ひが自ら生じ來らざるを得ない。この區別を立てることは常に甚だ容易い可能であると、私は抗論する。精神醫の間には判別診斷に於いて動搖せぬ人のある事を私は知つてゐる。併し彼等はそのくせ屢々間違ふことを私は確信してゐる。間違ひはたゞ精神分析者にとつての方が、所謂臨床的精神醫にとつてよりも、評判を決定して了ふだけである。何となれば所謂臨床的精神醫は過度の病狀に陷つてゐない場合にも早發性痴呆症の場合にも、別に患者のためになることはしないのだからである。彼等はたゞ或る理論的誤謬の危險を冒すのみであつて、彼等の診斷はたゞ

アカデミイ的興味あるのみである。精神分析者は、併し、都合の悪い場合には實踐上で思ひ違ひをするのである。彼は無駄な勞力を支拂つて、その治療法は信用されなくなるのである。患者がヒステリー又は强迫精神症を病んでゐるのでなく、知力喪失症者(パラフレニカー)である場合には、精神分析者は治療の約束をすることが出來ない。それ故に誤診を避けるべき特に强い動機を持つてゐるわけである。一二週間の準備的處置の間には、彼は屢々疑はしい見方をすることがあらう。そのために彼は治療の試みをもうそれ以上續けなくなることもあり得る。さう云ふ試みに依つて常に必ず確實な決定をなし得るやうになるとは、遺憾ながら私も主張出來ない。それは寧ろ、一つのよき用心深さである。(二)

註(一)『知力喪失症者』の意。(本全集第九卷『分析戀愛論』二三一頁參照)(譯者)

(二) この診斷上の不正確と云ふ問題に關して、輕微な形の知力喪失症の分析可能機會に關して、また二種の病苦の類似點を確立することに關して、云ふべきことは甚だ多いであらうが、私は只今は細論することは出來ない。ユングの先例に倣つて、ヒステリーと强迫神經症とを『轉嫁神經症』として、これを『内向神經症』としての知力喪失症と對立せしめることにしてもよいと私は思つてゐる。但し(リビドー)の『内向』と云ふ概念をこのやうに用ふることは、彼が唯一の正しいとする意味から離れるかも知れないが……。

分析的處置を始める前に、長く準備的對話を試みることは、醫者と被分析者との間に前から知人關

係が存すること〻同樣に、その結果は必らず思はしくない。であるから、その用意をしておかなければならない。つまり長く準備的談話を交してをると、患者が醫者に對して既に轉嫁的態度をとつて了ふことになつて、醫者はその轉嫁の生成と發達とを最初から觀察する機會を持つ代りに、漸次にその態度を發見して行くことになるのである。そこで患者は暫くの間は治療中の經過を早く出し過ぎて、醫者の方では却つて困ることになるのである。

治療を或る期間延期しておいてから始めようとする總ての治療者に對して、人々は信用しない。經驗の示すところに依ると、所定の期間が經過した後にも彼等の治療はうまく行かないのである。よしんば未熟者には、この延期の動機は卽ち計畫の合理性は、當然に思はれやうとも……。

殊に、醫者と分析を受ける患者とが、或は患者の家族とが友情的關係、叉は社會的關係を結んでゐる場合には一層困難である。友人からその妻君を、叉は子供を處置してくれと依賴された場合には、分析者はこれを引受ることが自分等の交友の斷絕を意味するかも知れぬことを豫め覺悟しておかなければならない。併し信用出來る代理者を立てることが出來ない場合には、この犧牲をも敢へて辭してはならない。

醫者でない人も醫者と同樣に、得てして精神分析を暗示療法と混同し易いものであるが、彼等は患

者が新しい處理に對して抱く期待に常に高い價値を置いてゐる。彼等は精神分析に大きな信用をかけてゐて、その眞理とその能力とに就いて確信してゐるから、分析者が一人の患者にそんなに骨を折らないものだと、屢々考へてゐる。また他の患者にはさう簡單には行かない。何となれば彼の態度は非常に懷疑的で、自分の身に就いて成功を見るまでは何事をも信用しない。併し、實際に於いて病人のかゝる態度は大して重大な意義を持たないものである。彼等が豫め示す信任だの不信任だのは、神經症者が私かに抱いてゐる内的抵抗に對しては、殆ど問題にならない。患者が信任してゐてくれゝば實際、彼と始めて交渉する事は甚だ氣持がよくはある。我々はその信任を感謝するが、併し彼の好都合な先入見的態度も處置中に於いて最初に困難に逢着するや、忽ち粉碎せられると云ふことを覺悟してゐなければならない。懷疑家に對しては分析者はかう云ふ、分析は別に信頼して居て貰はなくとも結構、お好きなように批評的であり不信的であつてよろしい。當人の態度に依つてその人の判斷を定めようとは思はない。何とならば彼はこの點に關して信ずるに足るべき判斷を構成し得る力はないからである。彼の不信は彼の他の疾病（徵候）と同樣に一つの徵候である。で、處置上の規則が彼に要求するところのものを彼が良心的に遵奉せんとの意志さへあるならば、それ（不信）も障害にはならないことが分るのである。

神經症の本質の何であるかを心得てゐる者ならば誰しも、他人を精神分析する能力は非常にある者でも自分が精神分析の對象とせられるや否や、他の普通人と同樣に激しい抵抗を生み出すものであると聽かされても、驚きはしないであらう。そこで人々は再び人間の心理の如何に深いものであるかの感を新たにする。さうして分析修業を以てしても達し得ざる深層にまで心理が達してゐることを知つても不思議には思はないのである。

分析治療の始めに於ける重要な點は、時と金とを定めておくことである。

時に關しては、私は專ら、一定時間を貸すと云ふ原則に從つてゐる。總ての患者は、私が仕事をなし得べき一日中からの一定時間を宛てがはれるわけである。その時間は、彼の時間である。さうして彼は、よしんばその時間を利用しないにもせよ、それに就いての責任だけは負ふべきである。かう云ふ定めは、獨墺のよい社會に於ける音樂や語學の敎師に對して當然自明の事となつてゐるが、醫者に對してはこの定めはをかしいか、或は身分柄仕兼ねると云つたやうなことにさへ思はれてゐる。患者がいつも同じ時間に醫者の許へ來ないのは、大抵は偶然の事のためであると人々は考へる傾きがあり、長引く分析的處置の經過中に色々の病氣が入亂れて起るせいにしたがつてゐる。併し私は答へる、そんなに色々の事は起りはしないのだと。嚴しく云はないでやつてゐると、『偶然的』の缺席は非常に屢

々の事となり、醫者はその物質的生存を危くせられるほどである。然るにこれに反して、嚴しく云つて來させるやうにしておくと、邪魔になる偶然事は概して起らず、その間に病氣が起るやうなことは滅多にない。凡そ職業を持つ者は閑散を恥ぢこそすれ、これを喜ぶ氣持になるわけはない。仕事が障害されずに續行することが出來れば、仕事が特に重要で內容豐富であると見えて來た時に限つていつも仕事に不當な中休みが來るとの不快な、焦立たしい經驗をせぬでもよいのだ。人間の日常生活の心理的行り損ひの意義や、『學校病氣』の如何に屢々起るかと云ふことや、偶然事故の如何に何でもない事であるかと云ふことは、時間制に依つて料金を嚴格に徵收して一三年間精神分析を實施してゐれば、始めて整然たる確信が得られて來る。心理的興味も見られないではないが、明かに肉體的の病苦であると分つた場合には、私は處置を中絕して空いた時間を他に流用し、彼の肉體の病氣が癒り、また他に時間の都合がつくやうになるや否や、その患者を再度引受けるやうにするのが至當であると私は考へてゐる。

私は日曜日と大祭日とを除いて每日のやうに患者を扱つてゐる。つまり通常、一週に六度は扱つてゐるわけである。輕微の患者や相當癒りかけて來た患者に對しては、一週三度ぐらゐで十分である。でないと、時間を制限することは、醫者にとつても患者にとつても利益ではない。始めの內はどうし

ても時間の制限と云ふことはいけない。少しの間中休みしてゐると、分析の仕事はいつでも少し逆戻りしてゐる。日曜を休んでまた始めから行り直さなければならない場合には、我々は何時でも冗談に『月曜の痂蓋（かさぶた）』と云ふことにしてゐる。また時には、醫者が患者の現實の體驗と歩調を合せ得ないことの危險、治療が現在と接觸を失ひ、脇道に入込むことの危險が、仕事の上に存する事がある。時にはまた、所定以上の時間をそのために割かねばならないやうな患者――何となれば、彼等は何か自分の事を打明ける氣分にまで心が和むには所定時間の大部分を要するからである――に出會すこともある。

　醫者としてあまりうれしくない質問、而も患者が何よりも先に持出す質問はかうである。――處置して頂くのは何日くらゐ掛りませうか。私の病氣が癒りますにはどれくらゐ時日が要りませうか。一二週間の準備處置を提議してあるならば、その準備期間を了つたら確かな事を申上げることが出來ると云ふことに依つてこの質問への直接答辯を避けるのである。寓話のエソップが、道の長さを尋ねた旅人に對して云つたところを以て我々もまづその答へとする。――まづ歩きなさい、さうして實地に依つて自分の云ふところを確めて見せなさい、我々はまづ旅人の歩き振りを知つてからでないと、どれくらゐ彼の旅が掛るかを測ることが出來ない、と。まづかう答へることに依つて第一の難關を突破

する。併しこの比較はよくない。何故ならば、神經症者は容易にそのテムポを變へることが出來るし、また時には非常に緩漫な歩みをなすこともあるからである。處置の期間を豫測することの質問には、實際、答へることが出來ない。

患者が分らず屋で醫師がまた間違つた考へを持つてゐると、兩方が合して分析に無際限の要求を掛け、而もその期間を極度に短いものにしようとする。私は實例としてこゝに、ロシアの或る婦人から二三日前に私宛に來た手紙の中から次の事項を報告する。その婦人は五十三歲で、廿三年このかた病氣になり、この十年と云ふもの何も仕事が手につかない『いろ〳〵な神經病院で處置を受けたが』彼女は『能動的生活』をなし得るやうにはならなかつた。彼女は精神分析を讀んでゐたので、これに依つて病氣を全治したいと望んだ。併し彼女の處置のために彼女の家族は既に甚だ多くの費えをなし、六週間又は二ケ月以上ヰインに滯在してゐることは彼女には出來なくなつてゐた。なほその上に厄介なことには、彼女はたゞ筆を以てしてのみ『一切を語り』たいと云ふのである。何となれば、彼女のコムプレクスに觸れられると、彼女は怒鳴り出すか、或は『時に默り込んで了ふ』からである。――普通の人間ならば誰しも、重い大机を二本の指で、まるで小床几でも持上げるやうに持上げやうと思つたり、大廈高樓を木小屋のやうに忽ちにして打建てようと思つたりはしないであらうが、然し神經

症と云ふものは今日ではまだ人々がどんなものか十分に呑込めてゐないと見えて、神經症の事となると、時間と仕事と結果との必然的割合を、知識階級の人々でさへ忘れるのである。それと云ふのもやはり神經症の病源に關して全く無智な結果であることは明かである。この無智のために、神經症は彼等にとつては一種の『異國の娘』である。人々は彼女が何處から來たか知らない。またそれ故に彼等は、この病氣が何れの日か雲散霧消するものと期待してゐる。

醫者たちはこの盲信をよいことにしてゐる。また彼等の內で知つてゐる者も、屡々神經病の困難さを正當に評定してゐない。私の懇意にしてゐる或る同僚は、他の學問に基いて科學的の仕事に幾十年の間も從事して來て、健氣にも遂に精神分析に改宗するやうになつたんであるが、その人嘗て私に書を寄せてかう云つて來た。——我々に要求せられることは、强迫神經症者を簡單に、安易に、模索的に處置せよと云ふことである。私にはそんなことは出來なかつた。私は恥ぢて責めを遁れるためにかう云つた、結核又は癌種の治療はそのやうに簡單で安易で模索的であるから、さう云ふ治療をする內科醫の方に赴かれたら、非常に滿足を得られるでせうと。

もつと直接的に云ふならば、要するに精神分析では常に相當長い期間を、半年又は一年を、卽ち患者の期待するよりは長時間を要するのである。であるから分析者は、愈々處置することに定める前に

さう云ふ事情をよく打明けておくべき責任がある。分析者が患者を扱ふ場合には、あまり恐れをなさしめない程度に於て、分析治療は困難であるから相當犧牲を拂ふ覺悟がなければならぬと云ひ渡しておき、かくて彼が分析はあんなに時間が掛る厄介なものであるとは知らなかつたので處置を受けたがこれではペテンに掛けられたやうなものだ、などゝ後になつて云ひ出さないやうにしておくことの方が大低の場合一層立派でもあるし、また適當でもあると私は考へる。さう云ふ事を話しておかないと、誰でも後になつてやはり恰好でなかつたと思ふやうになる。處置を始める前にさう云つた種類のことを打ちあけておくことはよい。說明の進步につれて、患者の間にもこの最初の試問に堪えるものゝ數が、やはり增加して行く。

私は患者に一定期間我慢して處置を受けるやうに義務づけるやうなことはしない。何時でも好きな時に治療を中絕することを許す。併し、少しばかり操作をして後に中絕したのでは何の結果も殘らない。丁度手術をやりかけたまゝにしておくやうなもので、とかく不滿足な狀態に取殘されるとあけすけに云ふ。私が分析的活動を始めた二三年の頃には、も少し處置を受け續けるやうに勸めるのに最大の骨折りをしたが、今では何とかもうこれでいゝからと思はせるのに骨を折つてゐる。

分析治療を短縮せんとすることは正當な願ひであつて、この願ひの實現は、後に云ふ通り、種々な

方途で努力せられる。併し遺憾ながら、これを實現するに就いて重大な障害となるのは、深い精神的變革が極めて徐々になされると云ふことである。その最後陣を承るものは、抑々我々の無意識過程には『時がない事』„Zeitlosigkeit" であらう。患者が分析のために非常に多くの時間を割くことが困難である場合には、彼等は時々、或る手段を講ずることを心得てゐる。彼等は自分の病苦を分類してこの方は堪え難いものであり、この方は副的なものであると説明し、そして云ふ――先生が何とかこの一方（例へば頭痛とか、一定の不安とか）から私を救ふて下さるなら、他方は自分で何とか、生活しながら片をつけるつもりでをりますと。慥に、分析醫は多くの事をなし得るが、併し何を生み出すかを十分に定めることは出來ない。彼は一つの心的過程を惹起させるのである。既存の抑壓を解消せしめる過程を惹起させるのである。彼はそれを呼覺まし、促進し、また確に多くの邪魔物を取除くのである。病的現象に及ぼす分析者の力は、つまり云はゞ男の性的（ポーテンツ）の力の如きものである。力ある男子は子供の全體を作り得るが、併し女の有機體内に於いて子供の頭一つだけとか腕一本だけとか、脚一本だけとかを作り出す事は出來ない。彼はまた子供の性に關してさへも決定力を持たない。彼もまた同様たゞ非常に錯雜した、昔から既に定められてゐる過程を導入するのみで、その過程が子供となつて解決結着するのは母の力に依る。人間の神經症もまた有機體の組織を具へてゐる。その部分現象は

相互に獨立してゐない。互に條件づけ合ひ、それ〴〵支持し合ふ習はしになつてゐる。人間は常にたゞ一つの神經症を惱むもので、一個人に於いて偶然に起きる多くの神經症を惱むものではない。患者の望みに從つて或る一つの堪え難き病狀を取除いてやると、その患者はこれまでそんなにひどくなかつた症狀がとかく我慢の出來ないやうに强くなつて來ると云ふ經驗を持ち勝ちなものである。凡そ自分の暗示的（卽ち轉嫁的）條件の成功を出來るだけ解消しようと思ふ者は誰しも、また治療が成功するに就いての選擇的影響を（とかく醫者には或る一定の方面に餘計に感化を振ふ傾向があるから、それを）放棄するのがよい。精神分析者にとつては、自分に許された限りの全的健康を持たせてくれと云つて來る如き患者が、さうしてそのために必要な限りの時間を分析者に與へる如き患者が、最も好ましいに相違はない。勿論、そんな都合のよい條件を期待出來るやうな場合は滅多にないが……。

治療の始めに決定しておかなければならないその次の點は、金である、醫者の謝禮である。金が自己保存と勢力獲得の手段をして第一に問題になることを、分析者は否定はしないが、併し金錢の尊重に於いて力强い性的要素が參與してゐることを分析者は主張するものである。現に、文明人の金錢に對するは丁度性的なる物に對すると同樣で、愼しみと僞善との分裂的態度を以て彼等はこれを取扱はねばならないではないかと分析者は云ふ。であるから、分析者は豫め世の文化人たちと同じやうに振

舞はないやうに、寧ろ金錢關係は自治的正當さを以て患者の前で處置するやうに定めてゐる。丁度、それと同樣な正當さを以て性生活の問題を扱ふやうに、患者たちを教育しようと分析者は考へてゐるのだ。彼は如何に自分の時間を尊重してゐるかを問はず語りに述べることに依つて、自分では誤てる羞恥を放擲してゐることを彼に證明するのである。さうすれば人間は智慧を働かせて、一度にまとまつた大金を支拂つたりはしないで、一定の短期間に（例へば一ケ月每に）それだけを收めるやうにする。（處置を安賣りしてゐると、患者の方ではこれを高く買はないことは、誰しも知つてゐる通りである。）このやうなのは、人々の知る如く、我々歐洲社會に於いては、神經病醫や內科醫の普通には行らぬことである。併し精神分析醫は外科醫のやうに正々堂々と金をとつてよいのである。何となれば、分析醫の處置は救ふことが出來るからである。實際、自分の現實的要求及び必要を自分で認めることの方が、今なほ醫者の間に普通となつてゐるやうに、無私なる仁人を氣取つて而も氣取り切らず、秘かに患者の察しのなさや酷使を怨んだり、或は口に出して不平を云つたりするよりは、遙かに立派でもあり倫理的にも健全である。分析者は料金要求の理由として、困難な操作の場合にも他の專門醫のやうに多額を受取ることが決して出來ないことを主張する。

同じ論據からして、分析者はまた無料での處置を斷るのが當然であり、また同僚やその近親の者等

のためにとて別に例外を設けない。この最後の事は醫者仲間の情誼に撞着するやうに思はれようが、併し無料處置は精神分析者にとつては他の一切の醫者にとつてよりは一大事である、つまり彼が收入を得るための仕事の時間の少なからぬ部分（その八分の一又は七分の一位）を幾月もの間奪はれると云ふことを意味することは誰人にも分ることとである。同時に二つの無料處置があつたとすれば、彼の收入活動力の四分の一、又は三分の一を奪はれることになる。これは何か重大な外傷的災難を被つたのにも比すべき事となる。

そこで患者が利益を得るならば、醫者の犠牲は或る程度まで償はれるかと云ふ事が問題になる。それに就いて私は自信ある判斷を下すことが出來る。何となれば、私は神經症を知り盡したい目的のために出來るだけ抵抗を避けて仕事をしたいと思つたからである。然るにその時私は、望む通りの利益を得ることが出來なかつた。神經症者の抵抗の多くは無料處置に依つて甚だしく強められ、若い婦人に於いては誘惑が轉嫁關係に含まれて起り、若い男子に於いては父コンプレクスに根差す反抗（感謝の義務を果さゞらむとする）が起る。これは醫者の治療行爲に對する最も困つた苦手の一つである。醫者に金を拂ふことに依つて心持ちの方でも拂濟みとなつてゐるのに、それが中斷すると云ふことは非常に苦痛に感ぜられるやうになる。病人の態度はやはり現實世界から生じて來る。治療を短くしよ

うとの健氣な心持が患者の方になくなる。

金錢を禁慾的に汚物視することには全然離れることが出來るが、併し分析治療は內的原因並びに外的原因からして貧困者には殆ど近付き得べからざるものであることを嘆息する。これには殆どなすべき術がない。生活困難のために激しい仕事に强ひられた者はそんなに容易に神經症にならぬとの說は多くの人々の間に擴がつてゐるが、多分これは正しい。併しこれとは違つた經驗があつて、これまた全然反對するわけには行かない。卽ち、一度神經症を起した貧困者は、なかなかこれを脫することが困難であると。この神經症は貧困者のために、自己主張の戰ひに於いて、あまりによき奉仕をなすのである。神經症が彼に齎す第二次的の病氣利得は、あまりに重要である。人間はその物質的困難に對しては慈悲を拒否するが、今やその神經症の名の下にこれを要求し、その貧困を勞働に依つて除かんとの要求を自分に免除するのである。このやうに、貧困者の神經症を精神療法を以て扱ふ者は誰しも、この場合には抑々全然種類の違つた精神療法の必要である事が大抵は經驗せられる。我々には親熟してゐる傳說中で皇帝ヨゼフ二世が常に用ゐたと云はれてゐる如き療法が必要である。併し勿論、時には我々は、立派な人物で、必ずしもだらしがないためと云ふわけではなくとも金のない人物で、これを無料で處置してやつて、先に論證した如き障害にはぶつつからず、美事な結果を收める如き場合も

あるのである。

中流階級にとつては、精神分析に必要な金錢支出はたゞ一見甚だしい支出のやうに思はれるだけである。一方に於いて健康と行動能力とを得、他方に於いては僅かの金錢支出と云ふのでは餘りに普通の釣合を逸してゐるが、それは別問題としても、療養所や醫者の處置への無限の支拂を合算し、それに對して分析治療が目出度く終つた後の行動力と儲ける力との增大を考へ合せて見ると、その患者になか〳〵よい取引をしたものだと云ふことが出來る。凡そ人生に於いて何が金を喰ふと云つて病氣ほど――頭の惡くなつたほど――甚だしいのはない。

分析的處置の手引きに就いての言を終るに先立つて、なほ一言私は、治療を行ふ時の立場の法式に就いて述べておく。患者はそれを安臥せしめ、分析者はその背後に、患者から見えないところに座をとるやうに私は勸める。かう云ふ準備は歷史的意義を有してゐる。精神分析は抑々催眠的處置から發展して來たのであるから、かゝる準備は催眠術的處置の名殘である。併し、この傳統は、幾多の理由からして、確保せられねばならぬ。第一に或る個人的動機が存するが、この動機はまた私以外の分析者も私と共に領前してゐるかも知れない。私は一日八時間（又はそれ以上も）他人から見詰められてゐることは堪えられない。私は聽取の間に、自分自身を無意識思想の跳梁に任せてゐるから、自分の

態度が患者に對して解釋の素材を提供したり、或は彼の報告內容に影響を及ぼしたりしないやうにしておきたいのである。患者は自分に强要せられてゐる立場を普通に缺乏(エントベールング)(節慾)と見なし、それに對して反抗してゐる。殊に彼の神經症に於いて竊視本能(das Voyeurtum)が重要な役割を果してゐる場合には…。併し私はこの掟を固執する。何となれば、患者の轉嫁と思ひ付く事とを氣付かぬ內に混同することを防がんとし、轉嫁を孤立させ、これを時々抵抗として鋭く形を變へて現れさせんとする意圖をこの掟は有し、またその意圖を成功させるからである。多くの分析者はかうはしないと云ふ事を私は知つてゐる。併し別の行り方をする意圖とその行り方に依つて得られる利益とが、彼等の離反の何等かの動因となつてゐるかどうかを私は知らない。

さて治療の條件がそのやうにしてきまつたとすると、次には如何なる點から、如何なる材料から手掛けて處置を始めるべきかゞ問題となる。

如何なる材料から始めるか、卽ち患者の生活史からか、病歷からか、或は幼兒期記憶からかは、全くどちらでもよい事である。併し、如何なる場合にも分析者は患者をして語らしめ、その始める點の選擇は彼の自由に一任しておかなければならない。で、分析者はかう云ふのである。――私から貴方に何か云つてあげる事が出來るやうになるためには、まづ私は貴方に就いて多くを知つておかなけれ

ばならないですから、貴方は自分で自分に就いて知つてゐることを私に話して聽かせて下さい。そたゞ患者が知つておかなければならない精神分析技法の根本法則に就いては、この限りでない。その根本法則に就いて、分析者はまづ最初に患者に知らせておかなければならない。――併し貴方が話を始める前に一言云つておかなければなりませんが、貴方のお話はたゞ一つの點に於いて普通の會話とは違つてゐなければなりません。普通の場合ならば貴方は話に辻褄を合はせ、總て横合から飛込んで來る思ひ付きや副的の思想は押除けておき、俗にも云ふ通り、百番目の事から千番目の事に飛んだりしないやうにするのが當然であるが、併し只今の場合は、全然別の行り方をして下さい。貴方は話を續けてゐる内にいろんな思想が、何等かの批評的抗議で押除けたくなるやうな思想が浮上つて來る事を、貴方は觀察されるでせう。貴方は自分でかう云ひたくなるでせう、これやあれは此處では云はなくてもいゝだらう、これは全然下らないことだ、これは無意味なことだ、だからこれは云ふに及ばないと。かう云ふ自己批評に決して耳を借さない方がよろしい。さう云ふ批評に反抗して、いや批評のために話すまいと思ふが故になほさら、それをお云ひなさい。かう云ふ掟――貴方が遵守しなければならない抑々唯一の掟――が如何なる根據に基いてゐるかは、後になつて貴方にも分つて來るでせう。ですから、何でも頭に浮上つて來ることは一切合切喋舌つて了ひなさい。例へば旅行者が汽車の

窓邊に坐つて內側に坐つてゐる者に對して、只今窓前の景色は如何に變化してゐるかを語り聽かせるやうな風になさい。最後に、忘れてならない事は、貴方は全然正直である約束をしたことである。で、何かの理由のためにそれを語ることが不快だからとて、それを飛ばして了つてはなりませぬぞ。(一)

註(一) この根本規則に關するの經驗に就いては云ふべきことは澤山にあらう。我々が時々出會ふ人物の內にはこの規則をまるで自分で與へたかのやうに振舞ふ者がある。ところが他方に、極始めからこの根本規則に叛いて來るものもある。彼等のいふことは、處置の第一段階に於いては大切であり有用であるが、後には抵抗の支配を受けて、この規則への從順は拒否せられる。で、何人にでも一時はこの規則を無視する時代が來るものである。我々も自己分析に徵して想起せざるを得ないのである、思ひ付きを拒否せよとのあの批評の抗議に屈服せんとの誘惑が如何に力強く迫まり來るものであるかを‥‥。この規則を患者と共に守つて見て、この約束の如何に効果の少いかは人々の知つてゐるところであるが、第三者に關する何か秘密の事を始めて話さうと云ふ段になると、いつでもこの事を確信せざるを得ない。患者は總てを云はなければならないのだとは承知してゐるが、併し他人に對する愼みからまた新たな抑制を感ずる『私は本當に總てを云はなくてはならないのだらうか。私自身に關係あることだけを云へばいゝのだと信じてゐた。』患者が他人に對する關係や、その他人に就いての彼の考へを報告中から除くとなれば、さう云ふ場合には分析處置は不可能になることは勿論である。Pour faire une omelette il faut casser des oeufs (オムレツを拵えるには卵を壞さなくてはならない。) 上品な人間は、さう云ふ、秘密に關係

のない人に知らせても仕方がないと思はれるやうなことは、直ぐに忘れて了ふものである。また人の名前もやはり分析者は聽いておかないと困る。でないと患者の話しも何處となく掴みどころがなくて、例へばゲーテの『私生兒』の場面のやうになる。かう云ふのは、どうも醫者の記憶に殘らない。またその差し控へられた名前があらゆる最も重要な諸關係への入口を掩ふものである。被分析者が醫者と分析法とに一層信頼を持つやうになるまでは、その名前を姑く云はせないでおいてもよい。たゞ一個所でも差控へさせると、問題全體が忽ち解決出來なくなる事は、誠に著しい事實である。併し考へて見よ、もし我々の都市の唯一つの個所に對して隱匿權が存してゐたとすれば、全市の無頼の徒等をその個所に集まらしめるに、どれほどの時間を要さう。私は嘗て或る高官を處置したことがあるが、彼は自分の職掌柄或る事柄を國家の秘密として已むなく私に報告しないでおいた。ところがこの制限が暗礁となつて、彼の場合は乘上げてしまつた。精神分析では一切の顧慮反省を突破しなければならない。何となれば、神經症とその抵抗とは顧慮反省のないものだからである。

自分の病氣を或る一定の瞬間から數へてゐる患者は、普通に自分の病氣の原因となつたことの見當をつけてゐるのである。それとは違つて、自分の病氣と幼兒時代との關係を自ら見損つてゐないものは、大低は自分の全生涯の話から始める。分析者は別に組織的に話して貰ふことを期待しないし、またさう話させるやうに仕向けもしない。生涯の話の總ての部分々々は後にまた改めて語り直して貰はねばならない。さうしてその繰返しの時に、最も重要な、患者には氣の付かない事情に就いて分析者

をして窺知せしめるやうな附加が現れて來るのである。

患者の内には、最初の時から自分の話を細かく準備し、處置時間をなるべく有効に使用するやうにしたいと云ふ無駄骨折りをする向きがある。そのやうに熱心らしく裝ふて來るのは、それが抵抗なのである。かう云ふ準備は好ましからぬ思ひ付きの出て來る事に對する防禦として利用されてゐるのであるから、分析者はそれに對しては止めるやうに注意をする。(一)その患者は正直に自分の感心な意圖を信じてゐるかも知れないが、抵抗はその意圖的な準備の仕方の内に割込んで來て、報告すべき材料の内最も價値あるものを脱落せしめるのである。患者はまた處置に際して求められるものをはぐらかすために、なほ別の方途を發見してゐる事をやがて我々は氣付くのである。彼は大抵毎日のやうに誰か親友と自分の治療に就いて語り合ふのである。さうしてこの會話の中で、醫者の許では押へられてゐた一切の思想が持出されるのである。治療にはそこで、一つ漏口が出來るわけである。さうしてその漏口から一番大切なことがドン〳〵逃げて行くのである。やがてその内に患者に向つては注意すべき時が來るであらう。患者は自分の分析治療を醫者と自分自身との間の事とし、それ以外の總ての人々にはよしんば如何に近親者であらうと如何に聽きたがる者であらうと、これを洩してならないのであると……。處置の後段になれば、患者は概してそのやうな誘惑には乘らなくなるものである。

註(一)　家族一覽表、滯在、手術、その他の事實に對しては、但しこの限りに非ず。

自分が處置を受けてゐることを秘密にしたがつてゐる患者（その理由は多くはまた自分の神經症を秘密にして來たからにある）に對しては、私は別に心配はしない。その秘密主義の結果として、最も美事な治療の結果の二三が、彼の周圍の者等に對して效果を失ふかどうかと云ふやうなことは、勿論考へられぬのである。患者が秘密にする決心をしてゐることは、彼の生涯の特徴が秘密の歴史であることを明かにしてゐる。

處置の始めに於いてはなるべく、處置を受けてゐる事をあまりいろんな人に話さないやうにとの嚴命を分析者が下すのは、またこれに依つて、分析から離れさせようとする多くの敵意ある影響から多少とも彼を守らうとするものである。そのやうな影響は、處置の始めの頃であると有害であるが、後になれば一向平氣であるか、或は匿れたがる抵抗を表へ出すことに役立ちさへする。

分析處置の間に患者が暫く他の內面的の、或は專門的の治療を受けたいと云ふならば、分析者に非ざる同僚の助力を求めることの方が、この別人の補助的處置を自分で配慮するよりは適當である。强き身體的依憑ある神經症である故に、身心兩方の合一處置をすることは、大抵は行ひ難い。患者に對して、治療に導くべき一つ以上の方途を示すと、彼等はその關心を分析から離す。身體上の處置は心

理的處置の終つたあとでするやう、それまで延しておくのが上々である。身體的處置の方を先にすると大低の場合不成功に終るやうになる。

さて處置の仕始めの話に戻る。分析者が扱ふ患者の內には時々、何も話せるやうなことを思付かない（自分の生活史や病歴に就いては全然觸れたこともないくせに）と云ひ張る者がある。彼等にはそれを話させなければならないから云つてくれと吩咐けたからとて、いつまで經つても埒が明かない。さう云ふ場合には、何處から手をつけるべきかを分析者は考へるのである。それは神經症を守護するための力強い抵抗が前線に出て來てゐるのである。そこで分析者は挑戰を試みて肉迫して行くのだ。始めからそのやうに何も思ひ當ることがなかつたのではなかつたのだ。それは分析に對する抵抗を意味してゐるのだと繰返して云つて聽かせると、患者はやがて已むなく、さもあらんかしと思はれた告白をし、また彼のコムプレクスの第一の部分を呈露する。分析の根本規定を聽いてゐる內に、これは困つた、何とか差し控へたいと氣持が起きて來たと告白するやうだと、具合は惡いのである、どうしても多少の事は泥を吐かないであらう。分析に對して爾々の不信を抱いてゐるとか、如何に嫌なことを分析に就いて聽いたとか云ふ程度ならば、大したことはない。彼がかうした差し控へや不信に類した氣持を持つてゐるだらうと云はれて、これを否認するやうでも、分析者は彼を攻めて、彼の抱いて

ゐる若干の思想を沒却してゐたことを告白せしめることが出來る。彼は治療それ自體の事は考へたのであるが、特にこれと云ふ定まつたことは考へてゐない。卽ち彼は自分の居る部屋の有樣を考へてはゐたのだ。また彼は處置室内の樣々な物や、自分が長椅子の上に橫たはつてゐる事は考へざるを得ない。彼が『何も』考へないと云つた、その『何も』を以て置換へた『總て』はこれだけなのだ。これ等の言葉はよく分るやうだ。現在の立場に結び付けてゐる一切は、醫者に對する轉嫁に相應してゐる。その轉嫁は抵抗となつてゐることが知られる。で、分析者はこの轉嫁の發見を以て始める必要がある。この轉嫁を發見すると、患者の病的材料に潜入すべき途は直ちに見出される。その生活史の內容に應じて性的攻擊の準備をしてゐる婦人、甚だしく强烈な同性愛者でありながら、これを抑壓してゐる男たち、彼等は分析の最初期に於いて、右のやうに何も思ひ當ることがないと云ふものである。

最初の抵抗と同樣に、患者の最初の徵候、又は偶然行爲は、特別の興味を牽く。さうしてこれに依つて、彼等の神經症を支配してゐるコムプレクスの何であるかゞ判知出來るのだ。審美感の優れた、非常に才氣のある或る若い哲學者は、始めて處置を受けるために橫たはる前にズボンの條を急いでつまんだ。これに依つて彼が後に審美家となるべき人にのみ期待し得べき、非常に精緻な汚物愛好者であることが分つた。或る若い娘は同樣に、處置を受けるために長椅子に橫たはる前に、着物の裾を前

に見えてゐる踝の上に急いで引張つた。これに依つて彼女が、後の分析に依つて分つた通り、果して自分の肉體美に對してナルチスス的誇りを持ち、また露出症的傾向あることが察知せられた。
分析者が患者の背後に、患者から見えないところに坐ると、彼等に指定された身の置場に反抗する患者が特に多い。さうして何とか違つた姿勢で處置を受けさせてくれと乞ふ。その理由は大抵は、やはり分析醫の方を見てゐないからである。さう云ふ註文は一切斷ることにしてある。併し長椅子に就き始める前に、或は話しを総つて長椅子から起上つて後に二三語を交さうとすることは、これを禁制するわけに行かない。このやうにして彼等は處置を表向きの部分と、『快適』の部分とに分け、前者の間には彼等は大抵は甚だ窮屈さうな様子であるが、後者の間には如何にも氣安さうに、處置の內には這入らないと自分で思つてゐることを悉く喋舌るのである。醫者はこの區別を長く許しておかない。長椅子に就く前後に云つたことを注意する。さうして次の機會にはそれに相手にならないことに依つて、患者が折角打樹てようと思つた障壁を打破するのである。この障壁たるや、これまた轉嫁的抵抗の材料を以て出來上つてゐるのである。
患者の報告や思ひ當りが頓挫なく成功する限りは、轉嫁と云ふ問題には觸れないでおくのである。このやうに、あらゆる手續の內で最も皮肉な手續きを以て、轉嫁が抵抗となるのを待つてゐるのであ

る。

次に我々が直面する第一の問題は、原則的な問題である。即ち、何時頃から分析者は被分析者に對して報告を始めるべきか。被分析者が思ひ當つた事柄の奥秘の意義を解き明かし、分析の基本的豫想と技法的手續きとを彼に知らせるのは何時頃がよいか……と。

これに對する答へは、たゞからである。——行動能力のある轉嫁が、統制のある態度が、患者に起きてからの事で、それ以前は駄目である。處置の第一の目的は、患者を治療に、醫者の人物に、執着させておく事である。と云つても相當長く引きづつて行くだけで、それ以上に何もする必要はない。患者をして眞劍な興味を抱かせるならば、始めに擡頭する抵抗を注意深く取除き、若干の誤解を避けるならば、そのやうな執着は患者に於いて自ら生じ、患者がこれまで愛を受けて來た人々の空想中の一人にその醫者もさし加へられるのである。併しこの最初の成功とても、感情移入（アインシフユウルング）（相手の心持に同情し入込み行くこと）の見地以外の見地（例へば、道徳的見地を押付けるとか、或は夫とか妻とか、父とか子とか、とにかく當人の心の重大な相手方の立場の代表者又は代辯者としての見地）を以て望んでは、これを收めることが出來ない。

以上の答への内には勿論、醫者が患者の徵候を看破するや否や、これを患者に飜譯して聽かせたが

つたり、或はこの『解釋』を始めて會つた時にいきなり正面から叩きつけて得意にならうとしたり、するやうな態度がよろしくないと云ふ事も、固より含まれてゐる。熟練した分析者にとつては、患者の訴へや病狀報告を聽取したゞけで、彼が如何なる願望を抑壓してゐるかを判然と見拔くことは、困難でない。併し精神分析の豫備知識などのない赤の他人に、知り合つてからまだ間もないのに、貴方は母に近親姦的に愛着を寄せてゐるとか、貴方は妻君を意識的には愛してはゐるが無意識的には死ねばよいと思つてゐるのだとか、貴方は上役を欺かうと思つてゐるのだとか云つて聽かせることは、如何にも一人よがりな、無考へな話である。世にはさう云ふ瞬間的診斷並びに即席處置を考へてゐる分析者もあると云ふことであるが、併しさう云ふ例には倣はぬやうに私は總ての人々に警告しておく。分析者はそんな事をすれば自分及び自分の仕事に自信を失ひ、自分の判定が正しかつたかどうかに就いて最も甚だしい矛盾を感ずるやうになる。治療上の効果はまづ大抵の場合は駄目になり、而も分析を嫌惡するのが落ちになる。なほ處置の後期の階段に於いてもやはり、徵候の解釋や願望の飜譯をまだ知らせないやうに注意しなければならない。それを知らせてよいのは、患者が自分でこの解釋力を持つにはたゞ一步と云ふところまで來た時にである。以前には私は、解釋をあまりに夙く聽かせてやり過ぎて、そのために治療を早く切上げねばならなくなつた經驗が屢々ある。それは忽ち起り來る抵抗

の結果である事もあるし、また解釋に依つて輕症になつたゝめである事もある。こゝに於いてか人々は抗議を申出るであらう。――では、我々の仕事は處置を長延かせることであつて、これを出來るだけ夙く濟ませようとすることではないのかと。患者は自分が知らず理解せざる結果として惱んでゐるのではないのか。また醫者は自分でこれを知つた以上は、なるべく夙くこれを知らせてやるのが任務ではないか…と。

この質問に對して答辯を與へるには一寸した岐路に入らなければならない。卽ち、精神分析に於いて知識は如何なる意義を持ち、治癒の機制は如何であるかとの岐路的問題に入らなければならない。

分析技法の最も夙い時代には、どうしても、知力的思考態度に就いて、患者の忘れてゐるところを知るやうになることを重大視し、その際に患者が知ることゝ醫者が知ることゝの間に差異を設けなかつたのである。忘れられてゐる幼兒的外傷(トラウマ)が個々の場合に如何にして可能となつたかに就いての知識や報告を他方面から(例へば、兩親、子守、乳母、その他誘惑したもの等さへから)得ることが出來た時には、我々は非常に有難い偶然事として喜んだのであつた。さうして、その知識や報告の正しいことを患者に認めさせさへすれば、神經症と處置とを夙く終局に導くことが出來ると確信して、急いでさうしたのであつた。ところが期待した結果が來なかつたので、甚だしく失望した。今や自分の外

傷的體驗に就いて知つた患者が、それに就いて以前よりも知らないかのやうに振舞ふと云ふは、如何にして起るのか。抑壓されてゐる外傷に就いての記憶さへもが、それを知らせられ說明せられた結果として起つて來ようとしないのだ。

嘗て或るヒステリーの娘を處置したことがあつたが、その娘の母親が、娘の同性愛的傾向の定着に大きな影響を與へた經驗の話をして聽かせた。母はその場面を見て吃驚さへしたが、併し患者はそれを全然忘れて了つてゐる。そのくせ彼女は既に思春前期に在つたのだが……。そこで私は學ぶところ多き一つの經驗を持つ事が出來た。私が母親のその話を娘にして聽かせる度に、娘はヒステリー的な發作を以て反應し、而もその後でこの話は再び忘れられて了つてゐる。彼女は自分の昔の事を知るやうに押付けられ、それに對して激しい抵抗を示したのであることは疑ふまでもない。彼女は遂に頭が惡くて物忘れをするやうに胡麻化して、私の報告に對して自己を防衛するやうにしたのである。かくて我々は、知ることとそれ自身には思つたほどの力はなく、始めに忘れさせる源因となつた、さうして今なほ忘れさせる力を持つてゐるところの抵抗に重要さを置くことに結論せざるを得なかつたのである。併し意識的知識は、よしんばそれが再び押出されてゐない場合にさへも、この抵抗に對しては無力である。

このやうに患者は意識的知識を忘却を以て沒却することを承知してゐるもので、このやうなをかしな態度は所謂常態心理學にとつては理解すべからざるものとなつてゐる。精神分析は無意識心理なるものを認めてゐるので、かくの如きをかしな態度の說明には一向に困らない。右に說明した現象は併し、局所的な見地——心理的諸過程を局所的に違つてゐると考へる見地——に對して最もよき支柱を供するものである。患者は自分の思想中に抑壓されてゐる體驗のあることを承知してゐる。併しこの思想には、抑壓された記憶が何等かの形で含まれてゐるあの個所との連結が缺けてゐる。意識思想過程がこの個所にまで押進められて來て、そこで抑壓的抵抗に打克つた時に始めて一つの變化が生じ得るのである。それは丁度、司法省に於いて未丁年者の不法行爲は、これを多少寛大に處置すべしとの免除が通告せられてあるかの如きである。この免除が個々の區裁判所に十分に知られてをらぬ限り、或は區裁判所の判事がこの免除に從はうとの意圖を有せず、寧ろ自分の手で處罰しようと思ふ如き場合には、個々の年少者の犯罰の處置は別に變へられない。なほ是正として吾人の附言しておきたい事は、抑壓されてゐるものを患者に知らせてこれを意識させることが、必ずしも全然無効果ではないと云ふ事である。知らせる事に依つて所期の効果を示しはしないが、卽ち症狀を終らしめはしないが、併し他の結果を齎すのである。それに依つて先づ抵抗を生ずるが、併しやがて、抵抗の克服が成功し

た場合には、一つの考へ方が生じて來る。その考へ方の流れの内に遂には、無意識的記憶に對して所期の影響が及ぶやうになるのである。

今や我々は、我々の處置に依つて如何なる力を働かせるやうになつたか、その力を大觀すべき時となつた。治療の第一の動力は患者の惱み、並びにそれから生じ來る全治願望である。この大きな本能力の中から分析の進行中に發見されて多くのものが出て來る。就中、第二次的の病氣利得である。併し本能力それ自身は、處置の終りまで保存せられて行くのである。快くなつて行く毎にこれは小さくなる。併しこの本能力それ自身としては、病氣を取除く力はないのである。そこには二重に缺けたものがある。――この本能力は、何れの道を辿ればこの終りに達するかを知らない。また抵抗に對して必要なだけのエネルギー量を出さない。これ等二つの缺けたものゝあるために、分析處置の助力が必要になる。轉嫁のために備へてあるエネルギーを動かして來ることに依つて、分析的處置は、抵抗の克服のために要求せられるだけの感情量を工面する。適當な時期を見はからつて患者に知らせることに依つて、分析は患者がこのエネルギーを如何なる道をとつて導くべきかを示すのである。轉嫁は甚だ屢々病苦の徵候のみを取除く事が出來るが、併し轉嫁がそれ自身で固まつて了ふ限りは、それも一時的の事となる。そのやうなのは暗示的處置であつて、決して分析的處置ではない。分析的處置の名に

價するためには、轉嫁がその力を抵抗の克服に利用するやうでなければならない。その時に始めて病氣であることが不可能となる。また轉嫁が再び解かれた時（それが結局、轉嫁の望むところであるが）にもやはり不可能となる。

處置の進む内になほ他の必要な契機が呼醒まされる。即ち、患者の知的興味及び理解である。併しこの契機は、これと互に爭ふ他の力に對しては殆ど問題にならない。抵抗に依つて判斷を曇らされる結果、そこには不斷に價値失墜の脅かしがある。かくて新しい力の源泉として殘るのは轉嫁と（知らせることに依つての）理解力とである。これ等二つを患者は分析者に負ふてゐる。併し患者が理解力を用ふるのは、彼が轉嫁によつてその氣になる限りに於いてゞある。それ故に强い轉嫁が生じて來るまで、最初の報告を見合はせておかなければならない。さうしてなほ附加へて云ふならば、一切のその後の報告は、順々に生じ來る轉嫁的抵抗に依る轉嫁の障害が取除かれるまで、見合せておかなければならない。

# 想起、反覆、並びに徹底操作

『國際精神分析醫雜誌』第二卷（一九一四年）に始めて發表。原名は „Erinnern, Wiederholen und Durcharbeiten."

（一）

精神分析技法が、その發祥以來如何に深刻精到な變化を閲し來たつたかと云ふことを常々考慮させておくことは、これを學ぶものに對して無用の事ではないと、私は思ふのである。ブロイヤーが洗ひ流し法を創始した頃には、症狀構成の契機となつてゐるものを直接的に打破し、次いでその立場に於ける心的過程を再經驗させる（その過程を意識的活動に依つて終熄せしめるために）やうに着々骨折ることであつた。當時に於いては、催眠狀態の助けを俟つて病的契機を想起せしめ且つ發散せしめるのみであつた。やがて催眠術を放棄することになつた後には、被分析者の自由聯想の中から彼が想起し得なかつたことを觀取しなければならないと云ふことが問題になつて來た。解釋の仕事に依つて、

また解釋の仕事の結果を患者に知らせることに依つて、抵抗を避けやうとしたのである。症狀構成の立場に依ること、それとは違つた、病氣の契機の背後にあるあれ等の立場に依ることは、やはり存續してゐる。發散はなくなつて、その代りに仕事の支出が現れてゐる。つまり、被分析者が例の根本法則に準據して、自分の自由聯想に對する批判の現れ來るのを克服しなければならない時に致さねばならなかつた仕事の支出が現れてゐる。最後にその結果として、今日の技法が生れ出たのである。この技法に於いては、醫者は或る一定の契機や問題に踴躇することを放棄し、被分析者の時々の心理の表面を研究することだけで滿足する。さうして解釋術に對して起り來る抵抗を認識し、患者をしてこれを意識せしめるために、本質的にはこの解釋術を利用するのである。そこで一つの新しい種類の仕事の區分が生ずる。——醫者は、患者には知られない抵抗を發見する。この抵抗に打克つことが出來るやうになると、患者は屢々一向骨を折らずに、忘れられてゐる立場や關係を話すやうになる。これ等技法の目的は、勿論、少しも變らない。記述的には、想起の實際を滿たすことであり、動的には抑壓的抵抗を克服することである。

併し我々とても固より、舊き催眠術的技法に大いに負ふところあるものではある。即ち、我々はこの舊き技法に依つて、分析の個々の心理的過程を分解し型見本的に示されたのである。たゞこの催眠

術的技法に依つてのみ勇氣を與へられて我々は、錯雜した心的立場を分析的治療に於いて作り出し、またこれを歴々洞察することが出來るやうになつたのである。

ところで、かの催眠術的處置に於いては、記憶想起は甚だ簡單に形成せられる。患者は現在の立場と嘗て混同するらしくもない昔の立場に立つて、その立場の心理的過程（常態的である限り）を報告する。さうして當時は無意識的過程であつたものを意識化することに依つて生じ得るものを附加へて報告するのである。

なほ私は、總ての分析者がその經驗として確信し得た二三の觀察を添へてこの說明を終らう。さまぐ\の印象、場面、經驗などを忘却するのは、つまり大抵の場合は、それ等を『閉め込む』ためである。患者がこの忘却に就いて語る時には、殆ど常に必ずかく附言することを怠らない。――それならば實はいつも知つてはゐたが、別にそれを考へなかつただけであると。彼は自分がその事を『忘れた』と認めることは出來るのだが、それが記憶から逸して以來一度も思ひ出さず、また思ひ出さうともしなかつたことを遺憾に思ふと云ふことが一再でない。併しそれを思ひ出さうとの憧憬は、殊に轉換ヒステリーの場合に於いては、滿たされる。『忘却』はも一つ念入りな制限を受けてゐる。その制限とはつまり、誰人にもある隱蔽記憶を尊重することである。多くの場合に於いて私は、かの周知の、我々

にとつては理論上非常に重要な、幼兒期健忘が、隱蔽記憶に依つて完全に判知されると云ふ感じがした。この隱蔽記憶の中には幼兒生活中の二三の本質的なもののみならず、一切の本質的なものが保有せられてゐる。分析に依つてそれをほぐし出すことが出來るのだと云ふことを人々は悟らねばならない。隱蔽記憶が忘れられたる幼兒時代を十分に代表するものであることは、宛も夢の顯在內容が夢の思想を代表するが如くである。

印象や體驗と對立する純粹に內的心理的過程として人々の分類するところの空想、關係過程、感情亢奮、聯關などは、忘却と想起とに關係させて特にこれを仔細に觀察しなければならない。その間に特に屢々起ることは、決して『忘れ』られる筈のないことが『想起』されることである。(何となればそれは如何なる時にも氣付かれた事はなく、また嘗て意識されなかつたからである。)それのみならずまた、心の動きにとつては、そのやうな『聯關』が嘗て意識されて後に忘れられたか、或は嘗て意識に齎された事がないかどうかと云ふ事は何れでもよいのである。患者は分析の間に爾々の事があつたと云ふ事について確信を得るやうになるが、それはそのやうな記憶想起とは無關係である。

殊に、强迫神經症の如き多種多樣な形式をとるものに於いては、忘却とは云へ大抵は、聯關がとれなくなつてゐるか、連絡を見損つてゐるか、或は記憶がバラ〳〵になつて想起されるやうになつてゐ

るかに過ぎないのである。

特に重大な種類の經驗（早期幼兒時代に關してその時には意識せられず、併しその後になつて理解し解釋し得るやうになつた經驗）に對しては、大抵はその記憶を想起することは出來ないものである。さう云ふ種類の經驗は、夢に依つてこれを認識することが出來る。さうして我々は神經症の機構の中の最も强烈な動機を知ることに依つて、この認識を信ぜざるを得なくされる。また、被分析者は自分の抵抗を克服した後には、記憶想起の感情（認識感情）が感ぜられないからとて、これ幸にこの種類の經驗を容認することを拒むやうなことはしないと、我々は確信し得る。この對象は常に益々多くの批判的注意を要すると共に、また多くの新しきもの、不思議なものを齎し示すのであるから、私はこの對象は特別な處置法を以て扱ふべきものであると考へてゐる。

（二）

このやうに幸にしてなだらかに濟んで行つた場合には、いざ新しい技法を用ゐる段になつても、殘つてゐるものはあまり多くない、否、何もないことさへ屢々である。併し、内には、その一部分だけ

が殘つてゐて（催眠術を掛けた時のやうに）後になつて始めてなくなるやうな場合の起ることもある。併し始めからこれとは違つた態度を示す場合もある。區別を明かにするために、最後者の方の型に依るならば、我々はかう云ふことが出來る。――被分析者は忘却せられたもの、抑壓せられたものに就いては何事をも想起せず、却つて行爲に出す。彼は想起として表はさず、行爲として表はす。彼は自分がそれを繰返してゐるとは勿論知らずして、それを繰返してゐる。

例へば――被分析者は兩親の權威に對して反抗的であり不信であつたことを想起するとは云はないで、寧ろ分析醫に對してさう云ふ態度を示す。彼は自分の幼兒時代の性研究に自分ながら手のつけやうのないほどに固執してゐることを想起しないで、却つて込入つた夢や自由聯想を澤山に呈示する。さうして自分は何事をも行り通すことが出來ない。結局龍頭蛇尾に終るのは自分の宿命であると嘆ずる。彼は或る性的活動を強く恥ぢ、且つそれの發見を怖れてゐるのだとは想起しないで、今や自分が受けてゐる處置を恥ぢ、これを總ての人々に秘密にしておかうとするものである。等々……。

何よりもまづ彼は治療をそのやうな繰返しを以て始める。いろ〳〵變化に富んだ生活史を持ち、長い病歷を經て來た患者に精神分析の根本規定を聽かせ、何でも自由聯想のまゝに喋舌るやうにと要求し、さうして彼は自分の事を流れる如く話し出すだらうと期待してゐると、一向何を云つてい〻のか

分らぬと云はれて呆れることが屢々ある。これは勿論一切の想起に對して抵抗となつてのさばり出る同性愛的態度の反覆に外ならない。彼が處置を受け續けてゐる限りは、このやうな反覆への强迫は已むを得ないのである。結局、我々はこれこそは彼の想起の仕方なのだと解するのである。

勿論我々は、この反覆强迫の轉嫁及び抵抗への關係に、興味を持つ。やがて、我々は氣付くのである、轉嫁はそれ自身に反覆の一部分であり、反覆は忘れられてゐる過去を醫者へ轉嫁したものであるばかりでなく、また現在の立場のあらゆる他の（醫者以外の）方面への轉嫁であるのだ、と。で、彼分析者は（今や想起への衝動の代りとなつてゐるところの）反覆强迫に從ふが、それは醫者に對する個人的關係に於いて從ふのみならず、また彼の生活のあらゆる他の同時的の活動及び諸關係（例へば患者が治療中に或る戀愛對象を擇ぶとか、或る課題を自分に課するとか、或る企てを立てるとか）に於いても從ふのだといふことを、我々は承知してゐなければならない。また抵抗の役割は、これを認識するに容易である。抵抗が大であればあるほど、愈々豐富に想起は行爲（反覆）に依つて代償せられるやうになる。忘却されてゐるものを理想的に想起することは、抵抗が如何なる程度まで完全に取除かれてゐるかに由る。治療が溫和な、甚だしく積極的な轉嫁の庇護の下に始められるならば、催眠術を以てする如く、記憶想起の中に深く侵入することがまづ許される。その侵入の間には、病氣の徵

候も沈默を守つてゐる。併し、更らに進んでこの轉嫁が敵對的となり、或はあまりに強くなると、それ故にまた抑壓の必要があると、卽ち記憶想起は行爲にその席を讓る。その時以來、卽ち、さまざまの抵抗があつてそれに相當する一聯の反覆が決定せられるやうになる。患者は過去の武庫の中から武器を取出し、それを執つて彼は治療の繼續から已れを防ぐのである。で、我々はその武器を一つ一つ奪ひとらねばならない。

今や我々は、被分析者が記憶を想起する代りに反覆するのだと云ふことを知つた。そこで我々は尋ねなければならない、何を一體、被分析者は反覆もしくは行爲してゐるのであるかと。それに對する答へはかうである。――彼は自分の抑壓してゐるものゝ源泉から出て既に明かに彼の本質をなしてゐるところの總てを、卽ち彼の禁制、彼の活動出來ない心持、彼の病理的な性格特徵を反覆するのである。實際、彼はまたその處置中に自分の一切の徵候（症狀）を反覆する。そこで今や我々は、反覆強迫を指摘することに依つて何等新しい事實を知つたものではなく、たゞ一層統一的な見方を知つたに過ぎないことを氣付くのである。我々はただ、被分析者の病狀が彼の分析を始めると共に中絕し得るものではなく、我々が彼の病氣を一つの歷史的機會としてゞなく、寧ろ一つの實際的な力として處置すべきものである事を知るだけである。一部分づゝこの病狀は水平線下に、治療の効果領域内に押遣られ

患者がその病狀を現實的なもの、實地的なものとして體驗してゐる間に、我々はこれに對して治療の操作を加へるのである。その操作とは、大抵は、過去に溯ることに存するのだ。

催眠術に於いて記憶を想起せしめることは、實驗室に於いて一つの實驗をなす如き感じがせざるを得ない。一層新しい技法に依つて分析處置中に反覆させることは、現實生活の一部を呼起すことで、從つてあらゆる場合に無難であり心配はないとは云ひ去れない。『治療中に惡くなる』ことは避け難い場合も屢々あるが、この問題の全部がこゝでまた考へ合せられねばならない。

とりわけ、患者が病氣に對する意識的態度を變更すると云ふことが、既に處置の始めに起ることである。患者は普通に、自分の病氣を卽ち、ナンセンスだと蔑視し、その意義を見縊つて滿足してゐるが、併し普通でない場合には抑壓的の態度（彼が病氣の起源に對して用ゐたフォーゲル・シトラウス政策）を病氣の顯現に就いて續けて來たのである。そこで患者は自分の恐怖病が如何なる條件に基いてゐるかを普通には知つてゐず、自分の强迫觀念を正しく言葉に云つて聽かせても耳を借さず、卽ち自分の强迫衝動の本來の意圖を正しく摑んでゐないと云ふやうなことになるわけである。そんなことでは勿論治療の必要であることをも悟らない。さう云ふ患者には、自分の病氣の有樣に注意をさし向けるだけの勇氣を持たせなければならない。病氣それ自身が、彼によつてはもう輕蔑すべきものでなく

なることが必要である。自分自身の一部分でありながら、侮り難き反對者であり、而も自分の後半生にとつて價値あるものが得られるか得られないかもそれに懸つてゐる如き大事なものであることが分らなければ駄目である。徵候となつて現れ出て來る被抑壓物との調停がこのやうに始めに準備せられるが、併し病狀に對する多少の我慢と云ふこともそこに這入つて來るであらう。ところが病氣に對してこのやうに態度を革めると、葛藤は激しくなり、以前にはあまり判然しなかつた徵候が愈々顯著になつて來るであらうが、併しさう云ふ場合にはかう云つて患者を容易になだめてやることが出來る。——これはどうしても已むを得ない狀態だが、併しほんの通り魔の如き惡化である、何しろ敵を殺すにはまづこれを近くへおびき寄せなければ仕方がない……と。併しかう云ふ事情は抵抗の方からすれば、これを利用するに丁度好都合であるから、病氣であることの許しを誤用せんとするのである。その時、抵抗は宣言するやうに思はれる。——見てゐ給へ、俺が實際にこれに關係したらどんなことになるかを——。俺がそれを抑壓させておいたのは、やはり正しかつたのではないかと。殊に幼少年者は、治療中には寧ろ病狀を強く示すことが必要だとなると、それを利用して、病氣の徵候に耽溺するやうになるのが常である。

更にこれ以上の危險の起るのは、治療を續けてゐる內に、また新たな、一層深いところにあつて今

まで出て來なかつた本能感情が、反覆となつて出て來ることがある場合である。最後にまたかう云ふ危險もある、卽ち患者の行動に轉嫁以外の一時的の生活障害が伴つたり、或はこの行動をとれば、やがて到達すべき健康を永い間には無價値ならしめようとて、この行動をとるやうなこともあり得る。

このやうな立場に於いては、醫者として多少の術策は執らねばならぬが、それは當然であらう。醫者として執るべき方法には、古い行り方に依る記憶想起、卽ち心理的領域內での再經驗がある。この再經驗は、新しい技法に於いては到達すべからざるものと分つてゐる場合にも、醫者はこれに固執するのだ。醫者は、患者の一切の衝動を――患者が言語動作として導き出したいと思つてゐるところの衝動を――心理的領域內に追込んでおくための不斷の鬪爭に入るのである。さうして、患者が行動として發現させたがつてゐる或るものを記憶想起的操作に依つて發起させることに成功したならば、その時こそは治療が凱歌を奏する時である。轉嫁に依る結び付きが何とか利用し得べきやうな結び付きであるならば、處置に於いてこれを利用して患者のあらゆる重要な反覆行動を阻止し、その行動への意志を、意志がまだ單なる意志に止まつてゐる內に、治療的操作の材料として轉用せんとするのである。患者がその衝動を發現させるための障害を患者のために防いでやるには、醫者は患者をして、治療の續いてゐる間は一切の生活的重要事、例へば職業に當らしめないやう、確定的な愛情對象を擇ば

しめないやう、寧ろこれ等一切の意圖のために恢復の時期を待つやうにさせるのが、最もいゝ方法である。

から云ふ計畫を立てゝこれが患者の個人的不自由にならないならば、醫者として甚だ好都合であるが、併し大して重要性のない（時には馬鹿げた）事ならば、續けてやらせておいても差支へないのである。つまり人間と云ふ奴は元來、何か自分で損だとつく〴〵痛感した時に始めて悧巧になるものだと云ふ點を忘れないで、これを利用するのだ。また分析醫が處置中に、全然不適當な企てに這入つて行かなければならないやうな場合もあるやうだ。さうしてそれ等の場合が、後になつて漸くほぐれて來て、分析的の影響を受容れることが出來るやうになる。時々はまた分析醫にも、本能が强すぎてこれに轉嫁の手綱を締める暇のないやうな場合、或は患者を處置につないでゐる紐を、反覆行爲に依つて斷切るやうな場合も、どうしてもある。私は極端な實例として或る老婦人の場合を引證することが出來る。彼女は朦朧たる意識狀態に於いて彼女の夫の家を出で、何處へともなく逃げて行くのだが、この『家出』の動機は一つも意識されない。彼女は始めて私の處置を受ける時に非常に躾けのよい、柔しい轉嫁を示し、最初の日に氣味の惡いほどの速度を以てこの轉嫁を進めて行つた。然るに一週間の後には、私の許からも『家出』して行つた。つまり、私が彼女のこの反覆を阻止し得るやうな何事

かを語ることが出來る暇を持つ前に、行つてしまつたのである。

併し患者の反覆强迫を制御し、これを記憶想起への動機に轉用するための主要なる手段は、轉嫁を利用することとである。我々は反覆强迫のためにその正義を認めてやり、これを或る一定の領域内で働かしておく事に依つて、我々はこれを弊害のないものにし、否、寧ろ利用するのである。我々は反覆强迫のために、その完全に自由な遊戯場として、また被分析者の精神生活中の病的本能に現れてゐる一切を我々に吐き出させるための息拔場として、轉嫁を許しておくのである。患者が分析處置の存在條件を尊敬するほど、その態度を甚だしくこちらに向けて來たならば、一切の病的徵候に轉嫁的意義を與へ、その普通の神經症に代ふるに轉嫁神經症を以てすることは、常に必ず成功するのである。但しこの轉嫁神經症からは治療操作に依つて癒すことが出來るのである。で、轉嫁は病氣と健康との間の中間領域をなしてをり、これを通じてのみ病氣から健康へと移行することが出來るのである。この新たな狀態は一切の病的特徵を受繼いではゐるが、併しこの狀態に於いて現はれてゐる人爲的病氣は總て我々の力でどうにかなるものである。この狀態は同時に現實的經驗の一部分であるが、併し特に好都合な條件に依つて可能となり、また暫定的狀態としての性質を帶びてゐる。轉嫁の內に現れる反覆行爲からして、やがて誰しもが知つてゐる記憶覺醒への道が通ずる。記憶は抵抗が克服されゝば苦

もなく覺醒して來るのである。

（三）

私はこゝらで筆を擱いてもよいのであるが、この論を大觀して見て、なほ一言、更に右以上、分析技法に就いて述べておくべき義務があるやうに思ふ。抵抗の克服を始めるには、明かに次の如くすべきである。卽ち、被分析者には決して認識出來ない抵抗を醫者が發見してやつて、これを患者に知らせてやるのである。ところが分析の初步者には、この手始めの仕事を仕事の全體だと考へる傾きがあるやうである。私は屢々醫師から、患者にその抵抗を知らせてやつたが、やはり一向變りがない、寧ろ抵抗は愈々強くなり、どうしたらいゝのかまるで見當がつかなくなつたが、敎へて貰ひたいと云つて相談を受けることがある。治療は行詰つたやうな感じがする。併しかう云ふ悲觀的な期待はやがて常に誤りであることが分つて來る。治癒は大抵の場合は最もよく進展してゐるのである。抵抗を指摘しさへすればその後直ちにそれが熄んで了ふわけでないといふことを、醫者の方で忘れてゐたゞけだ醫者は患者の抵抗に逆らひつゝ分析的根本法則に依つて操作を續けることに依つて、彼のために相當

の時間をかけねばならない。彼自身にまだ十分に分つてゐない抵抗を深く知悉させなくてはならぬ。抵抗を徹底操作（durcharbeiten）し、克服しなくてはならない。さう云ふ徹底操作の高頂に於いて始めて、醫師は被分析者と共同して、抑壓されてゐる本能感情を發見するものである。抵抗はこの抑壓されてゐる本能感情に支持されてゐるのであつて、その感情の存在と力とを患者はそのやうな操作の經驗に依つて確信するのである。その間に醫者として爲すべき事は、たゞ期の滿つるまで待つてゐることである。期の滿つることは避けることは出來ないが、また促すことも出來ない。これだけの洞察を確實に持つてゐると、醫者は自分が正しい方向に處置を進めてをりながら行詰つたのではないかしらと云ふやうな誤認を屢々避けることが出來よう。

このやうな徹底操作は、分析實施に於いて、被分析者に對して甚だむつかしい仕事となり、また醫者にとつては忍耐試験となるであらう。併しこの部分の操作こそは、患者を改變せしめる最大の影響力を有するものであると共に、また分析的處置が暗示的處置と異る所以でもある。理論上ではこれを抑壓に依つて閉込められてゐる感情の總量の『發散』Abreagieren に比較することも出來る。この發散と云ふことがないから、催眠術的處置は無力に終つたのだ。

# 醫者に對する婦人患者の轉嫁愛に就いて

『國際分析醫雜誌』第三卷(一九一五年)に始めて發表。原名は Bemerkungen über die Übertragungsliebe.

精神分析の總ての初步者が恐らく始めに困らせられる難事は、患者の自由聯想の解釋と、被抑壓物を再現せしめる仕事とにあるであらう。併し、これ等の難事はやがて大したことではなくなり、却つて唯一の眞の重大な困難は、轉嫁を如何に使用すべきかと云ふ事であると分つて來る。

かゝる場合には種々な立場を生ずるのであるが、その內唯一つだけ、細かく書きとめておいた立場を取上げて見ようと思ふ。それは、かゝる立場が甚だ屢々起り且つ現實的に重要であるためばかりでなく、また理論上でも興味があるからである。私の云ふのは、つまり或る婦人患者が、死んだ或る他の女の如く、自分を分析してゐる醫者を愛すると、疑ふべからざる暗示的な言葉で洩すか、或は直接的に明言するか、の場合である。から云ふ女の心持には苦しげな滑稽な方面もあるが、また眞劍な方面もあるのだ。それはまた甚だ込入つてをり、多方面的に條件付けられてをり、非常に不可抗的であり、また甚だ解決が困難で、それを論究することは分析技法上の永い間の緊急要項となつてゐるので

ある。併し我々とても、他人の失敗は非難するが、自分の方でも全然間違はないとは限らないから、この任務を果すために、これまで急がなかつたのである。またしても我々はこの點に於いて、醫者としての分別上の責任を感ずるのであつたが、併しこの分別は實生活に於いてこそ缺くべからざるものであるが、併し我々の學問上では大して必要と云ふわけではない。精神分析學の文獻がまた現實生活にも屬するものである限り、かくの如きは一つの解決すべからざる矛盾點である。私は近頃、この分別に就いて或るところでかう論じておいた、患者の醫者に對する轉嫁愛のために、精神分析的治療の發達はその最初の十年間を遲延せしめられたと。(一)

註(一)『精神分析運動史』(一九一四年)參照。――譯者曰、本全集第十卷參照。

十分に教養はある(が、精神分析には專門的知識のない)人――かくの如きは、精神分析に對しては、恐らく最も理想的な文化人――にとつては、戀愛問題は他のあらゆる問題とは、同日に論ずべからざるものである。戀愛問題は、云はゞ特別の頁に書いてあつて、そこには他の記事は載せてない。で、婦人患者が醫者に戀した場合には、そこに二つの歸結しかないとさう云ふ人は考へるであらう。即ち極端な場合として、總ての事情が二人の合法的に持續的に結付くことを許す場合と、もつと屢々ある場合として、醫者と患者とが物別れになり、折角恢復するやうになるべき筈の操作を始めてをり

ながら、何か已むを得ない事でも起きたかのやうに、それをやめてしまふ場合である。慥にまた治療の繼續と撞着しないやうに思はれる第三の歸結も考へられる。卽ち、非法的に、一時的に戀愛關係を結ぶことであるが、併しこれは市民道德並びに醫師の品位に關することであるから出來ない。そこで更に、精神分析に深い理解のない人は訊くであらう、かう云ふ第三の歸結に入るやうなことは決してないと云ふことを分析者から出來るだけ判然と保證して貰ひたいと。

精神分析者の立場は、全然別なところにあらねばならぬことは固より明かである。

第二歸結の場合はどうかと云ふに、これは我々も云ふ通り、婦人患者が醫者に惚れ込んで後に、兩人が物別れになり、治療もやめになる場合である。併し婦人患者はかうなつても、やがてまた別の醫者に依つて第二の分析的試みを受ける事が必要になつて來る。併し今度も婦人患者はまたこの第二の醫者に惚込みを感じ、さうしてよしんばこれからまた離れて、新しく始め直しても、やはり第三の醫者に惚込むやうになる。このやうなのはどうしても逢着しなければならない事實で、明かに精神分析的理論の根本の一つである。この事實は、一方分析醫に利用さるべき價値ある事實であると共に、他方分析を必要とする婦人患者にも好都合な事實である。

醫者にとつては、この事實は、彼がとかく陷らうとする逆轉嫁を明かに見せてくれる、價値ある警

告であることを意味してゐる。婦人患者の惚込みは分析上の立場に依つて必然的にさうなつてゐるのであつて、彼の人物が優れてゐるからと云ふわけではないのである、從つてそのやうに『男を上げた』(と分析者以外は、さう云ふ場合に普通に云ふけれども)からとて別に威張る理由は少しもないんだと云ふ事を、自分で認識しなければならない。で、その點に就いて自ら愼んでゐるのは、常にいゝことである。併し婦人患者にとつては、どちらに轉んでも損は行かないのである。――精神分析處置を廢めにすることが出來るか、或は醫者への惚込みを不可避の運命として容認することが出來るか、何れかである。(一)

註(一) 轉嫁がこれほどでなく、もつと感傷的ならぬ感情で現れる場合もあると云ふことは、分つてをるが、併しこの論文中では扱ふべき限りでない。

婦人患者の身近の者等が、右の二つの起り易い場合の第一の方を十分に呑込んでくれること、宛も分析醫が第二の方を呑込んでくれる如くであらうことを、私は信じて疑はない。併し、困るのは、かう云ふ場合には、近親者の感傷的――或は寧ろ自己本位的に嫉妬深い――心配に決定を任せてはおけないことである。たゞ患者の興味のみが、決定を與へるべきである。近親者の愛情は、併し、神經症を少しも治癒するものではない。精神分析醫は自分を押付けるには及ばないが、併し或る種の操作に

は自分でなければ駄目だと云ふ事は云つてもよい。近親者として、トルストイがこの問題に對しての立場を自分の立場とする者は誰しも、自分の妻や娘を自分のものとして失はないでおくことが出來るし、また妻や娘が神經症を、並びにその神經症と結び付いてゐるその戀愛能力障害の存續を堪え忍ばうとするに違ひない。これは結局、婦人科の處置の場合と同じである。嫉妬深い父や夫が、その娘や妻の神經症を直すために分析處置以外の處置を受けさせたら、醫者への惚込みがなくなるだらうと考へるならば、それはやはり大間違ひである。その間の相違とはたゞ、そのやうな惚込み――彼女等は何れ惚込むにきまつてゐるのだ――がいつまでも曖昧で分析せられないまゝになつてゐるだけで、それだけのリビドー量を分析を以てすれば恢復に導くことが出來るが、婦人科の方などではそれが出來ないと云ふだけであるやうだ。

聞くところに依ると、分析を行ふ醫者の内には、患者が戀愛轉嫁を起すやうに仕向け、或は寧ろ、たゞ醫者に惚込んでくれさへすれば分析は進捗すると云つたやうな註文を出すものがあると云ふことであるが、これほど馬鹿げた技法は一寸考へられない。それでは、分析が自發を特徴とするものであるのに、さうでないかのやうに見えて來るし、また分析者自身が除くに困難な障碍をわざ〳〵設けることになるのである。

始めの程はどうしても、轉嫁としての惚込みの中から治療を促進する何物かゞ生じて來ようとは思はれない。これまでは最も素直であつた婦人患者も、忽ち處置に對する理解と興味とを失ひ、自分の戀愛に就いて以前の事は話さうともしないし聽かうともしない。さうして自分の戀愛の話を尋ねてくれと要求する。彼女は自分の症狀を示さなくなるか、或はこれを等閑視し、遂に自分は健康であると云ひ出す。場面が忽ち變轉するのである。例へば、遊戲の中へ突然現實が飛込んで來て、遊戲がやめになるやうに——。また芝居の最中に火災の警鐘が亂打された時のやうに——。醫者として始めてこのやうな經驗をしたものは、依然、分析者としての立場を確保し、處置は事實上終りになつたと誤想しないことは、なかなか容易でない。

少し考へて、やがてハハアと氣がつく。就中、人々はかう云ふ疑ひを起す、治療の繼續を障害する一切は一つの抵抗の表はれであるかも知れないと。あらしのやうに戀愛の要求が起きて來ることには疑ひもなく抵抗が大いに與つてゐるのだ。分析者は婦人患者に於いて感傷的轉嫁の徵象を旣に久しく認めてゐたのだ。さうして彼女の素直であること、分析の說明を根掘り葉掘り聽くこと、それを聽いた時に示す彼女の著しい理解力、高き知性などは、彼女が醫者に對してそのやうな轉嫁的態度を持してゐるがためであると考へざるを得なかつたのである。然るに今や總ては一掃された如くになり、患

者は全然洞察力がなくなり、その惚込みの中に沒頭するものゝ如くである。かゝる變化は或る時に、即ち、彼女の生活史の中で特に著しい、骨折つて抑壓してゐる部分を告白し、或は想起しなければならなくさせた時期に、常に必ず擡頭する。このやうに、惚込みは旣に久しく存在してゐたのだが、併し今や抵抗がこの惚込みを利用して、治療を妨げ、一切の興味を操作から離反させ、分析醫をして手のつけやうのないやうにさせてゐるのである。

なほ仔細に調べて見ると、かゝる事情の中には錯雜ならしめんとする動機も認められるのである。一部分は惚込みの中に這入るべき動機であり、他の部分は併し、抵抗の特殊な顯現である。前者としては婦人患者が自分の不可抗力を確め、醫者を情人に引下げることに依つてその權威を打破し、その他戀愛滿足の副的利得を持たうとすることであるが、抵抗に就いては人々はから推定することが許されるだらう。即ち、抵抗は時々戀愛の打明けを手段として利用し、緊張してゐる分析者を試驗して見るのである。實際、腰のふらついてゐる分析者はさういふ誘惑を待つてゐるかも知れないのである。就中併し、抵抗は原動力となつて惚込みを强め、觸るれば落ちん風情を誇張するのである。かくして病氣は手のつけやうがないと云ふ危險を引證して、抑壓の效果を愈々確實に保持しようとするのである。總てこれ等の附隨作用は、より純粹な場合にはそれだけが遊離して殘ることもあるが、これをアルフ

レッド・アードラーがかゝる過程の本質をなすものであると認めてゐることは人々の知る如くである。

併し、かゝる狀態に坐礁して了はないやうにするには、分析者は如何なる態度をとればよいか。かかる戀愛轉嫁があるに拘らず、またこの戀愛轉嫁を通し、これを乘越えて、治療を繼續すべきだといふ目安が立つてゐる場合に、分析者は如何なる態度に出でなければならないか。

このやうな場合には、一般に妥當する道德を强調して、分析者は決して〲さう云ふ据膳に箸をつけるどころか、それに向つてさへならないと、要請する位の事は私にも容易である。それどころか、寧ろ分析者は惚れ込んで來てゐる女の前に道德的要求と放棄の必要とを代表して立ち、彼女の憧憬を善導し、彼女の自我に於ける動物的の部分を克服することに依つて分析的操作を續行するの契機が到來したものと考へなければならないと云ふべきであらう。

併し私はこれ等の期待を果さないのである。第一の期待のみならず、第二の期待をも果さないのである。何故に第一のを果さないのかと云ふに、それは私が顧客や患家のために書いてゐるのではなく重大な困難と戰はねばならない醫者のために書いてゐるのだからである。なほその上に私はかゝる場合には、道德の掟を彼等の本來の目的の內に、つまり如何にして病氣を癒すべきかと云ふことの內に歸することが出來ないからである。要するに私はかゝる場合には、道德を押付ける代りに分析技法を

顧慮せしめてをれば、結果に於いては變りがないと云ふ、誠に好都合な立場にあるわけである。

併し、提示せられた期待の第二の部分の方に對しては、私はなほさら決然と拒否するであらう。婦人患者がその戀愛轉嫁を告白するや否や、本能を抑壓させ、放棄させ、或は昇華させるやうにすることとは、分析處置ではなくて、ナンセンス的處置である。これではまるで魔術師が折角苦心の妖術に依つて靈を下界から呼上げておきながら、何も尋ねないでそのまゝ元の下界へ追返すやうなものである。また實はそれでは、抑壓されてゐるものが意識にまで呼出され、驚いて再抑壓されるだけであらう。戀愛の情熱さう云ふ生眞面目な態度で立向つたからとて、結果が必ずよいとは限つたものではない。婦人患者はたゞ侮辱に對しては、唯でも知る通り、そんなに壯嚴な話し方で向ふものではない。婦人患者はたゞ侮辱に對しては復讐をしてやらうと考へるであらう。

そこで中間の道をとつて、婦人患者の感傷的感情を受付けるが、この感傷性の一切の肉體的活動を避けて、遂にこの態度を最も安全な軌道に導き、更に高き段階へと擧げて行くことにしてはと云ふ說が出て來る。これは特に悧巧な方法のやうに思はれるが、私はやはり贊成出來ない。私はかう云ふ方便的な遣り方には、精神分析的處置が眞實の上に立つてゐるものであるからと云ふ理由で反對する。眞實の上に立つてゐると云ふ點が、分析處置法の敎育的効果、並びに倫理的價値の大部分である。こ

の根本を離れるのは、危險である。分析的技法に深い經驗のある者ならば誰しも、嘘や體裁のいゝやうな事（大抵の醫者にはそれは已むを得ないことだが）は決して云はないし、また最もよき意圖の下にそれを試みた場合でも、それを洩してしまふのが常である。分析者は患者に對しては眞實を語るやうにと最も嚴格に云ひ渡すのであるから、自分の方からその眞實を離れるやうな事をしたならば、折角の自分の權威を臺なしにして了ふものである。それにまた、婦人患者の感傷愛の中に浸つて行かうとの試みは、全然危險がないとは云へない。人間は自分が計畫したところまで行つて、そこで急に立止らうと思つても、そんなにうまく自分が支配出來るものではない。だから私の考へでは、分析者は逆轉嫁を抑制することに依つて心持の平靜、冷淡を得たならば、それを伴らないやうにしてよいのである。

私はまた旣に、分析的技法上から分析醫たちに、婦人患者の戀愛要求を滿させないやうにと云ふ意味の事を云つておいたことがある。治療は節慾の內に進められなければならない。と云ふのは、肉體上の節慾ばかりではない。併し人間としての一切の慾望を節せよと云ふのでもない。そんなことは恐らく如何なる患者も堪え得ないであらう。寧ろ私は根本法則として、かゝる要求や憧憬を、仕事や變化の方へと驅立てる力として患者に於いて存せしめ、これを代償によつて滿足せしめ鎭撫することは

愼まなくてはならないと云ひたいのである。實際、代償以外の何物をも、人々は患者に供することは出來ないであらう。何故ならば、患者は、彼等の病狀の結果として、また彼等の抑壓が十分に取除かれない限りは、非代償的（實際の）滿足は不能だからである。

分析的治療は節慾の內に行はれねばならないとの根本法則は、こゝに論じた個々の場合以外にも擴充せられねばならぬし、また更に立入つた論究（依つて以てその擴充の限界が指定せらるべき論究）が必要であると云ふことを我々は告白しておかう。我々はその事をこゝでするのは避けたいと思ふ。で、我々は自分等が出發點とした立場を、出來るだけ狹く固守してゐようと思ふ。醫者がこの立場を守らず、婦人患者の戀愛の相手になつたり、その感傷慾を滿したりするに就いて、兩方に與へられてゐる自由を利用したりしたならば、どんな事が起るであらうか。

かゝる場合に醫者として、さう云ふ風にする方が婦人患者を確實に支配出來、治療の任を果すことの出來るやうに彼女を動かすことが出來、かくて彼女を神經症から永久に救ふことが出來るとの思惑がもしあるならば、やがてその思惑は誤算であつたことを經驗が示すであらう。婦人患者の方は目的を達するであらうが、醫者の方は決して自分の目的を達しない。これは牧師と保險勸誘員との間の面白い話を、醫者と婦人患者との間に移して演じ直してゐるやうなものだ。無信仰の保險勸誘員が重病

に罹つたので近親の者等が敬虔な牧師に來て貰つて、今はの際に善心に立歸らせようとした。二人の話は相當長びいてゐるので、これはどうやらうまく行きさうだと室外に待つてゐる者等は思つてゐた。遂に病室の扉は開いて、不信者は善心に立歸りはしなかつたが、牧師の方は保險に這入つて歸つて行つた。

婦人患者としては自分の求愛が受容られ、治療がすつかり駄目になつて了つたならば、大きな勝利であらう。彼女はたゞ想起し、心理材料として再生産し、心理的領域に於いて保留しおくべき筈の或る事を、行動せんとする（總て患者は分析に於いてさう仕様と努めるのである）に、生活に於いて反覆せんとするに成功したわけになるのである。(一) 彼女は戀愛關係のその後の經過に於いて、その戀愛生活の一切の禁制、並びに病理的反應を露出させ、而もそれ等を是正することは不可能であつて、遂にこの苦痛な體驗を後悔しつゝ、その抑壓傾向を愈々強めつゝ、おしまひになるであらう。戀愛關係が生じては、分析的處置に依る影響力も齒が立たなくなつてしまふ。兩方が一になつてしまつては、處置は論外となる。

註(一) 前論文『想起……』を參照。

婦人患者の戀愛願望を受容れることは、このやうに、それを抑制することゝ同樣に、分析には關係

するところ多大である。分析者の方法はこれ等とは違ふ。現實生活にはその典型を見出し得ざる如きさう云ふ方法である。彼等は戀愛轉嫁を徒らに回避したり、彈ね返したり、患者を恥づかしめたりしないやうにする。と共にまた、それを受容れることもしない。彼等は戀愛轉嫁をそつとしておく。併しこれを現實的ならぬものとして、治療中に何とか片をつけるべき立場として、その無意識の起源にさかのぼり、患者の戀愛生活の最も匿れたるものを意識にまで導き出して、それと共にこれを支配し得るやうにしてやるべき立場として、處置するのである。分析者があらゆる誘惑に對して不死身であると云ふことを感ぜしめればしめるほど、愈々夙く、患者の態度の中から分析的内容を引出すことが出來る。婦人患者の性抑壓はなほ止揚されてをらず、たゞ背景に押込められてゐるのであるから、彼女は一切の戀愛條件、彼女の戀愛憧憬の一切の空想、彼女の惚込みの一切の特徴を表に出しても十分に大丈夫だと感ずるやうになるであらう。さうしてこれからしてやがて、彼女の戀愛の幼兒的條件への道さへもが開けて來るのである。

或る部類の女に於いては、戀愛轉嫁に滿足を與へないで、これを分析的操作のために保持しておかうとの試みが、どうしても成功しないことがある。それは原素的(エレメンタール)（幼兒的）な情熱を持つてゐて、代償することの出來ない自然兒で、彼女等は實質的なものに代へるに心理的なものを以てして象徴的に

満足することの出來ない女で、彼女等には、詩人の言葉を以てすれば、たゞ『團子的說明入りの肉汁的論理』だけしか近付き得ないのである。かゝる人物に對しては、分析者はたゞ、逆轉嫁的戀愛を示すべきか、或は恥ぢをかゝせられた女の全身的の憎惡を引受けるべきか、これ等二つの内一つを擇ばねばならぬ。かゝる場合の何れに於いても、人々は治療の興味を知覺することは出來ない。空しく手を引くより外はない。さうしてたゞ、このやうに神經症になる者にどうしてこのやうな猛烈な戀愛慾が存してゐるのかとの問題を考究することが出來るばかりである。

惚込みがこれほど頑强でない他種の婦人患者を漸次に分析的考への方へ導いて來るには如何にすべきか、それは多くの分析者にまで同じやうな方途で呑込めて來る。分析者は就中、この『戀愛』に於いて明かに『抵抗』が這入り込んでゐることを認めると强調する。實際に惚込んでゐる場合には、婦人患者は素直になつてゐて、自分の場合の諸問題を、解決しようとの用意の念は高まつてゐるであらう。何故ならば、それはたゞ愛する人を要求してゐるからである。さう云ふ婦人患者は喜んで治療完成の道を辿つて行く。それは醫者に自分の價値を認めて貰ひたいためであり、また戀愛傾向が存する以上は、當然それだけの現實性がなければならないからである。然るに婦人患者はそれとは違つて剛情で我儘である。處置への一切の興味を自分でかなぐり捨て、また醫者の深い根據のある信念に對し

て何等の尊敬を拂はない。かくて彼女は惚込みの外形の下に抵抗を示し、それのみならず、醫者を所謂『板狹み』の苦境に陷れて、別に氣の毒だとも何とも思はない。何故ならば、醫者の方で拒否すると（醫者としてそれは責任でもあり理性でもある）今や彼女は侮辱されたものとして振舞ふことが出來、やがて憤怒と復讐とからして彼に依る治療から免れることが出來る。併し只今は偽りの惚込みの結果として、免れることが出來てゐるのである。

この戀愛が眞實でないことの第二の論據として、我々は次の事を主張し得る。卽ち、この戀愛は現在の立場から生じて來た、唯一の、新しい特徵を具へてはゐず、以前の、また幼兒時代の反應の反覆や復寫の寄せ集めに過ぎない。分析者は、婦人患者の戀愛態度を仔細に分析して、これを證明することはわけはないのである。

これ等の論議に加ふるに、なほ必要なだけの忍耐を以てするならば、この困難な立場を克服し、少くともこの惚込みを減ずるか、或は轉落させるかして、この操作を繼續することが大抵は出來るのである。さうしてやがてこの操作の目的たる、幼兒的對象選擇又はそれにからんだ空想を發見することが出來るのである。併し私は右に述べて來た議論を批評的に解明して、次の質問を提示したいと思ふ──我々はこれ等の說を以て婦人患者に眞實を語つたか、或は我々の已むを得ざる位置として胡麻化

して逃げを張つたのであるかと。換言して見れば、分析的治療中に顯現する惚込みは、本當に少しも現實的でないと云ひ得られるかと。

私は婦人患者に本當のことを云つたつもりであるが、併し結果を顧慮せずして全部本當の事を云つて了つたのではない。我々の二つの說の內では、第一の方が力强い。轉嫁戀愛の一部分が抵抗であることは、議論の餘地はないし、また甚だ觀察し易い。併し抵抗だけでこの戀愛は生じはしない。戀愛の生じるのを見て、抵抗がこれを利用し、その現はれを誇張するのである。この現象が眞實であることはまた、抵抗に依つてその力を剝がれないことに依つても見られる。我々の第二の說は、遙に力弱い。この惚込みは古き特徵の復活から成立ち、幼兒的反應の反覆であることは、眞實である。併しこれは一切の惚込みの本質的特徵である。幼兒的原型の反覆に非ざる惚込みなどは、あり得ない。强迫的で、病理的にさへならうとするその特質が何から來るかと云へば、それはその幼兒的條件からである。轉嫁戀愛は、生活に起る、常態的と名付けらるべき戀愛よりは、自由の程度が少いやうである。幼兒的原型に依憑するものであることが、如何にも判然と認識される。これを撓め改めることが容易でない。併しまたそれが總てゞあつて、その本質ではない。

では普通の戀愛の眞實さは、如何なる點に認むべきか。それの實行能力にか、それの目的貫徹力に

か、この點に於いては、轉嫁戀愛としても他の戀愛と比して、敢へて劣らないやうである。轉嫁愛を俟つて始めて總てが可能だと云ふ感じが、人々にはするのである。

そこで我々はかう約言する。——分析的處置中に擡頭して來る惚込みには、『眞實の』戀愛の特質はないとは、云ひ去れないと。轉嫁戀愛は常態的とは思へないと云ふ人があるかも知れないが、そんなことを云へば、分析的治療中以外に現れる普通の惚込みとても、常態的神經現象と云ふよりは變態的神經現象と云はるべき節が多いではないか。ところが更に、轉嫁戀愛には二三の特徴があるので、それに依つて轉嫁戀愛の何たるかゞ明かになる。轉嫁戀愛は(一)分析と云ふ立場に依つて誘發される。(二)この立場を支配してゐる抵抗に依つて非常に高められる。また(三)この戀愛には現實への顧慮が甚だしい程度に缺如し、その結果に對する分別と顧慮とを失ひ、愛する相手の評價（常態的惚込みに於いては相當にこれのあることは認められるが）が一層亂れてゐる。併し我々の忘れてならないことは、このやうに常態からかけ離れてゐると云ふ特徵こそは、惚込みの本質をなすものであると云ふ點だ。

醫者の處置に對しては、右に擧げた轉嫁戀愛の三つの性質の內の第一のが、決定的標準となる。醫者は神經症治療のために分析的處置を始めることに依つて、この惚込みを誘發したのである。醫者と

して當然とるべき態度をとればさう云ふ結果になつて來るのは不可避の事である。丁度、患者の肉體を素裸にしたり、生活上の最も重大な秘密を打明けたりずることゝ同樣に……。併しそれと同時に醫者としてのさう云ふ立場から、彼は何も個人的利益を得ることが許されないと云ふ事もある。その點に於いては、婦人患者の方で醫者に個人的利益を得させさうに見えるのも、同じ事であつて、結局責任を負ふのは醫者自身である。患者が癒るには實は(やがて醫者にその事は分つて來るが)それ以外の機制はなかつたのだ。どうしてもかう云ふ道を辿らねばならなかつたのだ。幸にして總ての困難を克服した後には、患者は屢々かう云ふ期待の空想を持つてゐたことを告白する。卽ち、自分が醫者の命ずる通りに正直に立派にやつてのけたならば、しまひには醫者から優しく褒めて貰へるであらうと。

醫者が患者の戀愛に對して、これを許容しないやうに己れを制せしめるものは、倫理的動機と共に技術的動機がある。彼は自分の目的を判然と眼中において居なければならない。卽ち、自分の戀愛能力が幼兒的定着に依つて妨げられてゐる婦人をして、その能力のためには甚だ重要な機能を自由自在に果さしめるやうに、併しその能力を治療中に費ひ果して了はないで、現實生活のために用意させておくやうに(處置が終つてそれがいざ必要となつた場合に)してやるのが、彼の目的である。犬の競走會へ行つて見ると、腸詰を花輪に組んだのを優勝犬に與へる筈になつてゐるのに、ふざけた男がそ

れを一つ一つにして競走場へ投げてやつたりするために、犬は競走の事など忘れて了ひ我勝ちにそれに喰ひつき、優勝してから貰ふ氣がなくなつて了ふやうなことをよく見受けるが、分析醫が婦人患者の戀愛能力に對する態度はこのやうであつてはならない。併しながら、醫者にとつて、倫理と技法との指定してゐる限界內に自己を守つてゐることは容易であると、私は主張するものではない。殊に年若でまだよく固まつてゐない男子は、これは甚だ難題だと感ずるであらう。疑ふまでもなく、性的戀愛は人生の主要內容の一つであつて、戀愛享受に於ける心身の滿足の合致はその最高點の一つである。少數の頭の惡い有難屋たちを除いて、總ての人々は、その事を承知してゐる。さうして自分の生活をそのやうに立てゝゐる。たゞ學問に於いてのみは、人々はそれを認めることを體裁惡がつてゐる。他方に於いて、婦人から戀愛を求められた時に、これを斷り拒けることは男として誠に苦しい役廻りである。また情熱に燃えてゐる品位ある婦人と云ふものは、神經症であつたり抵抗があつたりしても、なかなか魅力のあるものである。婦人患者の野卑な要求は、一向に誘惑にはならない。このやうな要求は實際、却つて嫌らしいもので、これ等に對して我慢することは少しも無理をせずとも自然に出來るのである。婦人の上品な、目的を禁制された願望感情こそは、恐らく、それ自身に危險を伴ふものであり、美しい體驗のために技法と醫者の立場とを忘れがちになるものであらう。

併しながら分析者に對しては、大目に見ることは禁物である。よしんば彼が戀愛を如何に高く評價するにもせよ、彼は自分の婦人患者をその決定されてゐる生活段階から上の方へ擧げてやるべき機會を持つてゐることの方を、より高く置かなければならない。彼女は分析者から、快樂原則の克服を學ばなければならない。手近にはあるが、社會的には調和しない滿足を放棄して、遠くにあつて、恐らくは賴りないが、併し心理的にも社會的にも批難のない滿足をとることを學ばなければならない。この克服の目的のために彼女は、その精神の發達の極早期にまで連れて行かれねばならない。さうしてこの方途に依つて、あれだけの多いさの精神的自由(その自由のあるなしに依つて、組織的な意味に於ける意識的心理活動と無意識的心理活動との區別がつくところの、その精神的自由)を獲得するやうになるのである。

で、分析的精神治療者は三重の戰ひをせねばならないわけである。治療者自身の內面に於いては、彼を分析的水準から引下げようとする種々の心的勢力に對する戰ひ、分析以外に於いては、性的本能力の意義に就いて彼に抗議し、彼がこれをその學的技法に利用するのを妨げる反對者に對する戰ひ、また分析中にはその患者に對する戰ひ。彼等も始めは一般の反對者と同じやうな態度をとつてゐるが併しやがて自分が性生活を非常に尊重してゐることを告白し、社會的に拘束せられざる情性を以て醫

者を虜にしようとする。

十分に教養はあるが、精神分析には理解を缺いてゐる人々の斯學に對する態度を本論の始めに云々して來たが、彼等は右に私の論じて來たところを讀んでは、愈々この療法は危險だからやめた方がよいと世間の注意を喚起するやうに慥になることであらう。精神分析者は自分の操作しつゝあるのが最も爆發的な力を具へたものであるから、化學者と同じやうな注意と細心とを要することを承知してゐる。併し爆發物は危險だから、化學者はこれを取扱つてはならないと云つたやうな話しのあつたことがあるか。醫者の活動には詩人的な自由があると云ふことは從來とても容認せられてゐたが、かゝる一切の自由を始めて新たに高めるべきは精神分析であつて、この事は人々の注意に價する。さりとて私は、危險のない處置法は廢めにせよと云ふものでは、決してないのだ。危險のない處置法が多くの場合に滿足である。で、畢竟するに、人間社會は治療の情熱などを必要としなくなつてゐることは、何によらず他の熱狂を必要としなくなつてゐるのと同じである。併し、精神神經症は危險のない方法で克服しなければならないと云ふならば、それは精神神經症を、その由來とその實踐的意義とに照して甚だしく見縊つたものである。否、醫療には醫術の外に、鐵と火との入るべき餘地がなければならない。かくてまた技術正しい、强烈な精神分析は缺くべからざるものとなるのである。何となれば、

精神分析は敢へて危險を冒して心的亢奮を處置し、患者を全治に導くものだからである。

# 精神分析療法の道

一九一八年九月、ブダペストに於ける第五回精神分析總會に於ける演說。文獻としては『國際精神分析醫學雜誌』第五卷（一九一九年）に現はる。原名は Wege der psychoanalytischen Therapie.

同僚諸君！

諸君も御存知の通り、我々は我々の知識及び能力を完全であるとか、超然たるものであるとか云つて、誇つたことは嘗てなかつたのである。我々は、これまでもさうであつた如く只今とても、我々の知識の不完全を認めるにやぶさかではなく、またそこに新たなものを加へ、我々の遣方を改め、よりよきものあらばそれを以て置代へんとするの用意を有するものである。

我々は御互に苦しい幾歲の間を別れてゐて、再び一堂に會することになつたのであるから、我々が依つて以て人間の社會に我々の位置を許されてゐるところの、我々の療法が如何なる狀態になつてゐるかを、御互に語り合ひ參考し合ひ、また今後如何なる方向にそれが發展するであらうかの大觀を得ることは、私にまで甚だ魅力あることである。

吾人は、分析醫の任務とは要するに、神經症患者をして、彼自身の内に存する彼の無意識的な、抑壓されてゐる感情を意識せしめんとし、その目的のためには、彼自身の内にあつて彼の知識がそのやうに擴大するのを妨げんとするところの抵抗を發見するにあると、論定したのである。この抵抗を發見しさへすれば、またその克服も保證されるのであるが、惜にいつもさうとは限らぬ。併し我々は、醫者と云ふ人物に對する患者の轉嫁を利用して、如何に幼兒時代に起つた抑壓過程が不適當なものであり、快樂原則に基いて生活しようと思つても生活し切れるものでないと云ふことを、我々の信ずる如く彼等にも知らせてやることに依つて、この目的を達せんと希望するものである。患者の幼兒的コムプレクスに由る葛藤に代ふるに、この新しき轉嫁戀愛の葛藤を以て患者を導くのであるが、この新しい葛藤の持つ動的態度に就いては、私は既に他の個所で說明しておいた。それに就いては、私は只今別に說き改むべき何ものをも知らない。

患者の心内に抑壓されてゐる精神的なものを彼の意識にまで齎らさうとする操作を、我々は精神分析と名付けたのであるが、何故に『分析』であるか。解析、分解とは何を意味するか。化學者は自然の中に發見した材料を實驗室に持つて來て、それに操作を加へるのであるが、この化學者の操作と何等かの類似が存するのか。さう云ふ類似が、或る重大な一つの點に於いて、實際に存してゐる。患者

の症狀並びに病的表現は、彼のその他の一切の精神的活動と同樣に、非常に錯雜混淆した性質のものである。この錯雜混淆の要素は何かと云へば、それは畢竟するに、動機であり、本能亢奮である。併し患者はこの要素的動機に就いては何も知らないか、或は極不十分なことしか知つてゐない。で、我々はこの非常に錯雜した精神的構成の具合を彼に理解させてやるのである。彼の症狀（徵候）を發動せしめてゐる諸本能にまでその症狀を還元して見せ、患者にはこれまで知ることの出來なかつたこれ等の本能的動機が如何にしてこれ等の徵候となつてゐるかを證明するのである、丁度化學者が根本材料を、化學的要素を、鹽（その鹽の中にその要素が他の要素と混入して分らぬやうになつてゐる）から抽き出すのと同じである。同樣にまた我々は、患者が自分で病的だとは思つてゐない徵候に就いても、それ等の動機がたゞ不十分にしか彼には意識されてゐないのだと云ふことを、彼の思ひも寄らなかつた他の本能的動機がその症狀構成に參與してゐるのだと云ふことを敎へてやるのだ。

また我々は人間の性活動をも、その合成部分に解析することに依つて說明したのである。さうして我々が夢を解釋する場合には、全體としてのその夢は放置しておいて、それの個々の要素に就いての聯想を結び付けるやうにするのである。

このやうに、醫術的な、精神分析活動を化學操作と比較することは正當であつて、この比較からし

て今や我々の療法上に一つの新たな方向が指定せられるのである。我々は患者を分析した。それはつまり、それを要素的(エレメンタール)な構成部分に分解することであり、これ等の本能要素を一つ一つ彼の内に指示したことである。さうなれば、我々は、彼がそれ等の要素を新たに、もつとよく構成し直すことに助力となつてやらねばならぬと要求せられることは、固より當然でなからうか。諸君も御存知の通り、實際我々はさう云ふ要求を受けて來たのである。病的精神を分析する以上は、次にはこれを綜合して貰はねばならないと、我々は聞かされて來た。さうして、やがてまたそこへ別の心配も加はつて來て、分析者は無暗に分析するばかりで、あまり綜合と云ふことをやらないと云ふ。精神治療の効果をこの綜合に、云はゞこの解剖に依つてバラ〳〵になつたものを何とか再建することに、移せよと云ふのである。

併し、諸君よ、この精神綜合に依つて一つの新たな課題が生じたとは、私は信じ得ないのである。いさゝか失禮に亘つても正直に云つて差支へないならば、私はさう云ふ要求は無考へな言葉であると云ひたい。が、私は大人しくかう云つておかう、それはたゞ一つの比較を内容に頓着なく引延したものに過ぎないと、或は(かう云つた方がよければ)一つの名稱を不當に擴充したものに過ぎないと。併し、名稱と云ふものは、單に約束手形に過ぎない。それに類似した他のものと區別するための符徵

に過ぎない。プログラム、內容品目、或は定義などではない。さうして比較は比較されたものに唯一點に於いて觸れてをればよいので、他の總ての點に於いてそれから遠く離れてをつても差支へはないのである。心理は特殊な唯一的な或るものであつて、これを何か他の一つのものと比較してもその性質を的確に定義出來るものではない。精神分析的操作は化學的分析と比較出來るが、併しそれと丁度同じやうなのはまた外科手術との間にも出來るだらうし、或は敎育の感化との間にも出來るだらう。化學的分析との比較で、當らぬのは次の一點にある。卽ち、心理に於いて分析は、どうしても統一と聯關の方へ引きづられて行くやうな努力をなしつゝ行はれざるを得ないと云ふ點。一つの特徵を分離させ、一つの本能感情を關係感情の中から遊離させることに成功したとしても、それはそのまゝ孤立してはゐないで、直ちにまた別の關係の中に這入つて行く。(一)

註(一)　化學の分析中に於いても、これと全く同じやうなことは起るのである。化學者が强いて一つの分離をなすと同時に、彼の意志せざる綜合が(材料の親和力が今や自由になつたゝめに)完成せられる。

正に正反對でないか！　神經病者は分裂したる、抵抗のために綜合を失つた精神生活を我々に提示するのである。さうして我々がこれを分析し、その抵抗を取除いてゐる間に、この精神生活は共同的になり、我々が自我と呼ぶところの大きな統一を、これまでは自我から分離し、別に結び付き合つて

ゐた本能感情にまで齎すやうになるのである。で、分析的處置を受けてゐる者に於いて、我々の干渉なしに、自動的に、必至的に、精神綜合はなされるのだ。徵候を分離し、抵抗を廢棄することに依つて、我々はその綜合への條件を創り出してゐるのだ。患者の心內の或るものがその存立の部分に分割せられて、我々がそれ等を何とか纏め上げてやるまで、そのまゝ靜かに待つてゐるなどゝ云ふことはあるわけがない。

我々の療法の發達は、このやうに、恐らく別途を辿るであらう。就中、フェレンチが近頃『或るヒステリー分析の技法上の困難』,,Technische Schwierigkeiten einer Hysterieanalyse" (Internat. Zschr. f. Psychoanalyse, V. 1919) に關する彼の論文中に、分析者の『能働法』と名付けてゐるところの、あの方途を辿ることであらう。

この能働法の何であるかに關しては、我々は速かに意見一致する。我々が治療上でなすべき仕事は二つの內容から成立つてゐると云ふことが出來る。――抑壓されてゐるものゝ意識化と、抵抗の發見と。それだけでも我々はとにかく、十分に能働的である。併し、我々はそれを患者に一人で處置するやうに任せておいていゝのであらうか。我々は彼に轉嫁の衝動に依つて彼が經驗するより以外の助力を、少しも與へ得ないものであらうか。我々が彼をあの心理狀態(望み通りに葛藤をなくするには最

好都合のあの狀態）にならせることに依つて助力を與へることは、また甚だ容易でないだらうか。彼の行動は、併しまた、外界から集まつて來てゐる幾多の事情に依屬してゐる。そこで我々はこの集まつてゐる事情を、我々の獨特の遣り方で變更することを考へるべきであるか。分析的處置をする醫師がそのやうな能働法をとるのは、別に批難すべきではないし、また全然正當であると、私は考へるのである。

諸君もお氣付きになる通り、こゝに我々にとつて分析技法上の一つの新分野が開けてをり、この分野の仕上げにはなか〳〵の骨折りが必要であるし、またそれに依つて全然確定的な規則が與へられるであらう。私は今日諸君に、このなほ發展の途中にある技法を紹介しようとはしないで、たゞ一つの根本命題（この新分野を支配するやうになると思はれる根本命題）を掲げるだけで滿足しておかう。その根本命題とはかうである、――分析治療は、それが可能である限りは、節制（攝慾）の内に行はれねばならない、と。

これを嚴守することが、どの限りにまで可能であるかは、それをなほ細かい論議に委ねゝばならない。併しこゝで攝慾と云ふのはあらゆる滿足の放棄を意味するのではない。そんなことは、當然不可能である。また通俗的な意味で解せられる如く、性交を絕つと云つたやうなことでもない。それとは

違つて、病氣の動き、恢復の動きと非常に關係のあることを云ふのである。

諸君は想起せられるであらう、患者を病氣にしたものは禁斷（節制）であり、徵候は禁斷せられたものゝ代償的滿足であることを……。諸君も治療の間に觀察なさつたであらうやうに、總て患者の病苦の狀態がよくなつて來るに從つて恢復のテムポは遲くなり、全快しようとの衝動力は低まつて來るのである。併しこの衝動力を我々は放棄することは出來ない。この力の弱くなつて來ることは、我々の治癒の意圖のためには危險である。そこでこの結果、我々としては是非とも如何なる方策をとらねばならないか。いさゝか慘酷に聞えるが、我々は患者の病苦を、或る（効果のある）程度までは、早く終らせて了はないやうにしておかなければならない。徵候を打破し無意味ならしめることに依つて患者の病苦が低減するやうならば、我々はその病苦をつらい節制以外の何等かの形で復活させなくてはならない。でないと、恢復が中途半端で徹底しないと云ふ危險がある。

この危險は、私の見る限りでは、特に二方面から襲ふて來る。一方に於いて、その病狀が分析に依つて打擊を受けた患者は、その徵候の代りに新たな代償的滿足を創り出さうと大いに努力する。それ等の徵候に、今や苦痛の特質がなくなつたからである。そこで彼は（或る部分自由になつてゐる）リビドーの轉位性を利用して、さまぐ＼な活動、先入見、習慣、並びに既存のさう云つたもの等にリビ

ドーを纏綿し、これを代償滿足にまで高めようとするのである。彼はまたしてもさう云ふ轉向の法を新たに發見し、それに依つて、治療を促進させる上に必要なエネルギーを脫漏させて了ひ、さうしてそれを暫くの間秘密にしておくことを知つてゐる。分析者はこれ等總ての轉向を嗅ぎつけ、その度にそれを放棄させるやうにするのが任務である。よしんば、滿足を得ようとするそれ等の活動がそれ自身に於いては無難なものに見えようとも……。半分癒つた患者は併し、またあまり無難でない道を進むことのあるものである。例へば患者が（男であるとすると）急いで或る女に結び付かうとしたりする如きである。その他氣付かれるのは、不幸な結婚や肉體が病身になれば、神經症はとかくなくなり勝ちであると云ふことだ。結婚が不幸であつたり身體が惡くなつたりすることは、殊に罪惡意識（懲罰慾）を滿足させる。多くの患者はこの意識を非常に強く自分の神經症に固着させてゐる。へまな結婚選擇に依つて、彼等は自分自身を罰するのである。長い間肉體が病氣であると、彼等はそれを運命の懲罰であると解し、やがて神經症はそのまゝ消えて了ふことが屢々ある。

醫者の能働法は、總てさう云つた立場に於いては、尙早なる代償滿足に對する猛然たる干涉となつて現れることになる、併し、これよりも醫者として監理し易いのは、第二の、馬鹿にはならない危險（これに依つて分析の衝動力は脅かされる）に對してである。患者は就中、治療中に於いて代償滿足

を醫者に對する轉嫁關係に於いてさへも、求める。さうして彼が分析されることに依つて放棄しなければならなくなつた一切のものゝ塡補を、この方法でなし遂げようとする。實際、多少のものは分析者も彼に大目に見ておくのである。その場合の性質に依り、また病人の個性に依つて……。併しそれがあんまり多くになつては、よろしくない。分析者が患者の力となつてやりたい心が一杯で、人間が他人から期待し得る一切を彼に與へたとすれば、それは分析者として誤りである。精神分析に依らざる現代の神經病院などが犯してゐるのと同じリビドー經濟上の誤謬を犯すことになる。これ等の病院ではそれを患者に出來るだけ氣持よくしてやらうと云ふ事しか考へてゐない。そのために患者は病院の方を氣持よく感じ、人生の苦艱から再びそこへ遁逃して來るやうになるのである。これはつまり、患者を生活に對して一層力強く、彼自身の任務に對して一層實行的に、してやらないことである。分析的治療に於いては總てさう云つた甘やかしは避けられねばならない。患者の醫者に對する態度に關して云へば、患者は充たされざる願望を豐富に保有してゐるのである。で、患者がそのやうに最も激しく願望し、最も切實に表現してゐるところのものを與へないでおくのは、却つて最も目的に適ふことである。

私は次の命題に表れたところを以て、醫者としての理想的能働法の範圍を云ひ盡したものであると

は信じない。――治療に於いては節制を正しく守れ。分析的能働法の今一つの方向に就いて、諸君も覺えてゐられる通り、既に一度、我々はスキツル派と論爭したことがある。助力を求めて我々の許に來た患者を我々の私有物の如く取扱ひ、彼の運命を彼のために造つてやり、彼に我々の理想を押付け造物主の如き高慢なる心を以て自分自身に似たもの（それは我々には氣に入る筈だが）に仕立上げやうとすることは、斷然いけないと吾人は云つたのであつた。この考へは私が今日もなほ動かぬところであつて、これこそ醫者としての分別ある態度で、これを超えては醫者としての關係以上の關係に立入ることになると思ふ。また患者に對してそれほど立入つて能働することは、醫療の意圖に對しては必要でないことを知つたのである。何となれば私は、民族、教育、社會的地位、世界觀などに於いて何等の共通性を持たない人々をも、その共通性のないまゝに彼等の本性を動かすに助力となつてやることが出來たからである。私はその論爭當時に受けた印象では、我々の方の代表者――就中それはアーネスト・ジョーンズであつたと私は信じてゐる――の抗論はあまりぶつきら棒で、無條件的に罵倒的であつたやうだ。我々はまた、非常にだらしのない、生存能力のない患者、そのために彼に對しては分析的影響を與へつゝまた教育的影響をも並せ與へて行かなければならないやうな患者をも、やはり受付けないわけには行かない。またそれ以外の多くの患者に於いても、時々は醫者が教育者として忠

告者として臨む必要のある機會もあらう。併しこれは如何なる場合にも、なるべく控へめ勝ちにしておくべきで、患者は自分の本質を醫者に似たものにせられず、それ自身の解放と完成との方へ教育せられねばならない。

今では我々に甚だ敵對的態度を示してゐるアメリカに於ける我々の尊敬する友パトナム J. Putnam は、精神分析は須らく或る一定の世界觀に從つて、これを患者に押付けて彼を高尚ならしめるに資したらよからうと云つてくれてゐるが、我々が折角のこの要望を受付けることが出來なくても、彼は許してくれるに相違ない。私としては云ひたい、これまたやはり强要に過ぎないと、よしんばその意圖は如何に高尚であらうとも……。

結局、これまでのとは全然性質の違つた能働法が、漸次いや增し行く洞察に依つて、必然的に成立し來る。卽ち、我々の處置するさまざまな形の病氣は、同じ技法を以てしては癒す事は出來ないと。これに就いて細說することは尙早であらうが、併しこの新能働法が如何なる範圍まで適用されるかを、私は二つの實例に就いて說明することは出來る。我々の技法はヒステリーの處置に於いて始まつたものであつて、やはりなほこの病氣に向つてゐる。併し、旣に恐怖症のために我々は我々のこれまでの態度を逸出するの必要に迫られたのである。恐怖症の患者が分析を受ける氣になるまで待つてゐたの

では、人々はいつまで經つても恐怖症を除いてやれるやうにはならないのである。さう云ふことでは恐怖症を成程と思はせるやうに解除するに必要なだけの材料を、決して患者は分析中に示さないのである。我々は別の出方をしなくてはならない。臨場（外出）恐怖症の實例をとつて御覽なさい。そこには二部類の臨場恐怖症がある。一つは比較的輕症であり、他は比較的重症である。前者は、患者が一人で街頭を行く時にはいつでも恐怖に惱まざるを得ないが、併しそれ故にとて彼等はまだ一人歩きを廢めてゐない。なかには、一人歩きを廢めることに依つて、この恐怖に對して自己を防備した者もゐる。後者に於いては、分析者は患者を分析して、彼等をして第一段の恐怖症者のやうに振舞ふやうに、つまり街上を歩いてその間に不安と戰ふやうにさせることが出來た時にのみ成功するのである。で、分析者はまづこの程度まで恐怖症を低減させるのである。さうしてそれが醫者の努力に依つてなし遂げられた場合に、患者は恐怖症の解除を可能ならしめるところの聯想や想起を持ち得るやうになるのである。

これよりもなほもつと明かにされてゐないと思はれるのは、强迫行爲のより重い場合に受働的なぐづぐづした態度の見えることである。これの治療は實は一般に『目的を達しさうで而も決して達せざる』„asymptotisch“過程に傾いてゐる。治療の期間が無限に續く傾きがある。これを分析することは

常に甚だ多くを闡明してをりながら、何物をも改變し得ないと云ふ危險がある。かゝる場合にはどうするのが正しい技法であるかと云ふに、それは治療それ自身が恐怖となるまで待つてゐるに在ると、私は信じてよいと思ふ。治療自身が强迫になれば、その時この反對恐怖を以て病氣の恐怖を力づくで克服するのだ。併し諸君は理解せられるであらう、私はこれ等二つの場合に於いて、たゞ我々の療法が新に閲した發達の見本を諸君に示したに過ぎないのだと云ふことを……。

さて、最後に、私は一つの立場を問題にして見たい。これは將來に屬し、諸君の多くの方には空想的と思はれるであらうが、併し我々としてそれに就いての考へを準備しておくだけの價値はあると私は考へざるを得ないのである。諸君も知られる通り、我々の方の治療はさう無暗に盛んにやれるものではない。分析者と云はれるものはほんの僅かの人數だし、その僅かの人數の總てが如何に努力してやつて見ても一年間に扱へる患者の數は知れたものである。世には隨分過大の神經症的悲慘が存してゐるが、さうして恐らくこれほどに存在させないやうに出來ると思ふのであるが、我々がこの過大の悲慘をどの程度まで除去出來るか、それを量的に云々することは問題にはならない。その他、我々は我々の生存の條件に依つて、生活に困らぬ上層階級に限定されてゐる。彼等はその醫者を自分等で選ぶ習はしになつてゐるが、その選擇に際し、精神分析に就いてのあらゆる先入見に依つて妨げられて

ゐる。廣汎な下層階級は甚だ重く神經症に罹つてゐるが、彼等に對しては我々は只今のところ何とも致し方がない。

まづかう假定して見ませう、何等かの組織に依つて我々分析者の數を非常に殖やし、もつと大衆を處置し得るに差支へないほどになつたと…。他方にまたかう云ふことも豫想される、即ち社會の良心が眼覺めて、貧民に對して現今生命を救ふための外科手術が施されてゐると同じやうに、精神生活を救ふためにも相當の手當が施されねばならないとの考へが起きて來、また神經症は結核と同じやうに、民衆の健康を脅かすものであるから、これまた結核と同樣、民衆中の各個人の無力な配慮に一任しておくことは出來ないと…。さう云ふ事になれば病院なり感化院なりが建てられ、精神分析者がこれを受持ち、酒の中へ遁れやうとしてゐる男、絶望のあまり身を持崩しさうになつてゐる女、不良になるか神經症になるかの分岐點に立つてゐる少年少女を引受けて、これを分析することに依つて彼等に反撥力と、行動力とを恢復してやるやうになるであらう。かう云ふ處置は無料でなされることになる。國家がこのやうな任務を痛感するやうになるのは、なほ前途遼遠であらう。現在の樣子ではその期間はまだ〳〵延びることであらう。恐らく始めはさう云ふ組織が民間の慈善事業として起るであらう。併し何れの日か、それが國家的事業とならなければならない。

その時には、我々の技法を新らしい條件に協はせるやうにすべき任務が我々に生ずる。我々の心理療法が如何に適確であるかは教育のないものにも深く印象を與へるであらうことを私は疑はないが、併し我々は精神分析法の如何なるものであるかを最も簡明に、最も分り易く書いてやらねばならないのである。貧者はその精神症を捨てるに富者よりも吝であることを、我々は多分經驗するやうになるだらう。何となれば、貧者にとつては生活は困難であるから早く癒つて生活したいと云ふ誘惑が少く、病氣してさへをれば社會が助けてくれると云ふ氣があるからである。一體我々が何事かを爲し得るためには、その精神的行動を支持する物質力がこれに一致しなければならないこと、丁度ヨゼフ皇帝の遣り方の如くであることが屢々である。我々の治療を大衆的に適用するには、分析の純金に直接暗示の銅を豐富に合金しなければならないやうに、多分なるであらう。また催眠術的感化はまた、戰爭神經症の處置の場合に於ける如く、こゝにも再び起るであらう。併しかゝる民衆向きの精神療法が如何なる形態をとらうと如何なる要素から合成せられようと、その最も効果のある、重も最大なる組成部分は變りなく、やはり最も力強く、最も沒傾向的な精神分析から借りて來たものであるだらう。

# 分析技法前史に就いて

始めて匿名にて(たゞFの頭文字のみを署して)『國際精神分析雜誌』第六卷(一九二〇年)に發表せらる。
原名は "Zur Vorgeschichte der analytischen Technik,"

性慾學者として令名高く、且つ精神分析の優秀なる批評家なるハヴロック・エリスの新著『葛藤の哲學、並びに戰爭中の他の諸論文、第二論叢』"The Philosophy of Conflict and other essays in wartime, second series," (London 1919) の中に『性に關する精神分析』と題する論があつて、その中で著者は、精神分析鼻祖の事業は科學的操作の一部分としてよりは、寧ろ藝術的事業として價値を認めらるべきであると云ふことを、論證せんと努めてゐる。我々としては、この考へ方に於いて、抵抗の新たな轉向を、分析への新たな拒否を認めることが容易である。よしんば、この考へ方が表面如何に親切さうに、如何に愛想よさゝうに裝はうてゐようとも……。我々は斷然これに抗議を提出せんとするものである。

併し我々がハヴロック・エリスのこの論文を問題にする動機は、そのやうな抗議にあるのではなく、

彼がその偉大な博覽に依つて或る學者を發見し來り、その學者は、目的こそ違へ、自由聯想を技法として用ゐ、且つこれを薦めてゐるから、この點に於いては精神分析者の先驅と名付けることが出來ると云つてゐるその事實にあるのである。ハヴロック・エリス曰く、『一八五七年にガース・キルキンズンGarth Wilkinson と云ふ名の、醫者と云ふよりはスエデンボルク流の詩人にして神秘家と云ふべき人が、『印象』と自稱する所謂新方法に依つて一卷の凡庸なる神秘詩を公刊してゐる。』と。彼は曰ふ、『詩人が或る主題（テーマ）を擇び、これを書下すとする。やがてこれを書下して了ふと、題名を書いた彼に起る最初の聯想（心への印象）は主題の擴がりの始まりとして考へてよい。その起つて來た言葉或は文章が如何に突飛で沒聯絡なものと見えても、それには頓着なく……。』『精神の最初の動き、湧起し來る最初の言葉は、與へられたる主題に深入りしようとの努力の結果である。』人々はかう云ふ態度を段々續けて行く。すると、キルキンズンの云ふところに依ると『私はいつでも、宛も佯りなき本能に依つて導かるゝかの如くに、事物の內面に入込むことを知つたのである。』と。この技法は、キルキンズンの見方に依ると、最高度に進められた自働作用である。最深底に橫たはる無意識的感情をして自らを表現せしめんとするものである。意志だの理性だのと云ふものは取除くべきだと、彼は自ら誡めた。たゞ心の中に浮ぶまゝにさせておけば、心の力は自ら或る無意識的の目的に向つてをることが分

るのである。』と。

『キルキンズンは醫者ではあつたが、この技法を宗教的並びに文學的目的のために適用し、決して醫術的又は科學的目的のために用ゐたのではなかつたと云ふことを見逭してはならない。併しこれは本質に於いては、自己を對象とする場合の精神分析技能であると云ふことは、甚だ見易い。從つてまたフロイドの方法が藝術家の方法であると云ふことの證據にも、一層なるわけである。』と。

精神分析的文献に通曉するものは、こゝに於いてか、シルレル Schiller とケルネル Körner との間に取交された書翰の中の面白い個所を想起するであらう。(一)この個所に於いて大詩人と思想家(一七八八年)とは、創造的になりたいと考へてゐるものに對して、自由聯想を尊重せよと薦めてゐる。キルキンズン式の所謂新技法は既に多くの他の人々の考へついたところであつたことは察せられる。さうしてこれが精神分析に於いては組織的に應用されてゐるから、フロイドの遣方は藝術的であるとは云へないと思ふ。寧ろ總ての精神的の出來事は一律的に決定されてゐると云ふ風に、フロイドは殆ど先入見的に確信してゐるから、その結果から云ふ技法をとるやうになつたのである。ところが自由聯想が定着してゐる思想に屬してゐることが、やがてどうしても本當らしく考へられて來た。さうしてこの事はまた分析中に於ける經驗に依つて(抵抗があまりに大きくて、察せられてゐる通りの關係が

見えなくなつてゐない限りは）確められるのである。

註（一）オットー・ランクの發見に懸り『夢の註釋』第七版に引用してある。譯者はその相當個所をこゝに再引用して見る。――想起は一見『自由に湧起する』かの如くに見えるが、實は普通にはこれに對して批判が起るものであるけれども、その批判を放棄してその想起を想起せよとの要求は、多くの人々には容易でないやうに思はれる。想起されることを『好まぬ思想』は最も激しい抵抗を用心棒に立てるのが常でこの抵抗がこの思想の想起せられんとするに際して妨げをする。併しもし我々が、かの偉大な詩人哲學者フリイドリヒ・シルレルの云ふことを信用するならば、これと全然類似した態度が詩人創作の條件となつてをることが分る。彼がケルネルとの間に交した書翰の或る個所――これを搜し出したのはオットー・ランクである――に於いて、彼は、創造力の缺乏してゐる或る友人の嘆きに答へてから云つてゐる――『私の見るところでは、君の嘆きの根源は、君の想像力が君の悟性のために壓迫されてゐることに存するやうである。私はこゝで一つの考へを提示して、それを比喩に依つて分り易くして見よう。流れ出て來る思想に對して、云はゞその門口で、もし悟性が、これを抑へ、あまりに鋭く吟味するならば、それはよろしくない。精神の創造的仕事に對して不利益であると思はれる。思想（觀念）と云ふものは、それだけを引離して考へると、甚だつまらない奇妙なものゝやうに思はれるが、併しそれより後に來る思想に依つて重要となり、他の諸觀念（これまた同樣一向につまらない觀念と見えても）と結付くことに依つて甚だ適切な一部分となり得るのだ。――これ等總ては悟性には判斷出來ないのだ。たゞその觀念

が他の諸觀念と結び付くのを眺めることの出來るやうになるまで、その觀念を保留しておくことが出來れば判斷出來るのである。これに反し、創造的な頭腦に於いては、悟性はその番兵を門口から引揚げさせておくから種々の思想が雜然混然と雪崩れ込んで來て、さうしてその後で、悟性はこの大群を始めて大觀し吟味するのだと思ふ。……(後略)』(一七八八年十二月一日書翰)

併し、シルレルにせよキルキンズンにせよ、精神分析技法の採擇に影響を及ぼしたなどゝは、何人も確言することは出來ない。もつと個人的な關係が、一つの別方面からこの方面へ及ぼされてゐるやうに思はれる。

さき頃、ブダペストのフーゴー・ドゥボキッツ Hugo Dubowitz 博士がフェレンチ博士に注意を與へて、ルドヰヒ・ベルネ Ludwig Börne の僅か四頁半にしか足りない小論文を讀んで見よと云つた。この論文は一八二三年に書かれたもので、彼の全集(一八六二年出版)の第一卷に收載されてゐる。題名は『三日の中に獨創的文藝家となる術』,,Die Kunst, in drei Tagen ein Originalschriftsteller zu werden" とあつて、ベルネが當時私淑してゐたジャン・パウルの誰しも知る特徵を具へてゐる。その結論のところにかうある。——『さてこれからがお約束の方法である。まづ二三帖の紙を用意して三日の間續けさまに、一切噓や氣取りなしに、總て君の頭に浮んで來ることを書きつけ給へ。自分自

身に就いて考へること、君の女に就いて、トルコ戰爭に就いて、ゲーテに就いて、フォンクの犯罪過程に就いて、最後の審判に就いて、君の上長に就いて、考へるところを書きつけ給へ。三日の後には君は何と思ひも寄らぬ思想のあることに驚き呆れるであらう。これが三日の中に獨創的文藝家となることの術だ。』と。

フロイド教授がこのベルネの論文を讀ませられた時に、いろ〳〵の話をしたが、それは精神分析的な聯想尊重の前史に關する當面の問題に對しては、甚だ重大な意義のあることゞもであつた。教授の語るところに依ると、彼は十四歳の時にベルネの著述を贈られ、この書は五十年後の今日まで、彼が少年時代からずつと持つて來た唯一の書物であると云ふことである。この文藝家は、自分の文中で自己を堀下げて行つた最初の人である。只今云々して來た論文に就いては、彼は覺えはないが、併し同巻中に收められてゐる他の文、例へばジャン・パウルの思ひ出、喰道樂、白鳥の衣裳を纏ふ痴人などは永年の間何と云ふわけもなく、彼の記憶に叉しても浮上るのであつた。彼は特に、獨創的文藝家になる術を說いてある文中に、彼が平常自分の考へとして抱いて來たところがそつくり述べてあるのを發見して驚いた。例へば、——『考へることに對する固陋なる憶病が、我々萬人を抑制するのだ。政治の檢閱よりもまだ彈壓的なのは、我々の精神上の仕事に對するお上の意見である。』(こゝにやはり『檢

閲』と云ふ語が出てゐるが、これは精神分析に於いては夢の檢閲となつて再現してゐる。)『大抵の文藝家に於いて、自分が現在あるよりはもつとよくなることの精神と性格とは缺如してはゐない。……たゞ正直になることが、總て天才の源泉である。さうして人間は、性生活が一般的であればあるほど愈々機智縱横になるものであらう。……』

多くの場合に於いて一見して獨創的に思へても、その背後には多少の隱蔽的忘却の存するものであるが、以上の論はこの部分の忘却を暴露指摘したもので、これは必ずしも我々のみの專門ではないと見える。

# 非醫者の分析可否の問題

始めて一九二六年九月に發表。原書全集第十一卷に收載。原名は „Die Frage der Laienanalyse.“

# はしがき

この小論の題目は、ちよつと分りにくい。で、私はこれを説明する。Laien(素人)=Nichtärzte(非醫者)で、問題は非醫者もまた分析を實施してもよいかどうかと云ふ事にある。この問題には時間的並びに場所的の條件がある。時間的には、これまで何人も誰が精神分析をやるか頓着してゐなかつたほどである。實際、人々はあまりにその事を介意しなさすぎた。何人も精神分析などはやらなければよいと云ふ願望に於いてのみ一致してゐた。その根據は區々であつたが、その底に横はる拒否に於いては同樣であつた。であるから、たゞ醫者のみが分析すべきだと云ふ說は、分析に對する新しい、一見直情的な態度を示すものである。つまり、その態度も以前の態度の多少違つた派生であるのではないかとの疑ひが起らないとすれば、直情的である。分析的處置は事情に依つては行つてもよいと云ふことは認めるが、やるとすればそれはたゞ醫者のみに行らせるやうにしなければならぬ。何故にこのやうに限定するのであるか、それが次に研究を要することになる。

場所的にこの問題は條件づけられてゐる。何となれば、この問題は同樣な到達距離を持てる總て

の國々に對して考慮せられるのでないからだ。ドイツ及びアメリカに於いては、この問題は專ら大學で論議せられてゐる。何となれば、これ等兩國に於いては總ての病人は如何にでも何醫からでも勝手に處置を受けることが出來るからである。自分の行爲に責任を持ちさへするならば、萬人が自分の處置しようと思ふ總ての患者を處置することが出來るからである。患者が損害を受けてその罪を告發するまでは、法律はこれに干渉しないのである。併しオーストリー（に於いて、またオーストリーのために私はこれを書いてゐるのであるが）に於いては、法律は豫防的で、法律は非醫者が患者を引受けることを、その歸結を待つまでもなく、禁じてゐる。（フランスに於いても同樣である。）だから、この國に於いては、素人＝非醫者が患者を精神分析を以て取扱ふてよいかとの問題は、實踐的意義を帶びてゐる。併しこの問題はまた、問題として提起せられるや否や、法律の條文に依つて決定されて了ひさうに思はれる。神經症者は患者である、非醫者（素人）は醫者に非ず、精神分析は神經病を治療し快癒せしめるための方法である。總てそのやうな處置は、專ら醫者がそれに當るべきものだ。從つて、非醫者が分析を神經症に加へることは許されない、もし加へるものがあれば罰すべきであると。併しさうこれほど問題は簡單明瞭であるから、非醫者の分析可否は問題として取上げるまでもない。併しさう簡單に片付けられない事がなほ二三殘つてゐて、而も法律はそれを介意しないから、これに就いてな

ほ考慮を拂つて見なければならない。恐らくまづ第一に起る問題は、かゝる場合の患者は他の患者の如き患者ではなく、非醫者が非醫者でなく、醫者が普通に期待さるべき醫者でなく、從つてあてには出來ないと云ふことである。もしこのことが證明せらるれば、法律に何等の手加減を加へずして、このやうな場合にこれを杓子定規に適用しないやうにとの要求は、當然となつて來るであらう。

# 一、分析は醫療にして醫療に非ず

もしかう云ふ事が起きるとすれば、それは精神分析の特殊性を知らうとの責任を覺えない人々のためである。これ等、不偏不黨者を、我々は只今のところまだ無智な人々として扱つておきたいと思ふが、彼等を教育することは我々の仕事である。ところが困つたことには、彼等をしてそのやうな處置の傍聽者たらしめる方法が我々に立たない。『分析的立場』には、第三者の介在を許さない。處置はそれ〴〵の診察時間に依つてその價値が區々である。さう云ふ――權能なき――傍聽者は、勝手な時間にやつて來て、大抵は何等價値ある印象を受取らないであらう。彼は分析者と患者とが二人で何をやつてゐるのかを理解しない危險があるか、或は彼は退屈して來るであらう。で、彼等はよかれ惡かれ

我々の說明を聽くだけで滿足するであらう。で、我々はその說明を出來るだけ呑込めるやうにして見たいと思ふのである。

で、患者は氣分が常にぐら〳〵してゐて、自分でそれを支配することが出來なくて困るとか、或は小心臆病で、そのために精力を消耗するやうに感じて困る、何故ならば、彼は何も正しいことを信じ得ない、或は他人の間に這入つて不安と混亂とを覺えるからと云ふ風であるとする。彼は自分の職業の仕事を果すのが困難であるが、併しまたあらゆる眞劍な決心や總ての企てをすることもむづかしくなつてゐることを、悟性の助けなしに知覺するかも知れない。彼は或る日、不安な感情の苦しい發作を何處からともなく覺え、それからと云ふもの、その感情を克服しなければ、一人で街上を行くことも出來なければ、鐵道旅行をすることも出來ない。兩方とも多分やめて了はなければならない。卽ち甚だ苦しいことは、彼の思想が勝手放題に動いて、彼の意志の指圖を受けないことである。彼の思想は彼にとつてはどちらでもよいやうな問題を追及し、自分では下らないと思ふのであるが、而もそれを放置することが出來ない。また甚だ馬鹿げた問題が彼に起きるのだ。例へば、家々の正面の窓の數が全部で幾つであるとか、また手紙を投函するとか、ガスの火を消すとか云ふ單純な仕事の場合にもその一瞬間後には、自分が果してそれをしたかどうかと云ふことが疑はしくなる。これくらゐならば

まだ恐らく厄介で面倒だくらゐのところであらうが、併し自分が何處かの子供を車輪の下へ投込んだのだとか、何處かの人を橋から川へ突落したのだと云ふ觀念を拂ひ除け得なかつたり、或は今日警察で發見した殺人犯の下手人を探してゐるが、それは自分ではなからうかと自問しないではゐられない状態になつたりすると、堪え得られない。それは實際、明かにナンセンスである。彼は嘗て何人にも惡事を働いた覺えのないことは、自分でよく知つてゐる。併し、彼が實際そのお尋ね者であつたとしてもその感情——罪惡感——はこれほど強くなるわけはないのである。

併しまた、我々の患者——今度は婦人患者だが——が、別方面で別の苦しみ方をしてゐる。彼女はピアニストであるが、彼女の指が痙攣して云ふことを聽かない。彼女が或る會合に出掛けて行かうとすると、或る自然的な要求が彼女に起きて來て、その要求を滿たしてゐると會合へは出られない。だから、彼女は集合、舞踏會、劇場、音樂會など行くことを斷念しなければならない。それでも無理して出掛けて行くと、彼女は激しい頭痛やその他苦しい感覺に襲はれる。必要の場合には、彼女は總ての食事を嘔吐に依つて自分から吐き出さねばならない。それが續くと恐ろしいことになつて來る。遂に彼女は一切の亢奮に堪え得ないと云ふ嘆を發するやうになる。併し人生から亢奮を除くことは出來ない。彼女はさう云ふ事をした場合には、すつかり元氣がなくなり、無氣味な病状を想はせるやうな

筋肉の痙攣を見ることも屢々である。

また別の患者は或る特殊な分野に於いて障害を感ずる。つまり、感情がそれに相當した肉體活動を要求し、それ等がその分野に於いて一致すべき筈のところ、一致しなくなるのである。男子患者である場合には、彼等は異性に對するその戀愛感情に肉體的表現を與へることが出來ない。然るにあまり戀愛してゐない對象に對しては、どうやらその反應が自由に發動するのである。卽ち彼等はその肉感を、自分の輕蔑し、寧ろ別れたく思つてゐる人物に對して、起してゐるのである。卽ち、彼等が肉感を滿すためには、彼等自身にも不快であるやうな條件を果さなければならないのである。婦人患者ならば、性生活の要求に從ふことを、不安や嫌惡やわけの分らぬ障害に依つて妨げられるのだ。またもし彼女が戀愛の赴くまゝに靡いたならば、自然がそのやうな服從への報賞として定めたところの享樂が、一向享樂でないことを知るのである。

から云ふ人々は總て自分を病氣と認め、さう云ふ神經障害を取除いて吳れると人々の云ふなる醫者の許へと訪ねて行く。醫者にはまた種目があつて、それぞれへ人々はこれ等の病苦を持込んで行く。醫者達の方では自分自分の立場に應じて、それ等の病氣をいろ〳〵な名稱で診斷する。卽ち、神經衰弱、精神衰弱、恐怖症、强迫神經症、ヒステリーなど。彼等は症狀の出て來る肉體機關たる心臟、胃

腸、性器などを調べる。併しこれ等の器關は何ともない。彼等は日常の生活樣式を變へて見よとか、精神保養をせよとか、强烈な手續をとつて見よとか、强壯劑を服用せよとか云ふ。さうしてこれに依つて一時的の輕快を目指すのであるが、要するに何物をも目指さないことゝ同じである。遂に患者の方で、そのやうな病苦を全く專門的に處置してゐる人々があると聽いて、それ等の人々から分析を受けにやつて來る。

我々の不偏不黨者（が現在我々の前にゐると考へて）は、神經病の病的顯現を區別してゐる間は退屈さうな顏をしてゐたが、今や彼は注意を緊張させて、またかう云ふのである。――『では、醫者には手のつけようのなかつたさう云ふ患者を、分析者はどう處置するのか、一つ拜見しませう。』と。

分析者と患者とはたゞ話し會つてゐるだけで、彼等の間には別に何も變つたことはない。分析者は道具を使ふわけでもなし、處方を書くわけでもない。彼は患者を處置してゐる間に、もしそれが如何樣にか可能ならば、患者を身邊の者の如き關係にまで引入れる。勿論それが條件ではなく、またそれを徹底させるわけでもない。分析者は患者を一日の一定の時間に來させ、彼に話させてそれを聽き、彼に話してそれを聽かせるのである。

我々の不偏不黨者の樣子は今や明かに輕やかになり、緊張を失つて來るが、併しまたその代りに何

一、分析は醫療にして醫療に非ず

だそんな事かと云ふ風も見えて來る。彼はかう云ひたげである。――それつきりかね？　王子ハムレットの云ひ草ぢやないが、言葉だ、言葉だ、も一つおまけに言葉だ。彼にはまた慥にメフィストの嘲罵――言葉で片付けておくのは樂だ――が思ひ出される。この語はドイツ人としてよもや忘れてゐるものはあるまい。

不偏不黨者はまたかう云ふ。――『ぢやア、それは一種の魔術だな。貴君が話してをれば、患者の病苦が吹飛んで行くのだな。』

左樣ですとも、魔術と云へませうよ、もしその效果が迅速に出たらば……。魔術と云ふものは迅速と云ふことが無條件に屬してゐる。忽ちにして效果が現れることゝ云つてもよからう。併し、分析的處置は幾月も、悪くすると幾年も掛る。そのやうなぐづ〳〵した魔術には魔訶不思議の特質がなくなる。併し我々はやはり言葉を輕蔑はしたくない。それは何としても力強い道具である。これは我々が互の感情を、依つて以て傳達する手段であり、他からの影響を受けるべき道である。言葉は何とも云へないほどの善行をなすが、また恐るべき害毒を加へるものでもある。慥に、最も始めには行爲があつて、言葉はその後に現れたのであるが、行爲が約せられて言葉となつたのは、さま〴〵な關係からして、一つの文明的進歩であつたのだ。併し、言葉はやはり、本來一つの魅力であり魔力であつたのだ。

で、言葉にはなほその古き力が多分に保存されてゐる。

不偏不黨者は續けて云ふ。――『假りに患者が分析的處置に就いて私ほども理解の準備がなかつたとしたら如何にして貴君は彼に言葉又は話の魔力（その魔力に依つて彼の病苦が取除かるべき筈の）を信じさせようと思ふのか』と。

分析者は勿論、患者に或る程度の準備を與へておかなければならない。さうすれば仕事が多少とも樂になる。分析者は患者に向つて、自分に對して全然正直であつてくれ、心に浮び來ることは何事によらず意圖的に差控へないでくれ、更に進んでは、多くの思想又は想起を人に報告しないやうにさせるところの一切の抑制を放擲してくれと、要求するのである。誰でも自分でよく承知してゐる通り、自分には他人にあまり語りたくないこと、或は全然語つてはならないと考へてゐることがあるものだ。それがその人の『秘密』である。彼はまた、自分でそれを認めることを欲しない何物かゞ、自分で匿しておきたい何物かゞ、それ故にそれが湧上つて來ても、いゝ加減に切上げ自分の思想中から追出しておきたい何物かの存在してゐることを、感付くのである。これを感付くことは自己心理の認識上非常な進歩を意味してゐる。自分自身の考へを自分自身に匿しておかうとすることは、そこに非常に注意に價する問題の一つが潛んでゐることを、彼は多分氣付くのである。さう云ふことになれば自分の

自我は、これまでは一體をなしてゐるとばかり思つてゐたのだが、實は一體をなしてゐないらしいのだ。その自我の內にその自我に反對する何物かゞ存在してゐるらしいのだ。自我と廣義に於ける心理生活との間に、相反の如きものゝ存在することが、彼に仄かに感ぜられる。ところで、總てを語つて了へと云ふ分析の要求を患者が受容れると、これほど普通とは變つた豫備條件の下に於ける思想の交換交通に依つて、獨特の効果に導かれて行くと云ふことが、容易に呑込めて來るのである。

『いや、分りました』と、熱心に聽入つてゐた不偏不黨の士は云ふ。『總て神經病者は自分を押つけてゐる何物かを持つてゐると、貴君は認めるのですね。で、その押付けてゐる祕密を語らせるやうに、貴君が患者に仕掛けてやれば、それでその重味が去つて、病氣はよくなると云ふのですね。それは實は、告悔の原理ですね。カトリック敎會が昔から信者に對する支配力を確實にするために用ゐて來たあの懺悔の原理ですよ。』

さうだとも云へるし、さうでないとも云へる。分析をするには、云はゞその手始めに告悔をしなければならない。併し告悔は分析の本質には觸れないし、またその効果を說明するには、遙に緣遠い。告悔に於いては罪ある人は自分の知つてゐることを云ふのであるが、分析に於いては神經症者はそれ以上の事を云ふことになつてゐる。それのみならず我々は、告悔に嘗て直接的の病的徵候を取除くだ

けの力が生じたと云ふことを、まだ聞いたことがない。

『ぢやア、やつぱりまだ分らない』と反對者は云ふ。『自分の知つてゐる以上の事を云ふとは、どんなことか。併し、貴君は分析者として患者に對して、告悔敎父が告悔敎子に對するよりは、長く、切實に、また個性的に交渉するから、彼等に對してより强い感化を與へると云ふことは理解出來る。また貴君がこの强まつた感化を利用して、患者のこの病的思想を取除き、彼の恐怖を吹飛ばすと云ふこと等は理解出來る。だが、から云ふことは注意しておかねばなるまい、卽ちから云ふ方法に依つて純粹の肉體的現象（嘔吐、下痢、痙攣など）を支配することが出來ると云ふことを……。併しさう云ふ影響は、我々が一人の人間を催眠狀態に陷れた時に甚だ可能だと云ふことを、私は知つてゐる。どうやら貴君は患者のための骨折りに依つて、そのやうな催眠術的關係を目指してゐるのである。それが貴君の意圖ではないにもせよ、貴君の人物への暗示的結合を目指してゐるのだ。だから、貴君の療法の不可思議は催眠的暗示の效果である。私の知つてゐる限りでは、併し催眠術的療法は貴君の分析よりは遙かに迅速に作用する。分析は幾月も幾年もかゝると、貴君は自分で云つてゐるが……。』と。

我々の不偏不黨者は、始めに我々の思つたほどには、無智でもなければ無見識でもない。彼が自分の前から持合せてゐる知識の助けに依つて精神分析を理解しようと努め、自分の既に知つてゐる何物か

一、分析は醫療にして醫療に非ず

に結付けようとしてゐることは、何としても見遁せない。今や我々には甚だむづかしい仕事が出來たわけである。催眠術の概念を以て精神分析を理解しようとしても駄目である、分析は獨自發生の方法であり、新しい、獨特のものであり、新しい見解（アインジヒテン）——又は想定（アンナーメン）と云つてもよい——の助力を借りて始めて理解され得るものであると云ふことを、彼に呑込ませなくてはならない。併し我々は、彼が最後に云つた言葉に對して答へておかねばならない。

分析者の特殊な個人的影響と云ふことを云々したのは、貴君として慥に一隻眼があります。そのやうな影響は存在して、分析に際して大きな役割を果します。併しその役割は、催眠術の場合のとは、同じではない。兩方の場合に於いて、立場が全然違ふと云ふことを、貴君に十分に呑込ませておかねばならないのであつた。それにはかう云つておくだけで十分であらう、卽ち、我々の方ではこの個人的影響——この『暗示的』契機——を、病苦徵候抑壓のために利用（催眠術の場合にはそれをするが）しないのであると。更にまた、この影響は全然、處置者の方からばかり與へるものと信ずるのも間違ひだと云つておかう。始めの內は分析者の影響を受けるであらうが、併し後には我々の分析意圖に對して反抗を起して來るので、我々の方でも大いにその對應策を講じなくてはならなくなるのである。また私は、分析療法が如何なる程度にまで轉向と思ひを打ちまけさせて了ふことゝに存するかを、貴

君に示したい。我々の患者が何かの大罪を犯したかのやうな或る罪惡感に惱んでゐるとすると、我々は彼にそんなに良心を惱ます必要はない、君に罪のないことは疑ふまでもないことだからなどゝは云つて聽かせないのである。そんなことならば本人が自分で十分に試みてゐるのだが、併しその甲斐がないのだ。我々は寧ろ、さう云ふ力強い頑固な感情は、やはり何か現實的なものに根差してゐるのだ。それは多分發見出來る筈だと云ふ風に話して聞かせる。

そこで不偏不黨者は考へる。『貴君がそのやうに患者の罪惡感を尤だと云つて聽かせることに依つてその惱みを鎭めることが出來るのだとすると、實に不思議ですね。併し一體、貴君の分析的意圖とはどんなことなのか。また貴君は患者をどう云ふ風に扱ふのか』と。

## 二、分析療法の理論的根據

私が貴君に何か理解の行くことを話すとすれば、それにはまづ精神分析學說の一部分を報告しておかなければならないが、この學說は分析學者仲間以外には知られてゐないし、また尊重されてもゐない。この理論が呑込めれば、我々が患者に就いて何を意志し、また如何なる方法に依つてこの意志す

るところを爲すかゞ、容易に演繹出來るのである。私は貴君のためにこの理論をドグマ的に、既製の學說組織であるかの如くに、貴君に御覽に入れる。併しながらこの理論は哲學體系と同じやうにしてさう云ふものとして成立したのではないと云ふことを信じて貰ひたい。我々はこれを徐々に發展させ、そのあらゆる部分を彫琢し、實際觀察の結果を不斷に校合することに依つて改變しつゝ、遂にこれを一つの形態にまで築き上げたのであつて、この形態を具へたことに依つて我々の目的に十分に適うやうになつたと思はれるのである。なほ二三年前には、私はこの學說を別の表現を以て裝はねばならなかつたらう。勿論、今日の表現形式が確定的なものとなるであらうとは、私も貴君に保證することは出來ない。御存知の通り、科學は默示（お筆先）ではない。科學はその始めから確實性、不變性、不過誤性を持たない。人間の思想は、實はそれ等の諸特性を甚だ憧憬してゐるのではあるが……。併し科學はさう云ふものであるにもせよ、それが我々の持ち得る總てだ。それに考へても見給へ、我等の科學はまだ甚だ年若いのだ、まだ一世紀にもならないのだ。その上人間の研究對象として恐らく最も困難な材料を對象とする學問だ。さう考へてくれたならば、貴君にも私の講義に對して如何なる態度を以て臨むのが正しいかゞ分つて貰へるだらう。併し話の途中でも、もしをかしいところや、分り難いところがあつたら、何時でも遠慮なく喙を容れて吳れ給へ。

『ぢやア、まだ貴君が始めない前から喙を容れるが、貴君は僕に一つの新しい心理學を講義して聽かせると云つてゐる。併し心理學はそんなに新しい學問だとは僕は思つてゐないのだがなア。心理學と心理學者とは今までに十分に存在し、學校でもこの方面の業績に就いては隨分聽かされたものだ。』

それはまアさうかも知れぬ。併し貴君がもつと細かく調べて見られるならば、それ等の偉大な業績は、寧ろ感官生理學に屬せしめなければならなくなるのであらう。精神生活に就いての學説は發達し得なかつたのだ。それはこの方面の學説が唯一の、本質的な認識不足に妨げられてゐたからだ。學校で敎へてゐることころでは、今日心理學の範圍はどうであらうか。かの價値ある感官生理學的洞察以前に、我々の精神過程に就いての多くの區分や定義があつて、これ等は言語の習慣に依つてあらゆる敎養ある人々の間の共通財となつてゐるのである。併しこれだけで明かに、我々の精神生活を把握するに十分ではない。貴君は氣付いてゐないのであらうか、あらゆる哲學者、詩人、歷史家、傳記者が自分自身の心理的を拵へ、心理的行爲の關聯並びに目的に關して自分の特殊の假定なり豫想なり（それ等は何れも多少は面白い點はあるが、併しみな同様に確實でない）を立てゝゐると云ふことを……そこには明かに、一つの共通的な基礎が缺けてゐるのだ。從つてそこには、心理學的な土臺に於いて云はゞ何等の尊敬も、何等の權威も存しないことにもなるのだ。誰でもその土臺の上を、好き勝手に

荒らし廻つてよいのだ。もし貴君が物理上の、或は化學上の質問を提出したならば、その方の『專門知識』を具へてゐないものは誰でも默つてゐるであらう。併しもし貴君が心理學上の主張を敢へてするならば、それに對して誰でもが判斷を下したり反對して來たりすることを覺悟してゐなければならない。萬人は自分の心理生活を持つてゐる。それ故に萬人は自分を心理家だと思つてゐる。併しそれは十分に正當な名稱だとは私には思はれない。から云ふ話がある、或る人が乳母に雇つて貰はうと思つて行つた時に、子供の扱ひ方を心得てゐるかと尋ねられた。で、その人は、だつて私も嘗ては小供であつたのですよと云つたと云ふことだ。

『で、この、總ての心理學者に看過されてゐる心理生活の「普遍的基礎」を、貴君は病人の觀察に依つて發見したと云ふのですか。』

我々の發見が病人の觀察に由來してゐるが故にとて、そこに價値がないとは私は信じてゐない。例へば、胚子學は、生れながらの畸形が如何にして生ずるかの說明が圓滑に出來なかつた時に、全く信用を失つた。併し私は貴君にから云ふ人々の話をして聞かせた、彼等の思想が勝手に動き廻り、彼等自身には全く下らないと思はれるやうな問題がどうしても氣になつて仕方がないのである。さう云つた異常の說明に嘗て學校心理學が多少でも寄與したことがあると、貴君は信じますか。然るにまた他

方、我々萬人に於ても、夜中には思想が勝手に動き廻り、さうして我々にはどうしても分らないやうな、我々を不思議に思はせるやうな、且つ著しく病的所産を髣髴するやうなものを造り出すと云ふことがある。つまり、我々の夢の事である。民衆は、夢には一つの意義があり、一つの價値があり、何物かを意味してゐることを、常に確信してゐた。夢のかう云ふ意味を學校心理學は、決して說き明かすことは出來なかつた。夢にはてんで手のつけやうがなかつた。その說明を試みたとすれば、それは非心理學的の說明で、例へば、感官の亢奮に歸したり、種々の腦髓の部分の不同なる睡眠深度に歸したりするのであつた。併し、夢の說明の出來ないやうな心理學は、常態的精神生活の理解にも役には立たないから、科學と呼ばれる資格がないと云つていゝのである。

『いや、なか〳〵鋒先銳いですね。慥に急所に觸れたやうですよ。實は、私も分析に於いて夢が非常に價値をおかれてゐると云ふことは聞いてゐる。夢に解釋を下し、記憶想起に對してはその背後にある實際の出來事を探るのだと云ふ風に聞いてゐる。併しまた、夢の解釋は分析者の氣まぐれに委せられてゐて、夢を解釋すべき方法に關して論爭し得るだけの、夢から結論を引出すことの正しさを論爭し得るだけの、準備がまだ十分でないとも聞き及んでゐる。もしさうだとすると、分析が學校心理學よりも優れてゐるにしても、あまり大きな顏は出來ないわけである。』

貴君の云ふところにはなか〳〵本當の事が澤山にある。夢の解釋が分析の理論並びに實際に對して比較すべからざる重要さを持つやうになつてゐることは眞實である。私が鋒先鋭く切込むやうに見えたのは、私にとつてはたゞ辯解のための一方途であるに過ぎない。多くの分析者が夢の解釋に際して隨分いろ〳〵の間違をやつたことを思ふては、私もいさゝか消氣て彼の偉大なる諷刺家ネストロイが云つた悲觀的な言葉——總て進歩と云ふものは始めに思つた半分ほどのこともないものだ——を首肯せざるを得ない。併し、人間と云ふ奴は何でも自分の手に投けられたものを、總てくしや〳〵にして了ふときまつたものであらうか。多少の注意を勉強とを以てすれば、人々は夢の解釋の大抵の危險を確かに避けることが出來るのだ。併し、かう脇道にそれてばかりゐては、肝心の講義がなか〳〵出來ないぢやないですかね。

『さうだ、私が貴君を正解した時に、貴君は新心理學の根本的豫想を語らうと云ふわけであつたのだ。』

さう云ふところから始めるつもりではなかつたのだ。我々が分析的研究の間に、精神的裝置が如何なる構成に出來上つてゐると考へるやうになつたかを、貴君に話して聞かせようと考へてゐるのだ。

『精神的裝置とはどう云ふものか、また何からそれが出來てゐるのか、それを聞きたいものだ。』

これら裝置の何たるかは、やがて明かになるが、それが如何なる材料で出來てゐるかは、どうか尋ねないでくれ給へ。それは何等心理學的の興味ではない。そんな問題の心理學に關係のないことは、宛も光學に對して、望遠鏡の筒が金屬で出來てゐるか厚紙で出來てゐるかゞ問題でないのと同じである。我々は一般に材料上の見地は不問に附しておくが、併し空間的の見地は不問に附さない。我々は、心理作用を掌つてゐる未知の裝置を、やはり實際に一つの道具の如くに考へる。その道具は多くの部分――それを我々は個所(Instanzen)と名付ける――から成立つてゐて、それ等の部分はそれ〲の機能を果たし、また確乎たる空間的關係を互に保つてゐる。卽ち、『前方』とか『後方』とか『上層部』とか『深層部』とかの空間的關係を保つてゐるが、それ等の關係は我々にとつては第一にたゞ、機能が規則的に相互繼起をすると云ふことを表はすだけの意味に過ぎないのだ。こゝまでは分つて貰へたであらうか。

『あまりよく分らぬが、多分段々分つて行くだらう。併し何れにもせよ、それは一つの特殊な精神解剖法だ。さう云ふのは、生理學的心理學者の間には全然存しない。』

何とでも貴君は考へてよいが、それは學問にはつきものゝ補助觀念だ。最も初めの補助觀念は、いつでも可成り生硬なものであつた。再吟味にかけよ――と、何時でも人々は、さう云ふ場合に云ふこ

とが出來る。こゝで、例の一般的になつてゐる『かのやうに』„Als ob“[(一)]を持出すまでもなからうと私は考へてゐる。そのやうな――『假設(フイクチオン)』(作り話)と哲學者ファイヒンガー Vaihinger はこれを名付けるであらうが――の價値は、如何に多くの事を人々がそれに依つて處理するかに懸つてゐるのだ。

註(一) わが國に於いてファイヒンガーの哲學を最も夙く紹介したものは森鷗外博士であつたらうと思ふ。博士にはこの哲學に基いて作つた『かのやうに』(大正三年四月籾山書店)と名付ける小説がある。ファイヒンガーの(一八五二年)の主著を『かのやうにの哲學』„Philosophie der Als Ob“と云ふ。(譯者)

さて話を續けるが、我々は常識の見地に立つて見ると、人間の心理の中には一つの組織體がある。それは、感官の亢奮並びに、一方では彼の肉體的要求と、他方では彼の言動的行爲との間に介在し、常に一定意圖を以てそれ等の間の仲介となるものである。我々はこの組織體を彼の自我と名付ける。ところで、これは何も珍しいことではなく、哲學者でなくとも誰でもかう云ふ假定はしてゐる。また或る人達は、哲學者であつても、やはりさう云ふ假定を爲してゐる。併し、精神的裝置はこれだけですつかり記述し盡されたとは、吾人は信じないのである。この自我以外にこれよりも遥かに廣汎な、雄大な、且つ不明な領域を吾人は認識するのである。さうしてこの領域を吾人はエス Es(it, id, それ)と名付けるのである。で、この自我とエスとの關係が、次に我々の問題となつて來なければならない。

吾人がこれ等二つの精神的個所又は地域を名付くるに、簡單な代名詞を用ゐて、別に朗々たるギリシャ名を用ゐなかつたことを、恐らく貴君は難ずるであらうが、併し吾人は精神分析に於いては、なるべく通俗的な物の考へ方をあまり懸離れないやうにしたいと心掛けてゐるのだ。さうして通俗的な考へ方の用ゐてゐる概念を棄てるよりは、これを科學的に利用出來るやうにすることの方を好むのだ、それは別に功績と云ふほどの事ではなくて、我々は寧ろさうするより仕方はないのだ。何となれば、我々の學説は我々の患者達から理解せられなければならないからだ。然るに患者は非常に知識的であることも屢々あるが、併しいつも學識があるとは限らないからだ。非人格的のエス(それ)は、常態人の或る云ひ表はし方に直接的に結び付く。『それ(エス)が私を閃き通つた。(Es hat mich durchzuckt)(蟲が知らせた)と人々は云ふ。『この瞬間に於いて私よりも强かつたのは、私の内なる或るもので(それが)あつた。』„C'était plus fort que moi.“

心理學に於いては、我々はたゞ比較の力を俟つてのみ記述することが出來る。これは何も特別なことではなくて、他の學問に於いてもまたさうである。併し我々はまたこの比較をいつでも變へて行かなければならない。いつまでも一つの比較に引掛つてをるわけには行かない。で、自我とエスとの關係を明かに知らうと思へば、まづ自我はエスの正面の一種と考へて貰ふのだ。その前面、云はゞその

外皮、その上層と考へて頂きたい。我々の知る通り、上層なるものはその特殊性を、それが接觸してゐる外界物の改變的影響力に負ふてゐるのである。で、自我とはエスなる精神裝置の上層が外界(現實)の影響を受けて變化したものであると、我々は考へるのである。そこに、我々が精神分析に於いて、空間的な考へ方を如何に愼重に扱つてゐるかゞ、貴君にもお分りであらう。自我は我々にとつては實際に、表面的なものであり、エスは深層的なものである。それは勿論、外部から觀ての話である。自我は現實と、本來の心理生活たるエスとの中間に横たはつてゐるのである。

『如何にしてさう云ふことの總てを知り得たのか、私は貴君に尋ねようと思はぬ。まづこれを云つて貰ひたい、そのやうに自我とエスとを區別してどうするのか、何の必要があつて、貴君はさうするのか。』

なか〳〵うまく尋ねてくれた。それで私の話も正しく進展して行く。重要で、且つ價値あることはつまり、自我とエスとが多くの點に於いて、相互に甚だ離反するものであることを知ることである。自我心理的行動をなすに就いての規則が、自我に於けるとエスに於けるとでは、全然異なつてゐる。自我の追及する意圖は異り、またその手段も違つてゐる。それに就いては云つておかねばならぬ事は甚だ多からうが、併しどうです、貴君はも一つ別の比較と別の實例とを聽く氣はありませんか。あの大戰

中に、如何に戰地と國內とが違つてゐたかを考へて御覽なさい。戰地に於いては國內に於けると、總て樣子が異なり、戰地に於いて禁ぜられなければならなかつたことも、國內に於いては許してあつた。何がそのやうな決定的影響を與へたかと云ふに、それは勿論、敵が近いと云ふことである。心理生活にとつては、それは外界が近いと近ふことである。外界――未知のもの――敵、これ等は嘗ては同一概念であつたのだ。ところで實例だが、エスにはそこに何等の葛藤がない。矛盾や相反は互に撞着することなく双存し、屢々妥協形成に依つて似たものとなる。自我の方はさう云ふ場合に葛藤を感じて、何とかそれに解決をつけようとするのである。その解決のつけ方とは、つまり一方の力を抑へて他方の力だけを生かしておくことである。自我は一つの有機的組織體であつて、この組織體の特徵は統一の方へ、綜合の方へと、甚だ著しい努力を拂ふことにある。この特質はエスには缺けてゐる。それは――云はゞ――無思慮である。それの個々の努力は、互に他を顧慮せず、制肘されずに、それ自身の意圖を追求する。

『では、それほど重大な心理的國內が存してゐるものとすれば、分析の起るまでどうしてそれが看過せられて來たのか、何とか分るやうに說明して貰へまいか。』

その質問と共に、我々は貴君の以前の質問の一つに歸ることになる。心理學はエスの領域に至るべ

き道を自ら阻んでゐたのだ。それは手輕ではあるが、到底確保すべからざる豫想を株守してゐるからである。つまり、總ての心的行爲は我々に意識されるもので、意識こそは心理の徴象だと云ふ豫想である。また、意識的ならぬ過程が我々の頭腦内に存してゐるにしても、これ等は心理的行爲の名に價しないから、心理學には關係がないとの豫想である。

『それは自明の事で、私もさう思ふ。』

左樣、心理學者たちもさう考へてゐるのだ。併しそれが間違ひであることは、つまり不適當な區別であることは、これを容易に示すことが出來る。自己觀察をして見て、誰でも容易に首肯することは何等かの準備をしてかゝらねと想起されない記憶が存すると云ふことである。併し貴君の思想のこれ等の前階は、やはり實際に心理的性質を具へたものには相違ないのだが、貴君はそれに就いて何も知ることが出來ない。貴君の意識中にはたゞ出來上つた結果だけしか入つて來ない。時々には貴君はこれ等の準備中の思想構成を、後になつて、遣り直しのやうな形に於いて自意識することが出來る。

『それは注意がそれた爲めであらう。そのために人々はそれ等の準備を氣付かなかつたのだ。』

それが胡麻化しだ！　さう云ふ風に考へるから、貴君の心內に非常に錯雜した心理的行爲が――それに就いては貴君の意識は何も經驗せず、それに就いて貴君は何も知悉しないところの心理的行爲が

――起り得ると云ふ事實を見遁すやうになるのだ。それとも貴君は、貴君の多少の『注意』が掛かりさへすれば、非心理行爲も忽ちに心理的行爲になると云はうとしてゐるのか。その外に何か云ふことがあるか。また催眠術の實驗に就いて見ても、そのやうな非意識的思想が存してゐることは、これを知らうとする意志さへあるなら何人に對してゞも、これを不可抗的に證明することができるのである。『私は別に否定しようとは思はないが、併し、私は貴君を遂によく理解したと信じてゐる。貴君の云ふ自我とは意識であり、貴君のエスとは只今非常に問題になつてゐる所謂下部意識である。併し何のために、そんなに別名の假面を用ゐるのか。』

これは別に假面ではない。この別名は適切ではないのだ。また私に科學の代りに文學を求めないで貰ひたい。何人かゞ下部意識に就いて云々する時には、その人はそれを局所的に、精神中に在つて意識の下半に横はる或るものとして解してゐるのか、或は質的に、別の意識、云はゞ下界的意識と云ふ風に解してゐるのか、それは私には分らぬ。多分彼は全體を漠と考へてゐるらしいのである。唯一つ承認せらるべき相反は、意識と無意識との相反對立である。併し、この相反對立が自我とエスとの區別と丁度符合すると考へるのは、無理にこぢつけた間違ひであらう。何れにもせよ、もしそのやうに簡單に行つたならば、素晴らしいことであらうが、もしさうならば我々の理論は甚だ容易に働くのだ

が、併しさう簡單には參らぬ。たゞ、エスに於いて起る一切は無意識的であり、意識的とはならず、自我に於いて起ることのみが意識化し得ると云ふことだけは本當である。併し、自我內に於ける心理的過程とても總て、常に必ず、意識化し得るとは限らず、自我の大部分は永く無意識のまゝであり得るものである。

或る心的過程が意識化されるのは、誠に錯雜した事柄である。それに就いて我々が假定してゐることを——今度もドグマ的にだが——貴君にお話せずにゐられない。只今も申した通り、自我はエスの外層であり、邊層である。ところで、この自我の最外邊の上層に、一の特殊な、外界に直接してゐる個所が、組織が、器關が存すると我々は信ずる。この器關の亢奮に依つてのみ、我々が意識と名付ける現象は生ずるのである。この器關は外からも同樣に亢奮を與へられるので、感官の助けを俟つて外界の刺戟を受容れることは、丁度內からと同樣である。この內側に於いては、その器關はまづエスに於ける感覺を、次にはまた自我に於ける過程を、認識し得るのである。

『こいつはいよ〳〵面倒になつて、我輩にはなほさら分りにくゝなつて來た。だが、貴君は私に素人(非醫者)が分析的處置をしてもよいかと云ふ問題に關する話をしかけたのであつた。ところでその大膽な、面倒な理論——そいつは私にはまだ十分に呑込めないが——その理論を細かく話してくれたの

は、どう云ふわけであるか。』

貴君にまだ十分に呑込ませてゐないと云ふことは、私にも分つてゐる。それは到底不可能でもあるし、從つて私の固より意圖するところでもない。もし我々が我々の學生に精神分析の理論の講習を與へるとすると、我々は彼等に最初如何に印象を與へることの少いかを我々は觀察することが出來る。彼等が精神分析學說に對して冷淡であることは、宛も彼等がこれまでに教養せられて來た抽象事に對すると同樣である。内には確信を得たいとの意志あるものもあるが、併し確信を得たと云ふ色は一向に見えない。で、吾人は、凡そ他人を分析しようと思ふならば誰しもまづ自分から分析を受けるべしと云ひたいのである。この『自己分析』(これは誤解に依る名づけ方であるが)の間に始めて、分析の主張する心的過程をまざまざと我が身に、否、我が心に見せつけられたならば、彼等も確信を得て、それに導かれて後には分析者となつて行けるのである。だから、不偏不黨者である貴君に、我々の理論の正しさを確信せしめようなどゝ云ふことが、どうして期待出來よう。貴君のやうな人に對しては私はたゞ不完全な、簡單な、從つてまた分り難い說明を、貴君自身の體驗の裏付けと云ふ加勢なしに提示することが出來るだけである。

私の意圖は別にあるのだ。私と貴君との間では、分析がナンセンスであるかないか、或はその說く

ところが正しいか間違ひであるかと云ふことは、問題でないのだ。私が貴君の前に我々の理論を展開して見せたのは、分析とは如何なる思想内容を有するものであり、如何なる豫想を以て分析は個々の患者に臨むものであり、また患者を如何に扱ふものであるかを、それに依つて最もよく貴君に說明出來るからである。それに依つてやがて、一つの決定的な光りが素人分析の問題の上に投ぜられるのである。こゝまで私の話について來てくれて、逃出さないのであるから、貴君はこれで最も面倒な問題は通り越したのだ。これからあとは、段々樂になるであらう。併し、こゝらで一寸息を入れさせて貰はう。

## 三、神經症の發生機制とその處置法

『一體神經病は如何にして起るものなのか、それを一つ、精神分析の理論に照して說明して貰へないかと思ふのですが……。』

よろしい、やつて見ませう。併しそれをやるためには、我々は我々の所謂自我とエスとを一つの別の見地から、卽ちこの前には空間的見地から論じたが、今度は動的見地から硏究しなければならぬ。

その動的見地とは、つまり、自我及びエスの中に、及び間に、働く力に基いて考へる見方である。さきに我々は、精神的裝置に就いては、十分に記述しておきましたね。

『またあんな分りにくい話ですかね。』

今度は分りにくゝないつもりです。貴君にも段々分つて行くであらう。で、我々はかう假定するのだ、心理的裝置を活動へと驅立てる諸勢力は、肉體機關に於いて偉大な肉體的欲求の表現となつて生ずる。我々の詩人哲學者シルレルの云つた言葉『食欲と戀愛』„Hunger und Liebe“ を貴君は想起するであらう。やはりこれ等は重大な二大勢力である。これ等の肉體的慾求が心理的活動への刺戟である限り、これ等二大慾求を我々は本能 Triebe と呼ぶのである。近代語は多いがこれにまさる適當な言葉はない。ところで、この本能がエスの世界に充滿してゐるのである。エスにある總てのエネルギーはこれ等の本能から發するのだと、簡單に云へば云へる。自我に在る力とてもやはり他のところから發生したものではなく、エスにあつたものから派生したのだ。ところで本能は何を欲するか。滿足を欲する。つまり、その狀態に於いて肉體的欲求の滿され得る如き立場の生ずることを欲する。慾求的緊張が滿足に依つて弛緩することは、我々の意識器關に依つて快樂として感ぜられる、この緊張が再度高まつて來ると、段々不快になつて來る。この緩急の動搖からして快不快感の連續が生ずる。

この連續に應じて精神的裝置はその活動を規則的に反覆する。これが卽ち『快樂原則の支配』と云ふことである。

エスの本能慾求が何等の滿足を發見し得ない時、堪え難い狀態となる。然るにそのやうな滿足を得べき立場はたゞ外界の力を俟つてのみ達せられ得るものであることが、やがて經驗に依つて分つて來る。そこで外界に向けられてゐるエスの部分、卽ち自我がその機能を發揮するやうになる。總て衝動力が直ちに乘物を整へてエスから乘込んで來ると、自我は云はゞその舵をとるのである。この舵取りが缺けてゐると目的を果すことが出來ない。エスに在る本能は卽時に、我武者羅に滿足を得ようとするが、から云ふやり方では滿足は得られないか、或は手痛い障害を受ける。そこでこのやうな損害を防ぎ、エスの慾求と外界の抗議との間に立つて調停するのが自我の役目である。だから自我の活動は二つの方面に向つてゐるわけである。一方に於いて自我はその感覺器關、意識組織の助力を俟つて外界を觀察し、障害なく滿足を得られるやうな都合のいゝ機會を覗つてゐるのであるが、他方に於いてはエスに影響を與へてその『情熱』を制御し、本能をしてその滿足を苒延せしめ、またそれが必要と認められた場合の如きは、本能の目的を改變し、それを昇華せしめるやうなことさへする。自我はこのやうにエスに於ける亢奮を制御することに依つて、自我發生以前には唯一の有力な原則であつた快

樂原則の代りに、所謂現實原則を有力なものとする。この原則とても、同じ目的を追及するものではあるが、併し現實外界の設定する條件を考慮に入れる。その後になつて自我は、右に述べて來たやうに外界に適應すること以外に、滿足確保の道が他にあることを、知るやうになる。卽ち、外界と自我との關係を變へ、意圖的に或る條件を外界に作り上げ、その條件に依つて滿足を可能ならしめるのである。かゝる活動は自我の行爲として最高のものとなる。自分の情熱を支配し、現實の前に已れを屈するか、或は情熱に味方して外界を喰ひ止めるか、何れが目的に協ふかを決定することは、人生に處する上の知慧の最も微妙なるものである。

『では、エスが自我のそのやうな支配に屈するのですかね。お說を私が理解し得たところでは、エスの方が強い部分であるやうだが……。』

左樣、うまく屈するのですね。もし自我がその組織と行動力とを完全に保有し、エスのあらゆる部分に滲透し、それ等の部分の上に自分の勢力を振ひ得るならば、うまく行くのである。實は自我とエスとの間には本來何等の矛盾撞着はない筈である。二者は互に依屬し合ひ、健康時には實踐上で相互に分裂は來たさないものである。

『それは悉く成程と肯ける。併しこのやうな理想的關係に於いて、病的障害の個所が生ずると云ふの

が、分りかねる。』

それは尤だ。自我並びに、エスに對する自我の關係が、この理想的要求に協つてゐる限りは、また何等の神經障害は生じ得ない。病氣は實に意外な個所から發するのである。尤も、病理一般によく通曉してゐるものならば、正にその最も重要な發達を遂げ、變化（自我としての）を示したところに病氣の芽が、機能障害の種が潜んでゐるのを實證的に發見したからとて、敢へて驚きはしないが……。

『貴君の博學、到底我等淺學の理解し得るところに非ずだ。』

ぢやア、少し細かくお話するより仕方がない。小さな生物はあまりに强大な外界、破壞的な力に充ち滿ちてゐる外界に對しては、誠に愍れな、無力な存在ではないだらうか。小さな自我組織を十分に發達させてゐる一つの原始的生物は、總てこれ等の『外傷』に曝されてゐる。この生物は自分の本能的願望を『盲目的』に滿足させる。と、そのために屢々沒落する。自我がエスから變化することは、就中、生命維持のための一進步である。沒落して了つては何も學ぶことは出來ないが、併し人が幸にして外傷に堪えたならば、それと似た立場に近付いた時に、嘗て外傷を受けた時に經驗した印象を簡約に反覆することに依り、つまり强迫感に依つて、危險信號を自分に與へるのである。危險の知覺に對することのやうな反應から、やがて逃避の試みが生ずるやうになる。この試みは生命を救ふ効果があ

るが、併しそれは外界に存する危險に對し能働的に、恐らくは攻擊的に、拮抗し得る程、その人が强くある限りに於いてゞある。

『それはみんな、貴君が約束したところとは、非常にかけ離れた話ですね。』

いや、これが約束した話に近づいてゐるのだが、貴君にはそれが分らないのである。後には十分に行動能力ある自我組織を持つやうになる生物に於いても、始め幼年の頃にはその自我はまだ强固でなく、エスから十分に分化してゐない。そこで考へて御覽なさい、この無力な自我がエスからの本能的慾求を經驗する時にはどうなるかを……。この自我は無力であるが、エスからの本能的慾求を滿たせば危險であると云ふことを察知するが故に、この慾求に抵抗せんとするのである。外傷を受けさうな危險な立場だ、外界との正面衝突だとの不安な感じが襲ひ掛るのだが、自分はそれに對抗するだけの力をまだ具へてゐないが故に、これを支配することが出來ない。自我はそこで、本能の危險を取扱ふこと、宛もそれが外部の危險であるかの如くである。卽ち自我は逃避を試み、エスのこの部分から身を退け、これまでは本能亢奮に對して示して來た一切の干渉を棄てゝ、エスを放任して了ふ。これを自我はこの本能亢奮を抑壓したと、我々は云ふのであるが、それに依つて一瞬的には危險を防ぐことが出來るけれども、併し內と外とを取換へることに依つてその報ひを免れることは出來ない。人間は

自分自身を避けることは出來ない。抑壓することに依つて自我は、これまで自分が是正する立場であつた快樂原則に屈服することになる。その損害は當然自我が負はねばならぬ。その損害とは卽ち、自我が今や自分の勢力範圍を永く局限して了つたと云ふ點に存する。抑壓されたる本能亢奮は、今や孤立し、放任せられ、外からの干涉を受けない代りに、自分の方でも他に影響を及ぼすことがなくなる。つまり勝手の道を一人歩きせねばならぬ。自我は大抵はまた後に、强くなつた時に、もう抑壓をやめて了はないやうになる。自我の綜合は亂れ、エスの或る部分は自我には手の屆かぬところとなる。併し孤立したるエスの本能亢奮はそのまゝ居眠りしてゐるわけでない。自分には常態的滿足が拒否せられてゐるので、その埋合せをすることを心得てゐて、自分の代表としての心的派生物を作り上げ(自分の影響力に依つて自分と同時に自我から分離したところの)他の諸過程と結び付き、さうして遂に分らぬほどに歪められた代償構成となつて自我の中に、意識界に突入し、人々が徵候(症狀)と呼んでゐるところのものを作るに至る。そこで我々は一時に、神經障害の關係を見せられるわけである――その綜合を禁制されてゐる自我、エスの部分に對して何等の影響力を持たぬ自我、抑壓されたものとの新たな衝突を避けるためにはその多くの活動を放棄しなければならない自我、抑壓されてゐる本能亢奮の派生たる徵候に對する多くの防禦活動に於いて奔命に疲れてゐる自我、並びにエスである。(こ

のエスの中に於いては、個々の本能が獨立的に活動を許され、全人格の關心を顧慮することなしに自分の目的を追及し、エスの深部に勢力を張つてゐる原始心理の法則に、より多く服從してゐるのである。）全般の情勢を大觀すると、神經症發生の簡單な公式として、我々はかう考へることが出來る。即ち、自我はエスの或る部分を無理に抑壓しようと試みた、それが失敗してエスはそれに對する復讐をなしたと。神經症はこのやうに、自我エス間の葛藤の結果である。何故自我はかう云ふ葛藤をエスとの間に起すかと云ふに、それは自我が現實外界に對して全然從順であらうと欲するからで、この事は深い研究に依つて判明したのである。相反矛盾は外界とエスとの間に生ずる。然るに自我はその本質に忠實ならんとして外界に味方をすると、即ち自分のエスと葛藤を起すやうになる。併しよく注意して貰ひたいことは、この葛藤と云ふ事實が病氣の條件を作るのではなく——何となれば、現實とエスとの間のそのやうな矛盾は避くべからざるもので、自我はその葛藤の中にあつて調停するのが不斷の任務だから だ——寧ろ、この葛藤を無くするために自我の驅使し得る抑壓力が甚だ不十分だとの事情のために生ずるのだと云ふことである。併しこれにも根據はあるのだ。つまり、自我がこの任務を課せられた時分に、まだ發達不十分で無力であつたことである。實際、決定的な抑壓は總て幼年時代に起るのである。

## 三、神經症の發生機制とその處置法

『なか〳〵面白いところがある。精神分析は神經症の發生を如何に考へ、從つてまたこれに對して如何なる方法を講ずべきかに就いて、貴君は私にたゞ話してくれるだけで、私は御注意に從つてそれへの批評はしない。私は種々なことを尋ねるところであつたのだが、二三の事は後で持出すことにしよう。先づ私は貴君の考へ方を土臺にして更にそれを敷衍し、一つの理論を自分で打立てゝ見たい誘惑をやはり感ずる。貴君は、外界・自我・エス間の關係を立て、自我が外界に依屬してエスに戰ひを宣するところから神經症が生ずると云ふのである。併しまた別の場合も考へられるのでないだらうか、即ち、自我はそのやうな葛藤に於いて自分をエスから引離すと共に外界への顧慮を放棄すると。さう云ふ場合には、どうなるであらうか。精神病の性質に關してこれは私の素人考へだが、自我のこのやうな離脫は精神病の條件となり得るのでないだらうか。そのやうに現實に背反することが、どうも精神病の本質であるやうに思へる。』

左樣、私は自分でもさう考へてゐるのです。さうしてこれは正しい考へ方だと思つてゐる。尤も、かう云ふ想定を證明するには相當錯雜した關係を論議して見る必要があるけれども……。神經症と精神症とは明かに內的關係を有してゐるが、併し或る決定的な點に於いて相互に別々である。この決定的な點とは恐らく、自我がそのやうな葛藤に參與することであると思ふ。エスは何れの場合に於いて

もその執拗な盲目的な力を保存してゐるやうである。

『それでどうなるのです？　續けて下さい。貴君の理論は神經症の處置に對して、どう云ふ暗示を與へるのですか。』

こゝまで來れば、我々の治療上の目的は容易に說くことが出來る。我々は自我を確立しようと思ふのだ。自我力の制限を撤廢しようと思ふのだ。早期抑壓の結果、自我が失つてゐた支配力（エスに對する）を復興させようと思ふのだ。たゞこの目的のために我々は分析を行ふのだ。我々の技法の全體は、この目的に向けられてゐるのだ。我々は如何なる抑壓が起つてゐるかを吟味し、自我を動かして（我々の助力と相俟つて）抑壓を是正せしめ、逃避の試みに依つて葛藤を無くするよりももつとよい方法でなくするやうにさせるのである。ところがこれ等の抑壓は甚だ早期の幼年時代に起つてゐるのであるから、我々の分析的操作もこれ等の生涯時期に溯らなければならない。これ等の葛藤的立場は大抵は忘れられてゐるが、我々はこれ等を患者の記憶に於いて復活させようと欲するのであつて、これを復活させる道は、患者の徵候、夢、聯想等に依つて指示せられる。併しそれ等徵候、夢、聯想などは、エスの心理の影響を受けて我々には理解されないやうに怪しい表現をとつてゐるから、我々はまづこれ等を解釋し、飜譯しなければならない。聯想、思想、想起などは、患者に於いて抵抗あるた

めに率直に我々に報告せられないものであるから、それ等が抑壓されてゐるものと何等かの形で關係を保ち、またそれの派生であることを、我々は假定してよいのである。患者が報告する時の抵抗を克服するやうに彼等を促すことに依り我々は、彼の自我をして逃避の試みへの傾向を打破せしめ、抑壓されてゐるものと近付くやうにさせるのである。最後に、抑壓されてゐる心的立場を首尾よく記憶中に想起せしめ得るやうになれば、彼の素直さは大いに賞讃に價するのである。時代が別になつてゐることが彼には好都合となる。さうして彼の幼兒的自我が怖れて逃げ廻つたその可怕いものは、生長し強くなつた自我にとつては、屢々單なる子供だましに過ぎないものと思はれるやうになるのである。

## 四、精神分析と性慾

『貴君が今まで私に話してくれたことは、心理學であつた。それはいさゝか奇妙で、賴りなく、且つ漠としてゐたが、併しそれは常に（もし私がさう云つて然るべきならば）綺麗な、いやらしくない話であつた。ところで私はこれまで貴君の精神分析の事はあまり知つてゐなかつたが、併しいろ〳〵噂を聞いてゐたところでは、精神分析とは綺麗などころか、甚だいやらしい學問だと云ふ話であつた。

で、どうも貴君はこれまでのところ、そのいやらしい話を故らに差控へてゐたのではないかと云ふ感じがするのだ。また私にはなほ別の疑ひも起つて來ざるを得ない。精神症と云ふものは、貴君の云はれる通り、やはり精神生活の障害である。で、我々の倫理、我々の良心、我々の理想の如き重要な事柄が、これ等深刻な障害に於いて、何等かの役割を果してをらないものであらうか。』

貴君はつまり、吾人のこれまでの話に於いて、最も下劣なことゝ最も高尙なことゝが缺けてゐると云ふのですね。それは併し、吾人が精神生活の內容一般に就いてまだ何も觸れなかつたところから、さう云ふ感じを與へたのです。併し私に只今一度だけ、話の進行を妨げる邪魔者の役割を果させて下さい。私は貴君に隨分心理學の話をしたが、それは分析的操作が應用心理學の一部分であり、また精神分析は分析以外ではあまり人に知られてゐない心理學でもあると云ふことを、感ぜしめようためであつた。分析者は、それ故に何よりもまづ、この心理學（深部心理學又は無意識心理學）を、學び知らなければならない。少くとも、今日のところそれに就いて分つてゐる限りを、學び知らなければならない。それは、我々がこれから論を進めるに就いて、是非必要である。併し、只今のところで、貴君はこの心理學がいやらしくないと云ふことを暗示せられたに就いて、何と考へられるか。

『左樣ですね、分析中には性生活上の最も秘密な、且つ最も忌まはしい話を事細かく喋舌つてしまふ

のだと云ふ風に、一般に取沙汰してゐる。貴君のお話し振りでは、さうとも私には考へられないのだが、もしさうだとすると、そのやうな處置はたゞ醫者のみに許されると云ふのが、至極尤なことゝなる。その分別心を十分に信用出來ないやうな者、その人格に道德の缺けたやうな者に、どうして我々はそのやうな危險な自由を容認することが出來よう。』

醫者が性的方面の事に多少の先權を有してゐることは、本當である。彼等は成程、生殖器を檢査することさへ許されてゐる。尤も、東洋に於いてはそれは許されない。また多くの理想的改良家は――私が何人の事を云つてゐるか、貴君は御存知であらう――さう云ふ先權に反對した。併し、貴君の知りたい事は分析に於いてさうであるか、また何故にさうでなければならないかと云ふことであらう。――實際、分析に於いてはさうなんである。

併しそれがさうでなければならないのは、第一に、抑々分析なるものは完全なる正直の上に打建てられるものだからである。分析に於いては人々は、例へば財產事情をさう云ふ正直さを以て打明け、市民同志の間では（よしんば相手が競爭者や稅吏でなくても）差控へる程の事でも、喋舌つて了ふのである。このやうに絕對正直でなければならないと患者に要望するために、分析者の方にも重い道德上の責任が生ずると云ふ事は、私も勿論これを否認しない。寧ろ自らそれを强調する。第二に、さう

でなければならない理由は、精神病の原因及び契機の中では性生活に關するそれが、特に重大であり特に目立ち、恐らく一つの特殊な役割をさへ演ずるからである。分析は、患者が齎して來た分析上の素材、材料を改鑄するより以外の事を、何を爲し得よう。分析者は決して性的方面へとおびき出して來るものではない。別に分析者の方からかうしろと命ずるわけではない。たゞ彼等の性生活の內奥の秘事が眼目になつてゐるのだから仕方がない。分析者は患者にどこからでも好き勝手なところから報告を始めさせる。さうして患者自身で性的なことに觸れて來るまで靜かに待つてゐる。私は常にわが派の學徒に警告を與へてゐる、性的契機が何等の役割を演じてゐない場合に打突かるであらうことを我々の反對者たちが我々に知らせてゐると。それを分析の中へ導き入れることを避けてさへゐるならば我々はさう云ふ場合を發見するやうな機會を自分で妨げはしない。ところが、幸か不幸か我々の內の何人もが、さう云ふ場合にまだお目には掛らないのである。

神經症の原因を吾人が性に——當然な程度に、或は不當な程度に——認めてゐることが、精神分析反對者の最も强い動機となつてゐることは、勿論私も知つてゐる。それは果して間違ひであらうか。それは我々をして云はしむれば、現代の文明生活の全體が如何に神經症的であるかを示すに過ぎないのである。所謂常態者の態度も神經症者のそれと、あまり大して相違してをらぬからである。ドイツ

の有識社會で精神分析に關する審判が盛んに行はれた時分に――今日ではあまり喧ましくなくなつた――、或る發言者は自分の報告の後に患者たちに語らせると云ふので、特に權威ある者となつてゐた。それは診斷上の意圖のためであり、また分析者の處置を試驗するためであるのは明かだ。併し、彼はかう附言した、患者たちが語り始めた時、私が彼等をしてその口を緘せしめた、と。貴君は、かう云ふ證明の仕方を何と思はれるか。有識社會は彼の話者に大いに讃意を表するばかりで、當然彼のために恥づべきことをしなかつた。さう云ふ勝者らしい自信と自得とは、先入見が一般に行亘つてゐることを意識してゐるが故に、これを得て居るのであつて、この話者がこのやうな論理的粗笨さを示したのは、正にこの自得のためであることは明かである。當時私の學派であつた二三の者は、數年の後にはこの必要に應じて、人間社會を性の桎梏（精神分析に依つて人間社會が課せられる桎梏）から解放せんとした。或る者はかう說明した、性的と云つても性慾的なものではなく、抽象的、神秘的なものであると。第二の者は、性生活とは、人間が力と支配の方へと己れを驅り立てる要求を生かさうと欲する分野の一つに過ぎないのだと說いた。彼等は甚だ多くの贊同を得た、少くともその直後に於いては……。

『だが、私はこゝで一度だけ不偏不黨でなくなることにする。性慾は生物の自然な、自發的な要求で

はなく、他の何事かを表はすものであると主張するのは、甚だ大膽であるやうに思はれる。現に動物を實例にとつて見れば、思ひ半ばに過ぐるものがある。』

全くである。これほど馬鹿げた藥品を、もしたゞ性慾に暴威を振はれることの恐ろしさに對する反對劑として持出すならば、社會は決してこれを不用意に丸呑みにすることはあるまい。

ところで私はやはり貴君に告白するが、貴君は性的契機が神經症の原因に於いて非常に大きな役割を果すやうに見ることを拒まれたけれども、それは不偏不黨者としての貴君の役目柄からいさゝか不似合であると私には思はれる。さう云ふ反感があつては正當な判斷を得難からうとの不安を、貴君は持ちませんか。

『貴君がそれを云はれたことは、私には甚だ遺憾である。貴君の私に對する信任に動搖を來たしたと見える。では、何故に貴君は私以外の者を不偏不黨者に選ばなかつたのか。』

その以外と云ふのが、やはり貴君と違つた考へ方をしないやうだつたからだ。併しその人が始めから性生活の意義を直ちに認めるやうであるならば、世間の人々はみな叫ぶであらう、彼は不偏不黨者ではない、彼は君の派の人であると。否、不偏不黨者でない事はない。私は貴君の考へ方に影響を與へるであらうとの期待を決して棄てるものではない。併し今度の場合は、前に論じた場合とは違ふと

云ふことを、私は知つてゐる。心理學上の問題を論議する場合ならば、貴君が私の意見に贊成して吳れようが吳れまいが、そんなことはどうでもよく　たゞ純粹に心理學上の問題が要點であると云ふ印象を與へさへすればよかつたのである。今度の性慾の問題に於いては、反對せんとする貴君の最も强い動機が、實は貴君が他の多くの人々と共に頒前するところの、始めから持つてゐる敵意であると云ふことを、自ら洞觀して頂きたいのである。

『併し私には、貴君をしてそのやうな確乎たる不動の信念を持たしめたゞけの經驗が、缺けてゐるのだもの…。』

まア、いゝです。私はなほ自分のお話しを續けて行かう。性生活は啻に一つの强烈な享樂的刺戟であるばかりでなく、また眞劍な科學上の問題である。この方面で多くの新しいことが知られ、また多くの特別なことが說明せられた。私が旣に貴君にお話したやうに、分析は患者の早期幼年時代にまで溯らなければならないのである、何故ならば、幼年時代の、自我がまだ弱い時分に於いて、決定的な抑壓が生ずるからである。併し幼年時代に於いては、慥に性生活などゝ云ふものはなく、思春期になつて始めてそれが生ずるのだと云ふのですか？　どう致しまして、性的の本能感動は誕生以來生活につきもので、幼兒的自我が抑壓と云ふことをするのは正にこの性本能防禦のためであると云ふこと

を、我々は發見したのである。既に幼兒が性の力に對して苦鬪し、また後年には有識社會の例の話者が苦鬪し、更にその後には私の學派の者が彼等獨自の理論を樹てゝ苦鬪する如きは、正に好箇の三幅對ではないだらうか。どうしてさう云ふことになるのか？　それに對する最も一般的な說明としては抑々我々の文化が性を犧牲としてその上に打樹てられてゐると云ふにあるだらうが、それに就いてはなほ他に云ふべきことが多々ある。

幼兒性感の發見は、人々がその發見を恥ぢなければならないものゝ一つである。二三の小兒科醫は常にそれを承知してゐたが、また看護婦の間にもそれを知つてゐるものがあるやうである。兒童心理學者と自稱する理想的な人々は、批難的な口吻で、兒童を有邪氣視することに就いて云々してゐる。またしても論議の代りに感情である。我國の政治團體に於いては、さう云ふ出來事は每日のやうに起きる。反對派の誰かゞ立上つて、行政、軍事、司法その他に於ける失政を難ずると、やがて他の一人(與黨の一人であれば最も妙)が立つて、そのやうな批難は國家の、軍事の、王朝の、或は更らに國民的の名譽感情を侮辱するものであると說く。さう云ふ批難が當つてゐるかどうかはどちらでもよいようである。かゝる感情は如何なる侮辱にも我慢はしないのである。

兒童の性感は勿論、大人のそれとは違つてゐる。性の機能はその始まりから、我々によく分つてゐ

る窮極形態に至るまで、一つの複雜な發展を閲するものである。性的機能はそれ〴〵特殊の目的を持つた多くの部分本能から共同的に生長し、種々の時期を經て組織的となり、遂に生殖の用を果し得るやうになる。部分本能はみな窮極の歸結に對しては、同樣に役立たない。それ等は轉向され、變形せられ、或る部分抑壓せられなければならない。さう云ふ長い間の發達を閲さなければならないので、いつでもそれが無難に遂げられると云ふわけには行かない。そこに發達上の障碍が起り、早期發達段階に於いて部分的の定着が生ずる。後年になつて性的機能を果す上に障碍が起きてゐる場合には、性の力——我々の所謂リビドー——はそのような早期の定着個所に好んで退行する。幼兒性感並びにそれが成熟するまでの變化を研究することに依つて我々は、また所謂變態性慾への理解の鍵を把握するやうになつた。變態性慾に對して人々はあらゆる嫌惡の徵象を示して來たが、而も彼等はそれが如何にして生ずるかを說明することが出來なかつた。この分野の全體は並々ならず興味があるが、たゞそれに就いて私が貴君にもつと話したとしても、それは我々の對話の目的にはあまり意義がない。幼兒性感を正解するためには、人々は勿論解剖上並びに生理上の知識を具へてゐなければならないが、遺憾ながらこの知識は纏つては醫學派の方では得ることが出來ない。文明史や神話に關する知識が、やはり缺くべからざるものである。

『要するに、私にはまだ幼兒性感なるものは見當もつかない。』

では、これからなほ暫くこの主題に就いて論じる事にしよう。どうもこれに就いてはまだお喋舌りをしないでは具合が惡いやうだ。まア聽いて下さい、幼兒の性生活に於いて最も著しいことは、幼兒が甚だ前途遼遠なる全的發達を生後最初の五ケ年間に遂げるらしいと云ふことである。五歳以後思春期に至るまでは所謂潜在期で、この時期には常態的には性感は何等の發達をなさず、その反對に性的の力はその强さに於いて衰へ、幼兒が旣に實行し或は知悉したことでもその多くが廢止され、或は忘却されるものである。生涯のこの時期に於いて、性生活の早期開花がしぼんで了つた後に、羞恥、嫌惡、道德の如き自我の諸々の心的態度が擡頭する。それ等の心的態度は後年の思春期の暴風に對抗し新たに覺醒して來た性慾に進路を示す役目を勤めるものである。この所謂、性生活の第二期擡頭は、神經病の發生と重要な關係がある。この第二期擡頭はたゞ人間に於いてのみ見られることで、恐らく神經症になると云ふ人間的特權の條件の一つであるやうだ。前期性生活は精神分析以前には看過せられてゐたことは、丁度他の方面に於いて意識生活の背景が看過せられてゐたのと同樣である。これ等兩者がまた內的に聯關してゐると貴君は想像するであらうが、それは正しい。

この早期性感の內容、變化、行動に就いては、報告すべきことが多々あるが、それは貴君の思ひも

寄らぬことであらう。例へば、男の兒はその父に喰はれると云ふ恐怖を屢々抱くが、そんなことを聽かされては貴君はさぞ驚くであらう。(而も私はこの恐怖を性生活の表現の中に入れるのだから、貴君はなほさら不思議に思ふであらう。)併し貴君は恐らく小學生時代に聽いた例のクロノス神がその子供たちを喰殺したと云ふ神話を忘れてはゐまい。始めてこの神話を聽いた時に、貴君はさぞかし不思議に思つたに違ひない。併し私は信ずる、我々總てはそれに就いてその當時何も考へはしなかつたと。今日では我々はまた多くの童話を——その中には例へば狼のやうな、人を喰ふ動物が登場する童話を——思ひ出す事が出來る。さうしてこの動物に於いて父の假裝を認識するであらう。私はこの機會に於いて貴君に確言しておかう、神話と童話世界とは一般に幼兒的生活を理解することに依つて始めて理解されるものであると云ふことを……。で、これはつまり分析的研究の副的利得である。

右にも劣らず貴君が驚くであらうことは、男兒がその父に男性器を奪はれるであらうとの不安に惱むと云ふことである。つまりこの去勢恐怖のために男兒の性格發展上に最も力强い影響が及ぼされ、その性的方向が決定される程である。今度もやはり神話に依つて精神分析の云ふところを、貴君が信ずる勇氣を持つやうになる。自分の子供を喰つた同じクロノスが自分の父のウロノスを去勢するが、やがて母の詭計のお蔭で救はれた息子のツォイスに依つて、今度はその報復として去勢される。幼兒

の早期性感に就いて精神分析が述べる一切は、精神分析者の荒唐無稽な空想から生じたものであると假定せんとするに傾いてあるにもせよ、この空想は原始人の空想活動と同じものを創り出してゐるのだと云ふことは貴君も認めるであらう。さうしてその原始人の空想活動の産物の殘滓で、神話や童話はあるのだ。これとは違つた、もつと人に受容れられ易い、さうしてまた恐らくもつとぴつたりとした考へ方は、幼兒の精神生活に於いて今日もなほ同じ古代的な契機が（嘗て古代の文化に於いて廣く行亘つてゐた契機が）屢々指摘されると云ふことである。幼兒はその精神の發達に於いてその祖先の歷史を簡單な形で反覆するであらうことは、丁度胚種學に於いて旣に久しく肉體上の同じ事實が認識せられてゐたのと同じである。

早期幼兒の性感の特徵として右以外に認められることは、本來の女性的陰莖はそこに於いてまだ何等の役割を果してゐない――それはまだ子供にとつては、發見されてゐない――と云ふことである。一切の强調が男性的陰莖の方にばかり加へられてゐて、それが存在するか否かゞあらゆる關心の中點となつてゐる。少女の性生活に就いては、男兒の性生活に就いてよりも、我々は知るところ少い。我々はこのやうに少女の方の性生活を知るところ少いと云ふことを恥づるには及ばないのだ。が、生長した婦人の性生活も心理學にとつては暗黑の大陸である。併し少女は男のと等價の陰莖が自分には缺

けてゐると云ふことを苦痛に思ひ、そのために自分を劣等に考へ、さうしてその『男性器嫉妬』が婦人特有の一聯の反應を惹起させるやうになるのだと云ふことを、我々は發見したのである。

子供に特有なのはまた、兩便の排泄の必要に性的興味が纏綿してゐることである。後になつて教育の力に依つて兩者を截然區別するやうになる。機智的に兩者を關係させてゐるのが、教育に依つて再び關係を止揚するやうになる。我々成人には排泄物などはいやなものに思へるが、併し子供に於いては排泄物への嫌惡の心が生ずるのは餘程時日が經つてからである。これは兒童心理の天使のやうな純潔に似合はしからぬやうだが、やはりこれに依つても否定はされなかつたのである。

併し我々として何よりも最も注意を拂はねばならぬ事實は、子供がその性的願望を常に必ず自分の近親者に、即ちまづ第一に父母に、次にその兄弟姉妹に向けると云ふことである。男兒にとつては母はその最初の戀愛對象であり、少女にとつては父がそれである。但し兩性的傾向があるから同時に同性親への愛もそこに働くことがあるが……。同性親は常に邪魔をする競爭者として感ぜられ、また强烈な敵意を以て眺められることも稀ではない。貴君が私を正しく理解してくれてゐるならば、私は、子供が好きな方の片親から一種の感傷愛――この一種の感傷愛に於いて我々成人は兩親と子供との關係を見る傾きがあるから、父さん子だとか母さん子だとか云ひ慣はしてゐるのである――を願望して

ゐることをわざ〳〵斷るまでもない。否、分析の結果に依れば、子供の願望はこのやうな感傷愛を遙かに超えて、我々が肉感的滿足として考へる一切（但し子供の頭で考へ得る限りの）を得ようと努めるものであることは、疑ふまでもない。子供としては男女兩性器を合一すると云ふような現實の事情を決して考へ及ばぬと云ふ事は、理解するに困難でない。子供はその代りに、自分の經驗と感覺とから引出して來た考へを以てするのである。大抵の場合、子供の願望の頂點となるものは、一人の子供を生みたい――その方法は不確なのだが――造りたいとの意圖である。子供を生みたいとの願望を、男兒もその無知のために、女兒同樣に抱くのである。かゝる心持の全體を私は、有名なギリシヤの神話に基いて、エディポス・コムプレクス Ödipuskomplex と名付ける。このコムプレクスは常態的な場合には、早期性感の終末と共に放棄せられ、根本的に撤回せられ變形せられるが、これ等の歸結は後年の精神生活に於ける大きな行動となるべき定めになる。併しその變形は根柢から十分に行はれることは大抵はなく、思春期になつてこのコムプレクスが呼戾されて復活し、それがために重大な歸結の齎されることがある。

どうしたのです、一向默つてゐるではありませんか。默つてゐることは贊成を意味しはせぬ。分析上から、兒童の最初の對象選擇は（術語を用ふれば）近親姦的であると主張するならば、分析は慥に又

## 四、精神分析と性慾

もや人類の最も神聖な感情にケチをつけることになり、それに相當するだけの不信と敵意と反感とを覺悟してゐなければならぬ。實際、精神分析はさう云ふ不信と敵意と反感とを受けてゐるのである。現代人の精神分析に對する好意を最も多く傷ふてゐるのは何かと云へば、それはあらゆる人間の宿命的な形成としてエディポス・コムプレクスを打建てゝゐることである。例のギリシヤ神話はどうしてもその事を意味してゐるものに相違ないが、併し今日の人間の大多數は、敎養の有無を問はず、自然が生れながらの嫌惡を、近親姦の可能に對する防備として我々に植付けてゐると信ずることを好んでゐるのである。

論より證據、まづ歷史を播いて見れば分る。ユリウス・ケーザルがエヂプトに赴いた時、若き女王クレオパトラは（やがてケーザルにはこの女王は忘れがたいものとなつたが）弟のプトレモイスと結婚してゐた。このやうなことはエヂプトの王朝に於いては敢へて珍しくはなかつた。元來ギリシヤ出身のプトレメーエル家に於いては、その祖先たる昔の大王（ファラオーネン）たちが幾千年來傳統し來つたことを繼承したに過ぎなかつた。（一）併しこのやうなのは、單に兄弟姉妹間の近親姦で、これは今日に於いてもやゝ寛大に批判されてゐる。そこで我々は古代に於ける婚姻關係の如何であつたかを最もよく證明するところのものたる神話に就いて調べて見よう。神話の我々に示すところに依ると、單にギリシヤのみ

ならず、あらゆる民族の神話は父と娘、更にまた母と子との間の近親姦さへもが、甚だ豐富に傳へられてゐる。(二) 王族の宇宙觀と系圖觀とは、近親姦に基いてゐる。如何なる意圖を以てこれ等の詩篇が物されたと、貴君は考へますか。神々や王たちに犯罪者の烙印を捺すためにか。人類の嫌惡を彼等に轉嫁するためにか。寧ろ近親姦願望は原始人の世襲遺産であり、決してこれを完全に克服したことがなく、而も大多數の普通人は旣にこの願望の充足を斷念しなければならなくなつてゐたが故に、彼等はこれをなほ神々又はその後裔たる王侯に於いて容認したためであらう。歷史及び神話のこのやうな敎へと完全に一致するものは、個々の幼兒時代に近親姦願望が今日もなほ存續して生きてゐることであるのを、我々は知るのである。

註(一) わが國の上代にもかう云ふ事實の多々あつたことは、歷史に通ずる者の間に周知のことである。(譯者)

(二) 『父と娘と犯せる罪、母と兒と犯せる罪』云々の文句の祝詞などに瀕出するは何を意味するか。(譯者)

『貴君は幼兒性感に關する總てを私に話さないでおかうとしてゐるらしいのは、ひどいと思ふ。その事が原始人間史に關係があるための故にのみ、それが私に甚だ興味あるものと思へるのだ。』

私は、そのために我々の話しの本來の意圖からあまりに逸するであらうことを恐れたのだ。併し、それを話しておくことも、やはりそれだけの利益があらう。

『話して呉れるなら、まづこれを云つて欲しいね。幼兒の性生活に關する貴君の分析の結果に對して貴君はどれだけの確實さを示すことが出來るかを――。貴君の信念はたゞ神話や歷史との一致にのみ懸つてゐるのか。』

いゝえ、どう致しまして……。勿論、直接の觀察に懸つてゐるのですよ。かう云ふ次第である。―我々はまづ、成人の分析からして、つまり廿年乃至四十年の後に、なほ性的幼兒性の內容の存することを結論したのである。その後、我々は直接兒童分析を試みたが、丁度我々が廿年乃至四十年の中間年代の介在に拘らず洞觀したところと、正に一切の符合するのを見たときには、少なからず得意さを感じたのである。

『どうしてゞすつて、貴君は幼い子供を、六歲にならないやうな子供を、分析したんですつて？　そんなことが一體出來るのかしら、さうしてそんな子供に對して心配はないものかしら。』

非常にうまく行きますよ。四五歲のそんな子供に於いて、總てが既に起つてゐると云ふのは、殆ど信ぜられないほどである。子供はこれ位の年頃には、その精神が非常に興奮し易く、彼等にとつては性的早期はまた知力の開化期でもある。彼等は性的潛在期に入ると共に、また精神的にも禁斷を受け鈍くなると、私は感じてゐるのだ。多くの子供はまたこの時分から、肉體上の魅力をも失ふものであ

る。また、あまりに早期に分析することの弊害に關しては、私はかう貴君に報告することが出來る。私は殆ど二十年夙く、或る子供に實驗を試みたが、それ以來健康な、有爲な若者となり、また重い心理的外傷あるに拘らず、その思春期を何なく過ごしたのである。早期分析の鎗玉に上つた他の子供等もどうやらうまく行くであらう。この兒童分析に關しては、多くの興味が繋がつてゐる。なほ將來には、もつと大きな意義を愷に帶びるやうになるであらう。兒童分析が分析理論上價値のあることは固より論外である。成人の分析に於いては未決のまゝに殘つてゐることが、兒童分析に依つて始めて確定するし、從つてまた分析者をして重大なる誤謬を未然に防がしめるものである。我々は神經症の構成される契機をまざ〳〵と見せつけられるので、いやでも是れを認めざるを得なくなる。子供に分析的影響を與へようとする場合には、どうしてもそこに教育的標準が化合されてゐなくてはならない。その技法はまだ十分に完成してをらぬが、併し現代の子供の大多數はその成長の途上に於いて明かに神經症的の時代を經過すると云ふ事實を觀察することに依つて、一つの實踐的な興味が眼覺めて來る。我々が更に鋭く觀察することを知つて以來、兒童の神經症は例外ではなく普通であると、我々は云ひたくなつてゐるのである。宛も、兒童の神經症は幼少の狀態から社會的文化へと達する途上に於いては、避けることの出來ないものであるかの如くである。大抵の場合に於いて、この子供時分の神經症

の出現は、自然的に克服されて了ふのである。併し、平均して健康者と云はれるやうな人々に於いてこの兒童期神經症の痕跡が、常に必ず殘つてはをらぬであらうか。それどころか、幼兒時代に於いては必ずしも大したことではなかつた幼兒神經症が總ての後年の神經症患者の病氣と關係を有してゐることを、見遁すわけには行かないのである。丁度これと類似してゐる(と私の信ずる)のは、今日の內科醫が、總ての人間は嘗てその幼兒期に於いて結核症に罹つてゐると主張してゐることである。神經症に對しては、併しどうしても、病毒が這入つたと云ふ觀方は問題にならないで、たゞ性癖が豫め何物かに依つて決定されたと云ふ觀方をせねばならぬ。

貴君は兒童の性生活の分析に關して確實さを示せと、私に云つたのだ。で、その事に戻らう。これまで話して來たやうに、我々は兒童を直接に、分析研究することに依つて、これまで大人が自分等の幼兒時代に就いて話したところを正しく解釋してゐたと云ふことを、確信したのである。併し或る一聯の場合に於いては、一つの別種の確證が我々にまで可能となつたのである。我々は分析した材料に依つて、若干の外的事件を、幼兒時代の印象的な出來事を(それ等に就いては患者は意識的には少しも記憶してはゐないのである)組立て〻見たのである。ところが、仕合せな偶然に依つて、本人の兩親や世話した人がかく〳〵の事實があつたと、やがて報告して吳れて、結論した出來事が實際にあつ

たことの否むべからざる證據となつたのである。そのやうにうまく成功することは、勿論さう屢々はない。併しそれが見事に的中した場合には、非常な感銘を與へる。さう云ふ、忘れられてる幼兒時代の經驗を正しく組立てゝ見せることは、常に大きな治療上の効果のあることを、貴君は知るであらう。それ等の經驗が第三者に依つて確證せられようとせられまいと…。これだけの重大な意義が如何にしてこれ等の出來事の內に存するかと云ふと、それは勿論、それ等の出來事が非常に夙く、まだ薄弱である自我がそのために外傷を被りさうな時代に起つたと云ふ事情のためである。

『分析に依つて發見せられた幼兒時代の出來事とは、大抵どんな事件ですか。』

それはいろ〳〵です。まづ第一に、幼兒の芽ぐみつゝある性生活に永く影響を及ぼすだけの力ある印象、例へば成人間の性的行動を觀たとか、或は自分自身が成人と、又は他の子供と性的經驗を持つたとか――これとて稀な出來事ではない――云ふ事。それから、成人間の對話を聽かされ、それが子供ながらにも理解出來たり、或は後年になつて理解したり、少くともその不思議な、奇妙な事柄を鵜呑みにしてゐた事、更に、子供自身の表現や行動にして、非常に重大な感傷愛や敵對心を他人に向けて示したもの。兒童自身の忘れられてゐる性活動、並びにそれを禁止した成人への干渉を想起せしめることは、分析に於いて特に重要である。

『さう云はれると尋ねる機會を得たが、實は隨分以前からこの質問を出して見たいと考へてゐたのだ。それほど早期に幼兒は性的活動をなしてゐたのに、それを分析時代以前は人々は見落してゐたと貴君は云ふのだが、ではその幼兒的性活動とは如何なる點に存するのであるか。』

幼兒的性活動として常に必ず存するもの、並びに本質的のものは、やはり人々は見落してはゐないのだ。この事實は我々の注意に價する著しいことである。つまり、この事は特に注意させねば氣付かれぬやうなことではないのだ。それは見落さるべきことではなかつたからだ。幼兒の性的亢奮の主要な表現としては、自分自身の性器（實際に於いては、それの男性的な部分）を亢奮させることに依つての自己滿足にある。かう云ふ子供の『不行儀（ウンアルト）』は直ぐに廣まつて行くものであることは、成人の常々知るところである。この『不行儀』それ自身は重い罪惡と考へられ、また嚴しくたしなめられた。子供は實際にかう云ふことをするが、それは（彼等の云ふところに依ると）愉快だからだとあるが、かう云ふ不道德的な傾向に就いての觀察と、子供は生れながら清純無垢で非肉感的であるとなす說とを、人々は如何にして調和統一させるのであるか。それに就いては、貴君は私に何も尋ねない。かう云ふ謎は、反對者側から說明して貰ひなさい。我々にはもつと重大な問題が起つて來る。早期幼兒の性活動に對して、人々は如何に處置すべきか。この性活動を禁壓することに依つて如何なる責任を負ふやう

になるかを人々は承知してゐるが、併しこの活動を無制限に放任しておくだけの勇氣もない。文明程度の低い民族や、文明民族中でも下層階級に於いては、子供の性感は放置してあるやうだ。それに依つて、個々人が後年になつて神經病を惱むやうになるのを力強く防がうとするものゝ如くであるが、併しまた同時に文明的行動となつて表るべきものがそれだけ非常に損耗せられることはないか。それに就いて人々は云ふのである、こゝに於いてもまた我々は一つの新たなディレムマに立つと。

併し、神經症者の性生活を研究することに依つて惹起される興味のために、淫蕩的な空氣が生ずるようになるかどうかは、貴君の御判斷に一任しておかう。

# 五、精神分析技法の難點

『貴君の意圖は、私にも分ると思ふ。分析を實行するに就いて如何なる知識が必要であるかを、貴君は私に示さうとしてゐるのだ。さうしてその知識を具へてをれば、果して醫師のみが分析を行ふべきものであるかどうかを、私が判斷出來るやうになると云ふわけである。ところで、今までのところでは、あまり醫者的のことは出て來なかつた。大部分は心理學で、そこに多少の生物學又は性慾學が混

じてゐた。併し、多分これだけで全部終りと云ふわけではないのでせう?』

左樣、終りではないです。まだ云ひ殘したことがあります。で、私の方から貴君に少しお願ひしていゝですか。これまで話を聽いたところに依つて、貴君は分析處置とはどういふ風にすることだと考へてゐられるか、それを細かく描寫して頂きたいのである。つまり、貴君が自分で分析を行らなければならないことになつたとして……。

『それはいゝかも知れませんね。私は實際に於いて、當面の問題をそのやうな實驗に依つて決定しようとは考へてはゐない。併し私は御希望通りにしますが、責任は實際貴君にあるのですよ。では、患者が私の許に來て、その病苦を訴へると假定します。私は、彼が私の指圖に從ふ氣があるならば、治療又は快方に向はしめるであらうことを約束する。私は彼に、何でも彼の知つてゐること、聯想し想起することを總て最も完全な正直さを以て語つてくれと要求する。よしんば、云はうと思ふことの多くが、彼に不愉快なことであらうと、右の規定に反してはならないと命ずる。私の患者に云つて聽かすことは、これでいゝですか。』

それでいゝです。但し、患者が自分で重要でない、馬鹿げてゐると考へても、そんな批判に拘らず語れと云ふ一節を附加へておかなければなりません。

『あゝさうでしたね。そこで、彼はお話しを始め、私はそれを聽く。それでいゝですね、それからですか？　それから私は彼の報告中から、彼が如何なる印象、經驗、願望を抑壓してゐるかを（何故抑壓したかとならば、彼の自我がまだ弱くて、それ等の印象、經驗、願望などを處理し得ずして恐れてゐた時分に、それ等が押寄せて來たからである）觀取するのである。觀取したものを患者自身をして體驗せしめると、彼は自分自身を當時の立場に再び置いて見、さうして今や病氣は私の力でよくなるのである。さうなれば、彼の自我が強ひられてゐた制限はなくなり、さうして彼は健康を恢復する、これでいゝんですか』

結構々々！　併し世人は私がまた非醫者を分析者に仕立てたと云つて批難することだらう。併し、貴君はなか〳〵美事に分析を呑込みました。

『いや、私はたゞ貴君から聽いたことを鸚鵡返しに繰返したに過ぎません。併し自分がそれをどうやつて行くだらうかと云ふことは我ながら見當がつかないし、それにそんな仕事が、毎日一時間づゝやつてゐてどうしてそんなに長く掛るのであるか、とんと理解が出來ない。神經症でない人間は、大抵はそんなにいろんなことを經驗してはゐない。さうして幼兒時代に抑壓されることは、やはりどうも總ての場合に同じであるやうに思はれる。』

ところが實際に分析をやつて見ると、實にあらゆる事が出て來る。例へば、患者の與へる報告の中から現在患者自身は忘れてはゐるが若干の經驗——彼の抑壓してゐる本能感情——のあることを引出して來たとすれば、それはなか〳〵容易ならぬことである。彼は貴君に何事かを——始めには彼自身に對してと同樣、貴君に對してもあまり意味のない事を——云ふ。貴君は被分析者が規定を遵守して提供した材料に對して、全然特殊な見方を下すやうに決心しなければならなくなるであらう。丁度鑛石から一定の過程に依つて、その內容をなす貴金屬を引出すのと同じやうに……。そこで貴君はまた幾噸の鑛石をも加工するだけの準備が出來てゐることになる。併しそれ等幾噸數の鑛石にも尋ねる貴金屬はさう澤山に含まれて居ないらしいので、このためにもどうしても治療は長びき勝ちになるのである。

『併しその素材を貴君と同じやうに加工するには、どうすればよいのですか?』

患者の報告、思ひ付きなどは總て自分の尋ね求めゐるものゝ歪曲された形であり、云はばそれを暗示としてその蔭に匿されてゐるものを貴君が洞察しなければならないのだと考へればよいのである。一言で云へば、貴君はこの材料を(それが記憶想起であらうと、思ひ付きであらうと、夢であらうと)まづ解釋しなければならないのである。勿論、その解釋は、貴君がその患者の事情を知るにつけて(貴

君が聽いてゐる間に）貴君の内にかうでなからうか、あゝでなからうかと期待するやうになる、その期待に依つてゞある。

『解釋ですつて？　それは嫌な言葉ですね。自分には聞苦しい。それでは自分ながらアテにならなくて確實さは死んでしまひますよ。總てが私の解釋に依憑するものならば、私の解釋が正しいとは誰が私のために辯護して吳れよう。さうなればどうしても、總ては私のこぢつけになつてしまふ。』

慌てゝはいけない。何もさう惡くはならない。貴君は他人の精神には一定の合法性を認めてをりながら、自分自身の精神だけはその例外とするのか。貴君が多少の自己陶冶をなし、その上に一定の知識を具へるならば、貴君の解釋は貴君の個人的な特性からの影響を受けず、正確なところを中てるやうになるであらう。併し、かう云ふ部分の任務に對して、分析者の個人性が無關係であるといふのではないのだ。無意識的に抑壓されてゐるものを把むには、一種の勘（微妙な知解力 Feinhörigkeit）が必要である。このやうな勘は、萬人が總て同樣にこれを有してゐるものではない。で、就中、この點に於いて、分析はまづ自己を深く分析することに依つて、被分析材料を先入見なく受容するに適した者となすべき責任がある。併し、そこに一つだけ殘るものがある。それは、天文觀察に於ける『個人的方程式』に比すべきものである。この個人的契機は、精神分析に於いては、常に他の學術に於ける

よりは、一層大きな役割を果す。變態的な人間でも正確な物理學者となる事はあらうが、併し分析家としては、そのやうな人は自分の變態のために、他人の精神生活を正しく把握することを妨げられるであらう。何人も他人の變態を證明して見せることは出來ないからして、深部心理の事杯に關して一般的に一致を見ることは殊に困難であらう。多くの心理學者はこの一致を見ることは全然絶望であるとさへ考へてゐる。で、如何なる愚人も自分の愚蒙を眞理と僞稱する平等權を持つてゐる。私はこの點に於いて、より樂觀的であることを自認する。我々の經驗するところでは、やはりまた心理學に於いても、可成り滿足の行く一致を見るものである。總て研究と云ふものはその分野に應じてそれぞれに特殊の困難のあるもので、それを取除くやうに我々は骨折らなければならない。分析の解釋技術に於いてもやはり、他の知識材料と同樣に、多くのことを知悉しなければならない。例へば、象徵に依る獨特の間接的表現をとるのはどう云ふ事どもであるかと云ふが如き……。

『いや、ただ思想上だけで分析處置を企てると云ふやうな事は、もう全く考へてゐない。そこにどんな豫期しない驚くべきことが起るか、誰が知らう。』

たゞ思想の上だけで分析の可否を云々しようなどゝはすまいと貴君が云ふのは、全く正しい。如何に多くの教育と實習とが必要であるかを、貴君は氣付いてゐるのである。貴君が正しい解釋を發見す

る時には、一つの新たな問題が生じてゐるのだ。貴君は自分の解釋を患者に聽かせて成功を收めようと思ふならば、正當の機會を待つてゐなければならない。

『どう云ふ機會に云つて聽かせるのが、正しいのです?』

さア、それはコツの問題で、このコツは呑込みやうによつて隨分微妙になるものである。分析を早くしようと思つて、その解釋を發見するや否や、いきなり頭からそれを浴せかけると云ふやうなことでは、貴君は大失敗をする。そんなことをすれば、患者の抵抗、反撥、不興を購ふが、併し彼の自我をして自分の抑壓してゐるものを支配せしめることは出來ない。

『なか〳〵むづかしさうだなア。で、解釋に際してその注意を遵守したとして、そしたらどうなるのです?』

遵守してゐると、思ひも寄らぬ發見をするにきまつてゐるのです。

『と云ふと……?』

つまり貴君が患者を見損つてゐたと云ふ事をです。患者自身の助力や從順をあてにすることは出來ないと云ふ事をです。普通の操作に對しては患者がありとあらゆる邪魔ものを置いて妨げようとすることをです。一言で云へば、彼は抑々健康にならうとの意志のないと云ふ事をです。

『まさか、そんな馬鹿々々しい。そんな馬鹿げた事は君が今まで私には話さなかつたではないですか、私はそんなことはやはり信ぜられない。非常に病苦に惱み、自分の苦痛を愬え、處置のために非常に犧牲を拂つてゐる患者が、健康になる意志がないなんて……！　貴君の云ふのも、まさかさう云ふ意味ではないのでせうね。』

まア、落着いて下さい、私の意味はその通りなんです。私の云つたことは、眞實です。勿論、その全部ではないが、併しその眞實の非常に重大な一部分です。患者は固より健康にならうとの意志はあるのだが、併しまた健康になりたくないとの意志もあるのです。彼の自我はその統一を失つてゐるので、彼はまた何等統一した意志がないのです。もしさうでなかつたならば、彼は神經症には罹らなかつたでせう。

『成程、名は實の賓と云ふ譯だな。』

抑壓されてゐるものゝ派生物が患者の自我內に突入して來て、自我內で我意を張るのだ。然るに自我はこれに對して無力であることは、丁度被抑壓物それ自身に對すると同じである。またその派生物に就いては何も知つてゐないのが普通である。かう云ふ病氣は特種のもので、これは我々が普通に期待しない困難を掛けて來るものである。總て我々の社會制度は、統一ある、常態的自我を有する人物

に對して、つまりその自我を善惡に分類することが出來る（その自我が機能を果してゐるか、或は何か有力な影響に依つて自我がなくなるかどうかを分類することが出來る）如き人物を目安として制定されてゐる。それ故に法律上では、責任があるとかないとか、その二つに判決するのである。神經症者に對しては、總てこれ等の判決はあてはまらない。これ等の社會的要求を、彼等神經症者の心理狀態に適用するのは困難であることを、我々は容認しなければならない。さういふ經驗を人々が高度に味つたのは、さき頃の大戰に於いてゞあつた。軍務を逃げた神經症者たちは、假病をつかつたのであつたらうか、それとも假病ではなかつたのだらうか。彼等はその何れでもあつたのだ。彼等を假病者として取扱ひ、彼等をして病氣であることを不快ならしめると、彼等は健康になつた。ところが健康になつたらしく思へるので、彼等を軍務に就かせると、彼等はまた直ぐに病氣へと逃込んで行くのだ。彼等には何とも手のつけようがなかつた。ところが市井生活に於ける神經症者に於いても、同樣の事があるのだ。彼等は病氣には困つてゐるのだが、併し病氣を力にしてそこへ逃込んでもゐるのだ。で、我々が彼等から病氣を奪はうとすると、諺に云ふ牝獅子のその子獅子に於けるが如く、その病氣を守るのだ。で、あのやうな矛盾を責めて見ても、何の意味もないわけである。

『それぢや、さう云ふ厄介な人間は處置などせずに、うつちやらかしておいたらどうでせう、それが

一番よくはないかしら？ かう云ふ病人に對してそんなに骨を折ると云ふは（私が貴君の御説明を聽いて考へざるを得なくなつたところでは）無駄骨折りだと信ぜられる。』

いや、私は貴君の御提案を是認することは出來ない。勿論、錯雜せる人生をありのまゝに受容してこれにとやかく逆らはぬ方が正しいのである。我々が處置した神經症者の總てが分析の勞に價するのではないかも知れないけれども、併し彼等の間にも甚だ價値ある人物もゐるのである。我々としてはそのやうな手薄な心理的武裝を以て文明生活に臨むで行くやうな個人を出來るだけ少くしたいと云ふのが目的であり、またその目的を達成しなければならないのだ。で、我々はそれ故に多くの經驗を集積し、多くを理解しなければならないのである。總ての分析は我々に新たな説明の利得を齎すので、我々には役に立つのである。よしんば個々患者の個人的價値とは別にしても：．．。

『併し患者の自我内に一つの意志の亢奮が生じ、その意志が病氣に固執してゐようと云ふのならば、その意志の亢奮には必ず何かの根據や動機があらねばならぬし、また何ものかに依つて是認せられねばならない。併しそれにしても、何のために人間は病氣になりたがるのか、病氣から何を利得するのか、それがまるで分らない。』

いやなに、それはさうむづかしくはない。考へても御覽なさい、例へば戰爭神經症者たちは病氣で

あるからとて何の軍務に從ふにも及ばなかつたではないか。市民生活に於いては、職業上の自分の力不足を掩ふたり、他人との競爭を避けるための防禦策として用ゐられることがある。家族内に於いては、他の者に犧牲や愛の證據を强要したり、或は自分の意志を押付けたりする手段として用ゐられる。それ等は可成り露骨に見えるもので、我々はこれ等を總括して『病氣の利得』と名付けてゐる。たゞこゝに重大な點は、患者が（つまり彼の自我）がそのやうな動機と彼の正しい結果を生ずる行動との間の全的關聯に就いて何も知つてゐないと云ふことである。かう云ふ無意識的活動を本人の自我に知らせることに依つて、我々はこの活動の影響を制することが出來る。併し病氣に固執する動機としてはこれ以外に、これよりもつと深いのがある。この方はさう容易には把めない。これを理解するためには、別の心理學上の理論に這入つて行かなければならない。

『まア遠慮なく話して下さい。隨分理論を聽いたから、もう少々くらゐなら何ともない。』

私が貴君に自我とエスとの關係を細かく論じて聽かせた時に、私は精神的裝置に關する重要な理論的部分を貴君に話しておいた。つまり我々は、自我内にそれ自身の一つの特殊な廳（インスタンツ）（個所）が變化發展する（それを我々は超自我と名付ける）ことをどうしても假定せざるを得ないと。この超自我が自我とエスとの間に特殊な位置を占めてゐる。これは自我に屬し、それの高等な心理的組織に參與して

ゐるが、併しエスに對して特殊に內的な關係を保つてゐる。超自我は實はエスの場合の最初の對象纏綿の殘滓である。エディポス・コムプレクスが讓渡後の遺產である。この超自我は自我に對立することが出來、自我を對象の如くに取扱ひ、屢々これを甚だ酷に取扱ふことがある。自我にとつては超自我と協調を保つことは非常に重要であることは　丁度エスと協調を保つことの重要である如くである。自我と超自我とが分離することは、精神生活にとつては一大事である。貴君は旣に氣付いてゐられるであらうが、超自我とは、つまり我々が良心と名付けてゐる現象を掌る事である。精神の健康のためには、超自我が常態的に出來上つてゐると云ふことは、卽ちあまり人格的形態を帶びてゐないと云ふことは、大切である。正に神經症者に於いてはそれが常態的に出來上つてゐないのである、何となれば彼等のエディポス・コムプレクスは正當の變化を閱してゐないからである。神經症者の超自我はその自我に對して今もなほ對立してゐること、宛も嚴格なる父親が幼兒に對するが如くである。神經症者の道德は、幼兒時代の道德そのまゝで、その超自我をして自我を懲罰せしめると云ふ形で行はれる。病氣はこの『自己懲罰』の手段として用ゐられ、神經症者は罪惡感が自分を支配するまゝに振舞ふやうになるのである。さうしてこの罪惡感はその滿足を得るためには、懲罰として病氣を必要とするのである。

この力が意識されないと云ふ點である。』

『これは實に甚だしく神祕的に聽こえる。その內最も著しいことは、患者に於いてやはり彼の良心の

左樣、我々はやうやくこの總て重大な事柄の意義を問題にし始めたばかりである。それ故に私の云ひ表はし方は非常に曖昧にならざるを得なかつたのである。で、私はこれからそれを續けることが出來る。我々は、恢復への操作に反抗する一切の力を、患者の『抵抗』と名付けてゐる。『無意識的罪惡感』は超自我の抵抗を意味し、これは最も强力な、從つて我々にとつて最も苦手の、要素である。我々は治療に於いて、なほまた別の抵抗に直面する。自我が幼兒時代に恐怖のために或る抑壓をしたとすると、この恐怖はなほ存續してゐて、もし自我をこの被抑壓者に近付けようとすると、忽ちその恐怖が抵抗となつて表れて來る。結局、我々の考へ得るところは、幾十年の間一定の道を進んでゐた本能過程は、我々の切開いてやつた新たな道にこれを進ませようとしても、なか〱困難であると云ふことである。それを我々はエスの抵抗と名付けることが出來よう。總てこれ等の抵抗に對する戰ひは分析治療中に於ける我々の主要な操作であつて、これに對しては解釋の仕事の困難の如きは何でもない。併し抵抗へのこのやうな戰ひや克服に依つて患者の自我は非常に變化し强くなり、我々も治療が終つた後の彼の將來の樣子を靜かに期待することが出來るほどである。他方に於いて貴君は今や理解

したであらう、何故に我々の處置が長延かざるを得ないかを……。發展の道程が長いからとか、材料として種々なものを含んでゐるからと云ふだけで、處置が長びくと云ふわけではないのだ。寧ろその道に抵抗が立塞つてゐるか、ゐないかに因るのだ。平時に於いては一二時間の汽車旅行に依つて突破し得るところも、戰時に於いては幾週間も掛らなければならない。もしそこに克服すべき敵の抵抗が存在すれば……。そのやうな戰ひはまた、精神生活に於いてもやはり時日が掛るのである。分析治療を著しく短縮しようとのあらゆる努力も、これまでは遂にみな水泡に歸したと云ふことは、我々も遺憾ながらこれを承認しなければならない。時日短縮への最善の道は、これを正しく貫徹することに存すると思はれる。

『私がもし貴君の仕事に干渉をし、自分で分析處置を或る他人に試みるやうな氣があつたとすれば、私は抵抗に關する貴君のお話しを承ることに依つて、そのやうな無謀なことを思ひ止まることになつたであらう。併しそれにしても、貴君が承認した特殊の個人的影響とそれとは、どう云ふ關係になるか。その個人的感化力は抵抗に抵抗しないのであるか。』

只今それを貴君が尋ねられたことは、誠に機宜を得てゐる。この個人的感化力は我々の最も力强い個人的武器で、我々がこの抵抗狀態の中へ新たに導入してこの狀態を解消せしめようとするのは、正

にこの個人的感化力に外ならないのだ。これは無意識罪惡感の自己懲罰であるなどゝ患者の知力に愬へて説明してやつても、この狀態を解消せしめることは出來ないのだ。何となれば、世間と共通の先入見を持つてゐる患者のことであるから、我々の學問上の批評家たちと同樣、なか〳〵我々を信用する筈はないからである。神經症者が操作を受けるのは、彼が分析者を信用するからであり、彼が分析者を信用するのは、分析者の人格に對して特殊の感情を抱くからである。然るに幼兒もまた自分を保護してゐてくれる人々をのみ信用する。私が旣に貴君に云つた事だが、我々はこの特に大きな『暗示的』感化力を如何に利用するか。それは病徵を抑壓するためではなく――この點こそは精神分析が他の心理療法と異つてゐる點である――、患者の自我をしてその抵抗を克服するための本能力として利用するためである。

『さて、そこまでうまく成功すれば、あとは總てスラ〳〵と行かないものですかなア？』

さう行く筈なんです。ところが、思ひがけない錯雜したことが生じて來るのです。それは分析者にとつて恐らく最大の驚倒事であつたが、患者が分析者に寄せる感情は全く特殊な性質のものであるのだ。分析を試みた最初の醫師が――それは私ではなかつたが――、旣にこの現象に直面したのである。さうして面喰つたのである。この感情はつまり――はつきり云つて了へば――惚込みの性質を帶びた

ものである。驚くべき事ぢやないですか？　而も分析者はさう云ふ感情を誘發するやうなことは何もしなかつたのである。寧ろ反對に、人間としては患者に接しないやうにしてゐたのである。自分の人格をなるべく控へ目勝ちにしてゐたのにさうなるのです。更にこの戀愛感情はあらゆる他の現實上の好條件を無視して生ずるのである、つまり個人的魅力、年齡、性、階級などのあらゆる相違を超えて生ずるのである。と聽いては愈々驚くでせう？　この戀愛は全く强迫的である。かう云ふ强迫的性質の惚込みが分析以外には見られなかつたと云ふのではない。貴君も御存知の通り、他の場合にもさう云ふ惚込み狀態は見られるが、併し分析的立場に於いてはこれが常に必ず生ずるのである。けれどもそれを合理的に說明することは出來ない。人々はかう考へるであらう、患者の分析者に對する關係からは、或る程度の尊敬、感謝、並びに人間的同感以上のものが患者に於いて生ずる筈がないと。然るにそれ等の代りにかう云ふ惚込みが生ずるのであつて、この惚込みはそれ自身病的現象としての印象を與へる。

『併しさう云ふ惚込みがあれば、貴君の分析には都合がよさゝうに私には思はれるが……。人間は惚れてゐる內は從順で、何でも出來るだけ相手のためにやるものだから……。』

左樣、始めの內は好都合なんだが、やがて後になつて、惚込みが深まり、その全性質が表に出て來

ると、それに對しては分析の仕事は非常にやりにくいのです。患者の惚込みは分析の仕事に從つてゐるだけでは滿足しないのである。やがて段々要求が大きくなり、感傷的(ツェルトリヒ)、肉感的の滿足を憧憬し、自分だけ特別扱ひされることを望み、嫉妬を起こし、もしそれ等の望みが協へられぬと、いよ〳〵明白に戀愛の反面たる敵意を、復讐を示すやうになる。同時にその反面は、總て惚込みの常として、あらゆる他の心理的內容を押返へし、治療及び全快への興味を喪失するやうになる。約言すれば、その反面が神經症の代りになつたので、我々は病氣の一つの形を追拂ふに今一つの形を以てするに成功したのであつて、これは我々の疑ひ得ざるところである。

『さうなつては手がつけられないなア。さう云ふ場合には、分析者はどうするのです？　分析はやめになるのだらうなア。併し貴君の云ふ通り、そのやうな成功はあらゆる場合に起るのであるから、實際、分析と云ふことはやり通し得ないのだらうと思ふ。』

我々はまづその惚込み狀態を利用して、そこから種々なことを學び知らうと欲する。我々がこのやうにして知り得たところのものは、その惚込み狀態を支配し左右せんとするよすがとなるのである。如何なる內容の神經症にもせよ、その神經症を病的惚込みの狀態に變化したことは、非常に注意すべきことではないか？

神經症の根柢には戀愛生活がそれと變態的な關係を保つて存してゐるとの我々の確信は、この經驗に依つて愈々不動なものとならざるを得ない。この洞察に依つて愈々我々は褌を締め、勇を鼓してこの惚込みそのものを分析の對象にとるのである。我々はまた一つの別の觀察をする。あらゆる場合に於いて分析時の惚込みは、私が只今云つたほど明白に判然とは現れない。何故さうなのであるか。それは直ぐに分る。患者がその惚込みの全然肉感的な方面、並びに敵對的な方面を示さうと欲するならば、それだけにまたその反對の努力が、患者に於いて起きて來るからである。彼等がそれ〴〵の方面と戰ひ、これを抑壓せんとしてゐるのが、まざ〴〵と我々には分る。そこで我々は、その過程の何たるかを理解するのである。患者は自分が以前に既に一度心理的に經驗したことを、分析者への惚込みと云ふ形で反覆してゐるのである。――患者は自分の內に既に存在してゐたところの（さうして神經症の擡頭と內的關聯あるところの）心的態度を、分析者に轉嫁してゐるのである。彼は我々の眼前で當時の防禦行動を再演するのである。あの忘れられてゐる生活時期の一切の運命的な出來事を、分析者に對する彼の關係に於いて反覆することを最も好むのである。彼が我々に示すものはこのやうに、彼の內奧なる生活史の核心である。彼はそれを想起する代りに、判然把握し得るやうに現前せしめてゐるのである。これに依つて轉嫁戀愛の謎は解け、かくて分析はこの新困難（そのために分析も不可

能になるのではないかと危ぶまれたところの困難)のお蔭によつて、續けられ得ることになるのである。『なか〳〵素晴らしい。併し患者は貴君に惚込まずに、たゞ昔の生活を再演するやうに强ひられ迫られるほど、それほど容易に貴君を信ずるのであるか。』

總ては今やそこに懸る。さうして『轉嫁』の取扱ひの完全な巧妙さは、患者の信用を獲得することにある。貴君の見られる通り、分析技法上の最大な要求はこの點に於いて經驗せられるのだ。こゝに於て分析者は最も重大な失敗をなすか、或は最大の成功を確保するか、何れかだ。轉嫁を抑制したり輕視したりすることに依つて、この困難を避けようとするのは愚である。この愚を分析者以外の人々はこれまでやつて來たが、これは分析の名に價せぬ。厄介な轉嫁戀愛が生じてから患者を突き離すのは、馬鹿氣てゐるし、またそれでなくとも臆病である。それは宛も魔術師が惡魔を呼出しておいて、いざそれが出現した場合に逃出すのと同じやうである。實際、多くの場合に於いて、人々はさうするより外なかつた。分析者が現れ出て來た轉嫁愛を支配することも出來ず、分析を中斷しなければならない場合もあつた。併し分析者は少くともその惡魔と角力をとつて見るべきであつたのだ。轉嫁愛の要求に靡くことは、患者の感傷的、肉感的滿足への願望を容れてやることは、當然道德上の見地から許されないばかりでなく、分析的意圖を達成するための技法的手段としても全然駄目である。神經症

者は彼の内に既存する無意識的ステロ版を無改訂のまゝに再版、三版せしめることに依つて、その病氣を治療することは出來ない。患者の轉嫁愛に部分的の滿足を與へて、その代りに分析の仕事を協力して續けて行かうとの妥協的方法に入らうとする者は、病める保險勸誘員を改宗せしめようとしたあの坊さんのやうな滑稽な立場に陷らないやうに氣を付けたがよい。患者は改宗されなかつたが、坊さんは保險に勸誘されて了つたでは、仕方がない。轉嫁からぬけ出す唯一の可能な道は、患者の過去に溯つて、彼が實際に如何なる經驗を持つてゐるか、また空想の活動に依つて如何なる願望を充足させてゐるかを、究めることである。さうしてこれを爲すには、分析者に於いて餘程の巧妙さ、忍耐、落着き、並びに克己が必要である。

『さうして患者は何處で彼の轉嫁愛の原型を體驗したと、貴君は考へてゐるのですか?』

彼の幼兒時代にです、大抵はその兩親に對する關係に於いてゞある。吾人が如何にこの早期幼兒時代を重要視せざるを得なかつたかを、貴君は記憶してゐられるであらう。こゝで話は一段落ついたわけである。

『もう一段落? 私が貴君から聽いたことは隨分澤山だが、私にはまだ少し分らぬことがある。分析者にならうと思ふものは、何處で如何にしてそれを學べばいゝのですか?』

それには今のところ二つの研究所があつて、そこで精神分析の講習をしてゐます。第一のはベルリンにあつて、當地の學會長マクス・アイティンゴン博士 Dr. Max Eitingon が世話をしてゐる。第二のは、ギインの精神分析學會が非常な犧牲の下に、これを維持してゐる。官廳がこれに干渉して種々厄介なこともあつたが、これは若い企業に對してはいつでも定まつてゐることである。第三の講習所は丁度目下、ロンドンの學會長ジョーンズ博士 Dr. E. Jones 指導の下に開講せられることになつてゐる。これ等の研究所に於いては志願者自身もやはり分析を受け、分析上重要なあらゆる對象に就いて講義を聽くことに依つて理論上の訓練を與へられ、また彼等が比較的容易な分析の場合を試みることを許される場合には、經驗多き先輩分析者の監督を受ける。そのやうにして一人前の分析者となるまでには約二ケ年掛かることになつてゐる。勿論、二ケ年位の修業では、まだほんの驅け出しで、まだ大家とは云へない。なほ足らぬところは、實際の仕事に當つたり、精神分析の會合に於いて先輩後輩相合して思想を交換することに依つて、補はねばならぬ。分析活動に對する準備はなかなか生優しく簡單ではない。操作は困難であり、責任は重大である。併しそのやうな下稽古を修了し、自分でも分析を受け、今日のところで知り得る限りの無意識の心理學に就いて大要を知悉し、性慾科學に心得を持ち、且つ精神分析の困難な技法たる解釋術、抵抗への對抗法、轉嫁愛の扱方などを學んだものな

らば、彼既に精神分析の分野に於いては素人ではないのである。彼は神經の病的障害を處置すべき資格があり、やがて時と共に、精神分析に就いて人々の求める一切の事を處置に依つて爲し得るやうになるであらう。

## 六、精神分析への法律的干渉

『貴君は私に、精神分析とは如何なるものであり、効果を擧げるやうに實施するためには如何なる知識が必要であるかを示さうとして、隨分骨を折られた。結構です、貴君のお話しを聽かされたと云ふことは、別に差支へはない。併しそのお話しによつて如何なる影響が我輩の判斷に及ぶと期待してゐられるか、私は知らない。私の見るところでは、それは何も別に變つたものではない。神經症は特殊の病氣であつて、分析はこれを處置するための特殊の方法である。醫術的の特殊方法である。また大抵は、醫學の或る專攻部門を擇んだ醫師は免狀に依つて保證されてゐる教養だけでは滿足しないのが普通である。特に大都市にその醫師が定住しようとする場合にはさうである。（大都市はたゞ專門醫のみを養ふものだが……。）外科醫たらんと欲するものは、二三年を外科醫の臨床室に奉仕せんとする。

眼科醫、咽喉醫、その他もこれと同樣であるが、殊に精神醫は恐らく決して國立の病院や何處かの療養所から自由に出て來ることはないであらう。精神分析者もさう云ふ風になるであらう。この新しい專門醫術を擇ぶことに決心した者は、自分の研究を終つた後に二ケ年の實習を講習所に於いて引受けるのだと、貴君は云はれた。本當にそんなに永い期間が必要なのかどうか私は知らないが……。彼はやがてまた氣付くであらう、精神分析の會合に於いて同僚と接觸するのはなか〳〵有利であると云ふことを……。かくて總ては最も好都合に進展するであらう。ところで、どこに素人分析の問題の起る餘地があるのか、私には分らない。』

貴君が只今云はれたゞけの事をする醫者ならば、みな我々は歡迎するのである。私が自分の門下として認めてゐる人達の五分の四は、實は醫者である。併し、醫者たちの分析への關係が實際どうなつて來たか、またその關係がどう發展して行く見込みがあるかを、貴君にお話しするから、我慢して聽いて下さい。分析を獨專する特權は歷史的に醫者にはないのである。彼等はそれどころか、つい先頃まで、精神分析を傷けるために、最も淺薄な嘲罵から最も惡辣な輕侮に至るまでを吐いて來たのである。貴君はそれに對してかう答へるであらう、それは過去の事で、將來にまで及ぼす必要はないと。それは尤である。私にもそれは分つてゐるが、併し將來は貴君が豫言するやうではなくなるだらうこ

とを私は恐れるのだ。

私は『もぐり醫者』,,Kurpfuscher"と云ふ言葉に、法律上の意義以外の定義を與へて見たいと思ふ。法律上では『もぐり醫者』とは、醫師としての國法的免狀なくして患者を取扱ふ者を云ふ。私は今一つの定義の方がいゝと思ふ。卽ち、もぐり醫者とはそれに必要なる知識と能力とを有たずして處置をなすところの者である。以上の定義に基いて、私は敢へて次の主張をなす。――(歐洲諸國に於いてのみならず)醫者は分析上のもぐりを遙かに多くなしつゝある。醫者は分析處置を學ばずして、且つそれを理解せずして、分析處置をなすことが甚だ屢々である。

と云ふと、それは私があまりに無茶であり、醫者たちを信用しなすぎるものであると、貴君は私を批難するであらうが、駄目である。醫者にしても、醫師免狀は罪人逮捕免許狀ではなく、患者は法律の庇護權を失つた追放者でない位のことは承知してゐる。醫者は恐らく間違つたことを行つてゐても分析では相當の信念を以てやつてゐるのだと云ふことは、いつでも我々は認めてやることは出來る。で、我々は、貴君の考へる通りに、醫者たちが自分自身を啓蒙するやうになつて貰ひたいと云ふのが、本當のところなのだ。で、私は、醫者が他の方面では細心に避けてゐるやうな風に精神分析の方面でも振舞ふやうにならせるにはどうしたらよいかを、貴君に細く說き聽かせるであらう。

茲に第一に問題になるのは、醫學校派の醫者が受けた教育なるものが、精神分析への準備として必要なものとは、殆ど正反對だと云ふことである。彼等の注意は客觀的に把握され得べき、解剖學的な、生理的な、化學的な、事實の上に向けられてをり、それ等の事實を正しく把握し適切な影響を及ぼすかどうかに依つて、醫者として處置の成功如何が定まるとされる。彼の視野圏内に生命の問題が（從來我々に無機物的自然の中にも見られるごとき種々な力の競ひとして説明された生命の問題が）入込んで來た。生命現象の精神的方面に對しては、何の興味も持たれない。一層高尚な精神的行動の研究などは醫學は一向やらない。これは他の專攻に委してある。精神病科學のみが精神的機能の障害を研究することになつてゐるが、併しこの學問は如何なる方法で、また如何なる意圖を以てこれをなすか貴君御存知の通りである。この學問は、精神的障害の肉體的條件を調査して、他の病因と同樣にこれを處置するのである。

精神病科學はその點に於いて正しく、また醫學的教養と云ふものは明かにさう云ふものなのだ。もしこれをしも一面的であると云ふならば、この特質を批難し得べき立場を、まづ發見して掛からなければならない。それ自身に於いては、實は、あらゆる科學は一面的である。科學は一定の內容、見地、方法に限定されてゐるのであるから、その一面性は實に必然的である。一つの科學に依つて他の科學

を難ずる如きは、これ愚の骨頂であつて、論者の如きはこのやうな愚に參與することは眞つ平である。物理學は化學の價値を否定しないし、また物理學は化學の代理にはならない。さりとて化學を以て物理學の代理にすることも出來ない。精神分析は無意識心理の科學として、慥に特殊の一面性を具へてゐる。このやうな一面性は醫術的科學の當然の權利であるから、これを否定するわけに行かない。

そこで精神病科學の特質を批難すべき立場如何と云ふ問題は、科學としての醫學から實踐的な治療法に轉じた時に、明かになつて來る。病める人間は一つの錯雜したもので、さう云ふ把握するに困難な心理的現象は人生の姿から解消し去るものでないかも知れないと云ふ不安を、我々は感ずるのである。神經症者は慥に一つの望ましからぬ難物で、法律や軍務にとつての如く治療法にとつて苦手である。併し神經症者は慥に存在して、而も醫學が特にそれに近接してゐる。而も神經症の何たるかを知り、神經症者の處置に對しては、學校醫學は何もしてはゐない、殆ど何もしてゐない。我々が肉體的及び精神的として分けてゐる二つの事柄の內的關係に於いて、神經症の發生分野への認識の道が開かれる日が來るであらうことを、我々は豫見出來る。なほその時に、肉體器關の生成を調べたり化學の力を用ゐたりして、神經症の發生の分野への影響を與へることが出來るやうになれば、一層結構なことである。さう云ふ日はなほ前途遼遠であると思はれ、現在のところでは神經症と云ふ病態は醫學

の方面からは手がつけられないのである。

學校醫學が醫者にたゞ神經症の分野に手を出すことだけはやめさせたならば、まづ我慢が出來るであらう。ところがそれ以上の事をしてゐるのだ。學校醫學は醫者たちに誤つた有害な心持を植付けてゐるのである。醫者たちは生命の心理的要素に何の興味をも持つてゐないくせに、これ等の要素を輕卒に輕視し、非科學的に馬鹿にするのである。從つて彼等は自分等の爲すべき何事をも、眞にまじめにはやらないのである。さうして自分等の義務を感じないのである。それ故に彼等は心理的探究に對しても敬意を拂ふを知らざること宛も素人の如く、この方面の探究上の問題を輕視するのである。神經症者は患者であるから、さうして醫師を賴つて來るのであるから、これを處置せねばならない。また醫者は常に新しいことを試みなければならない。併し長い準備の骨折りはどうするのか。その準備の骨折りをするにしても、分析研究所で敎へられるほどの價値のあることを誰が知らう。對象に就いて理解が淺ければ淺いほど、彼等は愈々いろんなことをやり出すのである。眞に知悉してゐるものは謙遜である。何となれば、彼は自分の知識が如何に不十分であるかを承知してゐるからである。

貴君は私をたしなめるために、專門としての精神分析と、他の醫學的專門との比較を持出したが、それは御覽の通り役には立たない。外科、眼科などに對しては、學校は更に進んで敎養を持つべき可

能性を提供してゐる。分析の講習所はその數に於いて少く、その年に於いて若く、且つ世間の認める權威者もない。醫學校は分析講習所などは認めないし、頓着もしない。若い醫者はその先生方の云ふことを頭から信用し、自分自身の判斷をなすべき定見を持つてゐないほどであるから、まだ何等認められたる權威者のない新分野に於いて、遂にまた一度、批評家としての役割を演じて見たいと云ふ氣になる。

なほ、そのやうな若い醫者をしてもぐり分析者たるに好都合ならしめる他の事情がある。彼等がもし學問も不足し技術も未熟であるのに眼科醫を開業したとすれば、彼等はスタールエキストラクチオン Staarextraktionや虹彩膜切斷に失敗したり、從つて客が來なくなつたりして、彼等の山仕事もやがてやめなければならなくなる。ところが分析ならばやつても、彼等にとつて比較的危險が少い。世間は眼の治療の結果が大體好調であれば、それに安心して、施術者の治療を期待するのである。併し『神經病醫』はその患者を直さなくとも、何人も別に不思議には思はない。人々は神經症の場合には治療の結果に依つて何とも思はない。神經病醫は少くとも出來るだけの事はしたのである。またあまり仕樣もないのである。自然が助力をするか、或は時間が助けてくれるのである。で、女ならばまづ月經である、それから結婚、遂には月經閉止である。最後には、愈々死神が助太刀に來る。醫者の分

析者が神經症をどんなにしようと、それは目に立つことではないから、どこからも尻が來ない。實際彼は道具を使つたわけでもなく、藥を盛つたわけでもなく、たゞ彼と話し合ひ、種々なことを聽いたり聽かせたりしたゞけである。それは何としても差支へはないことだ、殊にその際苦痛を與へるやうなことや、亢奮させるやうなことを云ひさへしなければ……。醫者の分析者は嚴重な薰陶からは遁れてゐるのだから、分析をよくしよう、分析の毒牙を拔去らう、これを患者は快適なものにしようとの試みを、確に捨てゝはゐないのであらう。さうしてこの試みに留まつてゐれば、何と結構であらう。何故ならば、抵抗を呼覺ますやうに敢へてし、而もそれを如何に扱ふかを知らなければ、やがて彼は實際に好かれなくなつて了ふからである。

公平なところを云ふならば、訓練を經ざる分析者の分析活動は、未熟な手術者の手術ほどには危險でない。弊害があるとすれば、それは患者が無用の勞力を費し、その全治の機會を失ふか、或は惡化させられてゐると云ふことなどであらう。更にまた、分析の評判が惡くなると云ふことなどであらう。それ等は固より好ましからぬことではあるが、併しこれをインチキ外科醫のメスの危險に比すれば、殆どお話しにならない。病狀の惡化が相當重く、長く續くことは、私の考へでは、下手な分析を施してゐる場合にでも、さう恐るべきことではない。好ましからぬ反應は、やがてまた消失する。病源と

なつた生命の定着と對比すれば、醫者の施す多少の惡處置ぐらゐは大したことでない。たゞ、不適切な治療的の試みは病氣に對して何等よきことをなさぬと云ふだけである。

『私は貴君が醫者どものインチキ分析ぶりを話して聽かせてくれるのを默々として拜聽し、別に今まで口を出さなかつたが、併し貴君は醫者に對して敵意を持つてゐる（何故敵意を持つやうになつたかの歷史的の所以も說明してくれたが）と云ふ印象を受けないでもなかつた。併し私は貴君の云ふところに一つ附け加へたい。——既に分析をやる以上は、分析者としての根本的の敎養と訓練とのある者に依つてなさるべきである。さうして貴君は、分析をやつてゐる醫者たちがやがてさう云ふ敎養と訓練とを持つやうになるだらうと信じてゐないのでせう？』

持つやうになりさうもないのである。分析講習所に對する學校の態度が變つて來ない間は、醫者たちも憶劫に思ふでせう。

『併し、非醫者の分析の問題に直接關係した事を貴君は一つ避けてゐるやうに思はれる。それを私が洞察して云つて見るならば、分析せんとする醫者たちを貴君たちの方で監督することが出來ないから幾分その腹癒せに、醫者への罰に彼等から分析の專有權を奪つて、これを非醫者にふりまかうとするものであると・・・。』

それは何れとも、貴君の御洞察にお任せしておくが、多分後に私は貴君にもつと公平な立場の證據をお見せすることが出來るであらう。併し私が力點を置く要求とは、要するに、一定の教養と訓練とに依つて正當の分析能力を具へたものでなければ、何人も分析を行つてはならないと云ふ事である。その人が醫者であるかないかは、私にとつては第二義的のことに思はれるのである。

『で、何か一定の提案が、貴君におありですか？』

まだそこまでは考へてゐないし、またさう云ふ提案をすることになるかどうかも考へてはゐないです。私はも一つ別の問題を貴君と論じたい。併しその序にまた一つの新らしい點に觸れておきたい。監督官廳では醫職を奬勵するに就いて、非醫者の分析を全く一般的に禁止する方針だと云ふ事である。この禁止の網からは、精神分析學會員にして醫者に非ざるものも免れることは出來ないわけだが、彼等は著しい教養を持ち、實施に依つて申分のない分析者となつてゐるのである。一度この禁止を斷行せんか、卽ち何人もがその分析技術の上々を認めるに吝でない一聯の人々がその活動を阻まれ、而も他方それほどの技倆があるとは保證され難い人々が自由に活動を許されると云ふ狀態になつて來る。このやうな結果は、法律の制定として望ましからぬことである。併しこのやうな特別な問題は甚だしく重大でもなければ、またその解決が困難でもない。その際、問題になるのは、ほんの數名の人々で

あつて、彼等は損の行かないやうには出來るのである。さしづめドイツへでも行けば、ドイツならばやかましい法律などはないから、彼等もやがてその有能を世間から認められるやうになるであらう。彼等をドイツにも追ひ遣らず、法律の苛酷をも緩和する氣があるならば、それは周知の先例があることだから、容易に實現出來る。これは帝政時代のオーストリーには幾度もあつたことだが、評判のもぐり醫者にでもそれが實際に力があると人々が認めてゐたのだから、人物に依つて或る方面の醫師的活動を許可しておいたものである。かう云ふのは大抵は百姓の奇術的治療師で、彼等を辯護する者は常に必ず、一時は隨分數多くあつた太公妃の一人であるに定つてゐたが、併しまた都會の治療師のために、專門の大家が辯護してやると云ふこともあつたに違ひないのだ。それよりもつと重大であらうと思はれるのは、さう云ふ禁止がヰインの分析講習所に及ぼす効果だ。さうなれば講習所は爾後、非醫者の間から分析者を育て上げることが出來ない事になる。それに依つてまたもや、精神的活動の一つの方面は、他の國では解放せられてゐるのに、我々の祖國に於いては、抑制せられることになる。私は法律や制定への批判權を要求せんと欲する者では必ずしもない。併し私は今日我國でもぐり醫師法を強調するのは、ドイツの事情（に倣はうとはしてゐるが）の通りにならうとの意味に於いてゞない事だけは分つてゐる。またこの法律を精神分析の上に適用しようとするのは時代錯誤であることも

分つてゐる。何となれば、この法律の布かれた時分には分析はまだ存在してゐず、神經症の特殊な性質もまだ認識されてはゐなかつたからである。

そこで私は、これを論ずることが自分にとつて一層重大であると思はれる問題へと向ふ。抑々、精神分析の實施は政府の干渉に委せらるべき事柄であるか、それとも自然的發展に任せておくべきか。私はこゝでは何の決定をもなさないが、併し私は自由な立場をとつて、この問題を貴君に考へておいて貰はうと思ふ。我々の祖國に於いては、昔からずつと禁止狂、監督癖、干渉好き、禁制傾向が支配して來た。併しこの傾向は、我々の總ての承知してゐる通り、あまり好結果を生んでは來なかつた。この傾向は今度の共和政體のオーストリーになつても、またあまり大して變つて來たとは思はれない。貴君は、精神分析に對してこの傾向はどうであるかを決める際には（それが只今問題になつてゐるのだが）大いに重要な言を述べることであらうと察してゐるが、併し、貴君がこの官僚的傾向に反對するだけの興味や影響を持つかどうかを私は知らない。この問題に對する私の思想は標準にはなるまいが、いつでも貴君のために述べてよろしい。私の意見としては、あまりに制定や禁止が多過ぎては法律の權威が傷はれると云ふにある。誰でも觀察し知つてゐる通り、あまりそれが多過ぎないと、却つて規則はよく遵守されるのだ。一擧手一投足の事にまであゝしてはいけない、かうしては宜しくない

と云はれると、何だと云ふ氣になり易いものである。更にまた、法律や規則はその由來から云つて神聖でもなければ不可侵のものでもないとか、法律や規則は内容から云つて屢々遵守されないものであり、我々の正義感を傷けるものであり、或は暫くする内にさうなるものであるとか、社會を指導する人々が無能であるからさう云ふ役に立たぬ法律を是正するためには斷然これに違反するより外に道はないとか、云ふ風に考へたからとて、その人はまだ無政府主義者ではない。また法律や規則に對する尊敬を保持しようと思ふならば、それを遵守したり違反したりすることが困難であるやうな法律や規則は布かないやうにすることも、慥に一つの方法である。吾人が醫者の分析實施に就いて云つた多くの事柄は、こゝでこれを本來の非醫者の分析（それをこの法律は抑止しようと欲してゐるのだ）に對して繰返してよからう。分析の遣方は、全くまさかと思はれるやうなものである。藥を用ふるでなく、道具を使ふでなく、たゞ對談して報告を交してゐるだけである。たゞ話しをし、説明を與へ、精神的に助力を必要とする者に對して健康を供するやうな人間的影響を得させるだけではないかと主張する素人に對して、それが『分析の實施』であると證明するのは、容易でないであらう。どうしてもそれを素人に禁ずることは出來ない。その理由は簡單である、醫者もまた屢々それをするからである。英語を話す諸國にたては、『キリスト教學』の實施が大いに擴まつてゐる。キリスト教の教理を持出すこ

とに依つて、惡を辯證法的に否定する一種の方法である。かう云ふ方法は、人間精神の馬鹿々々しい錯誤を示すものであることを主張するに私は躊躇せぬが、併し英米に於いて誰がこれを禁止したり罰したりするものがあらう。そこで我々がそれぞれの行り方で幸福にならうとするのを妨げるほど、この方途で我々が幸福になれると高官は信じてゐるのであらうか。また假りに一歩讓つて多くのものに自分を危險に陷れる弊害があるとしよう、それならば不可侵の一定の分野を細心に限り、その分野以外（と云つても、それと關係を保つ限りでの）では人々には經驗と反對說とに依て自己を敎育するやうに放任しておくのが、高官として一番よい行り方ではないか？　精神分析は發祥以來まだ新しい科學である。大衆はまだその何たるかを知らなし、既製學問のこれに對する立場はまだぶらついてゐるから、今にして法力を以てその發達を干渉するのは私には尙早であると思はれる。精神的助力を人に與へるには如何にすべきかを心得てゐない者から處置を受けることが自分に有害であることは、患者自身をして發見せしめたらよい。その危險に就いては我々が彼等に說明して警誡せしめる。さうすればそれを彼等に禁ずるには及ばなくなる。イタリーの國道では電柱に誠に簡潔な印象的な注意書きがしてある。――『觸るゝ者は死す』(Chi tocca, muore)と。行人をして垂れ下つてゐる電線に注意せしめるにはこれで澤山である。これに相當する注意をドイツでは誠に餘計な言葉で、うるさく、廻りくど

く云ふ——電線に觸るゝことは生命に危險なるを以て、これを嚴禁す、と。何のための禁止ぞや？生命の惜しい奴なら自分で氣をつけるだらう、電氣で自殺をしようと思ふ奴ならば、禁止されてゐるからとてやめはしない。

『非醫者の分析の問題に對する先入見となつてゐる事が一つある。つまり素人が催眠術をかけることの禁止や、また神秘的の會を開いたりさう云ふ結社を作つたりすることに對する最近公布の禁令である。』

私はかう云ふ規則を讃美する者だとは、云ひ難い。後者の方の規則は警察的監督が知力の自由を惱ますものであることは、全く疑ふまでもない。私は勿論、所謂神秘的現象に大して信用を置くものでなく、それが認められることに憧憬を感ずるものでない。併しそのやうな禁令を加へたとて、さう云ふ神秘らしき世界への人間の興味が消失するわけのものでもない。寧ろ反對に、恐らくこれでは甚だ有害なことをしたことになる。抑壓せんとしつゝある力を解放する如き判斷に達するの道を進まんとする公平なる知識慾を妨止したことになる。併しこれもまたたゞオーストリーに對してのみ云ふことである。他の諸國に於いては『準心理的』研究も、何等の法律的阻止を受けない。催眠術の場合は、精神分析の場合とは一寸違つてゐる。催眠術は一つの變態的精神狀態を呼起すことであり、今日で

は素人に對してたゞ見せものゝ手段として役立つてゐる。始めにはあれほど有望に思へた催眠術の療法が保持されてゐたならば、精神分析のそれと似たやうな事情が起きてゐたであらう。やはり催眠術の歴史は、他の方向に於いて、精神分析の運命の先驅をなしてゐる。私が神經病理學の若い講師であつた頃、醫者たちは催眠術を猛烈に嫉視し、これを眩暈である、惡魔の詭計である、甚だ危險な働きかけであると說明した。今日ではどうか、彼等醫者は獨占し、憶面もなくこれを探究方法として利用し、また多くの神經病醫にとつてはこれは今なほ彼等の主要なる治療手段である。

併し私は既に貴君に云つたやうに、こゝで何かの提案をなさうとは考へてゐない。何となれば、法律的に統制することか、精神分析の何たるかを知らしめることか、何れがより正しいかの決定如何に提案は基くからである。これは一つの主要な問題であることを私は知つてゐる。これの解決如何によつて（議論よりは）規則を與へる人々の傾向は恐らくもつと影響を受けることであらう。放任主義の政策の云はんとするところは、私が既に述べておいた。それとは違つた決定、即ち能働的干涉の政策へと達したとすると、非醫者の分析を無反省に禁止する片手落ちな、不正な規則は、どうあつても不十分なやり方であると私には思はれるのである。もしさうなら、それ以上の事を配慮しなくてはならない。精神分析を實施せんとする總ての人々のために、その下に於いて分析實施がなされ得る如き條

件を定めなければならない。精神分析とは何ぞや、そのためには如何なる準備が必要であるかなどを訊き出し得る何等かの權威を確立しなければならない。また分析を學び得る機會を多くしなければならない。そこで、放任しておくか、秩序を與へてはつきりさせるか（併し役に立たなくなつた規則から機械的に引出される個々の禁止に依つて、事情を混亂せしめないこと）、これが問題である。

## 七、精神分析への三種の興味

『左樣、併し醫者はどうなのです、醫者は？　我々の話しの本來の題目に入るやうにと、私は貴君を仕向けはしない。貴君は今だに私の聽きたいことを回避してゐる。要するに問題とは、醫者に分析實施の特權を專ら許容すべきか（勿論、彼等が或る條件を充した上で）と云ふ事である。醫者は慥にその大部分は、貴君の云ふやうなインチキばかりではない。貴君自身の云はれるところでは、貴君の學徒や門弟の殆ど大多數は醫者ださうではないですか。噂に依ると、彼等は非醫者分析問題に關する貴君の立場を決して領前してをらぬと云ふことである。そこで私は勿論から假定することが許されると思ふ、卽ち、貴君の學徒は十分な準備その他をせよとの貴君の要求に贊成するだらうが、併しこれ等

の學徒は、さうなればどうしても非醫者に分析實施をやらせてはならぬと云ふことに必然的になつて來ることを知るであらうと。さうですか、もしさうならば、これを貴君は如何に說明するか。』

なか〳〵よく知つてゐますね、その通りですよ。私の方の醫者出身の分析者の全部とは云はぬが、大部分はこの點で私の考へに贊成してをらぬ。神經症者の分析處置は醫者が專らすべき權利があると考へてゐる。從つて貴君にも、この問題では我々の陣營內にも意見の相違があるだらうと云ふことが分るであらう。私の意見が何れにあるかは人々に分つてゐるが、非醫者の分析の點に於ける意見の相反は、我々の親密を亂しはしない。これ等の私の學徒のこの態度は、どうしたら貴君に說明することが出來るか。惟ふに、それが階級意識の力にならうとは、私は認めない。彼等は私とは違つた發達を閱して來たのであるから、醫者仲間から孤立することは不快に思ふので、醫者職として認められたがり、その承認を或る個所（その個所の人生的重要さは彼等にも明かでないのだ）で得るために或る犧牲を拂ふのだ。多分またそれとは別にかう云ふこともあるやうだが、彼等に競爭心があるやうに考へることは、彼等の根性を低く解することであると共は、また彼等を特別に近眼者流と見做すことになる。彼等は實際、いつでも他の醫者を分析に導入するに吝でないし、また依賴して來た患者を醫者の方へ廻すか非醫者の方へ廻すかと云ふことも、彼等の物質上の立場から云つてどちらでもいゝことで

ある。併しどうやらまた違つたことが問題になつて來るやうである。分析を實施するに就いて、非醫者に對してよりも醫者に對して、疑ふまでもなく有利であることを確證する如き或る契機があるから、私の學徒の者等はその契機の力を得たく思つてゐるのであらう。

『有利であることを確證する？　それ御覽なさい。貴君はその通り、遂にこの有利を承認したではないですか。それでもうこの問題は解決されたことになるでせう。』

それを承認することは、私には苦痛にはならない。それに依つて見ても、私が貴君の思つてゐられるほど情熱に眼盲いてゐないことが分るでせう。私は實はこの新しい問題に觸れて行くことを延しておいたのだ。何故ならば、それに觸れるとまた理論上の談議が必要になつて來るからである。

『それで、貴君の意見と云ふのは？』

それはまづ診斷の問題ですね。所謂神經的障害に惱んでゐる一人の患者を分析處置するやうに引受けたとすると、分析者は豫め自分はこの者を治療すべき適任者である、つまりこの方面で患者に力となつてやることが出來るのだと云ふ確信——持たれ得る限りの確信——を持ちたいと思ふのである。併しそれはたゞその患者が實際に神經症者である場合のことである。

『併しそんなことは、外から見たところで、患者が訴へる症狀に徵して認識される筈だと私は考へま

すがね。』

これがまた丁度一つの新たらしい錯亂（こんがらがり）の起きるところなんです。人々はそれをいつでも十分確實に認識しないのです。患者は外から見て神經症者のやうであつても、併しそれでなく、不治の精神病の始まり、頭の駄目になる準備過程であることもあり得るのです。その判別——相違診斷——はいつでもさう容易ではない、また如何なる樣相に於いても卽斷すべきものではない。そのやうな決定に對する責任は、勿論たゞ醫者のみが負ふことが出來る。さう云ふ決定は、旣に云つたやうに、醫者にも常に容易にはなされない。病氣は永い間、無難な性質のものゝやうな風を示してゐて、而も遂にその惡性を呈示するやうになることがある。實際また神經症者は、自分が精神病になるのでないかと云ふ恐怖を、常に必ず持つてゐるものである。併し醫者がさう云ふ病狀を暫時の間見落してゐたり、或はその點に判然しなかつたりしても、大したことにはならない。何等の弊害も生じないし、餘計なことも起きない。かう云ふ患者を分析處置しても、醫者には何の損もないが、併し分析の勞は無駄になるであらう。それのみならず、分析の惡結果として精神病になつたなどゝ云ひ出す者が、慥に出て來るであらう。さう云ふのは勿論、間違つてはゐるが、併しさう云ふ風に誤解されることは、避けるに越したことはない。

『併しそれは如何にも助からないですね。さうなつては、貴君が今まで神經症の性質や起源に就いて私に話してくれた一切のことは臺なしだ。』

何、そんなことはない。たゞ何れの方にとつても（從つて分析者の方にとつても）神經症は苦手であり難物であることを、新たに强調するだけである。併し多分、私の新たな報告にもつと正しい表現を被せたならば、貴君の混亂を再び解く事であらう。只今我々が問題にしてゐる場合に就いては、かう云へばどうやらより正しいのである。卽ち、この患者は實際に神經症者ではあるのだが、併し彼は物心何れの病人かと云へば、その病源は精神になく肉體に存するのであると。私の云ふことを理解してくれますか？

『理解してゐますよ。併しさうなれば精神の病氣ではなくなるのぢやないかなア。さつぱり分らない』

ところが、それが精神の病氣であることが分るのですよ、人間が錯雜した生體的存在であることを考慮に入れゝば……。一體、神經症の本質とは何でせう？　それは、外界の影響に依つて育て上げられた精神裝置の高等組織たる自我が、エスと現實との間の調停をなすべきその機能を果し得ないで、自分の弱さからエスの本質の部分と絕緣し、その代りにこの絕緣（斷念）の結果を、制限や徵候や無駄な反動形成の形で自分に滿足の行くものにせざるを得ないものである。

そのやうな自我の弱さは我々の總てに於いて、常に必ず幼兒時代には存するので、それ故に最幼少時代の經驗が後年の生活に非常に大きな意義を持つやうになるのである。この時代に異常な重荷を受けるので——我々は二三年の間に石器時代の原始人から現在の文明人に至るまでの廣大なる進化の距離を亘らなければならないし、その間に殊に早期性感の本能亢奮を防禦しなければならない——我々の自我は抑壓へと逃れ、幼兒神經症へとそれて、それの殘滓が後年の成熟時代の神經病への性向となつて持越されるのである。そこでこの成長し行く自我が運命に依つて如何に取扱はれるかと云ふことが、問題になるのだ。生活があまりにつらく、本能の要求と現實の干渉との間の相違があまりに大きいと、自我には兩者の間の調停がつきかねて破船する。さうして、持ち越された幼兒的性向に依つて自我が禁制されてゐればゐるだけ早く、その破船が起きる。そこでまた抑壓の現象が繰返され、本能は自我の支配を離れ、退行の途上に於いてその代償的滿足を作り、かくて愍れなる自我は力なく神經症となつて行くのである。

神經症になるならぬの境目は、自我の强弱に存することを、しつかりと覺えておかう。さうなれば神經病源に關する我々の大觀は十分なものとなる。神經病の所謂常態的源因としては、我々は既に幼兒的自我微弱、早期に於ける性的亢奮を仕末しなければならないこと、早期の偶然的な幼兒的體驗の

効果などを知つてゐる。併し、幼兒生活以前から發してゐる他の契機が一つの役割を演じてゐることも有り得はしないか。例へば、エスに於ける本能生活が生れつき非常に強くて、これを拘束することが困難であり、そのために豫めあまりに大きな課題がその自我に賦せられてゐること、或は何か不明な原因のために、自我の發達が特別に弱いことなどである。勿論、これ等の契機は一つの病源的意義にまで、多くの場合に於いて一つの卓越した病源的意義にまで、合流することは自明である。エスに於ける本能の力を、我々は常に考慮に入れておかなければならない。この力が過度に發達してゐると我々の治療の方には、やりにくい事になる。自我發達の障害の原因に就いては、我々はまだ多くを知らない。これは、だから、本來素質に根源を持つ神經症の場合である。何かそのやうな素質的の、先天的の誘因がなければ、恐らく神經症は生じないであらう。

併しもし、自我の微弱が神經症の生ずべき決定的契機であるならば、後年の肉體上の病氣（もしそれが自我の微弱を來たしさへするならば）も神經症を生ずることは、また可能であらねばならない。またさう云ふ場合は隨分あるのだ。そのやうな肉體的障害が自我に於ける本能生活に關係を及ぼすことがある。さうなると、本能の力は自我が現在發達してゐる限度を超えるやうになる。さう云ふ過程の常態的な見本は、まづ婦人に於いて月經の障害のために、月經閉止のために生ずる變化であらう。

或は、肉體が一般的に病氣になり、殊に神經の中樞機關が有機的に病氣になると、精神裝置の榮養條件が襲はれ、この裝置はその機能を引下げられ、一層微妙な行動（自我組織の確保はこの行動に屬してゐるのだ）は中止せしめられる。總てこれ等の場合に於いて、神經症の樣相は殆ど同じやうに現れる。神經症は常に同じやうな心理的機制を持つてゐる。併し、我々の認識する通り、その病源は多種多樣で、屢々非常に化合されてゐる。

『さう云ふ話なら分る。貴君はとう〳〵醫者らしい口吻で話しました。そこで、神經症のやうなさう云ふ錯雜した醫術上の事柄を一人の醫者で處置出來るものか、それは正直のところどうでせうね。』

馬鹿に氣が早いのだなア、さう目標を飛超えては困る。私が云つたのは、病理的の一部分で、分析では治療法が眼目である。醫者はあらゆる場合（分析にかけたらばと思はれる場合）に於いて、まづ診斷を下すべきだと云ふことは、私も承認する、否、要求する。神經症の十中八九は、幸にして、心理的性質のものであつて、その病理は疑ふまでもなく明白である。醫者がそれを確めたならば、彼はその處置を安心して非醫者の分析者に任せてよい。我々の分析者仲間に於いては、いつもさう云ふ風にしてゐる。醫者である分析者仲間と非醫者の分析者仲間との間に內的接觸があるので、心配するやうな間違は完全にと云つていゝ程、起さずに濟む。そこにはなほ、分析者が醫者の助力を俟たねばな

らない第二の場合がある。分析處置の進行中に――最も夙く肉體上の――徴候が現れることがあつて、その徴候が神經症に關係があるのか、それとは無關係で、障害となつて現れて居る肉體上の病氣に關聯せしむべきか、疑はしい場合がある。この決定は、これまた醫者に任せなければならない。

『して見ると、非醫者の分析者は分析中にも醫者を時々呼んで來なければならないのですね。非醫者が駄目だと云ふことの論證がまた一つ擧つたわけだ。』

いや、さうだからつて何も非醫者が駄目だと云ふことにはならないですよ。醫者の分析だつて、さう云ふ場合には違つた處置はしないのだから……。

『私には分らない。』

つまり分析の技法の規則として、分析處置中にさう云ふ曖昧な徴候が起きると、自分だけでそれを判斷して了はないで、分析には緣遠い醫者、例へば内科醫などによく見させる。よしんば自分が醫者で、自分の醫術上の知識を信じてゐる場合にでも……。

『私には餘計な事と思はれるが、何だつてそんなことを定めておくのです?』

餘計なことどころか、いろ〳〵理由があるのです。第一に、肉體的處置と心理的處置を一手でやる事はよろしくないし、第二に、轉嫁の關係上、分析者には患者を肉體的に調べることは好ましくない

ことになつてをるし、第三に、分析者は自分の考へが囚はれてゐないかを疑ふべきあらゆる理由があるからだ。何となれば、彼の興味は心理的契機の上に甚だ鋭く向けられてゐるからである。

『成程、非醫者の分析に對する貴君の態度は、やうやく私にははつきりして來た。貴君は非醫者分析者は必ず存在するやうになると頑張つてゐるのだ。ところが貴君は、彼等がその役目に不適當であることを辯護し得ないが故に、彼等の存在を辯護し容易ならしめる一切のことを搔集めてゐるのだ。併し私には一體何故に、非醫者的分析者が存在しなければならないのか分らない。どうせ彼等は二流の治療家にしかなり得ないのに……。既に分析者となつてゐる二三の非醫者に就いては、私としては何も云ひたくない。併しもうこれ以上には作られないがいゝし、講習所は非醫者を分析者に仕立てるやうに受付けないことにすべきだと思ふ。』

萬人に抱かれつゝある興味が、もしこの制限に依つて助長せられるならば、私は貴君に讃同する。これ等の興味に三種類あることを、承認なさい。即ち患者の興味と、醫者の興味と、さうして――最後に、併し最少ではなく――學問の興味である。この學問の興味の中にはあらゆる將來の患者の興味も含まれてゐる。これ等の三つの點を互に關係させて研究して見ませうか?

## 七、精神分析への三種の興味

さて、患者にとつては分析者が醫者であらうがなからうが、どちらでもいゝ事です。もし處置を始

める前に、また處置の途中での或る場合に、必要なだけの行屆いた醫者的の見立てがあつて、自分の病狀を誤認せられる危險さへ取除かれてあるならば……。患者にとつてそれと同日に論ずべからざるほど重大なのは、分析者が信賴を受けるだけの個人的特性を具へてゐることであり、また自分の仕事を果し得るだけの知識と洞察と經驗とを持つてゐることである。もし患者が分析者の醫者ならぬことを知り、多くの場合に醫者に對するやうな賴もしさを持ち得ないことを知ると、分析者の權威に關するやうに人々は思ふかも知れないが、我々は固より、分析者の資格に就いて患者に敎へることを決して怠りはしなかつた。さうして醫者か非醫者かと云ふやうな先入見は彼等には共鳴されず、何れの側からの治療にせよ、それを受容すること（この事は醫師階級の方で久しい間激しい不快の種となつて來たのだ）を知り得たのである。また實際、今日分析を實施してゐる非醫者的分析者は決して氣まぐれにころがり込んで來た者ではなく、大學敎育のある人であり、哲學の博士であり、敎育家であり、偉大な人生的體驗と卓越した人格とを具へた婦人などである。分析講習所の講習者たちはみな分析を受けなければならないことになつてゐるが、この分析はまた同時に、この重大な活動を實施するに自分の個性は適してゐるかどうかを知悉するの最上の方途でもある。

さて次は、醫者の興味であるが、精神分析を醫術の中に合一することに依つて、この興味は得らる

べきものとは、私は信じ得ない。醫術的研究は今では旣に五ヶ年も續いてゐる。最近の研究の完成は遙かに第七年目にも及ぶ。總て二年位經つと研究家には新しい要求が擡頭して、その要求を果さないと彼の將來に對する戰備が不十分であることが必ず分つて來るのである。醫者と云ふ職業への道は甚だ困難な道であり、それの實施は甚だ滿足を與へられるものでもなければ甚だ利益の事でもない。醫者はまた病氣の心理的方面をも知悉してゐなければならないとの、慥に尤な要求を抱くならば、さうしてそのために醫者的敎育を延長して分析への或る部分の準備をなすならば、それは學ぶべき事柄がそれだけ殖えたことになり、習學年限がそれに準じて長くなることを意味する。醫者が精神分析への彼等の要求をそのやうに果すことに依つて、滿足を得るであらうかどうかを私は知らない。併し精神分析の方では、固よりへたな遠慮はしない。而もこれが、只今のやうな時代に於いてゞある。醫者の出て來る如き階級に對しては物質的存在の條件が甚だ惡くなり、若い人達は出來るだけ早く自活の道を講じなければならないと云ふ時代に於いてゞある。

併し貴君は恐らく、醫者には精神分析實施の準備までさせてはならない、將來の分析者にはまづ醫術上の研究を完成せしめて後に必要な修業をなさしめる方が適當だと考へてゐるのであらう。そのために歲月が無駄になるが、それは問題にならない、何となれば三十歲以下の若い男は、患者に對する

精神的幇助の力の條件たる信賴をどうせ享受することがないであらうからだと、貴君は云ふであらう。それに對してはかう答辯することが出來よう、肉體的病苦への醫者でもホヤ〳〵のは患者のあまり大きな尊敬を期待することは出來ないし、また若い分析者は自分の時を經驗ある分析醫の監督の下に何處かの外來患者分析診療所で働くことに依つて、相當の年齡に達するまで待つてゐることも出來る。

併し私にまでもつと重大に思はれることは、貴君がこの提案に依つて力の浪費を辯護してゐることである。そんな浪費をして見ても、この困難な時代に於いて實際何等の經濟的是認をも發見し得ない。分析的修業は醫者としての準備教育の範圍に附加するところあるが、この範圍を包含するものでなく、またそれに包含されもしない。もし人々が精神分析の專門學校を建てるとすれば（これは今日でもまだ空想的に聞こえるかも知れないが）そこに於いてはやはり醫術の專門を教へる多くのことが教授せられることになる筈である。深部心理學が主要課目であることは勿論だが、それに副へて、生物學概論、出來るだけ廣範圍に亘つて性生活の知識、精神病醫學の方面での心理病の見方などである。他方に於いて、精神分析の教育には醫者に關係の遠い、醫者の活動には這入らない部門が包含される。卽ち文明史、神話學、宗教心理學、文藝學などである。これ等の分野をよく呑込んでゐないと、分析者は自分の折角の材料の大部分に對して理解を持たないことになる。それに對し、分析者にとつて醫學

校で教へることの大部分は、彼の目的のために役に立たないのである。跗骨、炭化水素の成分、腦神經纖維の變化に就いての知識など、總て醫學が桿狀病源體やその對抗法や、血清反應や組織の新成などに關して明かにしたことは、みなそれ自身に於いては非常に價値があるが、併し分析者には全く不必要であり無關係であつて、それによつて神經症を理解したり治療したりする助けにもならなければ、それを知る事がかの知的能力（分析的活動のために最も必要なかの能力）に鋭さを加へもしない。醫者が一つの醫術上の專門（齒科醫療）に向つたとすると（この場合は非常に類似してゐる）人々は反對をしない。この場合にも醫者は多く役立て得ない事柄に就いて試驗を濟ませなければならない。而も學校では敎はらなかつた多くの事を勉强しなければならない。兩方の場合は、併し、同日には論ぜられない。また齒科醫療に對しては、病理學の偉大な見地、炎症、化膿、骨疽に就いての學說、肉體諸器關の相互効果に就いての學說は、その意義を保有してゐる。併し分析者の經驗は彼を、それとは違つた現象、違つた法則の存する別世界へと導入して行く。哲學が如何に身心間の罅隙を無視してゐようとも、我々の經驗にとつてはそのやうな罅隙が慥に存在し、また我々の實踐上の苦鬪の種にさへもなつてゐるのだ。

他人を恐怖（フォビー）又は强迫觀念の苦痛から救はうと欲してゐる人間を、無理やりに醫術研究の迂路に驅り

立てることは、不當であり無駄である。またそんなことをしても何等の成功を收めないであらう。もし分析一般を抑へ付けることが出來ないならば……。こゝに一つの風景があつて、或る眺望地點に達するに二つの道が付いてゐて、その一つは短く眞直であるが、他は長く、曲折してをる迂路であると想像しよう。その近道の方に貴君は通行禁止の制札を立てるとする。それは多分、その沿道に花壇があつて、それが無暗に摘まれないやうにしたいからである。併しその近道が嶮しく骨が折れて、遠道がゆるやかに導いてゐる場合にのみ、貴君の禁令が尊重せられる見込があるのである。併しさうでなく、その反對に遠路の方が一層困難であるとすると、貴君の禁令がどれだけの役に立ち、花壇が如何なる運命に遭ふかは、貴君の容易に察知し得るところである。貴君がいくら非醫者に醫學を研究しろと强ひても、私が醫者に分析を學べと云ふのと一般で、その甲斐ないであらうことを虞れる。貴君も御存知の通り、これが人間性である。

『分析處置は特別の修業なくして實施すべきものでなく、而も醫學の研究は分析のための準備に依つて倍加する重荷に堪えない、さうして醫術上の知識は分析のために大部分あらずもがなのものだと云ふ貴君が正しいならば、その職業上のあらゆる任務に堪え得るだけの理想的な醫師的人格を目差して進むことは、どうしたらよいのですか。』

これ等の困難から如何なる血路が通ずるであらうかは、私の豫見し得ないところである。またその血路を指示しようと云ふ必要も感じてゐない。私はたゞ二つの事を考へてゐる。第一に、分析は貴君にとつて一つの難物であつて、こんなものは抑々存在しなければ一等いゝのである。――慥にまた、神經症者は一つの難物である。――さうして第二に、もし醫者があれほど莫大な心理的神經症者たちを自分等から引受けてくれる、さうして患者の有利になるやうに常に接觸してゐる、治療者の一階級を容認することに決めたならば、一時はあらゆる興味が生かされるやうになるであらう。

『貴君の云つた第三の興味と云ふのは、この機會に話すのですか。それとも、今はまだ何かもつと云ふことがありますか？』

左樣、私はまだ第三の興味、卽ち學問の興味を考慮して見るつもりであつた。そこで私の云はうとすることは、貴君にはあまりぴつたり來ないでせう。それだけに私には愈々重大なのである。

つまり我々は精神分析が醫術の中に吸收されて、その究極的な殘骸を精神病醫學の敎科書中に、治療法に關する章中に、催眠術的暗示や自己暗示や信念などの如き方法（それ等の影響が短命であつたのは、我々の寡聞のためにさう思ふのかも知れないが、大衆の怠慢と懶惰とに由るものである）と並べて論じられるのは、決して望ましいことだとは私は考へない。『深部心理學』として、無意識精神の

學說として、精神分析は、凡そ人間文明の發生史、文明的現象（藝術、宗教、社會秩序の如き）を對象とするあらゆる學問にとつて缺くべからざるものである。精神分析は既に今日までもこれ等の學問がそれぞれの問題を解決する上に相當の助力を供してゐると思ふ。併しこれ等は畢竟するに、文明史家、宗教心理學者、言語學者等がこの新たに提供せられた研究方法を充分驅使するやうになつた曉になされるであらうところの貢獻に比すれば、誠に些々たるものである。神經症の治療のために分析を用ふることは、その應用の一方面に過ぎない。恐らく將來には、この方面は最重要のものでないことが分つて來るであらう。何れの場合にもせよ、一つの應用のために他の一切の應用を犧牲にする（それもたゞこの應用方面が醫者の範圍に觸れてゐると云ふだけの理由で）のは、不當であらう。

何となれば、こゝに一つの事情が更に展開する。この事情を考へて見るとき、人々は遺憾を感ぜざるを得ない。種々の精神科學者たちが自分たちの材料の上に精神分析の方法と見地とを應用するために學ぶとすると、精神分析の文献に出てゐる結果だけでは間に合はない。精神分析を理解するために開かれてゐる唯一の道を辿ることに依つて、學ばなければならないであらう。即ち、自ら分析を受けなければならないであらう。分析を必要とする神經症者の他に、知的動機から分析を受容せんとする第二部類の人々もある。彼等は知的動機と並んで、自分等の行動力の向上と云ふ目的をも慥に歡迎す

る。かゝる分析を實施するためには、多數の分析者――彼等にとつては、醫術上の偶然的知識などあつて見ても大して役には立たないであらう――を必要とする。併しこれ等の分析教師――と我々は彼等を名付けたい――は特に細々した修業を積んでゐるに違ひない。彼等をしてそれ等の修業を失はしめざらむと思ふならば、材料的に有益な、證明的な場合を蒐集する機會を彼等に與へなければならない。而し健康な人々には知識慾の動機もなくなつて、自ら分析を受けないからして、分析教師をして將來の、非醫者的活動のための教育を受けしめるのは――細心の統制の下に――やはりまたたゞ神經症者に就いてゞなければならない。全體には、併し、或る程度の動きの自由が必要である。つまらない制限は少しも受けるには及ばない。

多分貴君は精神分析のこれ等の純粹に理論的な興味を信じないであらう。即ちそれ等の興味が非醫者の分析の實踐的問題に何等かの影響を及ぼすことを容認したくないであらう。ではまづ、精神分析には今一つの應用方面があることを考へて貰ひたい。これはもぐり治療者法の領域からぐづ〳〵云はれない方面で、醫者もこれには何も文句をつけて來ないであらう。つまり、教育學に精神分析を利用することを云ふのである。子供が好ましからぬ發達の徵象を示し始め、不機嫌で剛情で注意が散漫になると、小兒科醫や學校醫もそれに對しては何とも手が出ない。小兒が恐怖、食慾不進、嘔吐、不眠

などの明かに神經質的現象を生じてゐる時でさへも、何にも出來ない。分析感化と教育的標準とを打つて一丸としたる處置を、幼兒の環境の事情をよく考慮してやり、その精神生活に這入り込んで行くことを解してゐる人々が行ふならば、神經病的徵候をなくすると共に、始まりつゝある性格變動を元に還すことが、同時に出來る。幼兒神經症は屢々それと見えないが、これが後年の重病の性向であることを我々は洞察するので、この洞察に依つて我々はこの兒童分析が一つの卓越した豫防法であることを知るのである。分析の敵はなほ存してゐることは、否むべくもない。この等の教育家的分析者又は分析的教育家の活動を阻むために如何なる手段がそれ等の敵の方寸に存するか、私は知らない。私はそれも容易には出來ないと考へてゐる。併し勿論、あんまり安心してはゐられない。

なほ、成人の分析的處置に關する我々の問題に立歸るが、この方でも我々はまだ一切の見地を論じ盡してはゐなかつた。我々の文明は殆ど堪え難き壓迫を我々の上に及ぼしてゐる。そこには是正の必要がある。人々をしてそのやうな是正のための準備をなさしむべく、精神分析を、實行上さまざまな困難のあるに拘らず、賴みにすると云ふことは、あまりに空想的であらうか。恐らく或るアメリカ人は自國の社會的な仕事をしてゐる人々を分析的に教育し、文明的神經病に對する爭鬪への援軍を彼等に依つて編成することは、多少の金錢に價することだと考へるであらう。

『あはゝゝ治療隊の新しい一種ですな。』

・さうですとも、我々の空想はいつでも模範を示さうと働いてゐるのです。やがて歐洲へ流れ込んで來る熱心な研究者たちは、必ずヰインを通り過ぎて行くであらう。何となれば、此地では分析の發達は早期に禁斷外傷を受けてゐるかも知れないからだ。何かをかしいですか？　貴君に何とか判斷をさせようと思つてさう云ふのではないのです。慥にさうでないです。私は知つてゐます、貴君が私を少しも信用してゐないことを――。また、信用するやうになるであらうことを私は貴君に保證し得ません。併し一つの事を私は知つてゐる。貴君が非醫者の分析に對して如何なる決定を下すかは、あまり重要ではないのだ。それは地方的な効果を持ち得るが、併し要するに、精神分析が內藏する發達の可能性に對しては、規則や禁令では何とも仕樣のないものである。

# 『非醫者の分析可否の問題』への附言

一九二七年の夏、『國際精神分析雜誌』(第十三卷、第三號)にて發表。

私はさきに非醫者の分析問題に就いて一小論文を草したが(只今の論もそれに關聯してゐる)、その論文成立の直接的契機となつたのは、我々の非醫者なる同僚テオドル・ライク博士 Dr. Th. Reik がもぐり治療者の廉を以てヰインの役人から糺問を受けたことであつた。この訴訟は豫めあらゆる尋問があつたり種々な注意があつたりして後に却下された事は、周知の筈である。これは私の書物の結果であつたとは私は信じてゐない。この事件は恐らく原告に對して都合の惡い事があつたらしく、損害を被つたと訴へた人物はあまり信用するに足らぬ者であることが分つた。ライク博士に對する手續の中止になつたことは、非醫者の分析問題に對するヰインの官憲が原則的に決定したことを意味しなかつたやうである。私が『不偏不黨』的相手の傀を作り出した時に、私の想像してゐたのは現代の或る高官の人物であつた。卽ち私自身がライク事件に關して對談し、彼が望むまゝに本件に就いての管見

を洩した、好意的な考へのある、珍らしく公平な或る人であつた。私は勿論彼を說いて私の說に同化せしめる事は出來なかつた事を承知してゐる。またその不偏不黨者との會話の結果を一致に終らせもしなかつた。

私はまた、非醫者の分析問題に就いては、分析者仲間に於いてさへも立場の統一を私が生ぜしめ得るとも、期待してゐなかつた。誰でもこの集團に於いてハンガリー協會の說とニウ・ヨークの仲間のそれとを對比して見るならば、私の論文が少しも意見統一の役に立つてゐないことを、恐らく認めるであらう。萬人は以前の自說を固執してゐると考へるであらう。併しこれをも私はやはり信じない。多くの同僚たちは、その極端な偏頗を緩和したであらう。非醫者の分析問題はこれまでの習慣に從つて決定せらるべきものではなく、全然別の立場に卽することを、從つて一つの新しい判斷を下すことを、要求するものであるとの私の意見を、大抵の人々は受容したと私は考へるのである。

また、私がこの問題の全體に與へた轉向は、人々の贊同を得たやうに思へる。實際、私はこの命題を更に押進めて、要するに分析者が醫師の免狀を持つてゐるか否かが眼目ではなく、彼が分析實施に必要な特別の修業を獲得してゐるかどうかにあるとしたのだ。分析者に對して最も適切した修業は何れであるかに關して、同僚たちが非常に熱心に論じた問題は、右の事に關聯してゐた。それは大學が

將來の醫者にあてがう修業とは違ふと云ふのが、私の考へであつたし、また今もその意見である。所謂醫者的修業は分析者となるには面倒な迂路であると、私には思へる。これは分析者に缺くべからざる多くを敎へるが、併し他面に於いて彼が到底利用し得ないやうな多くの事を押付ける。さうして彼の興味が彼の考へ方と共に、心理的現象の把握から離れる危險を伴ふてゐる。分析者に對する敎育計畫をまづ創るべきである。その計畫の中には、精神科學的、心理學的、文化史的、社會學的材料を、解剖的、生物學的、進化史的材料と同樣に包含してゐなければならない。さう云ふ風に課目は非常に多岐に亘るからして、分析的活動に對して何等直接的關係がなく、知力や感覺的觀察を進めるにたゞ間接的貢獻しかなし得ない他の一切の研究の如きは、これを控除して至當である。これ等の提案に反對し、そのやうな分析的專門學校は存在しない、それはたゞ理想的要望のみと、批難することは容易である。左樣、これは一つの理想である。併し實現され得る理想であると共に、實現されなければならない理想でもある。我々の講習所は、創立以來日なほ淺きがために未だ至らぬ點は多々あるが、而も既に一つのそのやうな實現の始まりである。

讀者諸氏は、なほ大いに論究しなければならない或ることを私がこの論文に於いて、自明の事の如くに豫定してゐると、思はれるであらう。即ち、精神分析は何等、醫學の專攻的一部門ではないと云

ふ事を、である。人々がそれを認めることを、どのやうに拒むやうになるか、私には分らない。精神分析は心理學の一部分である。また陳い意味に於ける醫術的心理學又は病的過程の心理學ではなく、當り前の心理學である。慥に、心理學の全體ではないが、寧ろその下部構造、恐らくは抑々その基礎である。精神分析はこれを醫術的目的に用ふることが出來るからとて、人々は誤つてはならない。電氣やレントゲン光線とても醫術に利用することが出來たが、併し兩者はやはり物理學と云ふ學問に屬してゐる。また歷史的に考究して見ても、これ等の所屬は變更されない。電氣に關する學說の全體はその出發を神經筋肉裝置に於ける觀察から始めてゐるが、それ故にとて今日では電氣が生理學の一部分であると主張せんとするやうなものは誰もない。精神分析に對しては、これが或る醫者に依つて、患者の惱みを助けてやらうとして發見されたものである事を人々は云々する。併しその事は斯學の本性を判斷するに就いては、どちらでもよい事である。またこの歷史的論考は誠に危險である。歷史的論考を進めて行く內に人々の想起すべきことは、如何に醫者なるものが始めから分析に對して敵意と憎惡とを以てこれを拒否したかと云ふことである。從つて、彼等は今日となつてこれを自分等に於いて壟斷すべき權利がないことになる。また實際——私は固よりさう云ふ推論を却けるが——私は今日でもまだ確信が出來ないのである、醫者が精神分析を獲得することは、リビドー說の見地から、アブ

ラハム的の第一低段階に歸すべきか、第二低段階に歸すべきかゞ……。また分析を壟斷することが、これを破壞する意圖を以てか、或は保持する意圖を以てかゞ、分らないのである。

歷史的論考云々をなほ姑く續けるが——、要するに私と云ふ人間が問題なんだから、この事に興味のある人々のために、私自身の心的動機への二三の洞觀を供しようと思ふ。四十一歲まで醫者としての活動を續けて後、私は自分が本來醫者の柄でないことを自認するやうになつた。私が醫者になつたのは自分の本來の意圖を轉向するの已むなきに至つたゝめである。で、自分が大きな迂路を經た後に始めの方向を再發見したことが、私の一生の大勝利であつた。若い頃から自分には惱める人々を救はうと云ふやうな要求があらうとは、少しも知らなかつた。私のサディスティックな素質はあまり甚だしくなかつたので、その素質からのこの派生は發展しようとしなかつた。私はまた嘗て『お醫者』ごつこをしたことはなく、私の幼兒的好奇心は明かに別の方途を進んで行つた。靑年時代には、この世の謎に就いて何事かを理解し、またならうことならその謎の解決に何事かを貢獻したいとの要求が、非常に猛烈になつた。醫術的專門に向ふことが、そのためには最上の道と思はれたが、併しその當時に私はそれを動物學や化學に依つてなさうとして無駄であつた。遂に私は、嘗て私に影響を與へた最大の權威たるフォン・ブリュッケ V. Brücke の感化の下に生理學に熱中したが、その頃はこの學問は勿論

非常に組織說に限定されてゐた。その時分私は既にあらゆる醫學上の試驗を濟ませてゐたが、醫者的なことには興味を持つてゐなかつたので、遂に私の尊敬してゐる敎師が、物質的境遇の貧しい君としてあまり理論的な方面にばかり憂身をやつすのは避けねばなるまいと云つてくれた。そこで私は神經組織の研究から神經病理學へと向ひ、また新しい刺戟に基いて神經症のために苦勞するやうになつた。併し私は、自分には醫者としての正しい性向が缺けてゐるけれども、そのために自分の患者に甚だしい迷惑をかけたことはないと考へてゐる。何となれば、患者と云ふものは、醫者に治療上の興味が熱烈に燃えてゐても、あまり迷惑とはしないものだからである。醫者は冷靜で、出來るだけ正確に操作するのが、患者に對して最もよいのだ。

これまでの話は慥に、非醫者の問題の說明にはあまり貢獻するところはなかつた。私が精神分析の獨自價値を、並びに斯學が醫術的應用から獨立したものであることを保證するならば、これまでの話は單に私の個人的認定を强めたものであつた。併し人々は私に抗言するであらう、もし科學としての精神分析が醫學又は心理學の一分野であるならば、醫者非醫者の問題は實踐上では全然どちらでもよい事ではないかと。要するに問題となるのは、或る別の事柄で、分析を患者の處置に利用すると云ふ事である。で、分析をこの方面に利用する以上は、醫術に於ける或る專門事項として、例へばレント

ゲン學の如くに、取扱はれることに甘んじねばならない。さうして治療法に妥當する規則に從はねばならない。私はそれを認める。それを容れる。たゞ私は治療が學問を殺さないやうにしておきたいのだ。遺憾ながら總て比較と云ふものは或る部分だけの話で、やがて比較せられる兩者が分袂する一點が出て來る。分析の場合はレントゲンの場合とは違つてゐる。物理學者はレントゲン光線の法則を研究するために病人を必要とせぬ。併し分析は人間の精神的現象以外には何等の材料を持たない、たゞ人間に就いてのみ研究することが出來る。ところが神經症的な人間は特に把握し易くなつてゐると云ふ事情があるので、常態者よりはさう云ふ人々の方が材料として敎へられるところも多く、知解し易くもある。で、分析を學び應用せんとする人々からかゝる材料を奪ふならば、彼の修業の可能性はその大半が失はれたことになる。私は固より、神經症者の利害（興味）を犧牲にして修學や研究の興味のために奉仕せしめることを要求するものでは、決してない。私は非醫者の分析問題に關する小論の中で、或る防禦手段を講ずることに依つて兩者興味の一致を圖り得るであらうことを、またそのやうな解決はやがて正しい意味での醫者的興味に奉仕するものであることを、示さうと努めた。

私は總てこれ等の防禦手段を講じて見た。こゝで議論をして見ても何も新しいことを加へないと、私は云ふ理由がある。議論をしてゐると屢々現實に對しては正當でないやうな方面が妙に强調せられ

ることになる。判別診斷の困難に關して、多くの場合に於いて肉體的徵候の判斷が不確實であることに關して云はれたこと、つまり醫者の知識や干涉を必要とすると云ふことは、總て正しい。併し凡そさう云ふ疑ひが起きない（從つて醫者を必要としない）場合の數は、比較にならないほど多い。これ等の場合は學問的にはあまり興味がないかも知れないが、生活に於いては十分に重要な役割を演じ、分析資格を完全に具へた非醫者的分析者の活動を至當とするのである。私は嘗て或る同僚を分析したことがあるが、彼は醫者でないものが醫者的活動をなしてゐることに對して、甚だしく痛憤してゐたので、私は彼にかう云つた。——我々はこれまでにもう三ヶ月以上も操作を續けて來たが、我々の分析の何れの個所に於いて私の醫者的知識が必要になつたことがあるか、と。一向さう云ふ必要を認めたことがなかつたことを、彼は認めた。

また、非醫者の分析者は醫者に相談しなければならないから患者に對して何等の權威がなく、代診やマッサーヂ家程度の尊敬しか得られぬと云ふ說も、私はあまり高く評價出來ない。患者が醫者に權威を感ずるのは感情の轉嫁をするからだと云ふ點と、醫者の免許狀を所有してゐるからとて、醫者が信じてゐるほど患者が有難く思はないと云ふ點とはその通りだが、それ以外の點ではこの比較はやはりぴつたりしない。職業的に馴れた非醫者分析者は世俗的牧師としての尊敬を自分に收めることを、

さして困難とせぬ。醫者であれ非醫者であれ、分析者が大衆に對して果たすべき機能は、この『世俗的牧師職』と云ふ名でこれを記述することが出來よう。我々の說に讃同する友はプロテスタント僧侶の中にも、近頃ではまたカトリック僧侶の中にもゐるが、彼等はその信者たちの心的葛藤に或る部分の分析的說明を加へることに依つて彼等の信仰を恢復し、かくて彼等をその生活上の障害から解放してやることが屢々である。我々の反對者であるアードラー派の個人心理學者たちは、何とも自分ながら摑みどころがなく無能力になつて了つた者等に對して右と同じ變化を與へようと努める。卽ち彼等は患者たちの精神生活の唯一隅を照破し提示することに依り、社會的共同團體への興味を喚起するのである。これ等二つの遣り方はその力を分析に負ふてゐるのであるから、精神療法である。我々分析者は患者を成るべく完全に成るべく深く分析することを目的とする。我々は彼等をカトリックやプロテスタントや社會的の共同團體の中へ受容することに依つて、彼等の重荷を除かうとは欲しない。寧ろ、我々は、抑壓に依つて患者の無意識中に停頓してゐるエネルギーを自我の方へ引出して來ることに依つて、內面から彼等を豐富にしてやるのである。その他、抑壓を保持して行くために己れの自我を無駄に浪費してゐる人々をも豐富にしてやるのである。このやうにして我々の爲すところは、最もいゝ意味に於ける魂の世話（牧師的の仕事）である。これでは我々としてあまり高尙な目的を定め過

ぎたことになるであらうか。我々の患者の大多數は、我々がこれほど骨折つて操作するほどの價値があるであらうか。彼等の缺陷は、これを內部から改善するよりは、外部から支へておく方が經濟的ではなからうか。精神分析に於いては始めから、治癒と探究との間に聯結があるのだ。認識が成功を齎したのだ。何か新しいことを經驗せずして、處置することは出來なかつたのだ。そのよき効果を體驗して、始めて說明がついたのだ。我々の分析的方法は、以上の價値高き一致が保證される唯一の方法である。我々が分析的方法に依つて魂の世話をしてゐる場合にのみ、今や眼覺めつゝある（人間の精神生活への）洞察を我々は深めるのである。學問的利益へのこれ等の望みこそは、分析的操作の最も高尙な、最も喜ばしき特徵であつた。かゝる望みを、我々は何等かの實踐上の考慮のために犧牲にしてよいのであらうか。

これ等の議論に於ける二三の云ひ表はし方のために、私は疑ひを抱いてゐるのである、醫者問題に關する私の論策が或る一點に於いて誤解されてゐるのでなからうかと。私が醫者たちを一般に分析實施に不適當であると說明し、醫者の援軍を避けるやうにとの合言葉を發したかのやうに、醫者たちは私に對して互に掩護してゐる。勿論、そんなことは私の意圖ではない。どうしてそんなに思はれたかと云ふに、それは多分、私が例の論爭的な文中で、修業を積まざる醫者出身の分析者が非醫者よりも

更に危險であると說いたゝめであるらしい。この問題に於ける私の本當の意見は、かう說明することが出來よう。嘗て例のシムプリチスムス(一)の中で女に關して云はれた皮肉を、この場合に移さうとしたものであると。そのシムプリチスムスの中で、或る人が女の弱さと厄介さとに就いて愚痴を啣すと、他の者がかう云ふのである。——併し女は我々がかうした遣方で作つたものとしては上出來さ、と。私も告白する、我々が分析者を養成するために望んでゐる學校が成立するまでは、醫者として準備せられてゐる人々は將來の分析者に對する最良の材料であると。たゞ我々として當然要求したいことは彼等がその準備的教養をその得業的教養と穿き違へないことである。彼等はとかく醫學校での教育のために一面的に墮し易いから、それを克服して貰ひたいことである。心理學術的觀念を以て把握すべき心理的事實を、內面的な神經組織等に照して考へたくなり易いものであるから、その誘惑に抗するやうにして貰ひたいことである。心理的現象と肉體的、解剖的、化學的根柢との間の關係に交渉ある一切の問題は、兩者を研究した人々、卽ち醫者的分析者のみの扱ひ得るところであることは、私も同樣に期待する。併し、人々の忘れてならないことは、これ等のみが精神分析の問題の總てゞはないと云ふことである。我々は爾餘の方面に於いては、精神科學に於ける準備的教養ある人々の協力を決して缺くわけに行かないと云ふことである。實踐的の根據からして（また我々を一般に知らせるために

も）我々は、醫者の分析と分析の應用とを區別する習慣を受用して來た。それは正確でない。實際に於いては、區別限界は科學的精神分析と、精神分析の醫學的及び非醫學的應用との間に存する。

註（一）グリムメルスハウゼンの作とされてゐるユウモラスな繪入小説（一六六九年）のこと。精しくは、本全集第六卷『分析藝術論』一二四頁參照。（譯者）

この討議に於いて非醫者の分析を最もそつ氣なく拒否したものは、我々のアメリカの同僚たちであつた。彼等に對して二三の抗辯を用ふるのは、餘計なことゝは私は考へない。彼等の抵抗は專ら實踐的な契機に溯るのだとの意見を私が述べても、それは分析を論爭的目的のために誤用したことにはならぬ。彼等は自國に於いて非醫者分析者が分析を惡用し誤用し、その結果、患者も分析職も共に大いに損害を被つてゐることを見てゐる。であるから、彼等はこの憤慨に於いて無良心なエセ分析者輩から離れ過ぎ、非醫者があらゆる意味に於いて分析に與ることを拒否しようと欲してゐるのだ。併しかう云ふ事情では、彼等の態度の意義があまり大したことでないことになるのである。何となれば、非醫者の分析問題は實踐的な考慮に依つてのみ決定さるべきでないと共に、アメリカに於ける地方的な事情のみを以てして我々の標準とすることは出來ない。

我々のアメリカに於ける同僚たちが、本質的にはたゞ實踐的な動機に導かれて決定したことは、我

々には非實踐的であるやうに思はれる。何となれば、そのやうな決定では實際事情を支配してゐる諸々の契機の一つをだに改めることは出來ないからである。それは改善への一つの試みとしての價値はまづ具へてゐる。もし人々が非醫者分析者の活動を防ぐことが出來ず、彼等に對する鬪ひに於いて輿論の支持を得ることが出來ないとすれば、寧ろ彼等に修業の機會を供し、彼等に感化を及ぼし、醫者に是認せられ、同僚として醫者に近接し得る可能性を刺戟として彼等に供する事に依り、彼等をしてその道德的、知性的の水準を高めしめるやうにする方が、目的に適うものではなからうか。

# 性格と肛門性感

始めて一九〇八年、ヨハン・ブレスラー博士 Dr. Johann Brésler の神經症學週刊雜誌上に發表。原書全集第五卷收載。原名は „Charakter und Analerotik."

精神分析の努力に依つて我々が助けを與へてやらうとする人々の間には屢々、或る型の人物がある。彼等には一定の性格的特質が揃つてゐるが、或る肉體的機能の働き方やその働きを當人の幼兒時代に受持つた肉體器關が注意を惹くのである。そのやうな性格とこのやうな肉體器關の働きとの間には有機的關係が存すると云ふ感じのするやうになつたのは如何なる原因からであるかは、今日のところ私には多くが分つてゐない。併しかう感じたのは何も理論的に期待するところがあつてのせいではないと云ふ事だけは確言し得る。

屢々さう云ふ經驗をする結果、私はそこに關係が存するとの信念が甚だ強くなり、私は敢へてそれをこゝに報告する氣になつたのである。

私が記述したく思ふ人々は次に擧げる三つの特徴を示す點に於いて一律的に一致してゐる點では注意を惹くのである。その特徴とは秩序的 ordentlich, 節約的 sparsam, 主我的 eigensinnig などである。これ等三つの言葉の各々は、相互に關係ある一群の性格の特徴を元來示すものである。『秩序的』とは肉體上の綺麗好きを意味するのみならず、一寸した責任にも几帳面である事をも意味してゐる。その正反對は、無秩序的、だらしない、であらう。節約は昂じて來ると業慾となり、主我(我儘)

はやがて剛情となり、從つてまた癇癪持、復讐好きなどの傾向と容易に結付く。あとの二つの特徴――節約好きと我儘と――は相互の關係が密接で、その點第一の『秩序的』とよりは結付き易い。これ等の二つがこのコムプレクスの下にはいつも付きものゝ部分であるが、併しこれ等の三つが如何樣にか結付いてゐることは何としても否むことは出來ないやうに思はれる。

これ等の人物の幼兒時代の事を調べて見ると、彼等が相當永い間の習慣でお腹の調節を自由にする事が出來、そのためにそれ以後の少年時代にも排泄機能が時々具合惡くなるので困つてゐることが容易に分るのである。彼等は赤ん坊時分におまるに驅しても排便することを拒む（何となれば彼等は排便時の副的快感を惜むから）底の赤ん坊であつたやうである。何となれば彼等が自ら語るところに依つて見ると、相當後年に至るまで大便を保留することは彼等に快感を供したからであり、また白日の下に齎された糞便をいろ〳〵穢らしくいぢくつたことを想起（本人よりもその兄弟姉妹等の方が早く且つ容易に想起するが）するからである。これ等の徵象に就いて見て、彼等の齎した性的素質の中には肛門帶域のあまりに明白な色慾的强調の存することを、吾人は結論するのである。併し彼等が子供時代を去ると共にさう云つた弱點や奇癖の跡はもはや少しも認めることが出來ないので、吾人は假定せざるを得ないのである、肛門帶域はその性的意義を發達過程中に吞込んでしまつたのだと。そこで

また、彼等の性格中の常住的な三大奇癖は肛門性感の呑込み(消失)と關係があると認める事が出來ると我々は想像せざるを得ないのである。

人々は或る事が概念的に理解され難く思はれる限りは、説明のまだつきかねる限りは、その事を信じようとしないものであることを私は知つてゐる。少くともこの事の根本に横たはるものを私は、自分が一九〇五年に『性説に關する三論文』の中で云つておいた前提に依つて、一層我々に理解し易いものとすることが出來る。同書中に於いて私は、人間の性本能が非常に複雜なもので、澤山の要素や部分本能の寄與に依つて生ずるものであることを明かにしておいた。就中『性的亢奮』への本質的な寄與をなすものは或る著しい肉體的個所『性器、口、肛門、氣孔』で、これ等は『性的帶域』と呼ぶのが適當である。これ等の個所から進入して來る亢奮の大きさは、併し、人生のあらゆる時期に於いていつも同じやうになると云ふわけではない。一般的に云へば、それ等の亢奮の大きさのほんの一部分だけが性生活に寄せられるのであつて、他の一部分は性目的からは離反して他の目的にさし向けられる。この過程を我々は『昇華作用』と呼ぶことにしてゐる。『性的潛在期』と名付け得べき人生の時期(滿五歳から思春期の始め、卽ち十一歳頃まで)に於いて、かの性的帶域から供給せられた亢奮を犧牲にして精神生活中に羞恥、嫌惡、道德のやうな反動形成、反對力が產出せられ、この力が後年の

性本能の活動の堤防となるのである。然るに肛門性感なるものは、人間生長の過程に於いて、また今日の文明的教育の意味に於いて、性的方面には利用され得ざるものであるが故に、嘗て肛門性感者であつた者に甚だ屢々見られる性格的特徴――秩序的、節約的、主我的――が、肛門性感昇華の第一の常住の結果であることは、甚だ見易い道理である。(一)

註(一)　拙著『性説に關する三論文』(本全集第五卷)の中で幼兒の肛門性感に關して云つておいた事が、あまり物分りのよくない讀者の間に於いて特に反對を招いたやうであるから、私はこゝで一つの觀察を挿入しておきたいと思ふ。實はこの觀察は或る甚だ知識的な患者のお蔭で私の得たところである。――『「性說」に關する論文を讀んだ或る知人はこの書に就いて語つてゐます。この書は申分のない書である事は認めてゐるが、たゞ書中の或る一個所――併し彼とてもこれの內容を勿論承認し了解してはゐるのです――甚だグロテスクであり滑稽であると思つたと云ふのです。そのために彼はお肚を抱えて小半時も笑ひが熄まなかつたと云ふのです。その個所と云ふのはかうです。――「後年に偏屈になつたり神經質になつたりするその最も確かな前兆の一つは、幼兒がその世話する人に便器の上にあてがはれた時に排便を拒み、この機能を自分の好む時まで保留しておく時に見られるのである。寢床を穢すと云ふことは、子供は介意しない。彼はただ排便時の副的快樂を失ふまいと介意するだけである。」(本全集第五卷八七頁。)便器にあてがはれてゐる乳兒が、自分の個人的自由意志のそのやうな强制に對して從ふべきかどうかと考へたり、更にまた排便時の快感を失はないやうにと介意したりすると云ふ考へそのものが彼を甚だ愉

快にしたのであります。——それから約廿分經つて、お茶の時に私の知人は突然全く何のゆかりもなくから考へ始めたのです。「ココアを目の前に見て私は子供時分にいつも抱いてゐた或る考へが思ひ浮んで來たのである。その當時私はいつも考へてゐた。自分はココアの製造者 Van Houten（彼はこれを Van Hauten と發音してゐた。）であつてココア製造の偉大な秘訣を心得てをり、人々は自分からこの世界のためになる秘訣を知らうと骨折つてゐるが、自分はこれを株守してゐるのだと。何故に私が Van Houten を思ひついたのか、それは私には分らない。多分このココアの廣告で頭に這入つたのであらう。」笑ひながら、且つこれと結び付けるやうな深い意圖もなくて、私はかう考へた。‚Wann haut'n die Mutter?!‘暫くたつて後やうやく私はこの言葉の洒落が、突然思ひ浮んだ幼兒期記憶の解釋の鍵を供することを知つた。これを今や私は隱蔽空想 Deckphantasie の素晴らしい實例であると考へる。この空想は本來の事實（營養過程）が持續してゐる間は、字音的聯想（‚Kakao,‘ ‚Wann haut'—n.‘）を基礎として、罪惡意識を、記憶內容の完全な價値轉換に依つて落着けてゐるのだ。（背後の方〔肛門〕から前方〔口〕へと轉置されてゐる。營養を支拂ふ事が營養を攝取することに轉置せられてゐる。恥づべき匿されてゐる內容が世界を幸福にする祕訣と轉置されてゐる。）こゝで私にまで興味のあるのは一つの抵抗が働いてゐることであります。この抵抗は勿論ゆるやかな形式をとつてゐます。さうして本人をして本人の意志なきに、小半時の後に、自分自身の無意識中から最も美事な證明が提示せられたのであります。』

這般の事情の內的必然性は勿論私にも洞察出來ないが、併しその事情を理解するの助けとなるべき

ものゝ、亂雜なるもの、身體から離れたもの（『その所を得ざるものは穢し。』,,Dirt is matter in the wrong place,") に就いて興味を持つてゐる、それの反動形成であると云ふ感じがする。我儘（主我的なこと）を排便の興味と結付けることは一寸容易でないやうに思はれるが、併し既に乳兒は排便を中止する時にむづかることを考へて見れば思ひ半ばに過ぐるものがある。また剛情な子供を叱る時にこれを大人しくさせる時に、肛門の性的帶域と關係ある皮膚を打擲することを考へて見るがよいのである。反抗又は反抗的罵倒の表現として我々は昔から、肛門帶域の愛着を内容とするところの事柄をなせといつも云ふのである。つまり、柔しさに抑壓を加へたことをなせと云ふのである。お尻をまくることは斯く口で云ふところを弱めて動作に出したのである。ゲーテのゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンには口で云ふのと動作で示すのと、兩つながらこの反抗の表現が適當な個所に用ゐてある。

最も多く見られるのは、金の興味と排便との一見甚だ離れた二つのコムプレクスの間に生ずる關係である。精神分析の經驗ある醫師は恐らく誰しも知つてゐる通り、最も頑固な、最も永引いてゐる、所謂常習的便秘（神經質者の）がこの方法に依つて癒るのである。これは人々を驚かせるかも知れないが、併しこの機能は催眠術の暗示に對してもやはり同樣に從順になることを考へて見れば、そんな

に驚くほどの事でもないのである。併し精神分析者が、この効果を目指すのは、當人の金錢コムプレクスに觸れて、彼等をしてこのコムプレクスと共にこれに關係ある一切の無意識事項を意識化する場合に於いてゞある。神經症はかゝる場合には、守錢奴を『穢い』,,schmutzig" oder ,,filzig"（英語では filthy）と云ふ言語習慣の暗示に從つてゐるのだと我々は考へることも出來よう。併しこれはあまりに表面的の見方でもあらう。實際に於いて凡そ何處でも、古代的な考へ方が支配してゐたところ、或は殘つてゐるところでは、古代文化に於いても、神話に於いても、童話に於いても、迷信に於いても、無意識思想に於いても、夢に於いても、神經症に於いても、金錢と糞便とを最も深く關係させてゐるのである。惡魔がその情婦に與へた金が、惡魔の行き去つた後に糞に變つたと云ふ話は誰もが知つてゐる。この惡魔とは慥に、抑壓されてゐる無意識本能生活の擬人化である。[一] 更にまた寶は排泄と共に發見されると云ふ迷信は誰しも知つてゐる。また『黄金をこくもの』,,Dukatenscheisser" の像は多くの人々の親しく眺めてゐるところだ。實は、既に、古代バビロニアの敎儀に於いてさへ、黄金は地獄の糞（Mammon=ilu manman）である。[二] このやうに、神經症が言語習慣に從ふ場合には、この場合でも他の方面でも、その言葉の本來的な、深長な意義を採用してゐる。また神經症が一つの言葉を形象的に表現してゐるらしい場合には、その言葉のたゞ古い意義をのみ、再現してゐるのであ

る。

註（一）　ヒステリーに取憑かれると云つたり、悪魔的の流行病と云つたりするのを比較せよ。
（二）　エレミア著『古代東洋の光に照して見たる舊約聖書』（第二版一九〇六年）並びに『新約聖書中のバビロニア文明』（一九〇六年）中に次の如くある。――『黄金神（Mamon Mammon）はバビロニア語のman-manである。下界の神ネルガルス Nergals の別名である。黄金は東洋の神話（それが民衆の傳說や童話中に繼承されてゐる）に依れば、地獄の糞である。「バビロニア宗教中の一神教的の流れ」を參照せよ。』

人間が最も價値あるものとして知つたところのものと、廢物（„refuse"）として放棄した最も價値なきものとの間の相反對立から、金と糞とのこのやうな條件付き同一化に導くやうになつたことは、如何にもありさうである。

神經症的の思想に於いてこのやうな同一化が生ずるに就いて、その幇助となつたらしい事情がなほ他に一つある。排泄に對して性的興味を持つことは自然發生的であるが、愈々それが盛んになるのは我々の知つてゐる通り、相當年頃になつてからである。その年頃になると、幼年時代にはなかつた金錢に對する興味が新たに擡頭して來る。そこでその目的を喪失せんとしつゝある舊い努力が新に擡頭しつゝある目的に容易に委讓せられる。

肛門性感と例の三つの性格的特徵との間に關係があると論じて來たが、この主張の根柢に果して多

少の眞實が存するならば、成熟してから肛門帶域を性的に用ふるやうになる人々（例へば或る同性愛者）に對して特に『肛門性格者』„Analcharakter" と云ふ語を造らうとする必要はない。自分の見るところにして大過なしとせば、實際經驗に徵して見てもこの結論と殆ど撞着するところを見ないのである。

併し考へて見れば、他の性格的コムプレクスと雖も一定の性的帶域の亢奮に關係を有することが認められるのではないだらうかと人々は云ふに相違ない。私は今までのところでは、嘗て尿道性感の銳敏であつたものが、後に『燃ゆるが如き』名譽慾者となることを認識し得てゐるだけである。素質的な本能から窮極的な性格が構成せられることに就いては、とにかく一つの公式が與へられる。――殘つてゐる性格上の特徵は自ら具はる本能の不變なる存續であるか、それの昇華であるか、或はそれに對する反動形成である。



分析療法論　終

昭和七年十月五日 印刷
昭和七年十月十日 發行
昭和十四年十月五日 改訂第四版

フロイド精神分析學全集

(分析療法論)

定價壹圓九拾錢

譯者 大槻憲二

發行者 和田利彦
東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷者 吉原良三
東京市牛込區早稻田鶴卷町一〇七

印刷所 株式會社 康文社印刷所
東京市牛込區早稻田鶴卷町一〇七

發行所
東京市日本橋區通三丁目八番地
株式會社 春陽堂書店
振替東京一六一七番・電話日本橋五一番

フロイド精神分析學全集

# 分析療法論

大槻憲二譯

●

精神分析學研究所

春陽堂

フロイド精神分析學

分析療法論



大槻憲二譯

精神分析學研究所